KUMS
Kyushu
University of
Medical Science

令和5年度自己点検・自己評価委員会総会

日時　令和6年5月18日（土）　第1部 10:00 ～ 12:20
第2部 13:30 ～ 14:40

会場　F講義棟

あなたの学びを　あなたのカタチに
九州医療科学大学
Kyushu University of Medical Science

学校法人 順正学園

建学の理念

学生一人ひとりのもつ能力を最大限に
引き出し引き伸ばし、社会に有為な
人材を養成する。

令和５年度自己点検・自己評価委員会総会プログラム

日　時：令和６年５月18日（土）９：55 ～ 14：40（終了予定）　　場　所：F講義棟

開催要項	9:55 ～ 10:00	令和５年度 実績評価優秀者表彰	
	10:00 ～ 10:05	理事長・総長挨拶	加計　勇樹　理事長・総長
	10:05 ～ 10:15	学長挨拶（外部評価員紹介を含む）	児玉　　修　学長顧問（代理）
第一部	**≪実施部会報告≫【各５分程度】**		
	10:15 ～ 10:20	基本事項検討部会	池脇　信直　部会長
	10:20 ～ 10:25	教育改革部会	大倉　正道　部会長
	10:25 ～ 10:30	研究活動部会	池脇　信直　部会長
	10:30 ～ 10:35	学生サポート部会	三宮　基裕　部会長
	10:35 ～ 10:40	キャリアサポート部会	吉武　重徳　委員（代理）
	10:40 ～ 10:45	社会貢献部会	川﨑　順子　部会長
	10:45 ～ 10:50	学生受入部会	渡邊　一平　部会長
	10:50 ～ 11:00	質疑応答	
	≪３Pを踏まえた各学科の中期計画実施状況報告≫【各５分程度】		
	11:00 ～ 11:05	スポーツ健康福祉学科	正野　知基　学科長
	11:05 ～ 11:10	臨床福祉学科	稲田　弘子　学科長
	11:10 ～ 11:15	臨床心理学科	前田　直樹　学科長
	11:15 ～ 11:20	通信教育部	川崎　順子　部長
	11:20 ～ 11:30	質疑応答	
	11:30 ～ 11:35	薬学科	木村　博昭　学科長
	11:35 ～ 11:40	動物生命薬科学科	明石　　敏　学科長
	11:40 ～ 11:45	生命医科学科	山本　成郎　学科長
	11:45 ～ 11:50	大学院研究科総括	正野　知基　研究科長
	11:50 ～ 12:00	質疑応答	
	≪令和４年度授業アンケート結果報告≫		
	12:00 ～ 12:05	結果報告	大倉　正道　教育開発副部門長
	≪講評・総評≫		
	12:05 ～ 12:15	外部評価員　講評	澤野　幸司　延岡市教育長
			吉玉　典生　延岡商工会議所会頭
	12:15 ～ 12:20	副学長　総評	池脇　信直　副学長
昼休憩	12:20 ～ 13:30	第一部終了	
第二部	**≪事務部門報告≫【各５分程度】**		
	13:30 ～ 13:35	大学事務局	的場　嘉男　事務局長
	13:35 ～ 13:45	庶務部 庶務課 及び 付属図書館	大石　正憲　課長
	13:45 ～ 13:50	庶務部 会計課	牧野　喜代子課長
	13:50 ～ 14:00	教務部 教務課 及び 教育ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ課	紺野　智子　参事
	14:00 ～ 14:05	教務部 通信教育事務課	矢野　朋光　参事
	14:05 ～ 14:10	学生部 学生課（英語村含む）	加藤　泰輔　課長
	14:10 ～ 14:15	キャリアサポートセンター	猪股　健久　課長
	14:15 ～ 14:20	入試広報室	高木　真理子参事
	14:20 ～ 14:40	事務部門全体ディスカッション	

＊実施部会　点検・評価項目（最重点項目に◎、重点項目に○）

①使命・目的（教育目的の設定と反映を含む）、②学生支援（学生の受入れ、各種支援、学修環境の整備、意見要望への対応を含む）、③教育課程（卒業認定、教授方法、学修成果の点検評価を含む）、④教員・職員（教学ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄの機能性、教員配置及びFD・SD、研究支援を含む）、⑤経営・管理と財務、⑥内部質保証、Ⓐ地域貢献（人的、物的、知的資源等の社会への提供を含む）、Ⓑ倫理教育（人権啓発、ﾊﾗｽﾒﾝﾄ防止、情報教育等を含む）Ⓒ国際化（人材育成、国際交流推進等を含む）

令和５年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
基本事項検討部会 ※R5 より図書館部会を統合	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○

〇今年度の取組状況

今年度から新たにスタートした本学の第3期中期目標・中期計画(大学全体)に沿って、本学の自己点検・自己評価に関する基本方針の策定や評価結果の確認を行った。また、関連する委員会からの現状報告や内部質保証委員会からの意見も踏まえ、次年度に向けた基本事項の決定や検証・確認を行った。評価スコアは、定性的な評価として、5. 達成している、4. かなり進んでいる、3. 普通、2. やや足りない、1. ほとんど進んでいない、を採用した。

１．３つのポリシーを踏まえた、人材養成に必要な使命・目的等の評価・検討

今年度よりスタートした第３期中期目標・中期計画を踏まえ、特に学修成果の可視化を推進すべく、中核センター会議や大学教授会とも連動しながら、建学の理念や教育目標に沿った人材養成が行えているか評価・検討した。(評価スコア 4)

２．学生生活、学修支援、学修環境改善など、学生サービス全般への評価・検討

今年度より、学修支援体制を更に強化すべく、各種委員会の見直しや再編、学修環境の整備が行われたが、関係委員会や各事務部署等とも連動しながら、実施状況を確認・評価した。
(評価スコア 3)

３．ＣＰやＤＰに沿った教育課程や教授方法の評価・検討

各学科において実施されている教育課程や教授方法の改善に関しては、中核センター会議や大学教授会などを中心に協議・検討がなされており、教務部や関係委員会・部会においても改善に向けた支援を行っている。このことについて、実施状況を踏まえて確認・評価した。(評価スコア 3)

４．大学の強みや特色を活かした研究力強化の評価・検討

今年度よりスタートした第３期中期目標・中期計画では、本学の強みや特色を活かした研究力の強化を目標としており、中核センター研究推進部門を中心にして、新たな取組の実施や改善事項の確認などに注力している。このことについて、実施状況を踏まえて確認・評価した。
(評価スコア 3)

５．安定した財務基盤を確立し、経営の規律と誠実性を考慮した経営・管理体制の評価・検討

現在の学生入学状況は非常に芳しくなく、多くの学科で入学定員割れをおこしている事から安定した財務基盤の確立の為、教学体制の組織改革を行うと共に、入試広報室や関係委員会を中心に学生募集の見直しや本学のブランド形成の為の施策を検討・実施している。このことについて、改善状況を踏まえて確認・評価した。(評価スコア 2)

６．内部質保証の為の点検・評価体制の確立に向けた評価・検討

本学ではこれまで自己点検・自己評価と内部質保証が混在した形で実施されており、十分な効果が発揮できていなかったが、今年度より新たに内部質保証委員会を立ち上げ独立させる事で、内部質保証体制の更なる確立・推進に努めた。このことについて改善状況を踏まえて確認・評価した。
(評価スコア 3)

７．大学が行う地域活性化に向けた取り組みの評価・検討

今年度よりスタートした第3期中期目標・中期計画では、地域活性化の為の拠点創生を目標として、本学の所在する宮崎県北部地域を中心に産官学が連携・協力する事で、更なる地域振興や必要な人材養成に努める事にしている。このことについて、実施状況を踏まえて確認・評価した。（評価スコア 4）

８．快適で平等な大学環境の維持に向けた評価・検討

今年度よりスタートした第3期中期目標・中期計画では、重点項目の一つとして、キャンパス環境の整備を目標としている。今年度は学生支援の一環として、次年度に向けてスチューデントサポートセンター(事務部門)の整備や学生共用スペースの大幅改修を実施した。このことについて、実施状況を踏まえて確認・評価した。(評価スコア 4)

９．国際化に向けた国際競争力の強化の為の評価・検討

今年度よりスタートした第3期中期目標・中期計画では、重点項目の一つとして、国際競争力を意識したグローバル化の推進を目標としている。コロナ禍で一時ストップしていた海外協定校等との教育(研修)・研究などのプログラムも再開され、単純な国際交流に留まらないグローバル化を目指した取組も実施・計画されている。このことについて、実施状況を踏まえて確認・評価した。（評価スコア 3）

10．図書館の管理・運営 及び 学生の利用促進に向けた評価・検討

現在、本学図書館の管理・運営は、本学園の関連会社でもある株式会社ＪＥＩに委託されているが、これまで同様に学生・教職員に加え市民の方にも利用しやすい(開かれた)図書館を目標に、利用促進に努めていただいている。このことについて、運営状況や利用状況を踏まえて確認・評価した。(評価スコア 4)

〇来年度の計画案

来年度は、本学の第3期中期目標・中期計画に加えて、非常に重要とされる外部評価(第3者評価)が近づいている事から、新たな指針として特に重要視されている内部質体制の改善・充実が更に行えるよう、自己点検・自己評価に関する基本方針の策定や評価項目の見直しを行うと共に、内部質保証委員会とも連携して、内部質保証活動に必要な評価・検討を行う。

１．３つのポリシーを踏まえた、人材養成に必要な使命・目的等(学修成果を含む)に関する評価・検討
２．内部質保証の為の体制整備や自己点検・自己評価との更なる連動に関する評価・検討
３．内部質保証の機能性を高める為の状況把握や状況分析等の実施に関する評価・検討
４．学生生活、学修支援、学修環境改善など、学生サービス全般に関する評価・検討
５．図書館等の学生利用施設の有効活用に関する評価・検討
６．ＣＰやＤＰに沿った教育課程及び教授方法の改善に関する評価・検討
７．大学の強みや特色を活かした教育研究活動の推進に関する評価・検討
８．安定した財務基盤を確立し、経営の規律と誠実性の維持を行う為の機能に関する評価・検討
９．大学が行う地域活性化に向けた取り組みの評価・検討
10．国際化に向けた国際競争力の強化の為の評価・検討

令和５年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
【教育改革部会】 （旧：教育指導部会、カリキュラム部会、大学院部会、通信教育部会）	◎	○	◎	○		○		○	

○今年度の取組状況（教育改革部会）

本年度、取り組み計画として掲げた下記事項について総括する。教学マネジメントの推進を中心に、取り組むべき事項に着手できたものもあるが、未達或いは検証・検討を要する事項もあり、令和６年度に向けた課題も大きいと自認する。

（カッコ内は進捗・達成度：10 段階評価）

1. ブランドビジョンの実現に向け、新設した大学共通基礎科目の検証、改善に努める。

令和５年度より掲げる「4 つの en」の実現に向け、大きく前進した。（70%）

・「情報、AI、データサイエンス科目」を確立し、令和６年度には文部科学省が推奨する『数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム認定制度（リテラシーレベル)』に申請予定。

（実施、点検評価等内容については別紙 HP 内容を参照）

・医療、福祉を標榜する大学として基礎教育の強化に取り組み、「日向国地域体験学習」では延岡市だけではなく、高千穂町・五ヶ瀬町とも連携体制を構築できた。今後は助成制度の確立と地域の拡大にも努めたい。

・「医療・福祉連携講座」「インターンシップ」については、文部科学省が掲げるインターンシップの要件にも合致していないため、取り組み計画の再考を含め、早急の改善を要する。

・教学マネジメント指針にも掲げられる学修成果の可視化について、標準化された外部アセスメントテスト（GPS-Academic：ベネッセ i-キャリア）の導入検討を行い、令和６年度入学生より運用開始となった。なお、学年進行の高学年時の受検については、初回テストの実施結果並びに学科毎の運用計画を以て、継続的に協議する。

2. 全ての教科の基礎学力として重要な国語能力の更なる向上に取り組むと共に、リメディアル教育として導入して e-learning システムの活用法などの検証を行う。

取り組みから８年が経過し各学科での評価に大きな変化も無く停滞感を感じる。（40%）

・9 年目となる令和６年度は継続利用計画であるが、各学科に検証・実施の改善を促し、取り組みについて大幅な改善を要すると考える。

3. 国家試験合格率の向上を目指す。少なくとも、全国の大学の国家試験合格率平均を下回ることがないよう国家試験対策の充実に取り組む。

全国平均：達成８資格、未達４資格。達成資格が未達を上回るものの、ステークホルダーたる受験生の関心の高い数値の一つであるため、単なる合格率のみでなく、ストレート合格率なども意識した対策強化に努める。（50%）

（数値については別紙参照）

4. 教職員の意識改革並びに課題の共有を目的に、FD・SD 活動の促進に努め、学生を中心とした（学修者本位）研修活動の充実に努める。（ワークショップやハラスメント研修などの充実）

FD・SD 活動への参加促進に留まり、明確な実施は 3 回に留まり未達（40%）

令和 5 年 9 月 6 日『数理・データサイエンス・AI 教育の推進と生成系 AI の教育活動での活用』

令和 5 年 10 月 26 日『「学修成果の可視化」を「大学教育の魅力化」につなげる』

令和 6 年 2 月 21 日『「学修成果の可視化」～GPS-Academic の導入～』

次年度に向けては更なる促進を目指し、学部等での開催計画を後押しする。

5. 学修者本位の教育環境充実に向け、以下の強化を図る。

取り組み改善は行えたものの、更なる促進が必要となる。(60%)

・ユニバーサルパスポートを活用した学修成果の可視化の検証、改善

取り組み 2 年目として促進し、2 年間の中間評価を令和 6 年度予定。

・シラバス内容の充実・検証及びチェック体制の改善・強化

学科 DP との関連を明確に示すシラバス内容となるよう様式・マニュアルの改訂を行った。

・授業アンケートを初めとした教学 IR の改善と実施体制の強化

教学 IR の促進のため、改善と体制強化を目指した現状把握に努めたが課題は大きい。

6. ハイブリットコースを含めた通信教育部の改革並びに通学課程との連携強化を図る。

コースのスタートに向け、連携し体制確保に努めることが出来た。(70%)

しかしながら入学生は 4 名となり、周知活動に更なる努力が必要となる。

さらには、入学後の運営には様々な課題も出ることが予想され、令和 6 年度からの課題克服が重要となる。

その他、計画には掲げていなかったが、大学院教育の推進に繋がる「長期履修制度」(規程整備)に着手することができ、令和 6 年度入学生より適応可能となっている。

<u>○次年度の計画案（教育改革部会）</u>

令和 7 年度に向けては高等教育評価機構による第三者評価が控えている。その具体的な取り組み評価が次年度実績となるため、更なる点検評価・改革推進に努める。

1. ブランドビジョンの実現に向け、新設した大学共通基礎科目の検証・改善に努め、完成年次 (R7) に向けた改正の有無を含めた検討を行う。

2. 全学的方針として掲げる「国語力強化」の在り方自体を再考し、リメディアル教育として導入している e-learning システムの是非を含め検証を行う。

3. 国家試験合格率の向上を目指す。少なくとも、全国の大学の国家試験合格率平均を下回ることがないよう国家試験対策の充実に取り組む。**(ストレート合格率の向上を含む)**

4. 教職員の意識改革並びに課題の共有を目的に、FD・SD 活動の促進に努め、学生を中心とした（学修者本位）研修活動の充実に努める。(ワークショップやハラスメント研修などの充実)

・各学部での FD 開催の推進とサポート・連携体制の確立

・各事務部を中心とした SD 研修の開催促進と情報共有・フィードバック体制の確立

5. 学修者本位の教育環境充実に向け、以下の強化を図る。
・ユニバーサルパスポートを活用した学修成果の可視化の検証、改善
・シラバス内容の充実・検証及びチェック体制の改善・強化
・授業アンケートを初めとした教育 IR の改善と実施体制の強化
6. ハイブリットコースを含めた通信教育部の改革並びに通学課程との連携強化を図る。
・福岡事務所の活用と、入学生増に向けた体制強化
7. 研究者育成の大学院教育の充実を目指し、適正な入学生確保を行うことで、学部学生の意識向上と TA・SA などの活用計画を推進する。

九州医療科学大学「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」自己点検・自己評価

本プログラム科目「データサイエンス I」は 1 年生を対象とした学部共通選択科目として開講しており、本プログラム初年度である令和 5 年度では、1 年生 184 名中 51 名が履修（履修率 27.7%）をした。

本科目では、オンライン学習管理システム Google Classroom を用いて、受講学生の出欠、課題の提出の有無、授業後の確認テストの得点の全てを管理し、講義担当者である「情報教育センター分室員」がその情報を共有し、学生の理解が十分でないと考えられる場合には、すぐにフィードバックできる体制を構築した。その結果、47 名が単位を取得できた（単位取得率 92.2%）。

令和 8 年度までにデータサイエンス教育の必修化と履修率ならびに単位取得率 100%の実現を目指して、大学ホームページに本プログラムの概要を発信する Web サイトを構築した。

今後は、本学の学習支援システムであるユニバーサルパスポートの学修ポートフォリオ機能の活用を通して学修成果の定量的改善を目指すとともに、本プログラムの定着を推進する。

様式4

大学等名 九州医療科学大学

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

教育改革部会

（責任者名）大倉正道　（役職名）教務部長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラム科目「データサイエンスI」は1年生を対象とした学部共通選択科目として開講しており、本プログラム初年度である令和5年度では、1年生184名中51名が履修（履修率 27.7%）をした。本科目では、オンライン学習管理システムGoogle Classroomを用いて、受講学生の出欠、課題の提出の有無、授業後の確認テストの得点の全てを管理し、講義担当者である「情報教育センター分室員」がその情報を共有し、学生の理解が十分でないと考えられる場合には、すぐにフィードバックできる体制を構築した。その結果、47名が単位を取得できた（単位取得率92.2%）。
学修成果	オンライン学習管理システムを用い、毎講義後の確認テスト、アンケートの結果、課題の結果、受講学生の質問内容およびそれに対する回答が受講学生、担当教員ともにすぐに確認できるシステムを構築した。講義で映像資料として用いるオンライン教材はいつでも何度でも視聴可能であり、さらに、確認テストは問題がランダムに出題され、何度でも受験することが可能な仕様となっている。各講義回の内容を完全に理解できるまで繰り返しして学習してもらうことにより、学修成果の定着を図っている。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本学では全ての開講科目において履修後に受講学生へ授業評価アンケートを実施している。「データサイエンスI」では、本アンケートにて取り組み状況や授業内容に対する評価とともに、独自に「知識が得られたか」「自分の将来に関係すると感じたか」などの項目を設定し、学生の理解度を測ることとしている。 アンケートの結果、「知識が得られたか」、「自分の将来に関係すると感じたか」、「この授業は自分にとって意義のある授業だった」のそれぞれの質問項目に対し、それぞれ90%以上の肯定の回答があり、学生の内容の理解度は高いものと考えられた。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	履修後のアンケートで、「データサイエンスについて興味が得られたか」、「データサイエンスを自ら進んでより深く学びたいか」、「さらに発展的な科目が開講されたら受講したいか」、「受講後の満足度」の各項目について、肯定的な回答はそれぞれ、100%、97.8%、95.6%、91.1%と高い結果が得られたことから、後輩等他の学生への推奨度は高いと考えられた。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	履修者数、履修率向上に向けて、新入生オリエンテーションや学科別ガイダンス、さらに大学ホームページに継続的に本プログラムに関する情報を発信している。すでに、生命医科学部および薬学部では、プログラムの受講を強く推奨し、令和6年度ではこれらの学部でほぼ全員が履修登録をおこなっている。本プログラム科目は、現在選択科目として開講しているが、令和8年度までに完全必修化する予定であることから、遅くとも令和8年度以降入学の学生については、履修率100%となる予定である。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和5年に開設し、履修者は1年生であるため、修了者の進路、活動状況、企業等の評価を得るまでに至っていない。履修者が卒業する令和8年度以降分析ができるよう、本学就職キャリアサポートセンターと連携して準備を進めている。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	「データサイエンスI」で映像資料として用いているオンデマンド教材は、産業界からの視点が含まれた、株式会社ベネッセコーポレーションが提供するものである。「情報教育センター分室」においてこの教材の使用方法等を常に検討しながら講義に用いている。さらに、本学で毎年度実施される学外者の客観的な視点を取り入れた自己点検・自己評価や、卒業生の進路先企業等へのアンケートの回答を通し、産業界からの意見を積極的に聴取し、本プログラムの運用・改善に積極的に反映することのできる仕組みを構築していることから、プログラムには産業界からの視点が十分に含まれていると考えられた。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	「データサイエンスI」では、学生の理解に応じ、学生の専門分野や実社会におけるデータサイエンスやAIの利活用、ニュースや報道等に関する内容を絡めて講義を行っている。さらに、学生の専門分野でのデータを実際に解析することで、学んだことがどのようにして将来役立つかを実感することができるよう、講義を行なっている。 なお、履修後のアンケート調査で、「興味が得られたか」、「自ら進んでより深く学びたいと思ったか」といった項目について肯定的な回答はそれぞれ100%、97.8%と高い結果が得られたことから、学ぶことの楽しさ・意義について学生に伝わっていると考えられた。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	講義の際、学生の理解に応じて講義を行うことで、学生のつまづき、理解不足を減らすようにしている。さらに、毎講義後に確認テストおよび授業アンケートをオンライン学習管理システムを用いて実施し、講義内容が理解できていない場合には、次の回の講義でフィードバックをかける仕組みを構築している。学生にとってわかりやすい講義となるよう、教育改革部会ならびに情報教育センターにおいて教育内容と方法について継続的に検討、改善を図っている。担当教員は常に最新の情報を入手し、さらに今後は生成AIに関する情報も積極的に取り入れることで、本プログラムの内容・水準を維持・向上させるように努めている。

令和5年度　国家試験結果

社会福祉士

第36回

	新卒	既卒者	合計
出願者	18	87	105
受験者	18	87	105
合格者	14	19	33
不合格者	4	68	72
合格率(%)	77.8%	21.8%	31.4%
全国平均(%)		58.1%	
福祉大学等平均(%)	76.8%	41.7%	57.4%

作業療法士

第59回

	新卒	既卒者	合計
出願者	1	－	1
受験者	1	－	1
合格者	0	－	0
不合格者	1	－	1
合格率(%)	0.0%	#########	0.0%
全国平均(%)	91.3%	44.3%	83.8%
大学等平均(%)	―	―	―

※既卒者の取り纏めは行っていないため不明。

愛玩動物看護師

第2回

	新卒	既卒者	合計
出願者	25	8	33
受験者	25	8	33
合格者	21	6	27
不合格者	4	2	6
合格率(%)	84.0%	75.0%	81.8%
全国平均(%)		68.6%	
大学等平均(%)		79.1%	

精神保健福祉士

第26回

	新卒	既卒者	合計
出願者	2	7	9
受験者	2	7	9
合格者	2	1	3
不合格者	0	6	6
合格率(%)	100.0%	14.3%	33.3%
全国平均(%)		70.4%	
福祉大学等平均(%)	82.5%	31.8%	66.3%

言語聴覚士

第26回

	新卒	既卒者	合計
出願者	13	6	19
受験者	13	6	19
合格者	10	1	11
不合格者	3	5	8
合格率(%)	76.9%	16.7%	57.9%
全国平均(%)		72.4%	
大学等平均(%)	87.3%	32.8%	57.9%

臨床工学技士

第37回

	新卒	新卒(別科)	既卒者	既卒者(別科)	合計
出願者	10	1	3	2	16
受験者	6	1	3	2	12
合格者	5	1	1	1	8
不合格者	1	0	2	1	4
合格率(%)	83.3%	100.0%	33.3%	50.0%	66.7%
全国平均(%)	87.0%		16.1%		78.6%
大学等平均(%)	―	―	―	―	－

社会福祉士(通信教育部)

	新卒	既卒者	合計
出願者	45	113	158
受験者	45	113	158
合格者	30	52	82
不合格者	15	61	76
合格率(%)	66.7%	46.0%	51.9%
全国平均(%)		58.1%	
福祉大学等平均(%)	76.8%	41.7%	57.4%

介護福祉士

第36回

	新卒	既卒者	合計
出願者	**2**	0	2
受験者	**2**	0	2
合格者	2	0	2
不合格者	0	0	0
合格率(%)	100.0%	－	100.0%
全国平均(%)			82.8%
養成施設合格率(%)	71.5%	―	

薬剤師

第109回

	新卒	既卒者(6年)	既者卒(4年)	合計
出願者	69	85	1	155
受験者	44	78	0	122
合格者	39	33	0	72
不合格者	5	45	0	50
合格率(%)	88.64%	42.31%	0.00%	59.02%
全国平均(%)	84.36%	42.42%	43.87%	68.43%
私立大学平均(%)	83.71%	42.28%	20.00%	67.11%

はり師

第32回

	新卒	既卒者	合計
出願者	**11**	6	17
受験者	11	6	17
合格者	9	1	10
不合格者	2	5	7
合格率(%)	81.8%	16.7%	58.8%
全国平均(%)	85.8%	14.1%	69.3%
大学平均(%)	79.9%	17.6%	62.8%

きゅう師

第32回

	新卒	既卒者	合計
出願者	**11**	5	16
受験者	11	5	16
合格者	9	1	10
不合格者	2	4	6
合格率(%)	81.8%	20.0%	62.5%
全国平均(%)	86.2%	13.0%	70.2%
大学平均(%)	81.5%	19.3%	65.0%

臨床検査技師

第70回

	新卒	既卒者	合計
出願者	43	23	66
受験者	33	23	56
合格者	31	4	35
不合格者	2	19	21
合格率(%)	93.9%	17.4%	62.5%
全国平均(%)	88.0%	26.3%	76.8%
私立大学平均(%)	―	―	―

※9月卒は新卒に含む。但し、本年度は新卒者に9月卒はいない。

令和５年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
研究活動部会				◎		○	○	○	○

○今年度の取組状況（研究活動部会）

評価スコアは、定性的な評価として、5.達成している、4.かなり進んでいる、3.普通、2.やや足りない、1.ほとんど進んでいない、を採用した。

1.学内共同研究

研究経費助成と地域創生事業経費助成を適切に配分した。しかし、申請者や採択者が例年とあまり変わらない点が問題である（評価スコア 3)。研究経費助成は、科研費審査評価に基づき審査を行い、科研費採択率の向上を支援したが、採択は 1 件のみであった（評価スコア 2)。地域創生事業経費助成は、社会貢献度に基づき審査を行い、社会貢献活動を支援した。社会貢献度の適正評価基準が必要と思われる（評価スコア 2)。研究活動部会の自己点検・自己評価として、成果発表会（本年度はデジタルサイネージを活用）を開催し、研究コミュニティづくりの提供に取り組んだ。また、ガルーンに Web サイトを開設し成果を公開した（評価スコア 2)。今後は全教員が研究成果を発表する機会を設けることが望まれる（評価スコア 3)。

2.科学研究費助成事業

申請公募要領の説明と申請書作成の指導を行うと共に、ガルーンに「研究助成・補助金関連の情報スペース」を設け、採択件数向上を目指したが、向上には至らなかった（新規採択率 10%)。ほとんど申請をしていない学科や教員には実効的施策が望まれる（評価スコア 2)。戦略として、University Research Administrator（URA）の設置を基軸に科研費申請を共通目標とすること、研究活動の最適環境を提供すること、科研費コーディネーターを配置すること、学会発表や論文発表をノルマ化することが必修である。例えば、本学の査読制ジャーナルへの投稿など、実現しやすい目標設定が必要である（評価スコア 2)。

3.公的研究費コンプライアンス研修および研究倫理教育研修

文科省のガイドラインに則った研修会と研究倫理おける不正防止の強化・整備を実施した。ほぼ全教員が研修を受け、公的研究費と倫理教育のコンプライアンス意識が高められた（評価スコア 3)。毎年、研修会内容や研究費使用状況を見直すと共に、啓発活動事例を取り入れた研修方法を随時点検し、公的研究費と倫理教育のコンプライアンス意識を浸透・定着させることが重要である。

4.査読制ジャーナル

本学の査読制ジャーナルの充実を図るために、査読ガイドラインの明確化、教育的査読の考え方、査読インセンティブ制度を導入した。また、JST のデータベースにも登録できた。次年度以降も同様の継続が望まれる（評価スコア 3)。今後は査読ガイドランの定量的な改善が必要である。

5.順正学園学術研究交流会

学園間の学術研究交流を目的に、本交流会を開催した。発表件数は、8 件（吉備国大４件・九保大４件）であった。事前質問の受付けは、場を盛り上げる画期的な企画となった。今後は全教員が研究成果を発表・交流する機会を設けることが必要である（評価スコア 3)。

6. ものづくり交流展

社会貢献の一環として、大学の知的財産である「もの」を積極的に出展し、アピールする計画を立てたが、本年度は出展まで至らなかった。出展継続ができる環境整備が望まれる（評価スコア 1)。

7. 研究データサイエンス（各種研究助成と補助金関連情報の提供）

新たな価値を創出する研究データの分析ならびにガルーンの「研究助成・補助金関連の情報スペース」設定による各種研究助成と補助金関連情報の提供システムを導入した。応募率を 20%程度と予想していたが、満足できる結果には至らなかった（評価スコア 1)。情報コンテンツの構築・蓄積・利用を支援するプラットフォームの整備が今後の改善点である。

○次年度の計画案

1. 学内共同研究

より詳細な採択ガイドラインを設定し厳選なる審査を行う。成果報告は各種デバイスを利用して学内と学外、さらに国外にも発信できるよう計画する。今後、適切な経費配分と成果のリフレクションを視野に入れ、定性的・定量的な改善とアップデートを進める。

2. 科研費助成事業

採択率向上の戦略として、学会発表や論文発表のノルマ化、URA と科研費クラブの設置を積極的に進める。PDCA サイクルの高速回転を基盤に、科研費申請を全教員の共通目標とすると共に、研究活動の最適環境の提供、科研費コーディネーターとアドバイザー配置も積極的に行う。

3. 公的研究費コンプライアンス研修および研究倫理教育研修

研修内容の形骸化を防止するため、研究費使用ハンドブックの見直し、啓発活動事例の積極的導入を講師の先生方と連携を取りながら随時柔軟に対応していく。コンプライアンス研修と研究倫理意識をさらに強力に浸透・定着させる。

4. 査読制ジャーナル

本学の査読制ジャーナルの充実と質向上を図るために、より詳細な査読ガイドランの策定と明確化に取り組む。

5. 順正学園学術研究交流会

本交流会の開催目的をさらに明確化し、交流会の場を盛り上げる画期的な工夫や仕掛けを企画する。学園間での共同研究の推進を強力に進める。

6. ものづくり交流展

社会貢献の一環として、大学の知的財産である「もの」を積極的に出展し、本学を積極的にアピールする。

7. 研究データサイエンス（各種研究助成と補助金関連情報の提供）

新たな価値を創出する研究データの分析と各種研究助成と補助金関連の情報提供による競争的外部資金獲得のためのプラットフォームを整備する。

8. その他

個人研究費の報告書を年度末に提出することの義務化を検討する。報告書を学内で教職員が閲覧できるようにすることで学内共同研究推進の一助となると考えられる。

令和５年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
【学生サポート部会】		◎						◎	

関係委員会等：学生支援委員会、障がい学生サポート委員会、学生賞罰委員会、
ラーニングサポートセンター・英語村

○今年度の取組状況

1. 学生生活の安定のための支援（学生支援委員会関係）

① 交通トラブル対策

・ 学生課へ届出があった事故件数は、令和5年2月から令和6年1月までの間で17件（R4.2～R5.1は12件）であり、前年度から増加した。17件のうち学生が第一当の事故が13件（昨年は9件）、うち物損事故は12件（昨年は6件）であり、物損事故の増加が目立った。重傷事故の発生は2件（いずれも2当）だった

② 犯罪，生活トラブル対策

・ 犯罪、生活トラブルに関する相談が8件（昨年は2件）あり、前年度から増加した
・ 相談に対して、原則、個別面談を実施し、関係学部・学科、部署へ通知し早期の問題解決に努めた

③ 防災に対する意識向上

・ 全学生、教職員参加による南海トラフ大地震を想定した消防防災総合訓練及び防災講座を実施した（R5年12月）

2. 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用（障がい学生サポート委員会関係）

① 関係各所との連携体制の構築

・ チューターよりオーバードーズに関する相談が１件あった。前年度、本学学生の自殺企図への対応のために学内の緊急事態等の連携フローの作成と、医療機関、学内健康管理センターとの連携の仕組みづくりを検討課題として挙げたが、事務局内での議論にとどまり、委員会での検討までには至らなかった

② 相談しやすい環境づくりと相談スキルの向上

・ 事務局職員、委員会メンバーが下記の研修会に参加し、情報収集をおこなった
  令和５年度第68回日本私立大学協会学生生活指導部課長相当研修会（R5.7.13）
  令和５年度九州地区学生指導研修会（R5.8.31~9.1）
  第51回九州地区学生指導研究集会（R5.9.8）
  令和５年度自殺対策研修会（R5.8.25）
  2023年度障がい学生支援研修会（R5.8.24）　　ほか
・ 上記研修会での情報を事務局内で共有し、学生が相談しやすい環境づくりに努めたが、参加した委員以外のメンバーや委員以外の教員に対して、研修成果の報告はできなかった

3. 留学生・国際交流の取り組み（ラーニングサポートセンター・英語村関係）

① 留学生の除籍・退学者が出ないための支援をする

・ 2024.3.31現在、在学生17名(韓国16・中国1)、2023年度の退学者0名

【参考資料：令和4年度の留学生の状況】（令和5年3月31日時点）
在学生総数17名（韓国16・中国1）／令和5年度入学者数2人（韓国1）

② 日本での生活に慣れてもらうための機会を設ける

③ 日本人学生、教職員および地域住民との交流の機会を設ける

・ ②・③の取組として、英語村主催で下記のイベントを実施した（カッコは実施日と人数）
  Easter（4/26　30名）、ゲームの日（5/16～5/17　11名）、国際交流員出前講座（6/14　18名）、七夕（7/2　2名）、夏季集中講座（8/7　2名,9/19-9/20、9/22　8名）、Halloween（10/26　20名）、American Independence Day（11/4　11名）、Christmas（12/19　18名）、

ゲームの日②（1/10　8名）、映画鑑賞会①（2/2　13名）、教育後援会留学生支援経費にて日本人学生と小林市（生駒高原）・都城市（高千穂牧場）へ日帰り旅行（10/14　16名）

4.その他の取り組み
（学生支援委員会関係）
・ 学長と学生との意見交換会（R5.7.20）を実施し、各学部学科の代表学生12名より大学生活の様子と要望を聞き取った。要望の一つとして挙がったトイレの生理用品設置について関係課内で協議し、令和6年1月より試験的に設置した
・ 大学名変更に伴い、学友会に加盟する団体に対してユニフォーム等の新調のための経済的な支援をおこなった
・ 令和5年度入学者の授業料免除者が例年よりも多かったため、令和6年度の継続審査に向けて継続条件の見直し（免除対象から除外される学生が多くなるため）を検討した。結果として、在学生との不平等が問題となるため、従来の継続条件を踏襲することとした。これを受けて対象学生ならびに保護者に対して後期開始前に郵送にて保護者に授業料免除の継続条件を周知した

○来年度の計画案
（学生支援委員会関係）
1．学生生活の安定のための支援
① 交通トラブル対策
・ 定期的な安全運転講習の企画・実施や交通安全啓発活動をおこない、交通事故の減少を目指す
・ 延岡警察署との連携を継続し、事故等に対して迅速に対応する
② 犯罪，生活トラブル対策
・ 学生生活上のトラブル事例等の情報を配信し、身のまわりの「危険なこと」への理解を高める
・ 犯罪、トラブルに巻き込まれないように、そのような兆候があれば速やかにユニパでの周知を行い、学生の無知・常識のなさ・情報収集力の未熟さからくるトラブル・軽犯罪の防止や啓蒙を継続する。また、発生した場合には迅速かつ適切に対応する
③ 防災に対する意識向上
・ 地震に対する備えとして、総合的な防災訓練を実施するとともに学生の防災意識向上のためオリエンテーションでの講習、防災マニュアルの配布など各種対策を昨年に引き続き推進する
④ 学内生活のニーズ把握と改善
・ 学生の要望を聴く機会を設けてニーズを把握し、改善の可能性を検討し、実施する

（障がい学生サポート委員会関係）
2．心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用
① 関係各所との連携体制の構築
・ 医療機関、学内健康管理センターとの連携の仕組みを検討する
・ チューター、学科長、学部長との連携、情報共有の仕組みとして、緊急時対応の連携フローを検討する
② 相談しやすい環境づくりと相談スキルの向上
・ 学生生活に不安を抱える学生との信頼関係づくり、相談しやすい窓口対応をしていくために、学生が相談しやすい環境を整える
・ 学生支援に関わる研修会に参加し、情報収集とともに関係教職員に研修内容を周知し、学生支援の質の向上に努める
③ 合理的配慮の理解
・ 合理的配慮の提供の義務化を受けて、本学で取り組むことを検討し、実施する

3．留学生・国際交流の取り組み（ラーニングサポートセンター・英語村関係）

① 留学生の除籍・退学者が出ないための支援をする

・ 留学生であっても精神的な不安による退学者が出つつある。十分な意思疎通が難しい留学生にとっては相談できる場所も限られるため、相談できず不安を抱え込んでしまうこともある。留学生向けの相談体制を検討する

② 日本での生活に慣れてもらうための機会を設ける

・ 令和５年度は新型コロナ感染拡大措置も緩和されるため、少しずつ留学生と日本人が一緒に楽しめるイベントを増やしていきたい
・ とくに留学１年目の学生を対象に、日常生活上の不安や疑問を聞き取り、少しでも早く日本生活に順応できるように支援していく
・ 部活やサークル情報を提供し、日本人学生同様、課外活動を楽しむよう促す
・ 学生委員会内に留学生部門の設置を検討し、留学生を中心とした活動を促す仕組みづくりに取り組む

③ 円滑かつ安全な一時帰国を支援する

・ 新型コロナ感染拡大措置の緩和により、一時帰国希望者の増加が予想される。円滑かつ安全に一時帰国できるように、関係部署と情報共有し連携していく

令和５年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
キャリアサポート部会		◎					○		

○今年度の取組状況

＜取組内容＞

１．就職希望者の就職率100%を目指すとともに、数値目標だけでなく、個人指導重視の支援を通して学生の発達を促し、一人ひとりが満足できる進路選択ができるよう質の高いキャリアサポートをする。

２．低学年からのキャリア意識の醸成を目的とした支援、就職活動の円滑な展開や就職試験への対応に繋がる公務員対策講座や、各種企画を積極的に実施する。また、宮崎県や延岡市などの地元企業や自治体と連携し、公務員を含む地元への就職者増を実現させる。さらに、ユニバーサルパスポートの「私の活動記録」に活動内容を残し、自分自身を振り返り、新たな目標を掲げることで自己成長につなげる材料として活用させたい。

３．学生へのキャリア支援については、学部学科の要望を最優先させ必要とされるイベントを積極的に対面形式にて実施する。また、就職情報サイトと連携し、早期から企業研究や自己分析などを実施することで、ミスマッチを防ぐ取り組みを継続する。さらに、求人情報等のデジタル化を見据え、情報伝達の再考に着手する。

＜取組状況＞

１．質の高いキャリアサポートを目指して、就職率向上のみに留まらず卒業の先にある社会人としての自立を促すよう、課員間で情報共有・意見交換を頻繁に行った。また、学生一人ひとりが満足できる進路選択ができるよう、キャリアサポートセンターと各学科、さらには地元ハローワーク、ヤング JOB サポートみやざき延岡サテライト、九州コミュニティーカレッジと連携・協力し、多様な学生の進路支援にあたっている。さらに、求人数の少ない職種については、定期的にホームページの求人情報を確認し、掲載された情報を学生・教員にリアルタイムで提供している。加えて、ガルーンのメール機能を活用し、来客や電話等による求人情報を共有することで、スタッフ間の情報量の差をなくし、学生に対する情報提供でも均一化を図ることができている。

２．低学年からのキャリア意識の醸成を目指して、本学・延岡市共催で workCafé のべおかを 10 月に開催し、低学年の学生が社会で活躍する企業の若手職員と直接面談できる場を設けた。また、公務員試験対策講座については、土曜日に午前・午後の二部形式で実施した。休憩時間には、講師等を含む参加者同士で意見交換するなど、これまでにない和やかな雰囲気で終了することができた。さらに、本学卒業生である福祉職や薬剤師職の参加もあり、参加学生の満足度も高かった。加えて、ユニバーサルパスポート、マイステップ機能「私の活動記録」に入力さ

せるため、定期的に入力促進のアナウンスを実施している。入力者は 3 割程度だが、記録を残す学生も徐々にではあるが増加傾向にある。次年度以降は、学科教員からの入力指導も強化していきたい。

３．学生へのキャリア支援充実を目指して、本学学生が目指す職種の学内説明会や業界研究会を適宜開催し、事業所との接触の機会を多く持った。また、就職情報サイト運営会社を含む就職支援関係団体のガイダンスを定期的に開催したことで、近年の採用スケジュールの変化にも対応でき、ミスマッチのない就職先の選択が実現できた。さらに、求人受付 NAVI の掲載企業も増加したことで、有効求人倍率も上昇したと同時に、就職管理機能の活用の幅も広げ、進路希望調査や受験報告書もデータ入力させたことで、採用側の DX 化にも対応できる人材を育成する第一歩を踏み出すことができた。

〇来年度の計画案

１．就職希望者の就職率 100%を目指すとともに、数値目標だけでなく、個人指導重視の支援を通して学生の発達を促し、一人ひとりが満足できる進路選択ができるよう、学生支援担当部署と連携し質の高いキャリアサポートを実施する。

２．低学年からのキャリア意識の醸成を目的とした支援、就職活動の円滑な展開や就職試験への対応に繋がる公務員対策講座や、各種企画を積極的に実施する。また、宮崎県や延岡市などの地元企業や自治体と連携し、公務員を含む地元への就職者増を実現させる。さらに、ユニバーサルパスポートの「私の活動記録」を活用し、就職活動における履歴書作成や、自己分析の振り返りの有効な手段として活用させたい。

３． 学生の個々のキャリア適性や志向性を把握し、適切なキャリア選択を支援するために、定期的なキャリア適職診断を実施する。また、調査結果をもとに、個別のフィードバックやキャリアプランの策定を行い、学生が自己の強みや興味に合ったキャリアを見つけられるようにサポートする。さらに、資格取得にかかる費用を IT パスポートなど一部の資格に限りサポートしてきたが、様々な学生が求める資格に対応するため、支援する資格の範囲を拡大させる。

令和５年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
社会貢献部会							◎		

○今年度の取組状況

１．社会貢献活動の推進

宮崎県人権啓発推進協議会の受託事業である「人権啓発活動協働推進事業」の４年目として、社会福祉学部臨床福祉学科が主体となり、12 月 9 日（土）に「人生会議（アドバンス・ケア・プランニング)」をテーマに講演会とパネルデイスカッションを実施した（参加者 42 名)。各学部においても、企業、地域、関係機関との連携を図りながら、社会貢献活動を推進した。

２．情報公開、情報発信の充実

各学部・各学科・各部活動・ボランティア・各個人における社会貢献等の実績について、前期と後期に分けて調査し集約した内容を大学ホームページに公表した。その成果を検証するには至っていない。

３．ボランティアセンター活動の推進

延岡市を中心に活動団体等からのボランティア活動要請件数は 177 件（昨年 219 件）あり、学生の参加件数 136 件（昨年 187 件)、総参加数 509 人（昨年 609 人）前年比 84%の活動実績となった。要請に対する活動者不在の件数が 41 件となり、学生参加の促進や地域ニーズへの大学側の調整対応が課題である。学内活動として、共同募金５回、環境美化活動３回を企画実施した。

４．順正ジョイフルキッズクラブ（ＪＫＣ）の充実

延岡市の「ひとり親家庭等学習支援等事業」の業務委託事業（8年目）は、19回予定していたが、台風接近の影響で18回の実施となった。登録者数34名（昨年20名）であり、延べ参加人数は317名（昨年193名）で昨年比1.6倍となった。学習支援のみならず調理実習4回、文化・教養・スポーツ活動等８つ企画し、活動の充実を図ったためと考えられる。生徒・保護者へのアンケート調査の結果の検討と学習支援関係者と事業振り返りを行い、成果と課題を明確にして次年度に活かしていくこととした。

○来年度の計画案

１．社会貢献活動の推進

各学部で推進している産学官連携による地域活性化の取組や社会貢献活動の実施状況について情報収集し、ホームページ等を活用して情報発信していく。また、大学全体で情報を共有する機会や方法を検討する。

２．ボランティアセンター活動の推進

地域関係団体からの派遣依頼の調整はもとより、ボランティアセンター企画による学内外のボランティア活動を推進していく。

３．順正ジョイフルキッズクラブ（JKC）の充実

令和６年度は、実施回数 20 回を計画する。プログラムの工夫や実施体制の強化を図る。

具体的には、食育体験の必要性から調理実習を 10 回に増やす。また、運営スタッフと学習支援員の確保策を検討し、円滑な事業運営を確立していく。

令和5年度　自己点検・自己評価委員会報告書

部会名＼点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
学生受入部会		◎			○				

○令和5年度の取組状況

１．教育目的を踏まえたアドミッションポリシーの策定

・求める学生像、入学時に必要な知識能力などを具体的に示す。

改組、カリキュラム変更のある学科を中心に、アドミッションポリシーの見直しを依頼し、募集要項、ホームページに掲載した。また大学案内にはQRコードを掲載し、アドミッションポリシーが容易に確認できるようにした。

２．学部学科のポリシーに基づく入学者選抜の実施

・2024年度入学生の入学者選抜に関する評価等の見直し、公表、実施する。

募集要項に各選抜の具体的な評価方法を掲載し公表した（昨年度より具体的に表記した)。

・2025年度入学生にむけた入学者選抜の検討、公表する。

現在検討中であり、4月中の公表（選抜の告知）に向けて進めている。

３．入学者の追跡調査

・入学後の追跡調査、分析を行い初年次教育へつながる入学前教育の実施への検討材料の作成

10月の入試教授会において分析結果を報告した。指定校、総合選抜で入学した学生のGPAが低い傾向にあるという分析結果も踏まえた入学前教育などを各学科に依頼した。

・入学後の追跡調査分析結果を考慮した次年度以降の入試科目、入学者選抜内容の検討

2024年度入学試験の科目設定などにおいては、過去の分析結果（後期入試の入学者の学力が低い傾向にあることや薬学科の留年、退学者の多くが入学時の化学の点数が芳しくない傾向にあること）なども参考にし、今後の分析の指標に組み込めるよう一般選抜での小論文の導入および薬学科共通テスト利用においては化学必須などに変更した。

４．大学名称変更、学科構成変更の周知

・高校訪問、DM、CM、SNS等あらゆる方法で広く告知を行う

テレビCM素材の新規作成、宮崎県、大分県、鹿児島県、沖縄県、熊本県、福岡県の高校生、その保護者の年代をターゲットとしたGoogle、Instagram、Facebookのターゲティング広告、大分県、熊本県、福岡県の高校訪問委託、薬学科ポスターの作成・大分県、宮崎県、鹿児島県薬剤師会を通じた薬局等への配布、校名変更リーフレットの作成・指定校全高校、資料請求者（高校生）へのDM送付、各学科チラシの作成・業者リストによる九州圏内の薬学希望、医療系希望、救急救命希望者へ各学科のDM送付など、新たな方法も活用し告知を行った。

資料請求者数：94.3%（昨年対比）

2024年度入学者対象　8,564人、2023年度入学者対象　9,082人、

2022年度入学者対象　8,194人　2021年度入学者対象　7,899人

５．高等学校との連携強化

・高大連携校を中心に、県内高校に対する出張講義や見学の受け入れ、課題研究のサポート

今年度は特に延岡星雲高校、延岡高校の課題研究サポートを各教員が実施した。また五ヶ瀬中等教育学校、高千穂高校と高大連携協定を締結した。さらに宮崎県教育委員会主催課題研究発表会審査員、高大連携校の中学生の研究課題への協力なども実施した。

６．満足度の高いイベントの実施と SNS を活用した告知

・オープンキャンパスなどの告知およびイベント内容の工夫

今年度オープンキャンパスにおいて、WBC のトレーナーとして帯同した佐々木講師の講演会を実施した。本取り組みへのアンケート調査では高い満足度が得られた。一方、告知および集客方法については検討すべき点が認められた。

オープンキャンパス参加者数　※高校生のみ、3 月開催分は除く

2023 年度　372 人、2022 年度　295 人、2021 年度　152 人（コロナのため 2 回)、

2020 年度　162 人（コロナのため 2 回)、2019 年度　449 人、2018 年度　460 人

※3 月開催　2023 年度　80 人（3/21 現在)、2022 年度　31 人、2021 年度　54 人

・SNS を活用したイベント告知方法の工夫

Instagram、LINE などを活用した告知を実施した。また学生スタッフによる投稿、事務スタッフによる投稿などでフォロワー数約 700 名であったところ今年度は 800 名となり増加傾向を示した。

○令和６年度の計画案

入学者を増やすため特に以下の 2 点を強化する。

１．オープンキャンパスやキャンパス見学会への参加者数を増やす（目標値：前年比 130%）

・資料請求者へ定期的なメール配信を行う

・ガイダンスへの参加を増やす

・沖縄、鹿児島、福岡など遠方地域へはネットバナー広告を活用して認知度を上げる

２.各学科の特色づくり（可視化）

・学科毎に在学生に対するアンケートを実施し、本学を選択した理由および本学の特色をまとめ「他の大学（専門学校）との相違点が“わかりやすい資料”」を作成する

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（スポーツ健康福祉学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	スポーツ健康福祉学科
教育力(使命・目的等を含む)	**１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	Ⅰ．3つのポリシーを明確に示し、それらを踏まえた学修成果の可視化を図り、学生が自らの学びを振り返り展望することができる体制を構築する。 Ⅱ．リメディアル教育、とくに基礎国語力の向上について、学修成果の可視化を図りながら学びに対するモチベーション維持・増進を図る。 Ⅲ．建学の理念、学部・学科の人材養成の目的を踏まえたアドミッションポリシーを策定し、学力の3要素、意欲、資質、能力を多面的に評価する評価基準の見直しを図る。 Ⅳ．卒業研究をはじめとしたアクティブ・ラーニングを活用し、自ら考え実践できる人材の養成に繋がる教育手法について検討し、実践する。 Ⅴ．3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価を行い、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善向上に取り組む。 Ⅵ．学部（学科）FDを継続して企画・実施することで、個別の課題を横断的に共有し、学部（学科）全体および各コース個々の課題解決や、教員個々および教員組織としての教育力の向上に取り組む。 Ⅶ．国家資格取得を目指す学生に対してロードマップを作成し、指導内容と学生の習熟度を評価し、学修成果の可視化を図りながら国家試験合格を目指す。
	２）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	Ⅰ．問題を抱えた学生を可能な限り早期に発見・対応するために、チューター・学科教員・カウンセラー・保護者・事務職員との連携を図った支援体制を強化する。 Ⅱ．学科行事やゼミ活動等を通じ、異学年の学生や卒業生と交流の場を企画し、各学生が卒業までの過程をイメージした上で、卒業に向けたモチベーションを高く持ち学生生活に臨めるように支援体制を整える。 Ⅲ．進級規程に定められたGPAおよび修得単位数の基準の意義を1・2年生にわかりやすく説明し、これらの基準を卒業に向けた短期目標として捉え、将来に希望を持ち学業に取り組めるように、また3・４年生については、卒業や資格取得等の具体的な目標を定めて主体的に学業に取組むことができる支援体制を整える。
	３）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	Ⅰ．学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」をキャリアサポートセンターとの協力により構築し、キャリアサポートセンターを積極的に活用するように促す。 Ⅱ．ミスマッチを防ぐため、学生個々の具体的な進路や希望する就職先に応じた「就職支援体制」をキャリアサポートセンターとの協力により構築する。 Ⅲ．キャリアサポートセンターと協力し、公務員対策を強化する。 Ⅳ．教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かす。また、新たな就職先の開拓にも努める。
	４）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	Ⅰ．学科の各コースの強みや特色を活かした教育・研究環境の整備に取り組む。 Ⅱ．実習施設、演習室、図書館等の有効活用を図る。 Ⅲ．学修環境に関して学生の意見を基に検討し、学科レベルで可能な学修環境の整備に取り組む。

研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	Ⅰ．地域における中核的な研究拠点として、学科の特色を生かした研究を推進する。 Ⅱ．学生を巻き込んだフィールドワークを行い、研究に繋げる。 Ⅲ．学科や学内の教員間での共同研究を促進する。 Ⅳ．研究機器・備品等ハード面の適切な管理およびより使いやすい環境に整備する。 Ⅴ．学会発表や学術雑誌への論文投稿を促し、研究力のアップを図る。 Ⅵ．研究成果をフォーラム、シンポジウム、研修会等で地域住民に還元する。 Ⅶ．研究活動の助成として、科研費申請や学内の「研究経費助成」、「地域創生事業研究助成」への申請を促す。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	Ⅰ．悩み（学生生活や授業など）のある学生が、より相談しやすい体制を構築する。 Ⅱ．チューター制度を活用し、学生の単位取得状況や生活状況を把握し、学生一人ひとりの状況に応じた適切な助言、指導を行い、また必要に応じて保護者や関係者へ連絡を行う。 Ⅲ．学科会議において学生の状況を共有し、学科全体で支援する体制を整える。 Ⅳ．学生同士、横の繋がりのみならず、縦の繋がりを築ける行事を開催する。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	Ⅰ．戦略的な募集活動を行う。 Ⅱ．学科の施設・設備の整備を実施する。 Ⅲ．社会的ニーズに応じた教育力の向上を図る。 Ⅳ．学科の魅力・特色や大学・学科の情報発信・広報活動を積極的に行う。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	Ⅰ．留学生の受け入れについて、事務部門と連携・協力して環境整備を図る。 Ⅱ．海外留学・短期研修プログラムについては積極的な案内を進めて、参加学生の増加を図る。 Ⅲ．海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などを推奨する。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	Ⅰ．教員とともに学生も参加し、地域の活性化や地域課題解決に向けたフィールドワークに積極的に取り組む。 Ⅱ．大学の施設や人材等を活用して、地域（自治体、関係機関、団体等）と共同企画を検討し、学生の主体的参加を促しながら協働事業を充実していく。 Ⅲ．イベント情報を教員が把握し、より多くの学生にイベント参加を促す。 Ⅳ．地域のニーズに対応すべく各種審議会や委員会の委員要請に応えていき、知の拠点としての役割を果たしていく。 Ⅴ．福祉関係機関や教育現場（小学校・中学校・高校）との連携を強化し、教員の教育力・研究力を発揮する機会を創ると同時に、地域の活性化や人材育成のために大学の知の還元を推進する。 Ⅵ．地域における福祉、健康やスポーツに関する課題の解決を目的とした調査研究を実施する。

2023年度の総評 （今年度の取組）	教育力(使命・目的等を含む) 1）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化	Ⅰ．学生便覧に明示された3つのポリシーを踏まえてのシラバス作成、授業を展開した。学生が自らの学びを振り返り展望することができるように、教務課と連携して学修ポートフォリオの活用を進めているが、十分に活用できていない。 Ⅱ．リメディアル教育、特に基礎国語力の向上についてICT教材を活用したホームワークを実施し、全学国語統一試験により確認した。1/3の学生の得点が向上したものの、平均点の伸びは認められず、例年に比べて試験の欠席者が多かった。 Ⅲ．令和6年度よりスポーツ健康福祉学科と臨床福祉学科が統合されて救急救命士養成課程を新たに設置し、スポーツ健康福祉学科の1学科、4コース体制となるため、アドミッションポリシーの見直しを行った。 Ⅳ．コロナ禍により実施できなかった全学年参加の卒業研究発表会を開催した。1年生と2年生はコースの垣根を無くし、自由に卒業研究を聴講できる環境整備を行った。1年生のレポートからは、所属するコース以外の研究に興味を持つ学生がみられた。また、4年生からは多くの人に自分たちの卒業研究が聞いてもらえて、充実感があったというコメントを得た。卒業研究に対する考えが活性化できたものと思われた。1年生には、4年後の自らの姿を想像する良い機会になったと思われる。 Ⅴ．各教員が3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価を行い、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善向上に取り組んだ。継続して教員採用試験現役合格者を出し、社会福祉士4名（合格率80.0%）、アスレティックトレーナー（AT）学科試験合格者3名（合格率60%）、健康運動指導士4名（合格率100%）等の結果が得られた。 Ⅵ．本年度は学部改組に時間を割かれ、学部（学科）FDを企画・実施できなかった。 Ⅶ．はり師11名受験9名合格で合格率81.8%（全国平均85.8%、養成大学平均79.9%）、きゅう師11名受験9名合格で合格率81.8%（全国平均86.2%、養成大学平均81.5%）であった。ロードマップによる対策に加え、12月と2月の国家試験前に模擬試験を実施した。模擬試験結果が国家試験の自己採点の点数を反映する傾向が観察されたため、学習成果の可視化の役割を果たしたものと考えられた。 社会福祉士5名受験4名合格で合格率80.0%（全国平均58.1%、養成大学平均76.8%）であった。前期と後期に各1回ずつ各国家資格対策の代表者が集まり、試験対策の状況および課題について話し合った。また、月に一度、ガルーン上でのミーティングを行い進捗状況の確認を行い、各資格取得のための試験対策の修正や見直しを行った。
	2）学修支援体制の強化	Ⅰ．学科教員間での情報共有はもちろんのこと、各チューターおよびゼミ担当教員は、出席状況や成績、単位の取得状況を常に把握し、問題の早期発見と解決へ努めた。何らかの問題傾向の見られる学生とは早期に面談を行い、学生の置かれている状況の把握、手助けをすることによって問題解決へ導く支援を行った。また積極的に保護者との話し合いの場を設けるなど学生支援に努めた。 Ⅱ．前期に全学年が参加する合同交流会を開催し、後期には大運動会を開催するなど異学年と関わり、互いを知る機会を設けた。上級生が授業等で学んだ内容や自分たちのアイデアを用い、学生主体で企画、運営を行った。これらのイベント参加から下級生は上級生になるということをイメージしやすくなる。一部の科目では講義の補助学生として上級生が参加することもあり、資格取得から就職へのイメージづくりやモチベーションを保つことにつながっている。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化	Ⅰ．キャリアサポートセンターを中心に、work Café 延岡や小規模就職説明会等を開催し、学生の参加を促した。キャリアサポートセンターの利用増加を目指したが、本年度の利用・面談件数(4月～1月)は、70件と昨年度(101件)と比べ減少した。 Ⅱ．キャリアサポートセンターから学生の就職活動に関する情報を聴取し、就職活動の状況把握に努めた。就職情報や就職面談会等について、ガルーンを通じて学科内教員と情報共有を行った。3月30日現在で未定者1名、就職率は96.7%である。 Ⅲ．キャリアサポートセンターと協力し、公務員対策講座を開催し、学生の参加を促した。 Ⅳ．教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かした。また、新たな就職先の開拓にも努めた。
	4）キャンパス環境の整備	Ⅰ．新たに教育・研究備品として2点を購入した。 Ⅱ．学科教員を対象に教育備品の使用頻度を調査したところ、昨年より微増した。図書館での学科にかかわる新規購入書籍68冊、新版・継続12冊、教員リクエスト32冊、学生リクエスト24冊であった。 Ⅲ．体育館の備品について、特に開学当初からの古いものを新しいものに入れ換えた。学科レベルで可能な学修環境の整備に取り組んだが、まだ改善すべき点が多くある。

	研究力	Ⅰ．QOL研究機構社会福祉学研究所と連携して、地域に根差した調査研究・イベントを実施し、助成を受けた5件を報告書としてまとめ、公表した。 Ⅱ．学生が専門学会において発表を行い（学生部門優秀賞受賞）、その内容を地域における活動「お灸教室」において参加者に伝えた。 Ⅲ．学科や学内の教員間での共同研究を促した。 Ⅳ．新たに教育・研究備品として2点を購入した。 Ⅴ．今年度の論文数（10）、学会発表（12）、学会参加（21）は増加した。一方、著作数は減少した（0）。科研費採択は１件であった。所属教員2名が博士取得に向けた研究を継続中である。 Ⅵ．中核センター研究推進部門による「研究経費助成」・「地域創生事業経費助成」の研究・事業内容について、学内および市内のパブリックスペースでポスター発表会を年度末に開催し、本学科から１名が発表を行った。 Ⅶ．科研費応募2件で採択１件、継続1件、学内の「地域創生事業研究助成」採択1件であった。
	学生支援	Ⅰ．チューターやゼミ担当教員に加え、学生相談室でのカウンセラーにも相談できることを学生に周知した。個人情報の管理に十分配慮しながら、学内のカウンセリングに関する状況をカウンセラーと関係教員とで共有し、学生指導に活かした。 Ⅱ．チューター制度を活用し、学生の単位取得状況や生活状況を把握し、学生一人ひとりの状況に応じた適切な助言、指導を行い、また必要に応じて保護者や関係者へ連絡を行った。 Ⅲ．月1回の学科会議において各チューターからの報告により学生の状況を共有し、学科全体での支援を行った。 Ⅳ．学生同士、横の繋がりのみならず、縦の繋がりを築ける行事として新入生宿泊研修、合同交流会、学科運動会を開催した。
	募集力(ブランド力)	Ⅰ．進路ガイダンス、出張講義、教育実習での巡回訪問の際に、大学進学に際して大学を選ぶ理由、ポイントについて聞き取りを行った。特にスポーツ系の大学に求める事柄について聞き取りを行った。 Ⅱ．2号棟プレイルームにATルームの機能を持たせ、オープンキャンパスや大学見学会等で施設を有効に活用している。高校生が施設見学をする際に、鍼灸の施設と合わせて同時に見学できている。 グラウンドの天然芝の管理ではサッカー部の学生を中心に水やり、肥料の散布、冬芝の種蒔きを計画的に行い、緑化に努めた。また、芝刈りに関しては学科の教員が行うことで、芝生の生育が促進された。 Ⅲ．資格取得率向上のために、各資格の担当者が模擬試験や個別に学生対応などの対策講座を行った。教員採用試験では、現役合格3名に繋がった。AT取得を目指す学生や教員が積極的に地域や高校に出向き、トレーナーとしてのサポートや講習会を実施した。学科の多くの教員がスポーツ関連の外部団体の委員を行うことで先進的なスポーツの関連の情報を得るとともに小中高の競技団体の指導者と交流を行った。 Ⅳ．多角的な視点から本学の広報活動を行った。SNSの活用ではAT部、サッカー部、陸上部が学生を中心に行った。また、大学HP内の学科ブログの更新回数については月に2回の更新を行い、学科の魅力発信に努めた。教育実習やアスレティックトレーナー実習は、副次的効果として学科の魅力発信・学生募集に繋がっている。
	グローバル化	Ⅰ．留学生の受験が1名あった。 Ⅱ．海外留学・短期研修プログラムの案内は十分に行えていない。 Ⅲ．海外での学会発表が1件あったが、国際ジャーナルでの論文発表はなかった。
	地域活性化	Ⅰ．木城町との連携事業で地域課題の抽出と解決に向けたフィールドワークに、学生とともに継続して取り組んでいる。。 Ⅱ．のべおか子どもセンターのイベントで本学体育館やグラウンドを使用し、またボランティアとして学生も参加し、親子での体力測定およびレクリエーションスポーツの体験会を実施した。大学の地域創生事業経費助成を受け、女性向けの運動教室を本学体育館で実施した。「Out of KidZania in のべおか」や「お灸教室」のイベントを企画し、学生とともに参加した。 Ⅲ．イベント情報を教員が把握し、学生にイベント参加を促した。 Ⅳ．地域のニーズに対応すべく各種審議会や委員会の委員要請に応え、知の拠点としての役割を果たせるよう努めた。 Ⅴ．延岡市内の小学校から依頼を受け、水泳授業や遠足の補助に学生をボランティアとして派遣した。アスレティックトレーニング部の教員と学生が高校バドミントン部やバレー部の練習会や大会に参加し、サポートを行った。延岡市の駅伝大会に市からの依頼を受け、学生をトレーナーや補助員として派遣、競技運営に協力した。高大連携を活用し、本学教員が高校部活動の外部指導者として継続的に指導を行っている。 Ⅵ．宮崎県地域部活動移行のコーディネーターとして県内の事業への取り組みを担当した。延岡市教育委員会主催による学校インターンシップ「教育大学リーグ」に学生4名が参加し、県内外の学生と交流し、学生視点による教育現場の現状について報告を行った。

2024年度への展望 （来年度の計画案）	教育力(使命・目的等を含む)	スポーツ健康福祉学科と臨床福祉学科の統合、救急救命士養成課程の新設により、スポーツ健康福祉学科の1学科、4コース体制となるため見直した3ポリシーに基づき、教育力の向上に向けて設定した各目標達成に向けての取り組みを行う。 臨床福祉学科がスポーツ健康福祉学科と統合することから、卒業研究発表会を合同開催し、学科内で行われた多様な卒業研究を参観できることで、視野を広げる機会とする。 国家資格および認定資格の合格率が全国平均を上回り、より多くの合格者を出すため、3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価を行い、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善向上に取り組む。
	研究力	QOL研究機構社会福祉学研究所と連携を継続し、地域における中核的な研究拠点として、学科の特色を生かした研究を推進する。 学生を巻き込んだフィールドワークを研究に活かす活動は、学生の学習・研究意欲向上にも非常に有意義であり、積極的に取り組む。 論文および研究発表数は増加してきており、今後もこの状態を維持あるいは向上させるため、単独で行う研究だけではなく学科や学内、さらに学外の研究機関や研究者との共同研究を促進する。
	学生支援	1学科、4コースと学科の規模が大きくなるため、学生支援の仕組み、取り組みについて、状況に合わせて再構築していくが、下記の基本に変わりはない。 学生生活や授業などについて悩みのある学生が、より相談しやすい体制を構築する。その一つとしてチューター制度を効果的に活用していく。 また、個人情報に配慮しながら学生の状況を共有し、学科全体で支援する体制を整える。 学生同士、横の繋がりのみならず、縦の繋がりを築ける行事を開催する。
	募集力(ブランド力)	入試広報課と連携し、本学科の各コースに関して高校生が進路を決める際に重要視する点についての情報を収集、分析し、受け身ではなく積極的に4コースが協力し合い戦略的な募集活動を実施し、各コース20名の入学者確保を目指す。 他大学との競争において特にスポーツ施設の充実を行わなければ、他のスポーツ系大学との競争は困難となるため、スポーツ施設・設備の整備を実施し、本学科の特色を活かした環境づくりに努める。 教職、アスレティックトレーナーや社会福祉関連の資格を目指す学生や教員が実践的学びを行うために、学校現場や社会福祉関連施設等と連携し、教育力の向上を図り、ブランド力向上につなげる。 部活動を学生課と協力して活性化し、各部の活動や成績の向上を目指すとともにSNS等で活動情報を広める。 学科のHPブログやSNSを充実させ、また、その他の広報媒体も活用して、学科の取り組みや学生の学びの情報を積極的に広める。
	グローバル化	事務部門と連携・協力し、受け入れた留学生の学修環境整備を図る。 海外留学・短期研修プログラムについて積極的な案内を進める。 海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などを推奨する。
	地域活性化	地域の活性化や地域における福祉や教育、健康、スポーツ、医療に関する課題解決に向けたフィールドワークに、教員が学生とともに積極的に取り組む。その際、分野を超えた教員間の相互協力を重視し、異分野の積極的な交流を促す。 地域のイベント情報を教員が把握して積極的に協力し、より多くの学生にイベント参加を促す。加えて、大学の施設や人材等を活用し、地域と連携した福祉や教育、健康、スポーツ、医療に関するイベントを企画し、実施する。 各種審議会や委員会からの委員要請や受託業務に積極的に応じ、さらに、自身の活動や成果を積極的に情報発信し、地域住民や関係者との連携を強化するなど、教員が自身のフィールドを広げるように努める。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（臨床福祉学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力（使命・目的等を含む）	**１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	①福祉現場のニーズに対応できる専門知識や技術、実践力を備えた福祉・教育人材を育成するというディプロマ・ポリシーに基づく単位認定を行うための基準を策定し、学科での周知活用を目指す。 ・福祉人材育成に求められる評価ポイントを整理し、学科内で共有し各教員が単位認定の在り方を検討する ②社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の資格取得を目指す学生に対してロードマップを作成し、指導内容と学生の習熟度を評価しながら国家試験合格を目指す。 ③3つのポリシーを踏まえた学習成果の点検や評価を定期的に学科内で行い、より質の高い教育の提供を目指す。 ・学科内で学内教育および実習教育等の学外教育において注意や教育上の配慮を要する学生の情報を共有し、学生教育の質の向上を目指す。 ④大学および学部FDに積極的に参加し、教員の教育力向上を目指す。 ⑤座学講義におけるアクティブラーニングの導入を推奨する。また、アクティブラーニング実施科目の実施状況を学科内で共有し、効果的な教授法について検討する。
	２）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	①ディプロマ・ポリシーに基づいた卒業研究の評価基準を策定し、卒業研究指導のあり方を学科で共有したうえで指導を実践し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究発表会の実現を目指す。 ②1年次からの卒業研究教育法を確立し、4年間を通じた卒業研究指導を目指す。 ③教員による講義参観や複数担当教員科目を通じて、教員相互で教授法について定期的な意見交換を実施し、また、授業アンケートの結果を踏まえ、各講義の教授法改善の良循環を目指す。 ④国語力増進プログラムを構築し、文章力・読解力の基礎ならびに論理的思考を身につけさせ、専門書の内容理解やレポート報告書の作成、卒業論文の執筆技術につなげる。 ⑤統計や社会調査等のデータの取り扱いに際し必要となる数学的知識や操作スキルを習得させ、エビデンスに基づいた論理的思考教育を目指す。
	３）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	就職率100％を目指す ①「基礎演習」（1年次必修）の中で、キャリア教育を取り入れ、就職についての動機付けを行う。 ②学科会議等を利用して、個々の学生のニーズを教員間で共有し、学科全体としてのサポート体制を整える。 ③ミスマッチを防ぐために、インターンシップや就職ガイダンス等への参加を促進して、学生の自己覚知を促す。 ④キャリアサポートセンターを積極的に活用するように指導する。特に就職面接対策講座等の受講を促す。 ⑤キャリアサポートセンターとの連携を密にはかる。特に就職面談会等の情報を教員も把握して、参加促進をはかる。 ⑥教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かす。また、新たな就職先の開拓にもつとめる。
	４）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	①学修環境に関して学生の意見を基に、学修環境について検討し安全で快適なキャンパス生活実現に向けた環境整備に取り組む。 ・演習室、図書館、英語村等の有効活用を図る。

研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	①地域における中核的な研究拠点として学科の特色を生かした研究を推進する。 ・地域のネットワークや資源を活用し、地域に密着したテーマに基づいた研究を推奨する。 ・学生を巻き込んだフィールドワークを行い、研究に繋げる。 ・学科教員間での共同研究を勧める。 ・研究成果をフォーラム、シンポジウム、研修会等で地域住民に広く還元する。 ・学会発表や学術雑誌への論文投稿を促し、研究力のアップを図る。 ②研究活動の助成として、科研費申請や学内の「研究経費助成」、「地域創生事業研究助成」への申請を促す。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	①学生の健康相談や経済的支援（奨学金等利用を含む）に関して担当部署、保護者等との連携を図る。 ②学内のバリアフリーに関する課題を検討し学内の利便性を図り、学生のサービスへとつなげる。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	①学科の魅力発信 ・高校（特に出身校や福祉科高校など）と連携を図り、学科の魅力を伝える。 ・学科ブログを更新し、近況をアップする。 ・保護者通信で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。 ②オープンキャンパスのあり方を検討し、分かりやすい学科案内方法を検討する。 ③高校のガイダンス（出張講義）や大学見学会、体験型模擬授業、こども体験学習等を積極的に受け入れ、福祉の職業理解につなげる。 ④学生が地域（学外）に出る機会（ジョイフルキッズクラブ、ボランティア活動、授業活動等）を通して、地域との交流を図る。 ⑤公開講座やセミナー、科目履修証明プログラム等を通して、教員一人ひとりの研究内容や講義内容を地域住民へ情報発信をする。。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	①海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などを推奨する。 ②留学生の受け入れを積極的に行い、事務部門と連携・協力して、受け入れに伴う環境整備を図る。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	①教員をはじめ学生参加により、地域の活性化や地域課題解決に向けたフィールドワークを積極的に取り組む。 ②大学と地域（自治体、関係機関、団体等）と共同企画を検討し、学生の主体的参加を促しながら協働事業を充実していく。 ③地域のニーズに対応すべく各種審議会や委員会の委員要請に応えていき、知の拠点としての役割を果たしていく。 ④福祉関係機関や教育現場（中学・高校）との連携を強化し、教員の研究力を発揮する機会を創ると同時に、人材育成・地域の活性化に還元していく。

2023年度の総評 （今年度の取組）	教育力(使命・目的等を含む)	**１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** ①福祉現場のニーズに対応できる専門知識や技術、実践力を備えた福祉・教育人材を育成するというディプロマ・ポリシーに基づく単位認定を行うための基準策定はなされなかった。大学内で共有している評価方法の基準に加え、学科が掲げるディプロマ・ポリシーに基づく単位認定基準を作成し、学科教員で共有する必要がある。 ②社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の資格取得に関するロードマップは作成していないが、前期および後期に各1回ずつ各資格の代表者が集まり、試験対策の状況および課題について話し合った。また、月に一度、ガルーン上でのミーティングを行い進捗状況の確認を行った。その結果、各資格取得のための試験対策の修正や見直しを行うことができた。国家試験の結果は、社会福祉士が77.8%合格（全国合格率58.1%）、精神保健福祉士が100%合格（全国合格率70.4%）、介護福祉士が100%合格（全国合格率82.8%）を達成することができた。 ③3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検や評価を毎月開催される臨床福祉学科会議で行った。欠席が多い学生や合理的配慮が必要な学生について教員間で情報共有をし、学生の学修支援を行った。 ④研修会開催日時と業務が重なった教員以外は、大学および学部FD研修会に参加した。研修会では、講師の講話はもとより、グループワークで他学科の教員等と意見交換を行い、教育力の向上を目指した。 ⑤新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことにより座学講義におけるアクティブラーニングの実施が望まれるが、積極的に導入するという状況には至っていない。今後、引き続き感染対策を取りつつアクティブラーニングを導入する方法について検討し、積極的導入を目指す。
		２）学修支援体制の強化 ①ディプロマ・ポリシーに基づいた卒業研究の評価基準は素案作成の段階にとどまり、策定には至らなかった。 卒業研究要旨の提出を学科共通の単位認定条件とし、要旨を学科教員全員に公表することで、研究指導法の共有に一定の効果をもたらした。 卒業研究発表会については、令和5年12月4日と11日の2日間に分けて実施することができた。全学生が学科教員全員および３年次生の前で発表する機会としたことで、自ら学ぶ意識に寄与した。 ②1年次の基礎演習Ⅰ・Ⅱにおいて文書作法、プレゼンテーションの基本の演習、3年次に4月のオリエンテーションでのゼミ説明会、3年次のフィールドワーク演習Ⅰでの調査研究法の指導、3・4年次の卒業研究を経て4年次12月に卒業研究発表会と卒業研究要旨集と、1年次から卒業研究を意識したスケジュールは確立している。しかし、教育法という点では学科教員間で卒論指導法について情報交換をする機会がないため、実現できていない。 ③ソーシャルワーク実習指導や介護実習指導においてオムニバス形式の授業を取り入れ、担当者の授業を相互に参観することで授業改善に効果を挙げた。毎月、定例会議を開催し、当月の反省と次月の確認を定期的におこなっている。ソーシャルワーク演習や精神保健福祉援助演習では福祉現場で活躍する外部講師を招聘したことで、実践につながる教授法を得る機会となった授業アンケートは学生の回答数が少なく、授業改善に関わる情報が十分に得られなかった。④WEB学習教材（すらら）で国語力に関わる課題を前期194題（58時間）、後期170題（21時間）を設定し、文章力・読解力の基礎につなげた。全学統一の国語力試験では平均点が9.7点向上した。 ⑤社会福祉調査の基礎の講義時間において統計の基礎を理解させ、具体的な例題を用いて統計的推定の演習をおこなった。フィールドワーク演習Ⅰの講義時間においてフィールド調査の基本を講義し、CAD（コンピュータ支援設計）の操作演習をおこなった。講義に加えて具体的な例題を用いた演習により、情報活用の技術習得に効果があった。
		３）キャリア支援並びに就職支援の強化 ①「基礎演習Ⅰ」で、学生全員がキャリアサポートセンターを訪問し、職員からキャリアサポートセンターの役割や目的について講義を受け、利用方法について指導を受けた。質疑応答において学生から多くの質問があり、就職に対する意識付けができたと言える。くわえて、県内4町村社会福祉協議会合同就職面談会を利用して、社会福祉協議会の目的や業務内容などの講義も受ける機会も設けたことで、社会福祉協会の理解が促進された。 ② 学科会議において、学生の就職状況についての情報共有を定期的に行なった。就職率は100%である。 ③ ④ゼミにおいて、担当教員より就職ガイダンス等への参加促進をするが、キャリアサポートセンターからの情報提供が少なく、情報共有が不十分であった。 ⑤ 就職面談会等の開催についての情報が、キャリアサポートセンターと教員間で十分に共有されたとは言えない。学内メールや、学内掲示板（ガルーン上）などの活用が必要である。 ⑥ 近年は学生の売り手市場の傾向が強く、実習先への就職なども含めて、地元企業や地元福祉施設への就職が定着していると言え、地域への人的貢献が行われている。そのため、新たな就職先を特段開拓する必要性はなかったといえる。
		４）キャンパス環境の整備 1年のチューター時間において、大学のキャンパス環境や図書館・英語村など案内し説明した。ゼミの活動（卒業研究を含む）において、演習室で学生がパソコンを活用できるようにした。夏季・冬季休業などにおいて国家試験受験者に対して、演習室を使用できるようにした。

	研究力	①木城町との連携事業で、学生を引率してフィールドワークを実施した。学科教員による学会発表、論文投稿も行われており、宮崎県委託事業人権啓発セミナーにも積極的に関与した。 ②学科からは科研費を獲得・継続中の教員が3名おり、研究を行なっている。また、学内の研究助成事業も活用している。しかし、研究活動が積極的に実施されているとは言い難い状況であり、研究へのさらなる取り組みが求められる。	
	学生支援	①オフィスアワーやチューター時間、ゼミ時間を活用し学生の生活状況や学業等について個別面談等を実施した。学生の個人情報を守秘できる範囲で学科会議等で情報共有し学科教員全体でフォローする体制を整えた。相談内容に応じて、保護者や学科長・学部長・担当部署の事務職員と連携を図り、早期に対応した。 ②課題の検討は積極的にしていない。	
	募集力(ブランド力)	臨床福祉学科が次年度（令和６年）より募集停止が決まり、スポーツ健康福祉学科ソーシャルワークコースとして学科が統合することが決まった。募集力としては、ソーシャルワークコースへのスムーズな移行を行うため、スポーツ健康福祉学科と連携を図りながら、オープンキャンパスや大学見学会を実施できた。 ①学科の魅力発信 福祉科高校とは「宮崎県高校生介護技術コンテスト」の審査委員などを通して、交流を継続し、高校との連携を図っている。その他にも高校の探求学習のアドバイザーを務めたり、高校のガイダンスや模擬授業などを通して中高校生への福祉の魅力を伝えていく活動を継続して行った。学科ブログの更新についても、各教員より定期的に授業や大学行事の様子、学会参加等のトピックを更新できた。 年２回、社会福祉学部として保護者通信を発行し、保護者に大学の様子を伝えることができた。 ②オープンキャンパスのありかたの検討 スポーツ健康福祉学科としての募集となり、各コースと連携したプログラムを模索した。ソーシャルワークコースとしては、従来のスポ科のプログラムと調整し、学科チラシ・掲示物の刷新や新たな体験ブース（自己覚知カードゲーム）を設けた。また、今年度は学生生活が伝わる学内の様子や部活紹介等の動画を作成し、オープンキャンパスで流すことができた。 ③高校のガイダンス、大学見学会、体験型模擬授業、こども体験学習 高校の進路ガイダンス（出張講義）9件、中学・高校・PTAに対する大学訪問による模擬授業・見学等18件、こども体験学習１日を通じて、子どもから高校生、保護者向けに福祉の職業理解を促すことができた。 ④地域との交流 地域との交流をする機会を設け、学生の参加を促している、学生が地域に出ることで、地域活性化やブランド形成につながっている。 具体的には、ひとり親家庭等への学習支援を行うジョイフルキッズクラブへの学生のボランティア参加、年間を通した県北地域のボランティア活動への参加、地域への調査やその報告等を行う木城町連携事業、防災マップや防災標語を作成し紹介した防災フェスタ等への参加を指す。参加行事・イベント等は、昨年度と同じである。 ⑤公開講座やセミナー、科目履修証明プログラム 延岡市人権啓発推進セミナーを臨床福祉学科教員で担当し、テーマを「アドバンス・ケア・プランニング」とし、実施した。延岡市民に向け、セミナーを開催でき、ブランド力向上につながった。科目履修証明プログラムについても準備しているものの、受講希望者がおらず、実施に至っていない。	
	グローバル化	①②海外での学会発表や国際ジャーナルでの論文発表はできていない。中国からの留学生に対し、学習面・生活面において積極的にかかわり、学位並びに介護福祉士の国家資格を取得し卒業することができた。	
	地域活性化	①木城町との連携事業において、年2回のフィールドワークを行い、地域課題の抽出並びに課題解決　策の提案プレゼンテーションを行なった。また、フィールドワークにて調査した福祉事業所のＰＲ動画や木城町全協民向けの体操を開発、動画を作成し提供した。（学生述べ参加者数71名） ②延岡市からの受託事業であるジョイフルキッズクラブ活動（19回）に、学生ボランティアとして述べ88名が参加し、学習支援の充実を図った。 ③県・市等の要請に積極的に応え、外部委員40、講師派遣26、会議出席29の実積をあげ、知の拠点として役割を果たした。 ④県立延岡高校への課題研究指導に参画した。高校生研究グループのテーマに関連した内容について、教員の専門的知見から指導を行った。また、宮崎県内の福祉科高校の「介護技術コンテスト」に審査委員として,総評並びに介護技術指導をおこなった。	

2024年度への展望 （来年度の計画案）	教育力(使命・目的等を含む)	１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 ①福祉現場のニーズに対応できる専門知識や技術、実践力を備えた福祉・教育人材を育成するというディプロマ・ポリシーに基づく単位認定基準を6月までに作成し、学科教員で共有するとともに、前期単位認定試験において基準に基づく単位認定を行う。 ②社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の資格取得に関するロードマップを作成しつつ、学生の習熟度に合わせ、臨機応変に指導内容の軌道修正を行う。前期および後期に各1回、国家試験対策の状況を共有するための会議を開催するとともに、毎月、進捗状況をガルーン上で共有し指導内容を検討する。社会福祉士80%以上、精神保健福祉士・介護福祉士100%の合格を目標とする。 ③3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検や評価を毎月開催される臨床福祉学科会議で行う。視点として、学生が抱える課題に加え、積極性や行動力、社会貢献など他学生の模範となるような学生についても共有し、学生の力を引き出すための指導方法を検討する。 ④大学および学部FDに全学科教員が参加し、教育力の向上を目指す。 ⑤学科教員が実施しているアクティブラーニングの事例を共有し、各講義での教育方法の工夫を実施する。前期および後期に各一回、各教員が教育方法の工夫を報告する場を設ける。	
		２）学修支援体制の強化 ①卒業研究評価基準の素案は作成できているので、学科教員の合意を取り、2024年度の卒論指導から導入する。 卒業研究発表会に１年生から３年生までの参加を義務づけ、学生から自ら学ぶ力につながるようにする ②卒業研究に向けた4年間のスケジュールはおおよそ確立できてるので、学科教員が抱えている卒業研究教育における問題点を共有し、教育法確立につなげる方策を検討する。 ③本学科の教員は全員複数担当教員科目に関わっているため、引き続き相互の授業参観や定例会議をつうじて情報交換をおこない、授業改善に努めていただく。 授業アンケートは有効な回答が得られる程度の回答率に向上させるための手立てを講じる ④学科廃止に伴いWEB学習教材を活用した国語力増進プログラムは2023年度で完了した。 ⑤フィールドワーク演習Ⅰ・Ⅱの時間を活用して、調査法、分析法、コンピューター操作にふれる機会を設け、エビデンスに基づいた資料の読み取りと考察ができる教育法の確立を目指す。	
		３）キャリア支援並びに就職支援の強化 100%の就職率を目指すべく「基礎演習Ⅰ」のチューター時間を活用し、キャリアサポートセンターへの訪問と、職員によるレクチャーをおこない、Ⅰ年次から就職に対する動機付けをおこなう。キャリアサポートセンターと各種面談会や対策講座や、学生の求職状況や内定・決定等の情報共有を強化し、学科会議等で教員に周知する。	
		４）キャンパス環境の整備 快適なキャンパス生活の実現に向けて、建物の利用状況、設備の整備状況等キャンパス環境を学生に周知する。 演習室を学生が活用できるように学生の意見を取りれ状況に応じて変更する。	
	研究力	①地域のネットワークや資源を活用し、宮崎県、県北部が抱える問題、テーマに基づいた研究を推奨する。研究活動は学科教員に限定せず、他大学の研究者、学生と積極的に研究会等で学術交流を図る。また、研究成果は学会発表や学術雑誌へ積極的に論文投稿し、フォーラム、シンポジウム、研修会等で地域住民にも広く還元する。 ②研究活動の助成として、科研費申請や学内の「研究経費助成」、「地域創生事業研究助成」への申請を促す。・科研費を申請し、採択されなかった場合には学内の研究助成事業を活用する。・研究助成を活用した研究に関しては、学会発表、学術論文投稿による公表を行う。	
	学生支援	①オフィスアワー、チューター時間、ゼミ時間を活用し学生の状況を把握し、必要時は学科教員、学科長・学部長、担当部署と連携し早期対応をする。新1年生はスポーツ健康福祉学科なので、連携できる体制を考える。 ②学生から学内のバリアフリーに関する意見を聞く。	
	募集力(ブランド力)	①学科の魅力発信・在学生の出身高校や福祉科高校などと連携を図り、学科（特に福祉）の魅力を伝える。・学科ブログの運用について、スポ科と協議をする。よりタイムリーに、またダイレクトに情報を届けるためにも、インスタグラムなどのSNS等の活用を試みる。・保護者通信で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。 ②オープンキャンパス・スポ科の各コースと連携を密にし、オープンキャンパスでよりソーシャルワークをPRできるよう工夫する。 ③高校のガイダンス、大学見学会、体験型模擬授業、こども体験学習・引き続き、高校のガイダンス（出張講義）や大学見学会、体験型模擬授業、こども体験学習等を積極的に受け入れ、福祉の職業理解につなげる。 ④地域との交流・引き続き、学生が地域（学外）に出る機会（ジョイフルキッズクラブ、ボランティア活動、授業活動等）を通して、地域との交流を図る。 ⑤公開講座やセミナー、科目履修証明プログラム・公開講座やセミナー、科目履修証明プログラム等を通して、教員一人ひとりの研究内容や講義内容を地域住民へ情報発信する。	

	グローバル化	①海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表するのための情報収集・共有をする。 ②留学生の受け入れを積極的に行い、事務部門と連携・協力して、受け入れに伴う環境整備を図る。	
	地域活性化	①②③④地域（宮崎県、延岡市等の自治体、関係機関、団体等）や教育機関、各種審議会や委員会の要請に積極的に応え、教員の研究力を発揮するとともに、知の拠点としての役割を果たしていく。	

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学 臨床心理学科

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	**１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	1　臨床心理学科における3つのポリシーを明確に示し、ステークホルダーへの理解を深めることで、教育目標の実現を図る。 2　臨床心理学科が掲げる3つのポリシー（DP・CP・AP）について、学生などのステークホルダーが、ホームページ・ガイダンス・オリエンテーション等の様々な方法をスムーズに活用できるように促す。また、学生自らの学びを省察できる体制を構築する。その方法として以下の取り組みを重点課題とする。 ・学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極的な活用を促す。 ・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講を促進させる。 ・国語力等の向上にのための課題実施及び、elearningを積極的に活用する。 ・初年次教育につながる入学前教育の実施する 3　学生自らが考える力を向上させる。その対策として以下のような取り組みを進めていく。 ・卒業研究指導のあり方を検討し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究を目指す。 ・できる限り多くの科目において、学科教育力を向上させるアクティブラーニングの導入を目指す。 ・コース会議等で卒業研究の取り組み状況を確認し合い、全員の卒業論文の完成を目指す。 4　基礎国語力増進させる。対策として以下のような取り組みを進めていく。 5　学修成果の点検・評価においては、臨床心理学科の３つのポリシーを踏まえて、ＰＤＣＡサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善・向上に取り組んでいく。
	２）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　大学院進学希望者への効果的な対策を行う。 ・高校英語の再学習の機会を設け、英語力の向上を図る。 ・英語村を積極的に活用し、インプットだけではなくアウトプットの学習にも力を入れる。 2　国家試験合格率アップへ向けた対策を行う。 ・国家試験対策部会で効果的な対策方法を検討・実施し、コース会議等でその効果を検証する。 ・１年次から資格関連科目の授業において、必要に応じて資格取得の意義・意識づけを行う。 ・資格希望者のうち、成績不振者に対して個別指導による国家試験対策を行う。 ・コース会議等で各学生の成績を共有し、教員間で個別の対策を検討する。 3 学科教員の教育力のアップを図る。 ・授業改善に向けたFDへの積極的な参加を促す ・学修成果可視化に向けた教員相互による授業改善の仕組みを検討する。 4　教育施設のレベルアップを図る。 ・社会生活コミュニケーション室、家庭生活コミュニケーション室等を設備し、学内の実習・演習等で積極的に活用する。 ・学生の学習場所として演習室を積極的に開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促す。 ・学生の学習場所で学生が使用できる学習資料や学習ツールを充実させる。

教育力(使命・目的等を含む)	**3）キャリア支援並びに就職支援の強化** 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	1　学生の希望する就職先への就職率をアップさせる。 ・履歴書作成や模擬面接等を通じて、全ての学生が希望する就職先へ就職できるよう、キャリアサポートセンターと連携を取りながら、きめ細かい指導を行う。 ・「即戦力の九保大生」「印象の良い九保大生」を求人側施設にアピールできるよう、学生に臨床教育を行う。 ・低学年からインターシップへの積極的な参加を促し、キャリアイメージを早期に形成できるように支援を行う。 2　キャリア支援の一環として、行われる公務員試験対策講座への積極的な参加を学生に促す。 3　学生に各種就活イベント等への参加を促進する。 ・キャリアサポートと連携し、学科に必要なガイダンスを通年で実施する。 ・対面での就職活動を意識したイベントへの参加を促す。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	教育施設のレベルアップを図る。 ・社会生活コミュニケーション室、家庭生活コミュニケーション室等を設備し、学内の実習・演習等で積極的に活用する。 ・学生の学習場所として演習室を積極的に開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促す。 ・学生の学習場所で学生が使用できる学習資料や学習ツールを充実させる。
研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	1　学科教員の研究力アップを図る。 ・学科教員間で研究力アップの仕組みを検討する。 ・研究力アップの仕組みを充実させ、研修等を周知する。 ・学会への参加等、研究活動に必要な機会を保障する。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。 2　研究施設のレベルアップ。 ・必要な研究施設・設備の調査を行う。 ・研究施設充実のための資金調達の検討を行う。 ・必要な研究施設整備を行う。 3　外部資金の獲得を目指す。 ・外部資金獲得に関する研修会等の参加を促す。 ・研修等で得た知識を活かして、資金獲得の具体的な対策を立てる。 ・科研費や外部資金への積極的な申請を促す。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　学生生活を積極的にサポートする。 ・定期的なチューター面談を実施し、学生の情報をコース会議等で報告し、教員間で共有する。 ・学生の学力の把握を常時行い、必要に応じてチューターからの指導を実施する。 ・学生の適性やモチベーションに応じた指導を行う。 ・学生の意見を教育内容や方法に反映させ満足度の向上を図る。 2　退学者を防止する。 ・連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。 ・学生が抱える問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切に対応する。 ・教員はオフィスアワーだけでなく、相談やコミュニケーションがとりやす環境を作る。 ・チューターも含めた複数の教員で学生に寄り添い、不安や困りごとに対応する。 ・転学科してきた学生に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。 ・転学科してきた学生について、教員間で情報を共有し、早期対応を行う体制をとる。

		3　社会人としてのマナーを身につけさせる。 ・各チューターやゼミ担当教員が、マナーについて学生の心構えついて確認し、大学生の生活の様々な場面で、社会が求めるマナーが身につくように必要な指導を実施する。 ・教員から学生に対して積極的な挨拶を行い、普段から学生にどの程度のマナーが身についているかを教員間で確認する。 ・学内実習を通して、社会人として現場で必要な基本的態度、他人との関わり方について具体的な指導を行う。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　学科入学定員確保のための対策。 ・教員が学生ファーストの立場で教育を行い、在学生から家族や後輩、学校関係者に本学科の肯定的な評価が伝わるよう日々努力する。 ・入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発にする。高校訪問、出前講義等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう」働きかけ、一般入試における入学希望者の増加に繋げる。 ・本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行う。 ・入学者に対する入学動機、傾向を調査し、結果を広報活動に活かす。 ・入試広報室と定期的に情報交換会を行い、奉公活動のあり方を協議する。 ・高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科をアピールする。 2　学科の魅力を発信する。 ・中高生の学科見学、高校からの模擬講義、出張講義等に積極的に対応する。 ・社会で活躍している卒業生の情報を収集し、オープンキャンパス等で紹介する。 ・国家資格取得状況についてチラシ、ホームページ等を活用して発信する。 ・保護者通信等で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。 ・学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター（英語村）の積極的な利用を促す。 ・学科教員に対して。海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を促す。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　学科教員の地域連携力を向上させる。 ・教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況（連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況）を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携の強化を図る。 ・教員に期待される地域のニーズ・期待度を把握する（自治体・関係機関等） ・連携推進に係る検討チームを設置し、地域要請に応えられるよう相談窓口を検討する。 ・学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行う。

2023年度の総評 （今年度の取組）	教育力(使命・目的等を含む)	・入学前教育で国語力向上の課題を実施し、基礎国語力の増進を図った。 ・学生に対して基礎演習と並行して、すららに積極的に取り組むように促した。 ・次年度も今年度と同様に学生の能力に合わせた基礎学力の向上を図った。
	研究力	・学科教員間で研究力アップの仕組みを検討した。 ・学会への参加等、研究活動に必要な研修の機会を保障した。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進した。
	学生支援	・連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行った。 ・学生が抱える問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切な対応を行った。
	募集力(ブランド力)	・教員自身が学生ファーストの立場で教育を行い、在学生から家族や後輩、学校関係者に本学科の肯定的な評価が伝わるよう可能な限り努力した。 ・入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発に行なった。 ・土日見学会、オープンキャンパス、高校訪問、出前講座等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう積極的に働きかけた。 ・本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行った。 ・入試広報室と定期的な情報交換会を行い、広報活動のあり方を協議した。 ・高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科をアピールした。
	グローバル化	・学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター（英語村）の積極的な利用を促した。 ・学科教員に対して。海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を促した。
	地域活性化	・学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行った。 ・次年度は、教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況の具体的な把握の仕方について検討した。
2024年度への展望 （来年度の計画案）	教育力(使命・目的等を含む)	1　基礎国語力の向上 ・入学前教育で国語力向上の課題を継続し、基礎国語力の増進を引き続き図っていく。 ・学生に対して基礎演習と並行して、e-learning等にに積極的に取り組むように指導する。 ・卒業研究指導のあり方を検討し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究を目指す。 ・できる限り多くの科目において、学科教育力を向上させるアクティブラーニングの導入を目指す。 ・コース会議等で卒業研究の取り組み状況を確認し合い、全員の卒業論文の完成を目指す。 2　学修支援体制の強化 ・学科教員の教育力のアップを図る。 ・授業改善に向けたFDへの積極的な参加を促す ・教員相互による授業見学等を行い、授業改善の内容等を検討する。 3　国家試験、大学院試験、就職率の強化 ・言語聴覚士国家試験合格率100%を目指す。 ・公認心理師指定大学院志望者の進学率100%を目指す。 ・就職希望者の就職率100%を目指す。
	研究力	・学科教員間で研究力アップの訪略を検討する。 ・学会への参加等、研究活動に必要な研修の機会を保障する。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。 ・積極的に外部資金を獲得できるようさまざまな働きかけを行う
	学生支援	・連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。 ・学生が抱える問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切な対応を行う。 ・学生がいつでも教員等に相談できるような支援体制の構築を検討する。 ・本学科の退学者0人を目指す。

	募集力(ブランド力)	・教員自身が学生ファーストの立場で教育を行い、在学生から家族や後輩、学校関係者に本学科の肯定的な評価が伝わるよう日々努力する。 ・入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発に行う。 ・土日見学会、オープンキャンパス、高校訪問、出前講座等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう積極的に働きかける ・本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行う。 ・入試広報室と定期的な情報交換会を行い、広報活動のあり方を協議する。 ・高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科を知らない学校関係者、生徒、保護者に本学科の特色をアピールする。
	グローバル化	・学内の国際化推進に努めグローバル化を推進する。 ・学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター（英語村）の積極的な利用を促す。 ・学科教員に対して。海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、インパクトファクターの高い国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を促す。
	地域活性化	・教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況（連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況）を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携の強化を図る。 ・教員に期待される地域のニーズ・期待度を把握する（自治体・関係機関等） ・連携推進に係る検討チームを設置し、地域要請に応えられるよう相談窓口を検討する。 ・学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行う。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学　通信教育部（臨床福祉学科）

ビジョン（教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	**１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	・３つのカリキュラムポリシーを明確に示すとともに、通信教育部の特徴について、学生などステークホルダーに対し、多様な情報媒体（雑誌、ホームページやガイダンス等）を活用し周知する。 ・学修者が目標とする資格取得や学習方法を支援するため、カリキュラムツリー（履修系統図）や履修モデルを提示する。 ・定期的な授業アンケートを実施し、学修成果の点検や評価を行い、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組み、より質の高い教育の提供を目指す。 ・オンラインによるスクーリングの効果的な教授法について検討する。
	２）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	・通信教育部の学習支援体制の改善点を明確にし、環境を整備していく。 ・特に、ハイブリッドコースの学生が、学内で相互交流したり、添削課題等に取り組むことができる場所・空間を確保する。 ・学生によっては通信環境が不安定な場合もあるため、学内において、スクーリングや単位認定試験の際に活用できるパソコン室を設置し、運用する。 （LL教室等学内優先で使用されており、随時使用できない状況にあるため） ・オンラインによる学生相談会を実施し、得られた情報を適切に分析・検討していく。 ・学生の学修進捗状況を確認し、継続的な学修環境へのサポートを通して、退学防止に努める。
	３）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	・キャリアサポートセンターと連携し、通信教育部からの就職希望者に対しても就活情報の提供を行う。また、必要に応じてオンラインでの面接指導や履歴書添削など、個別の就職支援も行う。 ・学生からの要望があれば、求人受付ナビの閲覧が出来るように設定し、本学に届いている全国からの求人情報をオンラインで確認出来るよう設定する。
	４）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	・ハイブリッドコースの学生が、学内で相互交流したり、添削課題等に取り組むことができる場所・空間を確保する。（再掲） ・学生によっては通信環境が不安定な場合もあるため、学内において、スクーリングや単位認定試験の際に活用できるパソコン室を設置し、運用する。 （LL教室等学内優先で使用されており、随時使用できない状況にあるため）（再掲） ・通信事務課に隣接して学生の相談スペースを確保し、通信生が来学した際に、気軽に相談できる環境を整備する。
研究力	**１）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	・基礎となる学部において研究活動を推進する為、通信教育部独自では目標や計画は策定しない。
学生支援	**１）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	・通信制への入学動機等から、心身に関することや経済的な背景を把握し、支援の必要性を通信事務課と教員で情報共有し、支援体制を構築していく。 ・経済的支援（奨学金等利用を含む）に関して担当部署、保護者等との連携を図る。 ・学修の進捗状況を把握し、必要に応じて個別に相談対応していく。 ・学生の問い合わせに対して、メール・電話等を活用して迅速に対応できるようサービス向上に努める。
募集力(ブランド力)	**１）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	・通信教育部の特色（福祉と心理が学べる）や学習方法の選択性（ハイブリッドコース設定のメリット）等についてわかりやすいパンフレットや広報媒体等を作成し、募集広報戦略を検討する体制を作っていく。 ・通信教育部独自の募集方法として、教育提携校や提携施設を増やすとともに、募集を全国圏域に拡大していく。 ・社会人及び通信制や定時制をもつ高等学校に通信教育の周知を図る。 新たにハイブリッドコースの魅力も取り入れながら広報活動を行う。 ・インターネットを利用した募集強化の充実を図る。

グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	・大学全体でのグローバル化の推進には協力するが、学部の特性から通信教育部独自では目標や計画は策定しない。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	・福祉人材の充足と質の向上に資するため、福祉施設等や関係機関・団体との提携により、実践現場職員のスキルアップに寄与できるよう知の拠点としての役割を果たしていく。 （現状：ある福祉職場では高校卒業の職員が入職と同時に通信教育部に入学させて資格取得と大学卒業を目指せる環境を整備している。学費も職場が出資）
2023年度の総評（今年度の取組）	**教育力（使命・目的等を含む）**	・通信教育部の学科再編成に伴い、3つのポリシーを設定しなおし、体系化して公開した。 ・ホームページを大幅にリニューアルし、情報発信力を強化した。 ・進学情報サイトへ情報を掲載し、広く募集に努めた。 ・ハイブリッドコース開設のリーフレットを作成し、通信制を持つ西日本地域の高校等関係機関へ配布した。 ・スクーリング時の授業アンケートを実施し、集計結果を担当教員にフィードバックし、授業改善の検討資料として活用した。 ・科目単位認定試験を全てオンライン化して、利便性を図った。 ・オンラインによるスクーリングの効果的教授法について、同科目を複数で担当する教員と協議し、具体的な検討機会を設け今後の方向性を見出した。 ・社会福祉士国家試験対策情報を希望する学生（既卒者を含む）に、年間を通して随時模擬試験などの最新情報を配信した。また、オンラインにて試験対策講座を年2回開催し、合格率の向上に取り組んだ。
	研究力	通信教育部独自では目標や計画は設定していない
	学生支援	・直接の来学、電話、オンラインそれぞれに対応し在学生の学習相談、入学希望者の入学相談をおこなった。 ・スクーリング等連絡事項を郵送からメール配信に移行し、迅速な対応を可能とする体制を確立してきた。 ・科目単位認定試験もプレテスト期間を設け、オンライン化した。 ・ハイブリッドコース学生用の大学における学習空間の確保の見通しができた。 ・事務室のスクーリング用PCを入替え、PCトラブルでスクーリングが滞らないように努めた。
	募集力（ブランド力）	・通信教育協会主催の入学説明会（大阪・福岡）会場へ参加し募集に努めた。 ・広報業務を推進するため福岡サテライト事務所の設置の準備に着手した ・オンラインによる在学生の学習相談、入学希望者の入学相談をおこなった。 ・通信教育部独自に教育提携校や提携施設への継続的関係構築とともに、新たな提携可能な機関への広報・訪問活動を推進した。
	グローバル化	通信教育部独自の目標や計画は策定していない。
	地域活性化	・福祉施設・専門職能団体への広報活動により、実践現場職員のスキルアップに寄与する環境を推奨した。（提携団体への入学金・免除制度の周知を図った年2回）
2024年度への展望（来年度の計画案）	**教育力（使命・目的等を含む）**	・通信教育部の特色を生かした教育内容の充実を図る。 ・仮想空間を取り入れ在学生のコミュニケーションツールを導入し、スクーリング等に役立てる ・オンラインによるスクーリングの教授方法を教員間で共有し、対応可能な教員数を増やしていく。 ・ハイブリッドコースのメリットを明確にし、学びの多様性を実現できる教育方法を検討していく。 ・スクーリング時に学生アンケート調査を行い、教育内容の改善に役立てる。 ・2024年度は新カリキュラムでの社会福祉士国家試験初回に当たるため、最新情報の発信充実と年2回実施の試験対策講座への参加を働きかけ、合格率向上を目指す。
	研究力	通信教育部独自の目標や計画は策定していない。
	学生支援	・通信教育学部に関連する問い合わせには継続して丁寧な対応を行うとともに、通信生との連絡手段としてメールを活用していく。 ・提出書類関係について、可能な限りデータの送受信で確認できるシステムを活用し、学生の利便性と省力化を図る。 ・学内において、スクーリングや単位認定試験の際に活用できるパソコン室を設置し、運用する。 ・ハイブリッドコースの学生が、学内で相互交流したり、添削課題等に取り組むことができる学習スペースを確保し、利用しやすい環境を充実する。 ・通信生が来学した際に、気軽に相談できる学生相談スペースの環境を整備する。

	募集力(ブランド力)	・福岡サテライト事務所を活用し、広域的に募集活動を展開する。 ・提携校の開拓を行い、入学者を拡大していく。 ・通信教育部の特色（福祉と心理が学べる）や学びの多様性を実現できるハイブリッドコースのメリットを明確にして、通信制高校などに積極的にアピールしていく。 ・進学情報サイトに社会福祉、心理、大学院と3分野に参画し広く募集を行う。 ・提携団体（宮崎県社会福祉法人経営者協議会・宮崎県介護支援専門員協会・宮崎県介護福祉士会）への定期的（年2回以上）な広報活動を推進する。 ・新たな提携団体を検討していく。
	グローバル化	通信教育部独自の目標や計画は策定していない。
	地域活性化	・提携している教育機関、福祉関係機関の人材確保に資するニーズを把握するため意見交換会等の場に参画し、知の拠点として通信制大学が果たす役割を明確にしていく。 ・提携団体の職員に対する通信制大学のスキルアップカリキュラム（科目等履修制度等）の活用を促し、地域に貢献していく。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（薬学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	**全学共通目標**	**学科別計画・対策**
教育力(使命・目的等を含む)	**１）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。 (学修成果基盤型教育の徹底)	1　全教員で薬学科のブランドビジョンを策定した上で、３つのポリシーの改訂を行い、教員・学生・学外への周知を行う。カリキュラム委員会が中心となり、ブランドビジョンを達成するためのカリキュラム編成を行う。 2　学修者本位の教育課程編成の理念のもと、薬学科の3つのポリシー（DP・CP・AP）を明確に定め、学生などのステークホルダーに対し、ホームページ・ガイダンス・オリエンテーション等様々な方法を活用し周知する。また、学生自らの学びを省察できる体制を構築する。その方法として以下の取り組みを重点課題とする。 ・学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極的な活用 (特に学修ポートフォリオ、マイステップの機能) ・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講促進 ・初年次教育につながる入学前教育の実施 3　薬学科のポリシーに基づく入学者選抜を実施するために以下の取り組みを行う。 ・アドミッションポリシーに沿った、入試科目の設定 ・高等学校の教育課程に応じた出題範囲の設定と見直し ・学力の3要素、意欲、資質、能力を多面的に評価する評価基準の見直し ・入学者の追跡調査 ・上記４つの実施とその結果の分析、それを踏まえたアドミッションポリシーの策定 4　薬学科のブランドビジョンをを明確に示し、土台となる横断的な基礎教養教育を実践することで、医療・福祉などのコ・メディカル専門人材を育成する。その一例として、アクティブ・ラーニングを推奨し、自ら自分自身の学修における問題を提議し、解決策を考え、それを実践できる人材の養成に繋がる教育手法を共有する。 5　学修成果の点検・評価においては、学修成果基盤型教育における評価基準を事前に設定した上で３つのポリシーを踏まえて、内部質保証を重視した点検・評価を行うことで、ＰＤＣＡサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように、卒業生や地域社会関係者及び地域医療関係者による効果的な第三者評価の実施など、教育の改善向上に取り組む。 6　大学全体のFD活動はもとより、薬学科のFDの実践を推奨し、個別の課題を横断的に共有することで、全体の課題解決に取り組む。また、教育実践の点検評価として、授業アンケートの実施方法並びに内容を検証することで、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組む。 7　中核センター教育開発部門が中心となり、教授方法改善に繋がるFD活動を毎年実施し、学部学科の垣根を超えた教員間のグループワークを行うなど、教育方法の改善に取り組む。 8　本学は医療・福祉を中心とした専門職人材養成を目指す学部学科により構成されている。その土台となる学部横断的な基礎教養教育の充実並びに開発に努め、地域社会に貢献できる人材養成を実践できるカリキュラムを構築する。 ・カリキュラムツリー（履修系統図）及び履修モデルの活用、精査 ・シラバスの検証とチェック体制の強化

教育力(使命・目的等を含む)	**2）学修支援体制の強化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　中核センター教育開発部門を中心に、教職協働によるエンロールメントマネージメントに関する方針・計画・実施体制を適切に整備し、運営する。 ・全学的なチューター制度を土台に、学修支援システム（ユニパ）の積極活用により、学生　個々の支援体制を強化する。 ・退学防止の観点から、授業の連続欠席者情報を教職員が共有し、早期から学生の対応に取り組む。 ・在学中のあらゆる活動を可能な限り可視化（ユニパ、マイステップの積極活用）し、学生のキャリア開発を継続的に支援する。 2　教職協働により在籍学生数に応じた教室の割り当ておよび管理を行う。教室設備の経年劣化に伴う改修等も見据え、将来計画を踏まえた実現可能かつ実効性のある学修環境を提供する。 3　リメディアルを含めて、学生アンケートの実施と回答率向上に努め、得られた情報を適切に分析・検討し課題の明確化を行う。 ・授業アンケートの回答促進を行う。 ・授業アンケートを含めその内容精査に努め、効果的に学生の意見を反映できる体制確保に取り組む。 4　単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等は学生便覧やオリエンテーションにおいて周知徹底を図り、厳正に適用することで進級・卒業率の向上に取り組む。卒業研究はルーブリックを用いて公正な評価を行う。 5　自ら考え行動できる専門職人材を養成する為に、学部学科を横断した教養科目の開発に取り組み、専門的な知識と技術の実践に必要な、思考力・判断力・コミュニケーション能力、及び国語力等の基礎学力向上に取り組む。 ・すららの利用促進を含め、基礎学力向上に向けた取り組み強化について全学的に検証する。 ・学部横断科目の履修者を増やす。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援体制」を構築する。	1　教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備を進める。地元企業と連携し、学生のキャリア支援の取り組みとしてオープンカンパニーやインターンシップを含む企業との接点を積極的に提供する。また、外部機関と連携し学生のキャリア支援を強化する。 2　就職支援サイトと連携することで就職支援の強化に努める。ミスマッチを防ぐことを最大の目的とし、本学独自の就職ガイダンスを実施する。また、各地で開催される就職説明会等の情報を収集し、職種にあった情報をリアルタイムで提供する。 3　キャリア支援の一環として、公務員試験対策講座の強化を進める。参加学生の要望や各自治体の採用試験に合わせ、現場の専門職も参加した、より有意義な講座とする。 4　学生に各種就活イベント等への参加を促進する。各学科のキャリアサポート委員と連携し、学科が求めるガイダンスを通年で実施する（就職面談会〔5年生対象〕など）。また、対面での就職活動を意識したイベントも新たに計画する。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	1　校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理を行う。 ・施設設備の優先順位や必要性を明確化した上で、中長期的視点に立った修繕計画の立案や既存施設の老朽化対策を検討することで、学修環境の整備や管理を行う。 2　実習施設、図書館等の有効活用を検討し、学生のニーズに対応する教育研究環境を整える。 3　学修環境に関するアンケート調査や学生との意見交換の結果を分析・検討し、安全で快適なキャンパス生活実現に向けた環境整備に取り組む。 ・建物の利用状況や用途、設備の整備状況等を把握し施設の有効活用を図る。

研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。 （次ページ　学生支援の前まで）	1　外部研究費の獲得や国際学術誌への論文投稿などを促進する研究支援体制を構築することで研究環境の整備に努め、実施される研究活動についても研究倫理や安全面での管理を行い、適切な研究体制の運営を行う。 2　研究活動を適正に行う為に、関係諸規程の見直しや制定を行い周知する。併せて関係委員会などにおいて厳正な研究内容の審査を実施し適正な運用を行う。 3　海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を推奨し、研究のグローバル化を推進する。 4　研究活動の点検・評価においては、内部質保証を重視した点検・評価を行うことで、ＰＤＣＡサイクルを確立し、より質の高い研究活動が実施できるよう、適切な研究体制を構築する。 5　論文発表，学会発表等の研究成果を可視化・公表することで、地域における研究のノード機関としての役割を構築する。 6　学科内の高額共通機器等について、計画的な導入・更新を図る体制を見直す。 7　学科内の共通機器等の管理者を明確にし、不具合時の対応だけでなく研究成果を上げる効果的な使用法等についての情報を共有する。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望を把握し、分析・検討することで学生サービス向上に活用する。 ・健康管理センターを中心とした教職協働による支援体制の強化 ・学生の健康管理に関して外部機関と連携 ・課外活動支援の充実 2　各機関および諸団体から提供される奨学金情報は、遺漏のないように対象となる学生に確実に案内をすることで、学生の経済的負担を軽減することに繋げる。 ・家計急変等の情報を教職員間で共有することで、学生支援体制を構築 3　バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性向上を図る事で、学生サービス向上に繋げる。 ・アンケート調査及び学生との意見交換を実施。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施と検証を行う。（再掲） 2　入学定員に沿った適切な学生受入数の維持に取り組む。 3　入試・入学後のデータを分析し、高校との連携強化に取り組む。 ・入試データおよび入学後の学生の伸長状況などのデータを分析し、関連部署と連携し、高校への情報発信を実施 4　学生を活用した大学の魅力を発信する。 ・部活動の活性化、学友会組織の強化、在学生に対するイベントの企画・告知・実施 ・オープンキャンパスにおける学生ボランティア、「在学生と語ろう」の実施 5　効果的な学生募集の実施に向けて、卒業生の大学に対する満足度を向上させ、同窓生（会）との組織的な連携に取り組む。 6　地域の学びの拠点として、施設の開放や受け入れなど以下の内容を積極的におこなうとともに広く活動を周知する。 ・地元学生・生徒のための体験行事、課外学習の受け入れ ・施設の貸し出し、本学を会場とした公開講座の実施やセミナーなどのイベントを開催

募集力(ブランド力)		7　教員一人ひとりの研究内容、成果についての情報発信を行う。また、高校生の課題研究に積極的にかかわり、高校との連携強化に取り組む。 ・県北サイエンスフォーラム ・県内高校の課題研究サポート 8　ＳＮＳ・ウェブサイトを活用した、本学の魅力（学科の特色）や大学・学科の情報発信を行う。 ・薬学科の活動やイベント、薬用植物園の開花状況などを定期的に発信 ・学生スタッフを配置し、学生目線の情報発信による募集広報戦略を展開
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。 ・留学生の受け入れ増加、受け入れに伴う環境整備の推進、ラーニングサポートセンター（英語村）の充実など
		2　薬学科教員が、定期的に米国提携校のフィンドレー大学への短期研修プログラムに参加し、フィンドレー大学からの薬学生の受け入れも定期的に行い、両校の交流を推進する。薬学科学生の海外留学・短期研修プログラムについては、実施可能かどうかを積極的に検討する。また、学生の英語力向上を目指す。 ・ラーニングサポートセンター（英語村）において、留学を希望する学生の語学力の向上のためのネイティブ講師によるレッスンを充実 ・留学を目的とした英語力の向上を目指すだけでなく、国際交流のためのイベントなどを充実
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。 ・自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進 ・県内の大学間連携・高大連携を推進

2023年度の総評 （今年度の取組）	教育力(使命・目的等を含む)	2023年度内に、薬学科ブランドビジョンの策定、学則である教育研究上の目的（以下、目的）の見直しと、目的を補完する背景の新規作成、薬学科の理念、3つのポリシーの改訂を行った。これらの見直し・作成においては「本学の立地」「新しい薬学教育モデルコアカリキュラム」「薬剤師に対する社会のニーズ」から要求されている、研究や自己研鑽マインドの養成に対応することを考慮した。 そのブランドビジョンを達成することや、新しい薬学教育モデルコアカリキュラムに対応するため、カリキュラム編成を一から見直した。さらに定期的にディプロマ・ポリシーの達成度を評価できる体制づくりのため、カリキュラム・マップの見直しを実施した。また、学生の学修成果・アンケートから、教員と学生の両方を評価するシステムとしてアセスメント委員会を作った。さらに、中核センター教育開発部門を中心に、学生の学修成果の可視化に有効とされる「GPSアカデミック」に関する研修会（FD）が2月に企画・実施され、学科教員が受講した。これらによって、学生の学修支援、学修成果の向上、学修成果の評価システムの改善が期待される。 教育課程内外を通じて、学生の社会的・職業的自立支援体制を強化した。また、学修支援システム（ユニパ）の積極活用により学生個々の学修活動の支援を行った。さらに、地元内外企業との連携によるインターンシップ、オープンカンパニーの提供、外部機関との協力による薬学科独自のキャリア支援および専門的な就職ガイダンスの実施、リアルタイムでの就職説明会情報の提供、公務員試験対策講座の充実および就活イベントへの積極的な参加促進を行った。これらの取り組みにより、学生の職業選択の幅を広げ、就職活動の質の向上を実現できた。
		教授方法改善に繋がるFDは、2023年度には実施できなかった。次年度以降で実施を図る。 学修環境に関するアンケート調査は、12月に実施されたが、現状で結果の解析と学生へのフィードバックができていない。この点については、アセスメント委員会で次年度以降に対応する。 入試方法について、臨床を意識した考える人材の人選として、一部だが一般入試に小論文と面接を加えた。これらによって、本学科のアドミッションポリシーを把握した学生の選別が期待される。また、入学時の基礎学力を全国レベルで客観的に把握するため、全国規模のプレイスメントテストを行った。一部の科目については、成績下位者に対して演習講義を行い、強化学習をおこなった。国語については、全学科統一の試験を年度内3回実施し、成績に従ったクラス毎のe-learningによる学習を行った。これらも入学者の今後の学修成果の入学時基準値として使用できる。 以上より、教育力に関しては、理想通りではないが、確実に改善点等を抽出して、将来を見据えて進行・改善されている。
	研究力	薬学科の研究力アップのため、研究促進委員会が始動した。研究力促進のため、薬学科内の研究機器について、新規購入や補修などの整備を行なった。（2022年度から私学助成で申請していた蛍光顕微鏡を導入できた。老朽化していた実験動物センター内の機器の安全キャビネットの補修、高圧蒸気滅菌機の更新を行った。故障したマルチプレートリーダーを修理した。）また、全ての共通機器の使用頻度を確認し、数年後を見通した更新計画について議論した。 研究活動が適切に実施されるよう、学科教員はFDとして、5月に「公的研究費不正使用防止に向けた啓発活動」を、7月に「公的研究費コンプライアンス研修」を、2月に「研究倫理研修会『医学系研究の倫理と実務』（情報のみを用いる研究を中心に）」を受講した。教員の研究成果の公表の機会として3月に「第3回宮崎県北サイエンスフォーラム」を開催し、学科の研究を外部に発信した。また、研究活動の点検・評価に向けて、学科教員は3月に「第2回薬学科リトリート」で研究の実施状況を報告した。特別研究を実施する講座・研究室配属学生には、配属内定後の11月に「特別研究Iオリエンテーション」を実施した。また、薬学科の学生が、生薬学会で優秀発表賞を獲得した。 以上より、研究力は概ね良い方向に進んでいると言える。
	学生支援	学生の健康管理に関する取り組みとして、健康管理センターから情報提供を受け現況の把握に努めた。健康管理センターの薬学科学生の月別利用状況および相談件数など経過を把握しているが、年度途中であり、詳細な分析・検討は行っていない。 12月に薬学科2、4、6年生に対し、薬学科を中心とした学内の設備環境についてアンケート調査を実施した。分析結果については1月の薬学科学科会議で報告・説明を行った。 学生生活にかかわる経済的支援に関しては、教員または職員による個別対応は実施されたが、教職員間で情報を共有した取り組みは行われなかった。個人情報をどこまで共有するかは、大学の方で基準を決めた方が良いと考えられた。 学生からの学生生活における相談内容は、薬学科ハラスメント委員間で共有して対応した。ハラスメント防止ポスターを活用して、ハラスメント委員へ直結するメールアドレスを周知し、対面で相談に来ることができない学生にも対応した。また、薬学科ハラスメント委員を増員した。 以上より、学生支援は概ね良い方向に進んでいると言える。

	募集力(ブランド力)	中学校・高校への出張講義や課題研究、進路ガイダンス、本学での模擬講義やオープンキャンパス等、例年以上の回数の取り組みを行った。しかし、それらの取り組みの質の向上や、取り組み効果の分析が不十分な状態であるため、まず、どのような評価が有効であるか候補をあげて検討する必要である。 話題を定期的に提供するため、SNSを通じて薬学科のイベント、授業・実習風景をアップしたほか、薬用植物園の開花状況等を含めた植物解説を行った。また、教員や学生の研究活動をSNSや大学ホームページにアップし、教員の研究力のアピールや学生の研究や自己研鑽マインドの養成に対応していることを発信した。 以上より、募集力は入学学生数や知名度を考えるとまだまだ足りていないが、着実に改善されていると言える。
	グローバル化	昨年度まで、コロナ禍で中止になっていたフィンドレー大学との交流を再開するため、薬学科長をフィンドレー大学に送り、学長・薬学部長と直近の交流再開と長期的計画に協議し、合意に至った。直近の交流再開として、フィンドレー大学学生と引率教員の受け入れを5月に行うことが決まった。また、読む，書く，聞く，話すの4技能全般における基礎的な英語能力向上のため，TOEIC教材を用いた科目，医療場面での英語でのコミュニケーション能力を修得する科目，薬学・医療に関する英語文献の講読科目等が開講された。英語に親しむ機会を増やすため英語村の積極的な活用を促し，英語担当教員が学生と共に英語絵本の読み聞かせボランティア活動を行った。フィンドレー大学との長期的計画については、さらに協議を進め、詳細を決定するため、概ねグローバル化の計画は順調に進んでいる。
	地域活性化	高大連携の一環として、高千穂高等学校・五ヶ瀬中等教育学校と連携協力協定を締結した。（出張講義、探究活動の補助など長年の実績が結実したものと考えられる。）延岡高校など他の高校からの探究活動の協力依頼も全て受け入れた。 地域連携の一環として、延岡市との薬用作物に関する連携協定を更新した。延岡市や株式会社九州薬地と連携して、大学の研究成果で生産している「延岡ひなたサフラン」の商品ブランド力の向上に寄与した。延岡サフラン生産部会に所属する農業生産者と意見交換を行い、学術の立場から効率的な生産方法について自らの研究成果や論文報告を引用して周知し、人材育成を行った。また、福井県高浜町、大分県由布市の農業生産者団体と連携し、地域振興や増え続ける耕作放棄地対策としての薬用作物産地化を支援した。その他、福井県高浜町においては高浜中学校、内浦中学校の2校にて校外学習として薬用植物を使った地域活性化に関する講義を行った。
2024年度への展望（来年度の計画案）	**教育力(使命・目的等を含む)**	策定したブランドビジョンを大学内外にアピールし、九州医療科学大学薬学科のブランドを周知する。ブランドビジョンの達成のため、3つのポリシーに対して常にPDCAを実践し、継続して改善していく。設立したアセスメント委員会で単位取得率や進級率、アンケートなど様々な項目を解析し、教員へフィードバックを行なっていく。 「GPSアカデミック」を活用し、薬学科学生の学修成果を客観的に評価し、教員による教育に反映させる。また、中核センター教育開発部門を中心に、教授方法の改善に向けたFDを、実施し、教育力強化に努める。 2024度は、学生の自立と学修活動の支援をさらに深化させる。また、学生の個々のキャリア適性や志向性を把握し適切なキャリア選択を支援するために、個別のフィードバックやキャリアプランの策定を行い、学生が自己の強みや興味に合ったキャリアを見つけられるようにサポートする。さらに、様々な学生が求める資格に対応するため、支援する資格の範囲を拡大させる。 引き続き全国規模のプレイスメントテストを実施し、新たにGPSアカデミックテストを実施し、低学年時の基礎学力強化と学修成果の把握に繋げる。また、入学時の小論文などの導入の効果もプレイスメントテストなどで効果を評価する。また、学修環境に関するアンケート調査結果を点検し、学生の支援に繋げていく。
	研究力	研究活動が適切に実施されるよう、次年度も学科教員は研究倫理等に関するFDを受講する予定であり、特別研究を実施する講座・研究室配属学生には、配属内定後に「特別研究Iオリエンテーション」を実施する予定である。また、研究者・学生にとって安全・安心な施設環境の維持、共通機器の適切な管理に努める。また、科研費取得者をさらに増加させられるよう、よい方策を他大学からの情報を得て、良い方策を作成する。 地域における研究のノード機関としての役割を果たすべく、次年度も3月に「宮崎県北サイエンスフォーラム」を開催し、学科の研究を外部に発信する予定である。また、「薬学科リトリート」を「宮崎県北サイエンスフォーラム」に組み込み、学科全体の研究を発信し、多くのフィードバックを得ることによって、さらに教員の研究力を高める。

	学生支援	学生の健康管理に関しては、今年度のデータが揃った後分析し、その結果を学科教員で共有する。また次年度も健康管理センターへ情報提供を依頼し、学生の健康状況あるいは問題点の把握に努める。 薬学科を中心とした学内の設備環境に関する調査を、次年度の2、4、6年生を対象に実施予定である。学生の意見を吸い上げて、学生サービスの向上に努める。 ハラスメント委員の存在は学生に認知されているので、同様の掲示を行い、ためらわず委員へ相談できる体制を整える。
	募集力(ブランド力)	引き続き、中学校・高校への広報活動を積極的に行う。広報活動の質の向上のため、広報資料のデータベース化、内容のブラッシュアップ体制の構築等に取り組む。また、全学および学科の入試・教務データの分析に基づき、効果的な広報活動を計画する。 また、教員や学生の教育・研究活動についてSNS、大学ホームページを通じて発信する。そのツールとして、定期的に話題提供可能で、一般にも理解しやすい薬用植物園を今後も活用する。
	グローバル化	フィンドレー大学薬学部との交流を再開するために学科長がフィンドレー大学を訪問し、再開の具体案についてフィンドレー大学学長・薬学部長と会合し、日程について合意した。また、本学からの薬学生の短期訪問を将来的に実現したい旨を話し、時期は未定であるが前向きに計画を詰めていくことを合意した。この件に関しては、順調に進んでおり、以前と同様に5月連休後に約2週間フィンドレー大学薬学部生4名と教員2名の受入準備を進めることができた。予定通り進んでいるため、2023年度から準備を進めているとおり、5月にフィンドレー大学学生を受け入れる。2週間の滞在中に日本の医療システムや薬学での教育、日本の文化にも触れていただく予定である。また、英語科目履修により基礎的な英語能力を修得できる体制を構築する。地域における英語ボランティア活動を充実させ，多文化共生について学び，体験する機会を通して国際的な視野を持つ医療人材を育成する。学内での定期的なTOEIC®実施を実現し，英語学習の動機づけ，自己研鑽，英語能力を活かしたキャリア構築を支援する。
	地域活性化	今後も連携協力校を増やすべく、また学生募集にも良い波及効果を出せるよう、高校等からの協力要請には全て対応し、講義等の内容については適宜見直しを行う。 引き続き延岡市と薬用作物については連携体制を取り、商品ブランド力の強化、地域の農業生産者のレベルアップに対し、貢献する。 その他の地域の薬用作物に関する取り組みも、引き続き産地化を目指して支援するとともに、薬用作物をからめた地域の中学校・高校との連携体制構築も行う予定である。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（動物生命薬科学科）

ビジョン（教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	**全学共通目標**	**学科別計画・対策**
教育力(使命・目的等を含む)	**1）3つのポリシーを踏まえた学修成果 の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	1　３つのポリシーの明確化による教育目標の明確化 ・前後期毎のオリエンテーションにて、学科独自に作成した学修マニュアルを用いて、3つのポリシーを明確に示す。 ・修学支援システム（ユニパ）の積極的な活用。 2　基礎学力を向上させ資格試験の合格率を向上させる。 ・愛玩動物看護師、実験動物技術者の受験資格に必要な科目、成績などを学修マニュアルに明記、各資格試験受験担当者からの受験指導を実施する。（学芸員資格は必要な科目修得で取得できる） ・生物学について、入学前教育（課題学習：問題集）を実施する。 ・リメディアル教育を生物Ⅰ、化学Ⅰ、数学Ⅰで実施する。 ・学部横断的な基礎教育科目の履修を学生に推奨する。 3　学生の学修目的の把握・明確化 ・１年次にインターンシップ（動物病院、宮崎大学附属牧場） 4　教育において注意や配慮を要する学生情報の共有化を図る。 ・学科会議等で情報の共有化、分析、支援対策・体制、進捗方法等を確認することで教育の質の向上に努める。 5　大学及び学部FDに積極的に参加、教員の資質向上に努める。
	2）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　チューター制度・学修支援システム（ユニパ）の積極的活用 ・教員間で学生情報の共有化を随時、あるいは定期的（学科会議）に図り、円滑な学生対応により、退学者等を予防する。 ・必要に応じて、医務室並びに学生課等と連携を図り、円滑な学生対応を実施する。 2　基礎学力の確認・向上 ・入学直後に、「生物学」の試験を全員に実施、基礎学力を確認すると共に、成績は教員が共有、学生の教育指導に活用する。 ・1年次においては、「すらら」を利用することで基礎国語力の向上に取りくむ。 3　卒業研究のレベルアップ ・３年次から卒業研究の教員（チューターを兼ねる）を固定し、２年間の継続した教育研究指導を実施する。 4　学科独自の学修マニュアル・飼育マニュアルの作成により、学習効果の向上を図る。また、学科独自の学科基準薬を定め、愛玩動物看護師、実験動物技術員などの職域にふさわしい薬の知識を修得する。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	1　就職率100％を目指す。 ・1年次において、①キャリア教育（必修）で専任教員並びに外部講師のキャリア並びに②動物病院、宮崎大学農学部附属牧場、リバーパル五ヶ瀬川におけるインターンシップ（選択科目：必修扱い）を通して、将来、愛玩動物看護師やその他の職域で必要な知識・技術を知ることで、学生個々の就職先における学びの必要性について早期に動機づけを行う。 ・動物病院・企業―教員間のネットワークを活用、キャリアサポート委員並びにキャリアサポートセンターと情報共有し、学生が希望する職種の情報提供を円滑に行う。 ・学科―キャリアサポートセンターと積極的に連携、動物病院・企業等の情報の収集、並びに学生への円滑な情報提供あるいは学内就職説明会を実施する。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	1　高度な獣医療に関わる愛玩動物看護師（国家資格）の育成に相応しい教育設備の充実を図る。そのために、教育・研究機器の新規導入あるいは更新の優先順位を立案・計画する。

研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	1　研究活動の推進 ・科学研究費助成事業など競争的外部資金への応募を推奨する。 ・学内・学外との研究ネットワークを広げ、共同研究を推奨する。 ・学術論文・学会発表を推奨する。 ・学会・研究会等への参加を推奨する。 ・学位（博士）取得を推奨する。
学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　チューター制度を活用、適宜面談を実施することで学生の健康並びに健康状態を把握するとともに、学生の要望をも把握する。その情報は学科会議等で教員間で共有、対策を検討、実施することで学生サービスの向上を図る。 ・健康管理センターを中心とした教職協働による支援体制の強化 ・学生課とも協働し、奨学金情報を収集、学生に情報提供する。 ・講義・実習に汎用する大学会館における学生専用の休憩室（飲食可能な）の設置について関係部署と協議、学生サービス並びに利便性を向上を模索する。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　九州で唯一、大学として新たな国家資格の愛玩動物看護師受験資格取得が可能であることを発信する。 ・大学ホームページ（学科）を活用、学科の特色を発信する。 2　大学（学科）と動物病院との連携を強化する。 ・愛玩動物看護師病院実習における病院提携の登録の推進を行い、登録証を発行することで、本学のブランド形成と募集力の一助とする。 3　オープンキャンでは、本学科で取得できる３つの資格（愛玩動物看護師、実験動物技術者、学芸員）並びにフィリピン国立大学獣医学部編入留学制度とその実績（日本の獣医師誕生）を積極的に展示、広報する。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　フィリピン国立大学獣医学部（UPLB）への海外留学並びに短期研修プログラムを推進して、参加学生の増加を図る。 ・ラーニングサポートセンター（英語村）において、留学を希望する学生の語学力の向上のためのネイティブ講師によるレッスンの受講を推進する（英語村を積極活用）。 ・2年次の英語科目（選択）では留学を目的としたTOEFL対策の授業を推進する。 2　UPLBからのインターンシップ学生を円滑に受け入れるための学内・学外の仕組みを構築する。 3　海外留学生（UPLB以外）の受け入れるための仕組みを模索する。 4　学術交流協定校のUPLBと教員間（全学科を対象とした）の国際交流を図り、共同研究のグローバル化を模索する。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　学科教員の地域連携力の資質向上を目指す。 ・地域連携プロジェクトの調査・実施を推進する。 ・市民大学講座などで本学科の教育・研究の成果を発信する。 2．持続可能な目標に位置付けられる活動を実施する。 ・SDGｓ推進に位置付けられる活動を目指す。
2023年度の総評（今年度の取組）	**教育力(使命・目的等を含む)**	1.3つのポリシーの明確化による教育目標の明確化 学科独自に作成した学修マニュアル（学科基準薬を含む）、動物飼育マニュアルを用いて、前後期毎のオリエンテーションならびに講義において説明した。特に１年生についてはキャリア教育においても学修マニュアルは説明を重ね、理解を深めた。 ２．生物学の基礎学力を向上させるため入学前教育（問題集使用）を実施した。 ３．資格試験の合格率の向上を目指した。愛玩動物看護師試験では「動物臨床演習」科目（4年生）において、過去問試験実施、解説などの演習を教員（４名）でオムニバス形式で実施（通期開講）、国試対策とした。実験動物技術者認定試験では、「実験動物演習」において、筆記試験並びに実技試験対策を行った。また、実技試験対策としてSA制度（実験動物1級技術者合格の学生）を活用した学生指導も行った。 ４．1年次からの学外インターンシップを実施した（①NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワーク：リバーパル五ヶ瀬川におけるイベントのボランティア活動、並びに②動物病院での体験学習）。 ５．卒業研究において、薬学科の研究室（１つ）に本学科学生がゼミに参加、共同実験を実施した。 ６．高度な獣医療に関わる愛玩動物看護師の育成にふさわしい教育設備の充実（例：超音波診断機の更新・導入）は果たせなかった。 ７．①愛玩動物看護師国家試験合格率　84%（全国80.8%）。②実験動物１級技術者認定試験合格者3名。③大学院修士課程進学　2名（宮崎大学）。④就職率　97%（就職希望者：30/31）。⑤獣医師国家試験合格者1名。

	研究力	2024年度科研費に1件採択（６件応募）。学内研究経費助成に１件採択。投稿論文は国外1報（共著・筆頭）掲載、国内２報（単著・筆頭、共著・筆頭）投稿中。学会報告は４報（共同研究）。博士論文２名・作成中（専任教員６名／８名博士取得済み）。
	学生支援	１．長期欠席者に対しては、チューター、健康管理センター、必要に応じて保護者と連携して対応した。また、学科教員間並びに教務課と情報を共有した。 ２．一般学生に対しても、チューター面談を積極的に行い、教員間で情報共有した。 ３．就職情報については、キャリアサポートセンター、教員間とで情報を共有し、就職活動を協働でおこなった。
	募集力(ブランド力)	１．愛玩動物看護師資格が国家資格であること、並びに九州で唯一、本学が受験資格が取得可能であることを発信した。なお、年度の終わりに、鹿児島大学共同獣医学部畜産学科においても新年度の愛玩動物看護師の入学募集を開始した。本資格に国立大が初参入したことは、愛玩動物看護師の認知度の向上が今後、期待される。 ２．オープンキャンパスでは、本学科で取得できる３つの資格（愛玩動物看護師受験、実験動物技術者受験、学芸員）を積極的に展示、広報した。大きな特徴としては、１・２年生の全員がオープンキャンパスに参加（分散）、積極的に来学者に学科内容を説明した。 ３．来学した中・高生あるいは訪問先の中・高校生に本学科の紹介並びに講義を行った。 ４．動物病院との連携：「動物看護総合実習」受入れ承諾施設　42施設 ５．入学者数は２２名、定員充足率５５％(22/40)（昨年度は23名、58％）
	グローバル化	１．フィリピン国立大学獣医学部（UPLB）との教育交流協定に基づくUPLBへの編入留学制度は中止となった。しかし、学生個人で、編入留学することは可能であり、今後もこれまでの留学の実績（本学出身の獣医師は10名）を踏まえて、学生の留学支援を実施した。特に英語力向上のため、2年次における英語授業（選択）ではTOEFL対策に特化した講義とした。UPLBへの短期研修、インターンシップ（受入れ）等は中止した。 ２．留学希望者の語学力の向上のため、少人数ではあるが、ラーニングサポートセンター（英語村）を積極的に利用した。
	地域活性化	自治体・地区と連携し災害伝承を活用した防減災プログラム策定、旧小学校校舎を活用した企画展示等を実施した。また、複数の自治体市民講座において研究活動の成果を講演した。2023年度は過去におこなってこなかった活動に取り組むことができた。
2024年度への展望（来年度の計画案）	**教育力(使命・目的等を含む)**	本年度実施した１～６を継続する。 １．生物学の基礎学力を向上させる（入学前教育）。 ２．３つのポリシーの明確化による教育目標の明確化。 ３．1年次での学外インターンシップを継続・実施する。 ４．資格試験の合格率を向上させる（試験対策演習授業、SA制度活用など）。 ５．教育において注意や配慮を要する学生情報の共有化を行う。 ６．大学及び学部FDに積極的に参加、教員の資質向上に努める。
	研究力	科研費その他の外部研究費の獲得、並びに国内外の学術雑誌に論文を投稿する。
	学生支援	１．ハラスメント教育（学生）の説明の機会を多く設ける（オリエンテーション、キャリア教育などにおいて）。 ２．学生の授業欠席等の情報に留意し、チューター、健康管理センター、教務課並びに学科教員間での情報を共有する。 ３．就職活動については、キャリアサポートセンターと協働で活動する。
	募集力(ブランド力)	１．国家資格の愛玩動物看護師資格、実験動物技術者、学芸員の3資格について幅広く、広報活動を実施する。広報活動は、主にオープンキャンパスで行い、実施方法は在学生（主に１・２年生）参加型を継続する。 ２．来学した中・高校生並びに出張先の中・高校生に学科紹介、講義を実施、本学科の魅力を広報する。 ３．高校訪問先としては、農業高校も考慮する。
	グローバル化	１．フィリピン国立大学獣医学部への個人留学を支援する。特に英語力向上のため、2年次の英語教育（選択）はTOEFL対策に特化した講義とする。 ２．ラーニングサポートセンター（英語村）において、大学院進学、留学希望者の語学力の向上のため、受講を奨励する。
	地域活性化	１．教員の研究成果に基づいた活動を展開する。 ２．継続性を意識した地域連携活動の推進を目指す。 ３．持続的な社会構築を目標とし、それに沿った活動を推進する。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第３期】

九州保健福祉大学（生命医科学科）

ビジョン （教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	**全学共通目標**	**学科別計画・対策**
教育力(使命・目的等を含む)	**1）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	1　生命医科学科における3つのポリシーを明確に示し、教育の目標・目的を明確にする。 2　学修者本位の教育課程編成の理念のもと、生命医科学部生命医科学科に掲げる3つのポリシー（DP・CP・AP）を明確に定め、学生へホームページ・ガイダンス・オリエンテーションなど、様々な方法を活用し周知する。 ・学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）を積極的に活用する。 ・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講を促進する。 ・初年次教育につながる入学前教育を実施する。 3　生命医科学科のポリシーに基づく入学者選抜を実施するために以下の取り組みを行う。 ・アドミッションポリシーに沿った、入試科目の設定を行う。 ・高等学校の教育課程に応じた出題範囲の設定と見直しを行う。 4　生命医科学科卒業後の将来像を明確に示し、基礎教養教育を実践することで、グローバルな医療専門職としての人材を育成する。 5　学修成果の点検・評価においては、３つのポリシーを踏まえて、点検・評価を行いＰＤＣＡサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように教育の改善に取り組む。 6　大学全体のFD活動はもとより、生命医科学科のFDの実践を推奨し、個別の課題を横断的に共有することで、全体の課題解決に取り組む。 また、教育実践の点検評価として、授業アンケートの実施方法並びに内容を検証することで、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組む。
	2）学修支援体制の強化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1　生命医科学科教員を中心とし入学前・進級・国家試験・卒業に至る間の体制を適切に整備し運営する。 ・チューター制度を土台に、学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極活用により、学生個々の支援体制を強化する。 ・退学防止の観点から、授業の連続欠席者情報を教職員が共有し、早期対応を図ることで、未然に退学を防止する。 ・国家試験合格率アップのための対策を講じる。 2　学生アンケートの実施と内容改善に努め、得られた情報を適切に分析・検討し課題の明確化を行う。 ・授業アンケートの回答促進を行い、毎年度の回答率向上に取り組む。 ・授業アンケートを含めその内容精査に努め、効果的に学生の意見を反映できる体制確保に取り組む。 3　生命医科学科では卒業研究を必須化しており、同時に卒業を見据えてルーブリック評価を用いた国家試験合格相当かの評価を行う。
	3）キャリア支援並びに就職支援の強化 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	1　教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備を進めるため、キャリアサポートセンターと協力して以下の事を行う。 ・履歴書の書き方指導 ・面接の受け方の指導 2　次世代の医療人として「キャリアアップ」と「キャリアデザイン」を目指すために、本学科オリジナルの「キャリア教育」を構築・展開する。
	4）キャンパス環境の整備 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	1　学修環境に関するアンケート調査や学生との意見交換の結果を分析・検討し、安全で快適なキャンパス生活実現に向けた、環境整備に取り組む。
研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	1　学科教員の研究力アップを図る。 ・外部研究費の獲得や国際学術誌への論文投稿などを促進する。 ・学科教員間で研究力アップの仕組みを検討する。 ・研究力アップの仕組みを充実させ、研修等を周知する。 ・学会への参加等、研究活動に必要な機会を保障する。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。 ・本学出版の査読制ジャーナル（JHWI）のさらなる充実化を目指す。 ・大学の知的財産の充実化を図るために、「ものづくり」を中心とした企業的人材育成と産学官連携事業の強化を推進する。 2　論文発表，学会発表等の研究成果を可視化・公表することで、地域における研究のノード機関としての役割を構築する。

学生支援	**1）学生生活の支援を中心としたサービス向上** 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1　心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望を把握し、分析・検討することで学生生活に積極的なサポートを行う。 ・健康管理センターをを中心とした教職協働による支援体制の強化 ・退学へつながる欠席の多い学生への教員からの連絡 ・学生の健康管理に関して外部機関と連携 ・課外活動支援の充実
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力（ブランド力）の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	1　アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施と検証を行う。 （再掲） 2　入学定員に沿った適切な学生受入数の維持に取り組む。 3　入試データの分析、高校との連携強化に取り組む。 ・入学後の追跡調査、入学後の学生の学力の伸長などの分析を行う。 4　学生を活用して大学の魅力を発信する。 5　地域の学びの拠点として、施設の開放や受け入れなど以下の内容を積極的におこなうとともに広く活動を周知する。 ・地元学生・生徒のための体験行事、課外学習の受け入れを行う。 ・施設の貸し出し、本学を会場とした公開講座の実施やセミナーなどのイベントを開催する。 6　教員一人ひとりの研究内容、成果についての情報発信を行う。 また、高校生の課題研究に積極的にかかわり、高校との連携強化に取り組む。 7　ＳＮＳを活用した、本学の魅力（学科の特色）や大学・学科の情報発信を行う。
グローバル化	**1）国際競争力を意識したグローバル化の推進** 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。	1　学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。 ・学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター（英語村）の積極的な利用を促す。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	1　知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。 ・自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進する。 ・県内の大学間連携を推進する。
2023年度の総評 （今年度の取組）	**教育力(使命・目的等を含む)** **1）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化**	以下、2023年度の取組を総評する。評価は、3:達成している、2:普通、1:やや足りない、の3段階評価を採用した。 〇3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化（評価スコア2) 3つのポリシーは、学生便覧、学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の学習ポートフォリオに明確に記載し、周知徹底した。学科共通科目は初年次教育において高校理科科目の復習効果を十分発揮した。アドミッション・ポリシーは、学科が求める人物像と入試選抜法を1年次終了時のGPA値を参考に見直した。学修成果の可視化は、ディプロマ・ポリシー達成率の算出による点検・評価にて実施した。今後は授業アンケートの回答率を上げると共に、3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を目的とした学部FDの在り方を検討する必要がある。 〇学修支援体制の強化（評価スコア2) 学修支援体制の強化は、ディプロマ・ポリシー達成率の確認を行うと共に、成績不審者に対しては1on1の指導を行い、退学防止に努めた。また、GPA値の適正な評価、ルーブリックの定量的評価を実施した。学科オリジナルの国家試験対策講座は、高い合格率を維持できた。臨床現場でのタスクシフト/シェアに備えて、臨床実習前にOSCEのミニトライアルを開始した。 〇キャリア支援ならびに就職支援の強化（評価スコア3) キャリアサポートセンターとの連携を基盤に、就職情報の提供、エントリーシートの書き方、面接対策など、各教員が実施した。また、企業・病院採用担当者と学生との対面懇談会を実施し、就職内定に直結させる支援を行った。 〇キャンパス環境の整備（評価スコア3) 国家資格取得に必要なキャンパス環境が整備されている。授業アンケートの分析結果から、情報系ネットワーク環境、バリアフリー環境など、十分整備された学修環境である。保健管理センターは、学生の心と体の健康を支援する体制が整っていた。また、キャンパス・ハラスメント防止対策、障がいのある学生への支援体制など、キャンパス環境が整備されていた。
	研究力 **1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** **地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。〞**	1　学科教員の研究力アップを図れたかについては以下の通り。 ・科研費や外部研究費の獲得や国際学術誌への論文投稿などについては、研究に対する意識に大きな変化をもたらすことができなかったため、目立った成果を挙げることはできなかった。研究に向き合う姿勢の立て直しが必要であると考えている。 ・学科教員間での研究力アップのための仕組みについて、これまでイメージできず、放置されてきたため、そのような仕組みの充実につながる研修等の周知は行えなかった。 ・学会への参加については少数の教員が行っていたが、学科全体としての取り組みの意識が欠けていた。学会参加や研究活動に必要な機会を保障するための余裕を持つことが今年度も難しかった。 現状では、教育業務の占める割合が多く、意識や時間を研究に振り向けるまでに至らず、このような状況においては、学会発表、論文発表等の研究活動の推進に繋げられなかった。 ・本学出版の査読制ジャーナル（JHWI）の充実を目指し、大学院生の学位論文の投稿を働きかけるが、継続的な周知に務めることが重要だと感じられた。 ・知的財産の充実化のため、企業的人材育成と産学官連携事業の関連強化が必要であることは意識しているが、そのための方策を実践できなかった。 2　論文発表，学会発表等の研究成果を可視化・公表については、僅かしか達成できず、地域に貢献する役割を担うことはできなかった。研究自体の活性化が可視化や公表に繋がることを再認識することとなった。

	学生支援	2023年度は以下の５点に絞り充実した支援行った。 １）精神的の不安定な学生については積極的に保健室へ相談するよう推進した。 ２）新入生が速めに学校や教員そして先輩等に馴染む事ができるよう2年生と教員全体でレクリエーションを開催した。 ３）夏季休暇、年末年始期間中に学生が勉強するためのスペースを設けるため11号棟を開放した。その結果、4年生の国家試験では全国の平均を上回る合格率を示した。 ４）3回講義の無断欠席を目安として学生へ連絡し、状況を把握し退学防止へ繋がるように努めた。 ５）各種抗体検査については3年次の臨地実習へも影響を及ぼすことから早めのワクチン接種を勧めた結果、概ね抗体を得ることができた。
	募集力(ブランド力)	１．アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施と検証について 昨年度と同様に面接試験で使用するための、学科教員共通認識の質問集を用意した。これは入学者受け入れの決定に直接的かつ最も関与できるのは面接試験であるため、アドミッション・ポリシーに準じた質問を共通認識しておく必要があると考えているためである。具体的には学科の基礎的な知識となる生物学、物理学、化学に関する基礎事項を質問してきた。それにより、面接試験ではアドミッション・ポリシーに沿った入学者受け入れの実施ができていると考えている。 ２．入学定員に沿った適切な学生受入数の維持について 令和5年度の入学者は45名で充足率は56%と低い状態であった。改善の取り組みついては学科会議開催の度に意見を出し合い今後の方向性を見出そうとしてきた。その中で特に多かった意見は大学や学科を周知してもらうための活動の不足である。現在教員が直接高校へ説明に行く機会は少ないため、学科の詳細や取得できる資格について十分に理解してもらえていない可能性を考えている。そのため、今後教員が直接高校に説明できる機会を増やせるよう、入試広報と協力体制を整えている最中である。教員が訪問する際、自身の学科のみの説明しかできないことが危惧されているが、その解消方法として誰でも説明できるようなマニュアルを各学科で作成する方針となった。今後はそのマニュアルを使用し、高校により高頻度な接触を図る予定である。どのような日程で行うかの詳細はまだ決定していない。 ３．入試データの分析、高校との連携強化の取り組み、入学後の追跡調査および学力伸長などの分析について まず、入試データの分析については多くの重要な要素が含まれているが、一つのデータに複数の要因が考えられ、データからの具体的な突破口は見出せていない。しかし、PDCAサイクルを素早く回すことが重要であると考え、いくつかの要因からまず一つを絞り対策していく必要があると考えている。 高校との連携強化については、主に大学の見学会、講義体験、出張講義を通して行ってきた。高校生に興味を引くような内容にすることは勿論であるが、引率の教員とも積極的に会話をして関係性の構築に努めた。また、高校生および高校教員に名刺を配布し、今まで以上に気軽に連絡を取れるように動いた。高校教員からの連絡は届いていないが、高校生から質問を受け取り返答することができた。 入学後の追跡調査および学力伸長の分析については随時行っている。特に成績が向上しない学生に関しては頻繁に面談を行い、勉学の意欲を失わないようにしている。入学時は成績が良くなかった学生でも国家資格を取得できた例も多数あり、面談などによる意識改革の効果は少なからずあると考えている。しかし、退学者がゼロではないため、その点に関しては改善の余地がある。 ４．学生を活用した大学の魅力発信について 一部の高校からの訪問やオープンキャンパスでは学生を起用し、魅力の発信を行った。特にオープンキャンパスでは多くの学生に手伝いをお願いし、高校生や保護者の対応を行ってきた。特に学生生活については教員が説明するよりも現実味があり、好評を頂いている。 ５．地元学生・生徒のための体験行事、課外学習の受け入れや施設の貸し出し、本学を会場とした公開講座の実施やセミナーなどのイベントを開催する。 今年度は昨年度と比較して多くの中学校、高校からの訪問を受け入れることができた。のべおか市民大学院・公開講座に関しても本学科から3名の教員が担当し、地域に貢献できた。これらのイベントの際には本学科の特色や取得可能な資格の重要性などを示し、入学に繋がるような活動を意識して行ってきた。中には訪問時に体験した内容が楽しかったため本学を選択してくれている高校生もいるため、実際に入学に繋げることができている。 ６．教員一人ひとりの研究内容、成果についての情報発信および高校との連携強化への取り組みについて 研究成果を挙げた教員に関しては論文投稿、学会発表を積極的に行うことができた。しかし、研究成果数が少ないためさらに強化していく必要はある。 高校との連携強化に関しては来学の受け入れや出張講義、課題研究指導を通して行ってきた。特に課題研究指導では密接に関わるため連携強化という点では効果を感じている。高校からの訪問数は昨年より増加しいているが、高校教員と強く関わる機会はまだ少ないため、教員同士が関われる機会を増やしていきたいと考えている。 ７．ＳＮＳを活用した、本学の魅力（学科の特色）や大学・学科の情報発信について 現在SNSアカウントに関してはInstagramおよびYoutubeを立ち上げているが、うまく利用できていない。これらのツールは無料で使用でき、宣伝効果も高いため具体的な利用方法を練らなければならないと考えている。
	グローバル化	１　学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。 10月にタイの高校生を受け入れることで、ある意味グローバルな活動ができた。ただ、当大学学生とタイ高校生とのコミュニケーションが十分にとれていたかというとそうでもなかった。やはり、ある程度の英会話力が必要であることを痛感した。 ラーニングサポートセンター（英語村）の積極的な利用に関しては、ほとんど実行できていない。

	地域活性化	**2023年度は以下にあげる多数の項目を実施することが出来た。この事により、地域活性化の一助足り得たと考えている。** **１知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。** **①　自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進する。** **①-1.** 学校訪問（鹿児島実業高校）高校生（1年生）に臨床検査（技師）に関する医療の中の仕事・任務・責務について紹介を行った。 **①-2.** 令和5年度のべおか市民大学（10/14）（11/11医療の中の臨床検査の役割、そして個別化医療について　ー病理検査とがんゲノム医療を通してー）本市民大学を通して延岡の市民グループと方々との意見交換・交流を図った。 **①-3**. 旭化成の創業者を顕彰する野口遵顕彰会が中学生の科学への興味を育てるために主催している「ジュニア科学スクール」を本学科教員が本学で中学校２校（東海中学校と北浦中学校）の生徒に対して実施した。 **①-4**. 臨地実習病院への訪問（交流）を通して、県内の実習先の関係者の方々とこれから求められる人材育成（臨床検査技師育成・養成）などについて意見交換した。 **①-5.** 宮崎県臨床検査技師会活動を通して地域連携を図った。 インターンシップ授業を通して臨床検査技師展（宮崎県臨床検査技師会活動）に参加して人材育成（臨床検査とは何かを理解し、経験する。）および交流を行った。 **①-6.** 延岡市企業立地審議会委員（10年以上）地元の企業活性化に関する活動。 **①-7.** 宮崎県・東九州メディカルバレープロジェクト（ASEANの人材育成。2023年度10社ほどの地元企業を廻った。） **①-8.** 延岡市・個人情報保護審査会等（大学での研究の延長として協力） **①-9**. 宮崎県商工観光労働部、宮崎県産業振興機構、および宮崎県医務薬務課と連携 **①-10**. 共同研究（小林市立病院、野尻中央病院、千代田病院）透析関連技術の向上に寄与。千代田病院担当者（2023年度に本学大学院博士課程に進学：学術レベル向上 **①-11.** 日本臨床検査学教育協議会九州・沖縄部会（R5.9月13日）（担当校：九州保健福祉大学） **①-12.** のべおか郷土塾 大学訪問（講義+見学）延岡市教育委員会社会教育課 **①-13.** 市民団体「のべおか犬猫希望の会」野良犬野良猫対策、譲渡会での飼い主開拓。毎月1回開催 **①-14**. 細胞検査士会と協同し、Love 49 プロジェクトによる子宮頸がん検診啓発に関するリーフレットを学生に配布。 **①-15.** 宮崎県柔道整復師会と連携し、外部講師の派遣等を依頼 **①-16.** 宮崎県透析医会、宮崎県臨床工学技士会と連携 **①-17.** 県立延岡高校「課題研究、1，2年生対象、（国際大会ノミネート_2023年5月タイ開催）大学レベル課題研究」 **①-18.** キャンパス見学会　延岡星雲・日向・高千穂高等学校12月16日（土） 延岡星雲高校 体験講義・実習 7/21（金）、延岡中学校(98名)６月30日（金） 延岡南中学校 12月4日、岡富中学校3月14日（木）2024年 宮崎県立延岡商業高校185名、 高鍋高校への出張講義7/28（金）「映画が語る医療と生命倫理」 佐賀聖和高校3月7日(木)2024年、小林高校への出張講義令和5年10月6日(金) 尚学館中学校10月18日(水)（49名　講義） 聖心ウルスラ学園高等学校 48名12月17日（日） 西階中学校１年生99名 11月24日金（11月30日木） 聡明中学校 9月15日（金） 大分県立三重総合高等学校　キャンパス見学会　9月17日（日） 大分県立津久見高校 見学会11月2日（木） 東海中学校（160名）6月27日（火）、南浦中学校 7月27日 13名 日向高校：医療工学・臨床工学、医療技術系について　7/21（金） 日向高校フロンティア科体験・見学8/1（火）、 北川中学校（24名）5月17日（水） **②**　県内の大学間連携を推進する。 宮崎大学医学部および工学部との連携推進
2024年度への展望（来年度の計画案）	**教育力(使命・目的等を含む)**	2024年度の取組は以下の通り計画する。 ○3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 ・3つのポリシーを明確化すると共に、浸透させる。 ・学修ポートフォリオとマイステップ機能を最大限活用する。 ・ディプロマ・ポリシー達成率向上のための指導を行う。 ・アドミッション・ポリシーは、求める人物像や入試選抜法の妥当性を見直す。 ・高校の共通必履修科目「情報I」を分析し、出題範囲の見直しを行う。 ・コンソーシアム宮崎への参画、県内の高等教育機関との連携授業を推進する。 ・GPSアカデミーを最大限活用し、学生の成長を促す。 ・教育内容と方法および学習指導改善のための学部FDを実施する。 ○学修支援体制の強化 ・ディプロマ・ポリシーの周知徹底と達成率向上の指導を行う。 ・成績不審者は1on1の指導による支援を行い、退学防止に努める。 ・GPA値の適正評価とルーブリックの定量的評価をアップデートする。 ・学科オリジナルの国家試験対策講座のアップデートを行う。 ・授業アンケートの回答率向上のために、学生による意見の把握体制を整える。 ○キャリア支援並びに就職支援の強化 ・キャリアサポートセンターとの連携を強化する。 ・就職内定に直結させる支援を行う。 ・GPSアカデミーを最大限活用し、学生のキャリアアップを図る。 ・社会人の基礎力を学科オリジナルのキャリア教育を通して身に付けさせる。 ○キャンパス環境の整備 ・国家資格取得に必要なキャンパス環境を整備する。 ・AI時代に対応できる情報系ネットワークの環境整備を強化する。 ・保健センターとの連携を強化する。 ・キャンパス・ハラスメント防止対策と障がい者支援に取り組む。

	研究力	1　学科教員の研究力アップの方策を考える上で、学科教員は限られた人数で各自が全力で教育関連業務に対応しているという現状を把握することが必要である。 それを踏まえ、全業務時間とのバランスを考え、研究実践に割ける時間を無駄なく捻出していく意識改革が研究力アップのための方策に繋がると考えられる。 今年度までの停滞気味の研究実績を踏まえると、方策としては各教員が大きく踏み出し、研究に対する意識を高め、積極的な行動を伴うようなもので必要だと思割れる。その実際的な方法については、学科教員間で検討することが必要であるが、研究に対するモチベーションを高めるような、新規テーマの掘り起こしや教員間での協力（研究グループ構築や作業分担、研究カンファレンス）など、効率的で実現可能な行程を考えたい。こうして研究力アップの仕組みを充実させることで、以下のような研究の活性化に繋がっていくことを期待したい。 ・外部研究費の獲得や学術誌への論文投稿等の積極的な研究活動の推進 ・研修や学会への参加等の研究活動に必要な機会の保障 ・本学出版の査読制ジャーナル（JHWI）の更なる充実 また、研究力アップを達成し、「ものづくり」に関連する研究なども広く実践できれば、その成果を活用し、産学官連携強化をより推進させることで人材育成や大学の知的財産の充実化に繋がっていくと期待される。 2　研究成果の論文や学会等での可視化・公表については、迅速性をもって実施できるよう、研究プランの実施や研究成果のまとめがスムーズに行うべく教員間で協力するものとする。研究対象は限定せず、多くは各教員の専門を中心とした分野の研究を実施することとなるが、可能であれば、一部地域との関連性や地域へのフィードバックにも視点を向けた研究テーマも検討したい。それにより地域に根差した独自の検討や考察した研究成果を得ることができれば、地域における研究のノード機関としての役割を構築する上で非常に効果的であると思われる。
	学生支援	2023年度に引き続き以下の5項目と追加の1項目を実施する。 1）体調不良や精神的不安定な学生には保健室や診療所の受診を積極的に勧める。 2）新入生がなるべく早く学校に馴染むことができるように新入生、2年生そして教員とレクリエーションを実施する。 3）休暇時の勉強スペースを学校内で確保する。 4）欠席の多い学生へ電話やメールで連絡し学校に来るように促す。 5）臨地実習に関わるワクチン接種を早めに行うよう推進する。 6）授業についていくことが困難な学生についてはクラスメートから離れる事が無い様、積極的に声がけを行う。
	募集力(ブランド力)	アドミッションポリシーに沿った入学者をさらに受け入れる為には本学科の志望者数を増やす必要がある。特に以下の点について取り組む。 1　大学の魅力を発信する。 社会における臨床検査技師及び臨床工学技士の必要性をパンフレット、チラシ、SNSを活用して発信し、高校生もしくはその保護者が進学先を選別する際に本学が選択肢の一つとなるよう取り組む。 特に、在学中に細胞検査士を取得できる大学は九州内で本学唯一であり、この点については強くアピールする。 大学案内のみでなく学科オリジナルのチラシを作成し、受験生・高校に配布する。受験生・高校のリスト化は入試広報に依頼する。 2　地域の学びの拠点として学科施設を開放し、各種イベントの開催を受け入れる。利用者及び参加者を通じて九州圏内における知名度の向上を目指す。 ・地元中高生の為の体験行事、課外活動を受け入れる。尚、受け入れ窓口は入試広報課及び庶務課とする。 ・各種学会の研修会に本学科施設を開放する。窓口は本学科教員とする。 3　教員の研究内容に関する情報発信 上記SNSや大学HPを通じ、教員の研究内容を広く発信することで、研究マインドを持った生徒・保護者に向けアピールする。 また、高校の課題研究等に関わり、高校との連携強化に取り組む。窓口は本学科教員及び入試広報とする。 4　学科教員が広報活動に積極的に参加する。 県内外における高校・予備校を訪問し、広報活動に努める。学科教員が参加することでより専門的な説明が可能となる。 5　入試データの分析結果を参考に次年度の対応を学科として検討する。 入学試験における歩留まりを向上させる為には入学試験後の追跡調査が不可欠である。係る調査を入試広報に依頼し、得られた結果を解析することで歩留まりの向上を目指す。
	グローバル化	グローバル化の達成には、学生及び教員のグローバル化への意識拡大が重要である。 1. 教育については、医療のグローバル化を目指す大学として、キャンパスのグローバル化や、海外の提携教育機関（タイ）と連携した教育研究を通じて、生命科学の課題に取り組み、世界諸地域の人々と協働できる英語力の向上によるグローバル人材を養成する。そのために、以下の項目を推進する。 a. 英語村の活用の推進 b. 医療英語、英語コミュニケーションという選択科目履修の推進 c. 専門科目での医療系の英語（機械や検査の英語表現など）の紹介 2. 研究については、グローバルな視点に基づく生命科学の研究並びに検査、治療に関する研究を推進する。また、学内設備の共同利用・共同研究として、他分野とのチーム連携による研究蓄積を情報資源化し、国内外の研究機関・研究者とともに推進する。そのために、以下の項目を推進する。 a. 研究成果の英文雑誌への投稿の推進 b. 国内外での国際学会での発表の推進
	地域活性化 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	2023年度に引き続き以下の項目を継続して実施する。 1　知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。 ・自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進する。 2　県内の大学間連携を推進する。

九州保健福祉大学　中期目標・中期計画　【第3期】

九州保健福祉大学（大学院：社会福祉学研究科・保健科学研究科・医療薬学研究科）

ビジョン（教育目標）	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	**全学共通目標**	**各研究科別計画・対策**
教育力(使命・目的等を含む)	**1）3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化** 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	◆3つのポリシーを明確に示し、それらを踏まえた学修成果の可視化を図り、大学院生が自らの学びを振り返り展望することができる体制を構築する。 ◆時代のニーズに対応したカリキュラムおよび指導体制の検討・検証を引き続き行う。
研究力	**1）大学の強みや特色を活かした研究力の強化** 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	◆各研究室や教員個々の研究力向上を図り、国内外の学術論文発表数を増やす対策を講じる。
募集力(ブランド力)	**1）ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化** ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	◆定員充足を目指し、とくに社会人を対象にした広報活動に取り組む。 ◆各研究室や教員個々の研究・指導内容に関する情報発信を行う。
地域活性化	**1）地域活性化の為の拠点創生** 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	◆大学院と医療・福祉現場との連携強化を図っていく。
2023年度の総評（今年度の取組）	**教育力(使命・目的等を含む)**	・社会福祉学研究科では、学習のしおりに教育方針として明示した3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る機会として、夏・冬期スクーリング時に大学院生および研究科教員全員参加による研究テーマ・計画・中間・成果発表会を継続して実施した。また、指導体制の充実を図る取り組みでは、博士（前期/後期）課程研究指導教員1名を加えた。 ・保健科学研究科では、学生との意見交換を円滑に行い、適切な教育ができるようWEB体制を充実させた。6台のコンピュータを新たに導入し、研究教育並びに事務処理が滞りなく行えるようになった。 ・医療薬学研究科では、大学院生の指導体制の確認を教授会や研究進捗報告会で行った。講義は、前年度と同様のカリキュラムで実施した。3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る目的で、大学院生が自らの学びをユニパ上で記録して自ら振り返って展望できる体制とした。また大学院生がこのような学びを自ら展開しやすいよう、大学院生のスケジュールに即した指導体制を展開した。
	研究力	・社会福祉学研究科では、国内査読付き5報、紀要等3報、報告書2報であった。 ・保健科学研究科では、査読付き採択論文数は、国内9報、国際8報であった。 ・医療薬学研究科では、各大学院教員の研究の進展度を、薬学科と連携して引き続きリトリートにおいて可視化した。また薬学科と連携して各講座の研究力向上を図る目的で、講座費が今年度より講座一律に措置された。これらの取り組みが現時点で即時的に学術論文発表数増加につながったという効果は確認できていない。査読付き採択論文数（2023年度中に集計された2022年度分）は、国内5報、国際10報であった。
	募集力(ブランド力)	・社会福祉学研究科では、通信教育部のスクーリングを活用した広報活動を継続して実施した。博士（前期）課程から博士（後期）課程への進学も促し、1名の進学者があった。 ・保健科学研究科では、YouTubeにて3名の教員紹介を行い、具体的な研究イメージが描けるようにした。 ・医療薬学研究科では、社会人を対象とした広報活動を地域の薬剤師会や学会を通じて実施したが、今年度の入学者は1名に留まった。

	地域活性化	・社会福祉学研究科では、QOL研究機構社会福祉学研究所を活用した取り組みを継続して行い、社会福祉学部と連携して実施したイベント3件、調査研究2件を活動報告書としてまとめ、公表した。 ・医療薬学研究科では、現時点で在籍する大学院生は勤務先の医療現場において責任ある地位に就いており、大学院生を通じて大学院と医療現場は連携できる体制となっている。地域の活性化に資するアウトリーチとして、薬学科と連携して開催された「宮崎県北サイエンスフォーラム」において、6名の大学院教員が研究内容をPRしたが学外参加者は4名であった。
2024年度への展望（来年度の計画案）	**教育力(使命・目的等を含む)**	・社会福祉学研究科では、3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る取り組みを継続して実施する。また、指導体制の充実を図る取り組みについても継続する。 ・保健医療学研究科では、学習成可視化の一環として、院生の研究進捗状況をGoogleスプレッドシートなどに記載し、指導教員と一体化した教育を行う。 ・医療薬学研究科では、次年度も指導体制を点検する。大学院生の満足度が高い教育力を維持していく。
	研究力	・社会福祉学研究科では、地域における中核的な研究拠点として、本学の研究経費助成・地域創生事業経費助成やQOL研究機構社会福祉学研究所の研究助成等も活用して、積極的な研究活動を促す。また、大学院生との共同研究も積極的に進めていく。 ・保健医療学研究科では、博士課程後期の研究内容を、本学の査読付きジャーナルなどに投稿し研究力を向上させる。 ・医療薬学研究科では、各大学院教員が研究論文発表数を増やせるよう、今年度の支援体制を継続する。研究分野により1報の論文完成までの平均的な所用期間は異なるものの、各大学院教員が年1報程度は論文発表できることを目指す。最近数年間論文発表ができていない大学院教員には、投稿先の選択肢として本学の査読付きジャーナルも奨める。
	募集力(ブランド力)	・社会福祉学研究科では、通信教育部のスクーリングを活用した広報活動を継続する。 ・保健医療学研究科では、YouTubeへの教員紹介を複数名行い、研究内容の周知を試みる。 ・医療薬学研究科では、定員充足に向けて特に社会人が大学院に求めるニーズに応えていく必要がある。地域の病院/薬局に在籍の本学卒業生などを中心に学位取得のメリットをPRする。
	地域活性化	・社会福祉学研究科では、社会福祉学部と連携して、QOL研究機構社会福祉学研究所を活用した取り組みを継続する。 ・保健医療学研究科では、地元の医療施設との共同研究により、地域の知の向上を図る。 ・医療薬学研究科では、今年度の活動を継続するとともに、地域における存在感を高められるよう、HPでも大学院教員の研究成果をPRしていく。地域の薬剤師会・病院薬剤師会/高校/中学と共同研究を行い、「宮崎県北サイエンスフォーラム」での発表を通して地域との交流を広げていく。また同フォーラムへの学外参加者を20名以上に増やす。

授業アンケート結果 報告書
令和 4 年度(2022 年度)まとめ

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

１．はじめに

本学では平成 17 年度(2005 年度)より、各教員の授業方法・内容の充実を目指し、すべての講義・演習科目について、受講学生に対しアンケート調査を前期・後期に 1 回ずつ実施してきた。平成 22 年度(2010 年度)に設問の大幅な見直しを行い、平成 23 年度(2011 年度)から集計結果を公開してきた。平成 26 年度(2014 年度)に設問を 2 項目追加し、現行の授業アンケートは 15 項目の設問および自由記述から成っている。

授業アンケートの設問は、授業に対する学生自身と教員の取り組み姿勢、授業内容の理解度・達成度および授業の意義という観点から設定されている。その集計結果は、本学の教育理念「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」に相応しい教育が行われているか否かを知る貴重な手掛かりとなる。以下、令和 4 年度 (2022 年度) の授業アンケートについて、実施方法と全体および学科単位での集計結果を示す。

２．授業アンケート実施方法

アンケートの内容と配付・回収：

アンケートの設問は「学生自身の授業の取り組み」に関する 5 問 (結果の図中 Q1～Q5)、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する 7 問 (Q6～Q12)、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する 2 問 (Q13～Q14)、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する 1 問 (Q15) である。 回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの 4 段階または時間や回数などを 4 段階に区切った選択肢から 1 つ選ぶ形式とした。また自由記述の欄があり、授業の感想や要望等があれば記入することになっている。すべての科目について、前期・後期に 1 回ずつ、原則として授業実施時に時間を設け、ユニバーサルパスポート(本学 WEB 学習支援システム)において実施している。

アンケート対象学生数と科目数：

令和 4 年度(2022 年度)の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
令和 4 年度 (2022 年度)	前期	546	94	38	132	3,184	10,934
	後期	587	97	32	129	2,553	11,402

アンケート集計・解析方法とフィードバック：

各学科の学年ごとに、設問に対する 4 段階回答を集計し、学年及び学科単位で回答の割合を図示した。各授業科目については、科目間での比較のために差が顕著に表れるよう 4 段階回答を 8、3、2、0 点として点数化し、また設問項目間での比較のために評価レーダーチャートを作成した。

アンケートの集計・解析結果については、各教員へ担当分の結果を配布しており、アンケート結果をふまえ授業改善につなげられるように、令和 3 年度の授業アンケートより、学生からのコメント等に対し、科目担当教員がユニバーサルパスポート上で学生へコメントを入力し、フィードバックを実施

した。 令和 4 年度の授業アンケート回収率について、前期約 29.1%・後期約 22.4%と回収率の低下が著しかった。オンラインでのアンケートに講義室で回答してもらう特段の必要性は無いため、学生の自由なタイミングでの回答を認めていたが、結果として回答されずに放置され、回収率が下がった可能性も考えられる。来年度はアンケート回答のための時間を設定し、学生を講義室に集めた上でオンライン回答を促し、回収率向上を図る。

３．授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について、各学科での回答割合を図で示した。全学的な総括は、過去の結果との比較および学科間での相違に着目して行った。

全学的アンケート結果（図Ⅱ）

各学科のアンケート結果を基に大学全体での傾向をまとめた。総合評価としては概ね高評価であり、令和 3 年度(2021 年度)と同様に、総じて「意義ある授業」が行われている。教員の授業に対する取り組みに関しては、生命医科学科と臨床工学科の評価値が特に高かった。一方、2022 年度前期では薬学科 6 年次、動物生命薬科学科 1,3,4 年次、臨床福祉学科 3 年次において、2022 年度後期では薬学科 4 年次において、評価値が低めであった。その理由として、学科毎に分析されている記載にみられる通り、一部科目において学生が不満に感じる内容やシステムで授業をしている可能性や、指導方法の善し悪しが結果に出ている可能性なども考えられる。ただ、2022 年度の授業アンケートの回収率が 30%弱と低かったため、不満をもった学生による回答が相対的に大きな割合を占めている可能性もある。今後はコロナ禍前以上にアンケート回収率を上げ、記述回答データも十分に分析し、評価値の低かった授業内容やシステム、指導方法などを把握して改善につなげていく必要がある。

「学生自身の授業の取り組み（Q1～5)」

前期・後期ともに、大部分の学科において授業を 4 回以上欠席した学生は 5%以下であったが、薬学科 6 年次前期(40%),後期(75%)、臨床福祉学科 3 年次後期(65%)、生命医科学科 4 年次前期(35%)での欠席が多かった（Q1)。予習（Q2)、復習（Q3)、準備学習（Q4）については、学科・学年により差はあるが、10～70%の学生は全く予習、復習、準備学習をしていないことが示された。ただ、国家試験直前の最終学年後期での復習(30 分以上)への取り組み状況は、臨床工学科(100%)、生命医科学科(90%)、臨床福祉学科(80%)、薬学科(75%)をはじめ、大きな問題はないと考えられた。一方、授業への参加意欲（Q5）に関しては、Q1 で欠席が多い学科・学年での評価値が低い傾向がみられるようである。今後は、授業の内容やシステム、指導方法などを見直し、授業をより魅力的にしていくことで学生の学びに対するモチベーションを向上させ、学習習慣の改善を図っていく必要があると思われる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み（Q6～12)」

シラバスに沿った授業と目標や習得すべき事項の説明(Q6, 7)、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力(Q8, 9, 10)、およびわかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか(Q11, 12)について、上述した薬学科 6 年次、動物生命薬科学科 1,3,4 年次、臨床福祉学科 3 年次を除いておおよそ肯定的な回答となっており、大部分の学生は教員の取り組みを認めていると考えられた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度（Q13・14)」「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か（Q15)」

学生の理解度（Q13)、学習意欲の高まり(Q14)および授業の意義(Q15)について、上述した内容と重複するが、件の学科・学年を除いておおよそ肯定的な回答であった。これらは授業に対する教員の熱心な取り組みの成果であると思われる。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】では、1～5回欠席した学生が全学年を通して40～50%であり、前年度より多い割合となった。4回以上欠席した学生は、4年生の後期が一番多い。これは、単位数が卒業要件を満たすことができると学生が判断し、学生自身で加減していると考えられる。欠席 0 回の学生は前期 2～4 年生が60%弱、後期は2，4年年生が60%前後であり、1年生が前期後期とも40%台と全学年を通して最も少なかった。

【予習復習時間】では、「ほとんどしなった」が、4年生が15%～20%、1年生が40%、2年生45～50%である。4年生は国試試験対策と関連していると思われる。1～3年生は、ほとんどしない学生が約半数いることは課題である。1年生のうちから予習復習の学習習慣を身に着けるよう、オリエンテーションやゼミなどで指導を促していきたい。

【授業中の取り組み】では、「Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか」の問いに対して、「あてはまる・ややあてはまる」が90～100%であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

学生から見た教員の授業の取り組みに関する設問では、各項目（シラバスに沿って、授業の目標や習得すべき事項の説明、開始時間、授業の雰囲気の確保、授業への参加、わかりやすい説明、講義資料）に関して、「あてはまる・ややあてはまる」が90%以上で肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価であった。しかし「あてはまらない・あてはまらない」が若干ではある一定数いることは事実であり、授業意欲を低下させないため、教員は、アンケートの学生コメントを真摯に受け止め、更なる授業の改善・工夫に取り組んでいく必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度に関する設問では、各項目（目標や習得すべき事項の理解、学習意欲）に関して、「あてはまる・ややあてはまる」が1年生を除いては、95～100%と概ね良好であった。特徴的なこととして、1年生は「あてはならない」が数パーセントではあるが、一定数いた。まだ、自分の進路（なりたい自分）に悩んでいる学生がいたり、授業についていけない学生がいる可能性がある。少人数ではありが、出席状況や成績等の確認や、ゼミ時間などを活用して、学生と面談等をして対応いく必要がある。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について「あてはまる・ややあてはまる」と回答した学生は、2年生100%であり、肯定的な回答をしている。1年生前期・後期、4年生後期に関しては、「あてはならない」つまり意義がなかったと回答した学生が数名いた。4年生後期は卒業のためだけの単位履修である可能性がある。1年生に関しては、進路に関して不安定な部分があるとも考えられる。今後教員の授業の改善は勿論であるが、教務課から配信される出席状況の確認、学科会議等で学生の状況共有や、チューターのみでなく、学科教員全体で見守り、指導していく体制を整えていきたい。

＊3年生に関しては、後期回答者が2名であるため、今回は反映していない。

スポーツ健康福祉学科アンケート結果　（図Ⅳ）

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】は、3 回以内の欠席でみると、全学年で前期後期とも 80%以上であり、おおむね良好な出席状況であるが、1 年生・2 年生で前期後期の 4～5 回欠席者がやや気になるところである。また、1 年前期の欠席 0 回の学生の割合が約 65%と昨年の約 59%よりやや改善しているが､2020 年度の約 71%よりは低く、後期には約 35%（昨年約 33%）とさらに低下していることも気になる点である。

【予習復習】は、前期では学年が上がるにつれて 30 分以上の実施率が上昇する傾向が認められる。後期における 2 年生の 30 分以上の実施率の大幅な低下、ほとんどしなかった者の増加が気になるところである。また、全学年で前期に比べ後期の 1 時間以上の実施率が低下している。予習復習の習慣づけが課題として挙げられる。

【学習への意欲的な取り組み】では、90%の学生が肯定的に回答している。

2022 年度は引き続きコロナウイルス感染症の影響により一部制約は残ったものの、ほぼ順調に対面授業が行われた。出席状況について 3 回以内の欠席でみると、おおむね良好であった。

中期目標・中期計画に沿って各種国家試験に対する地力を養成するための取り組みを実施してきた結果、各種国家試験の合格率は全国平均レベルを大きく下回ることはなくなった。しかし、学年進行とともに受験をあきらめる学生もみられ、意欲的に資格取得を目指す者とそうでない者との二極化の傾向が続いている。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～12 のすべての質問において、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると全学年において 9 割を超える肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ている。「ややあてはまる」の評価を「あてはまる」の評価にしていくため、教員の授業に対する取り組みを工夫・改善していく。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度・学習意欲の高まりについては、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると、9 割を超える肯定的な回答を得ている。「学生から見た教員の授業に対する取り組み」の評価同様、「ややあてはまる」の評価を「あてはまる」の評価にしていくため、学生の理解度および学習意欲を高める取り組みを工夫・改善していく。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、90%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をしている。「あてはまる」だけに着目すると約 73～96%（昨年度：約 68～94%）であった。1 年生と 2 年生に前後期とも数%ではあるが「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の回答がある。原因を探り、本学科への進学に対する満足度を上げるために、学習意欲の向上を図る取り組みの工夫が必要である。

作業療法学科アンケート結果

※回答者なし

言語聴覚療法学科アンケート結果(図Ⅴ)

言語聴覚療法学科は令和 4 年度 3 月をもって閉鎖となった。最終年度である令和 4 年度の在籍学生数は 4 年生 6 名であった。回収された 3 件のアンケート結果について報告する。

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、全員が欠席 0 回と良好な結果を示していた。

1 回の授業に対して 30 分以上学習していた学生は、予習が 67%（2/3)、復習が 33%（1/3）であった。なお、4 年生では授業以外にも、学外総合臨床実習（前期 8 週間）の事前・事後学修や国家試験対策を実施しており、学習の実時間数はさらに多くなると考えられる。

また、学習に意欲的に取り組んだかに対して、全員が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答していた。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

授業の開始時間の厳守については、全員が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答していた。

一方、シラバスにそった授業、授業目標・修得すべき事項の説明、授業の雰囲気、授業への参加の促し、わかりやすい説明や指導、講義資料の適切性については、いずれも「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した学生は 67%（2/3）であり、令和 3 年度に比べて低い評価であった。学生の理解度を確認しながら、授業目標等について繰り返し説明する必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業の目標や修得すべき事項を理解できたか、及び授業で学習意欲が高まったかに対しては、67%（2/3）が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答しており、令和 3 年度に比べて低い評価であった。

令和 3 年度も、3 年生（当時）は「あてはまる」と答えた割合が他学年に比べて低かったことから、学生の理解度に配慮した丁寧な指導が他学年以上に必要な学年であったといえる。この点に配慮して、4 年生に対する国家試験対策プログラムを大幅に見直したことによって、国家試験合格率が令和 3 年度よりも高い結果となった。

「学生にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業は意義のあるものであったかに対しては、67%（2/3）が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答しており、令和 3 年度に比べて低い評価であった。前述の理解度・達成度の結果とも関連しており、個々の学生の理解度に応じたきめ細かい学習指導を行うことが求められる。学生の満足度を高めるためにも、教員間で授業の内容や方法について引き続き議論を重ねていくことが重要であると考えられる。

臨床工学科アンケート結果　（図Ⅵ）

「学生自身の授業の取り組み」

授業の欠席回数について前期ではアンケート回答者全員が出席している。授業の予習・復習の時間に関しては 1 時間以上おこなっており、アンケート対象者が 4 年生であることより国家試験対策の学習を行っていたと考えられる。授業にたいする取り組みも真面目に意欲的に取り組んでいる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそっての授業」、「授業目標や修得すべき事項の説明」、「授業の雰囲気」、「学生への授業参加の促し」、「わかりやすい説明や指導」、「講義資料の適切さ」、「修得すべき事項」に関して、「あてはまる」を回答しており、教員の授業に対する評価は高いと推測される。教員全体のミーティングでは前期・後期ともに同様の対応を行ってきた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標は習得すべき事項の理解」、「授業での学習意欲の高まり」については、についてはともに「あてはまる」を回答している。回答者は 4 年生で対象であるので、目前に国家試験受験という目標がはっきりとしていたために学習意欲が高まっている。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「あてはまる」を回答しており、学生自身にとって授業は意義あるものであったと認識していることが推測される。シラバスに記載されている授業目標、修得すべき事項を十分理解した上で授業に取り組んでいたと言える。

薬学科アンケート結果　(図Ⅶ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席】前後期とも、1〜5 年生においては、約 80%が欠席なしであった。5 年生は後期のみで、実務実習後で、久しぶりの授業ということもあってか、欠席が少なかった。6 年生においては、薬学総合演習の回数が前期 72、後期 63 であり、就活などのために休んでいることも考慮すると、前期は欠席が比較的少ないと考えられる。6 年生の後期は、単位認定試験や国家試験が迫り、自学を好む学生も増えるため、欠席数は増えていた。

【予習・復習】3 年生で予習復習を 1 時間以上やっている学生の割合が他学年より多くなっていた。一部、オンラインで復習する科目があり、増えているともとれるが、実習も前期から入って、予習復習が必要になっているからと考えられる。5 年生は演習型の授業でスライドでの発表が多いため、予習時間も復習時間も必然的に増加している。1,2 年生で予習をしていない学生が比較的多いので、薬学生として、難しい国家試験を目指すという自覚を早期に植え付けたほうが良いと考えられる。どのようにモチベーションを持たせるか、検討が必要である。

【シラバス記載の準備学習】全体的には 9 割以上の学生が取り組んでいる。

【授業に取り組む態度・意欲】6 年生で授業に取り組む態度・意欲が若干悪化している。これは、国試対策の勉強を無理にさせようとするシステムが良くないのかもしれない。また、オムニバスの教員の演習がほとんどで、講義の善し悪しが結果に出ている状態であると考えられるので、アンケートをとって、データを回収し、改善に努める。

「教員の授業に対する取り組み」

【シラバスとの一致性】4 年生後期でシラバス通りでない授業が少しあるようだが、概ねシラバス通り行われていると考えられる。

【目標等の説明】4 年生後期で授業目標や修得すべき事項の説明が足りない授業が少しあるようだが、概ね目標等の説明が適切に行われていると考えられる。

【開始時間】4 年生後期で授業開始時間が少し守られなかったようであるが、概ね守られていると考えられる。

【授業の雰囲気・学生の参加】4 年生後期で少し雰囲気が良くなかったようであるが、概ね良いと考えられる。

【授業の説明】4 年生後期で説明があまり良くない授業が少しあるようだが、概ね良いと考えられる。

【講義資料】4 年生後期で少し講義資料が良くなかったようだが、概ね適切だったと考えられる。

4 年生の後期のいずれかの科目（オムニバスを含む）で不満があった学生の意見があった。コメントを見なければわからないため、今後は、もっと授業アンケートの回収率を上げて、改善につなげる。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

【理解度】1，2，3 年生前後期通して、授業に対する学生自身の理解度・達成度は「あてはまる」、「ややあてはまる」の解答が概ね 90%程度であった。2 年生後期で、若干理解度が悪くなっており、4 年生後期でも少し悪化している。また、6 年生では、前後期ともに理解度が悪化している。これらの原因として、一部の教員の講義が、薬学科の学生の望んでいるレベルに達していないことが考えられる。ただし、授業アンケートの回収率が低いため、一部の不満を持っている学生の意見が強調されていることも考えられるため、今後、学生を集めて授業アンケートを回収し、少なくとも学生数の 3 分の 2 以上を目標にし、その結果、同様な意見が得られた場合、改善を求めていく方針である。

【学習意欲】上記、理解度と同様の結果であった。これも、対応としては理解度と同じで、まず授業ア

ンケートの回収率をあげて、結果を解析し、改善につなげる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

全学年前後期通して、意義のある授業であったか否かについては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価が、ほぼ 90%超あった。しかし、6 年生の前期、4 年生の後期に「あてはまらない」「あまりあてはまらない」が増加していた。6 年生の前期は、授業アンケートの回収率が低いことを考慮すると、主に卒延生の意見が反映されていると考えている。4 年生も不満のある学生の意見が強調されていると考えられる。どちらもオムニバスの授業で、一部の教員の講義が、薬学科の学生の望んでいるレベルに達していないと考えており、すでに上述しているが、今年度からは授業アンケートの回収率をあげ、その解析結果を考察し、授業改善につなげるつもりである。

動物生命薬科学科アンケート結果　（図X）

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、前・後期を通じて全学年で 90%以上が 0－3 回の欠席であった。0 回欠席は、2 年生の前期が 92%と最も高く、3 年生の後期が 70%と最も低かった。1－3 回欠席は 3 年生の後期が 30%と最も高く、2 年生の前期が 8%と最も低かった。4－5 回欠席は 4 年生の前期が 5%と最も高く、次いで 3 年生の前期 4%、1 年生の前期 2%、2 年生の後期 2%であった。なお、2 年生の前期、1・3 年生及び 4 年生の後期は 0%であった。4 年生の前期欠席が高い理由は就職活動のためと考えられた。

予習時間について、「ほとんどしなかった」、「30 分未満」を合わせると、全学年の前期 75－85%、後期 60－79%の学生が該当した。復習時間においても、「ほとんどしなかった」、「30 分未満」を合わせると、全学年の 68－81%、後期 58－75%の学生が該当した。したがって、半数以上の学生は、「ほとんどしなかった」あるいは「30 分未満」の予習・復習時間であった。予習・復習時間が短いことについては、今後、指導の必要性があると考える。

シラバスに記載されている準備学習については、「ほとんどしなかった」、「30 分未満」を合わると、前期では、1 年生 82%、2 年生 28%、3 年生 48%、4 年生 53%、後期では、1 年生 56%、2 年生 35%、3 年生 45%、4 年生 24%とバラツキが大きかった。一般的には「予習の時間」と「シラバスに記載されている準備学習」については、ある程度の相関があると考えられるが、乖離が散見された。今後、設問内容も検討する必要があると思われた。なお、1 年生の前期においてシラバスに記載されている準備学習が「ほとんどしなかった」、「30 分未満」の学生が 82%もいたことは、入学当初のオリエンテーションでシラバスについてより詳細な説明が必要と思われた。

「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、前期・後期ともに、いずれの学年においても「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた回答は、前期の 4 年生 79%、1 年生 88%であったが、他は 90－98%であり、全体として、学習への意欲的な取り組みは良好であった。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に対する取り組みに関する設問では、前・後期を通じて全学年において、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた回答は、ほとんどの項目で 90%以上とおおむね良好であった。しかし、前期において、4 年生で「授業の目標や修得すべき事項を毎回説明していましたか」、1 年生で「学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか」及び「学生に授業への参加を促しましたか」、1・4 年生で「わかりやすい説明や指導をしていましたか」及び「資料は適切でしたか」、さらに、後期において、3 年生「学生に授業への参加を促しましたか」及び「わかりやすい説明や指導をしていましたか」の設問に対して、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」を合わせた回答が 10%程度あったことは、教員の授業に対する取り組みの改善をする必要があると考えた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や習得すべき事項の理解」並びに「授業で学習意欲が高まりましたか」の質問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、前・後期を通じて全学年で、90%以上と良好であった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、前・後期を通じて全学年で、90%以上と良好であった。

生命医科学科アンケート結果報告(図IX)

「学生自身の授業の取り組み」

1 年次から 3 年次において欠席数 3 回以内は、前期では各学年 95%をこえている。しかし 4 年次では国家試験を控えた学年であるにもかかわらず 6 回以上の欠席群が 33%以上おり無欠席群が 66.7%と 2 分する状況であった。後期においては前期と同様な傾向を示したが、4 年次のみ国試前の意識が芽生えたのか 6 回以上の欠席は 3%未満と激減した。更に欠席 0 回について比較すると前期・後期を通じて 3 年次が 90%以上を示し欠席が少ない状況であった。昨年度と比較し、2022 年度は各学年や欠席が少ない傾向を示した。「予習」を 1 時間以上行った学生は 1 年次から 3 年次迄は前期・後期を通じて 5〜10%程度であるが 4 年次の前期では 30%を超えており後期になると 70%を超えており、国家試験を意識した状況と思われる。2021 年度の後期では 4 年次では 1 時間以上の予習時間が 30%程度であったのに対し、2022 年度は 40 ポイントもの増加しており、このことが 22 年度の国家試験合格率 100%を導いたこととの関連性が示唆される結果となった。また「復習」については 1 時間以上行った学生は学年が上がるとともに高くなる傾向を示したが、1 年次前期・後期を通じて 20%程度であった、また 4 年次前期にほとんど復習を行っていない学生が 33%以上おり、4 年次前期での指導の必要性を示唆する状況であった。

「教員の授業に対する取り組み」

「教員は、シラバスにそって授業を行ったか」と言う設問に対し「あてはまる」「ややあてはまる」の合計が前期・後期ともに 98%を超えており概ねシラバスに沿った授業が行われていると推測される。「教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していたか」と言う設問に対しては「あてはまる」「ややあてはまる」の合計が前期・後期を通じて約 97%以上を超えており、おおむね学生の授業への目標や修得すべき目標を得ることができたことがうかがえる。「授業の開始時刻を守っているか」と言う設問に対し「あてはまる」「ややあてはまる」が前期で 97%以上、後期では 99%以上であり概ね教員が開始時刻を守っていることが示唆された。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項を理解できたか」と言う設問に対し学年が上がるに従い「あてはまる」「ややあてはまる」が高くなりの前期の平均が 97%・後期 98%を超えており授業中に適切に目的や重要点の指導が行われていることが示唆された。また、「授業で学習意欲が高まったか」と言う設問に対して「あてはまる」「ややあてはまる」という設問に対し、1 年次・2 年次の前期に比較し、後期の 1 年次ではあまり変化がないが 2 年次では専門教科が増えることもあり大幅に増加する傾向を示した。全体の平均では前期・後期ともに 96%を超えており学習意欲が維持されていることが示唆された。しかし「あまりあてはならない」「あてはまらない」が前期・後期ともに約 3.3%あり 1 年間の学習によっても意欲の高まりに変化がない群がある事が確認された。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか」

総合評価として「授業は意義あるものだったか」と言う設問に対し、「あてはまる」「ややあてはまる」の合計が前期・後期ともに 98%を超えている。学年別にみると 2021 年度に最も低かった 2 年次の前期が 2022 年度は 3 ポイント増加し 99%を超えている。また後期では 1 年次が最も低く 96%であるが 2 年次から 4 年次は 99%から 100%であり学年の経過により医療に関する専門科目の意義を理解し授業が意義あるものとして認識されている状況であった。

臨床心理学科アンケート結果報告(図X)

「学生自身の授業の取り組み」

2022 年度の本学科の全体の出席状況に関しては、欠席 3 回以内の学生が 1、2、3 年生ともに 90～100%であり、良好な結果を示していた。特に 2 年生の出席は前期・後期共に 100%に近い割合であり、授業に対する積極的な姿勢が窺えると共に、出席指導の効果が見られたと考えられる。

予習時間は、「ほとんどしなかった」の割合が１年生では約 45%、2 年生 40%、3 年生 50%で 3 年生の予習時間が１番短く、この結果を踏まえ、今後学科で徹底した指導を行なっていく必要があると考えられる。

復習に関しては、１、２年生共に前期よりも後期の割合が高い傾向を示した。特に２年生の前期は、1 時間以上復讐を行っている学生の割合が 15%以上を示し、2021 年度の前期の割合を上回る結果となった。この結果から、引き続き学科全体で予習復習の学習習慣を身につけるような指導を促していきたい。

授業中の意欲的な取り組みに関しては、１、２、３年生において、前期・後期ともに「あてはまる・ややあてはまる」が 90%を超えており、学生は意欲的に大学の授業に取り組んでいるという結果であった。これは出席状況と同様に非常に高い値であり、今後もこのような結果を継続できるよう、学科として取り組んでいく。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

学生から見た教員の授業の取り組みに関しては、１、２、３年生ともに全ての質問項目において「あてはまる・ややあてはまる」が前期・後期ともに 90%以上となっており、2021 年度と同様に教員の授業に対する取り組みは、学生から高く評価されていた。今後も学生から授業評価を意識した取り組みを継続して行っていく必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度に関しては、１、２、３年生において、理解度、意欲の全ての質問項目において「あてはまる・ややあてはまる」が 85%を超えており、学生の授業に関する理解度・到達度は高いと考えられる。また、この結果から、学生が授業に対して意欲的に取り組んでいることが推測された。しかしながら、２、3 年生に比べて、1 年生の理解度・到達度が低いため、1 年生の授業に対する各教員の取り組みを見直していかなければならない。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義に関しては、前期・後期ともに 95%以上の学生が「あてはまる・ややあてはまる」と回答しており、概ね高い評価であった。この結果は、学生の授業に対する高い意欲と、各教員の地道な取り組みによるものであると考えられる。現在のところ、全体的な結果は概ね満足できるものではあるが、この結果に満足することなく、常に学生ファーストの視点で、今後の授業を展開していけるように、学科教員一丸となって取り組んでいく必要がある。

図　I

学生支援システム「UNIVERSAL PASSPORT」により、
Webアンケートを実施。

（以下、アンケート内容のイメージ）

123456789　科目A（教員B）

授業アンケート　　年度（前期）

授業アンケート　Q1～Q18

Q1　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、この授業を何回欠席しましたか

○ ①　0回
○ ②　1回～3回
○ ③　4回～5回
○ ④　6回以上

Q2　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、1回の授業に対して平均どのくらい予習を行いましたか

○ ①　1時間以上
○ ②　30分～1時間
○ ③　30分未満
○ ④　ほとんどしなかった

Q3　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか

○ ①　1時間以上
○ ②　30分～1時間
○ ③　30分未満
○ ④　ほとんどしなかった

Q4　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか

○ ①　全部やった
○ ②　ほとんどやった
○ ③　あまりやらなかった
○ ④　全然やらなかった

Q5　〔あなたの授業に対する取組について〕
あなたは、この授業で居眠り・私語・遅刻・早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか

○ ①　あてはまる
○ ②　ややあてはまる
○ ③　あまりあてはまらない
○ ④　あてはまらない

Q6　〔教員の授業に対する取組について〕
担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか

○ ①　あてはまる
○ ②　ややあてはまる
○ ③　あまりあてはまらない
○ ④　あてはまらない

Q7　〔教員の授業に対する取組について〕

担当教員は、授業の目的や修得すべき事項を毎回説明していましたか

- ○ ①　あてはまる
- ○ ②　ややあてはまる
- ○ ③　あまりあてはまらない
- ○ ④　あてはまらない

Q8　〔教員の従業に対する取組について〕
担当教員は、授業の開始時刻をきちんと守っていましたか

- ○ ①　あてはまる
- ○ ②　ややあてはまる
- ○ ③　あまりあてはまらない
- ○ ④　あてはまらない

Q9　〔教員の授業に対する取組ついて〕
担当教員は、学生の私語などに注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか

- ○ ①　あてはまる
- ○ ②　ややあてはまる
- ○ ③　あまりあてはまらない
- ○ ④　あてはまらない

Q10　〔教員の授業に対する取組について〕
担当教員は、学生に授業への参加を促しましたか（質問等）

- ○ あてはまる
- ○ ややあてはまる
- ○ あまりあてはまらない
- ○ あてはまらない

Q11　〔教員の授業に対する取組について〕
担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか

- ○ ①　あてはまる
- ○ ②　ややあてはまる
- ○ ③　あまりあてはまらない
- ○ ④　あてはまらない（具体的に書いてください）

Q12　〔教員の授業に対する取組について〕
担当教員の講義資料（教科書を含む）は適切でしたか

- ○ ①　あてはまる
- ○ ②　ややあてはまる
- ○ ③　あまりあてはまらない
- ○ ④　あてはまらない（具体的に書いてください）

Q13〔授業に対するあなたの理解・達成度〕
あなたはこの授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか

- ○ ①　あてはまる
- ○ ②　ややあてはまる
- ○ ③　あまりあてはまらない
- ○ ④　あてはまらない（具体的に書いてください）

Q14　〔授業に対するあなたの理解・達成度〕
あなたは、この授業で学習意欲が高まりましたか

- ○ ①　あてはまる

○ ② ややあてはまる

○ ③ あまりあてはまらない

○ ④ あてはまらない

Q15 〔総合評価〕
あなたにとって、この授業は意義あるものでしたか

○ ① あてはまる

○ ② ややあてはまる

○ ③ あまりあてはまらない

○ ④ あてはまらない（具体的にかいてください）

Q16 この授業でよかったと思う点について書いてください

Q17 この授業で改善した方が良いと思う点について書いてください

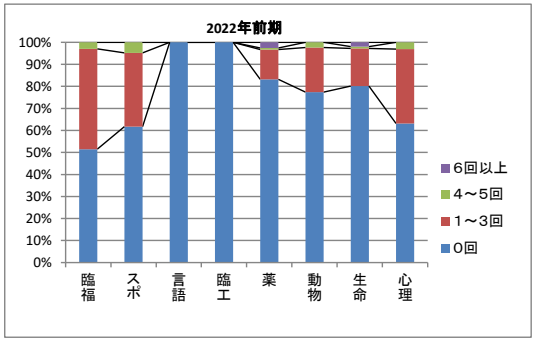
Q18 この授業の感想（自己反省を含む）、また授業担当者へ伝えたいことなどを自由に書いてください

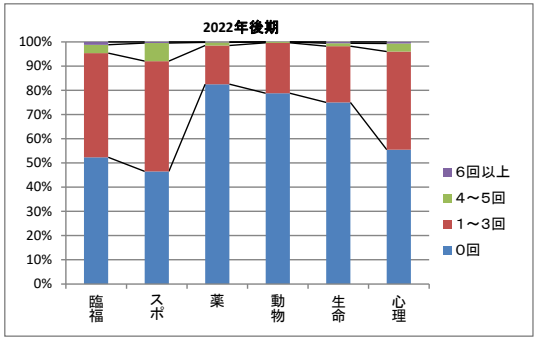
このアンケートは、授業改善を目的として実施するものです。あなたの意見は、今後の授業改善の参考となります。アンケートの回答によりあなたが不利益をこうむることはありませんので、率直な回答をお願いします。

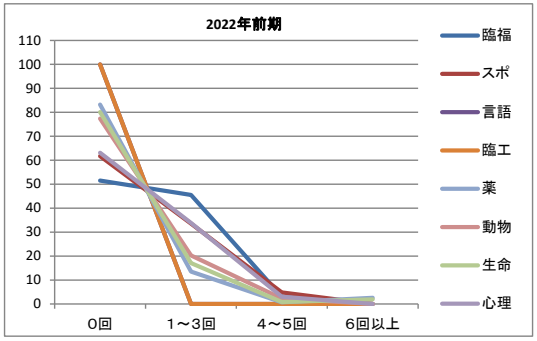
回答

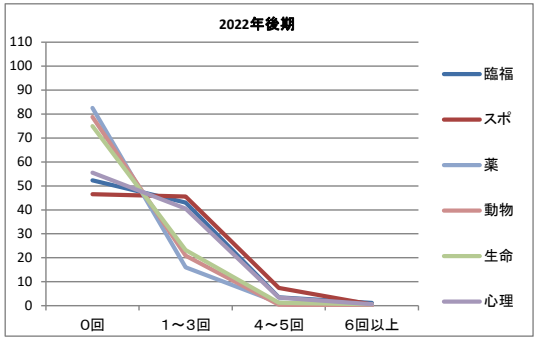
授業アンケート　令和4年度（2022年）

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

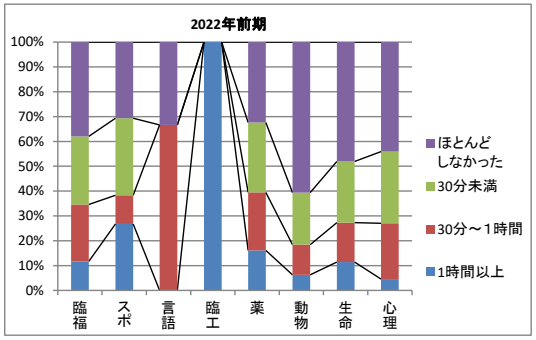


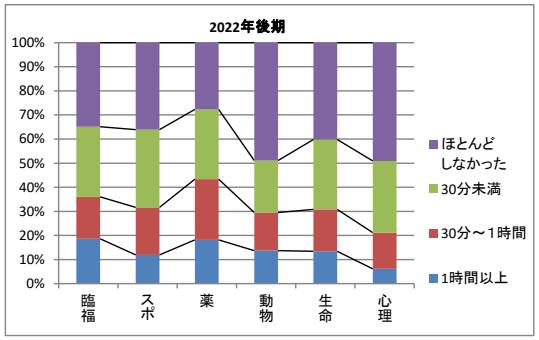


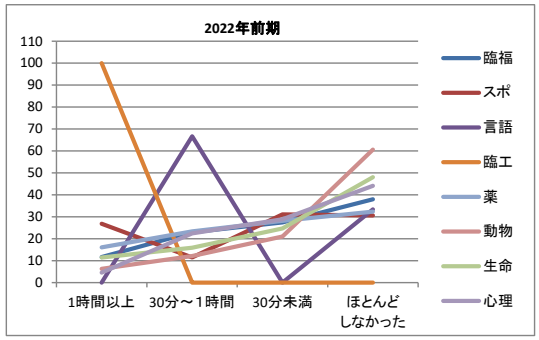


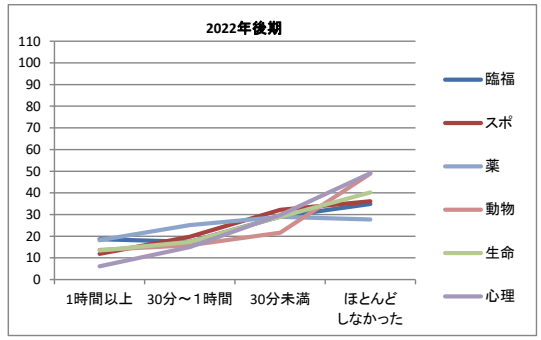


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して平均どのくらい予習を行いましたか。

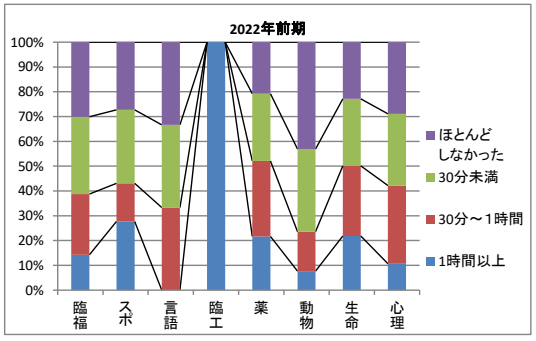


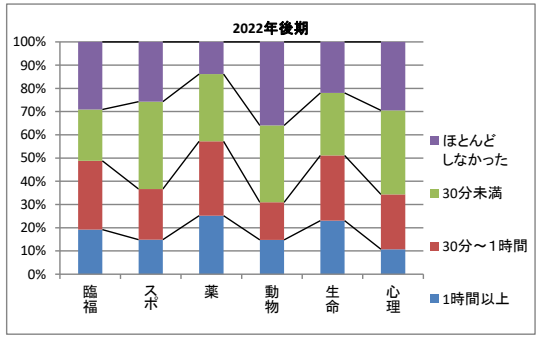


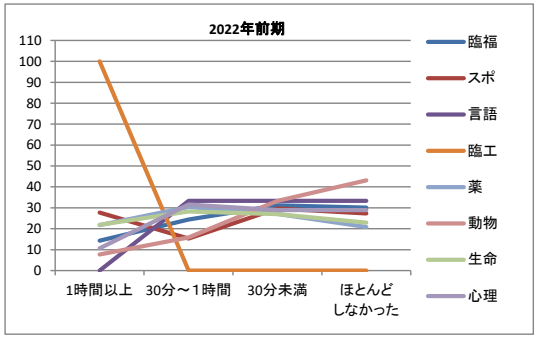


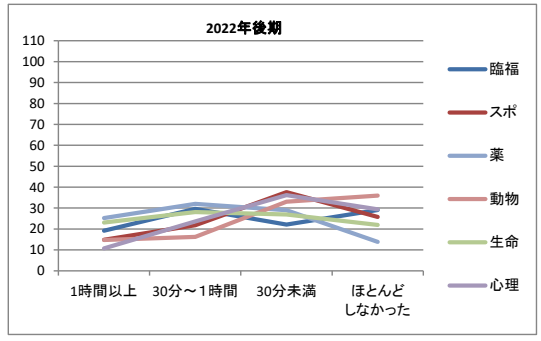


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



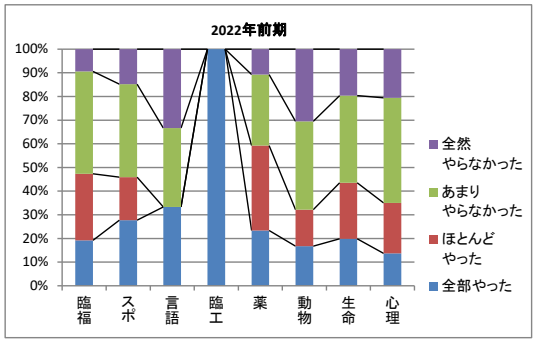


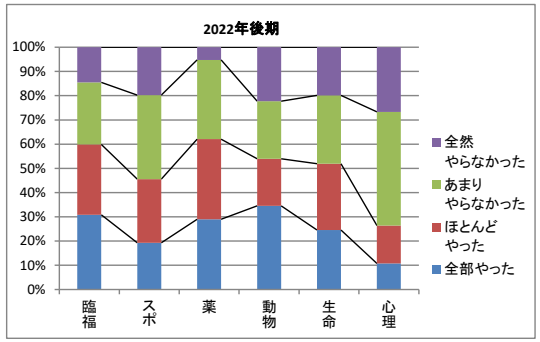


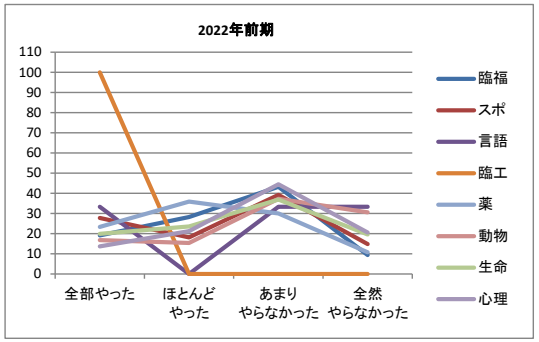


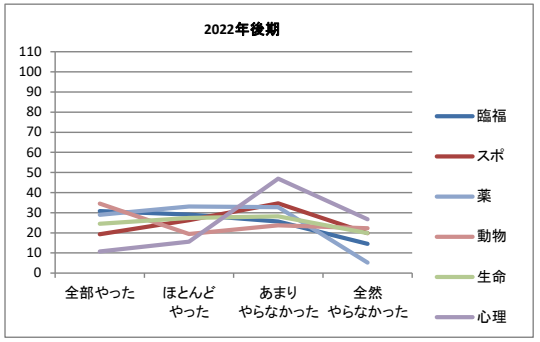
図Ⅱ

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

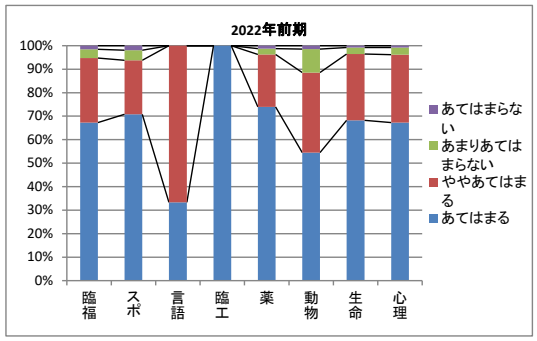


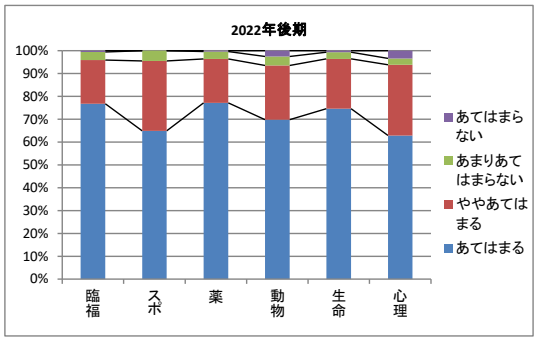


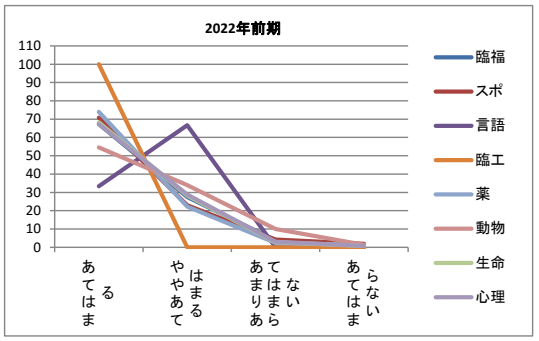


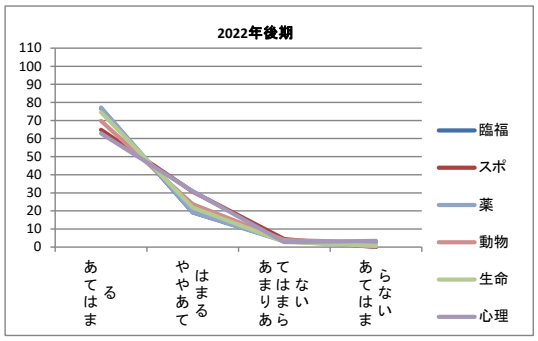


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

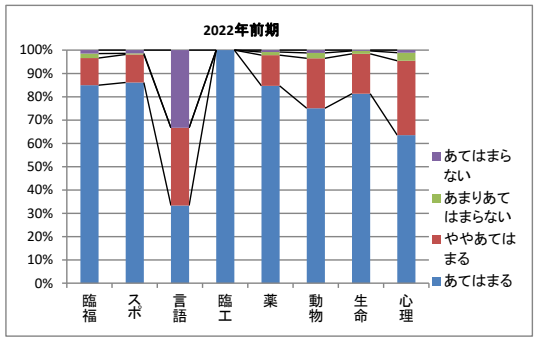


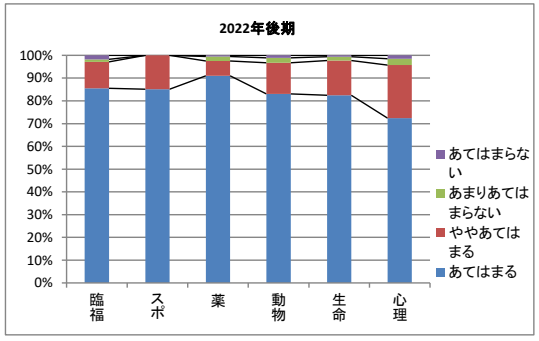


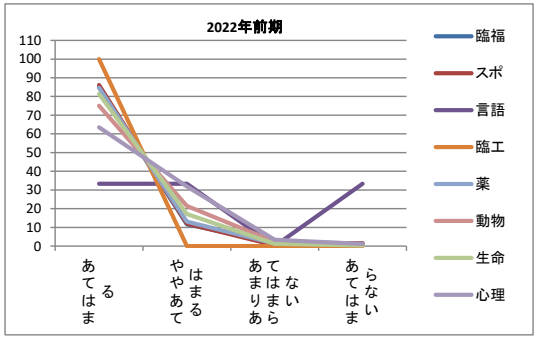


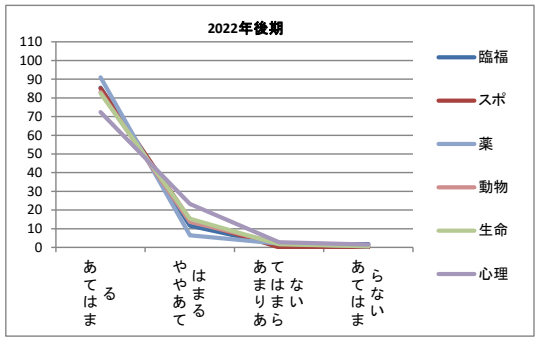


【教員の授業に対する取り組み】
Q6.担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

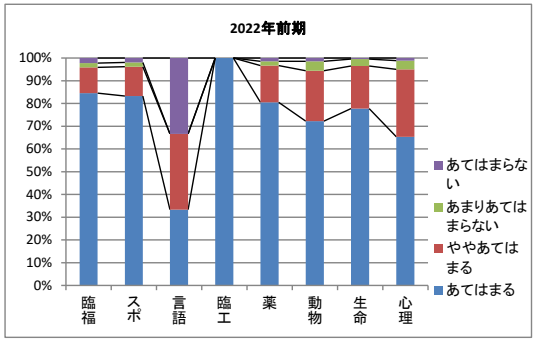


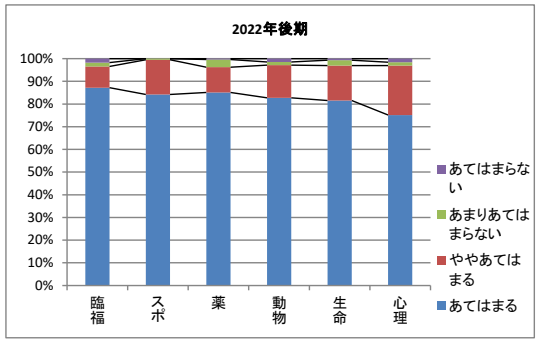


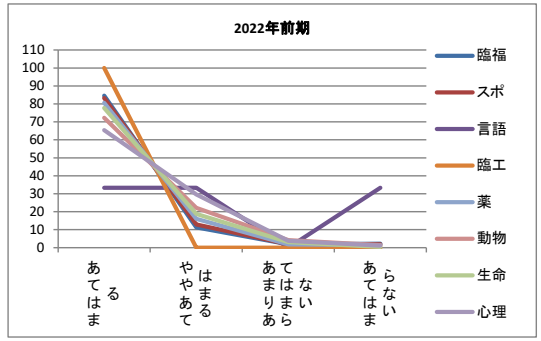


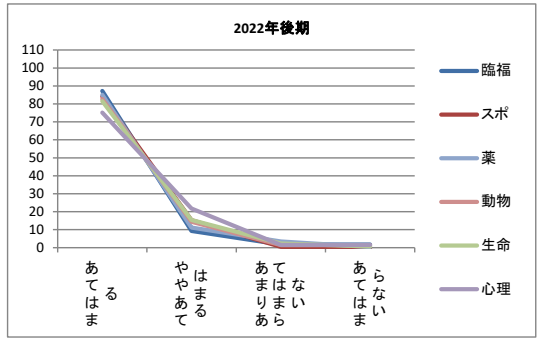


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

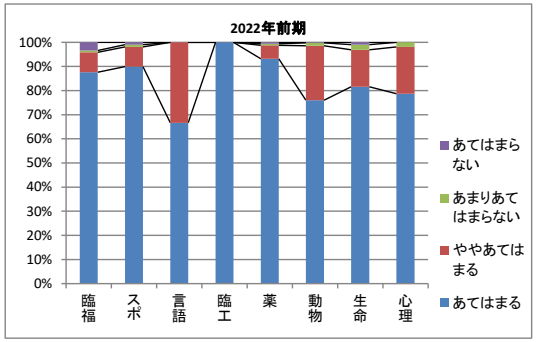


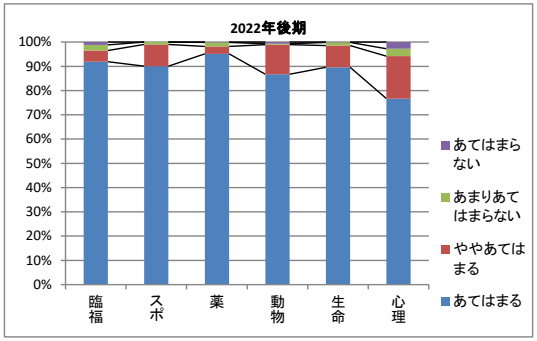


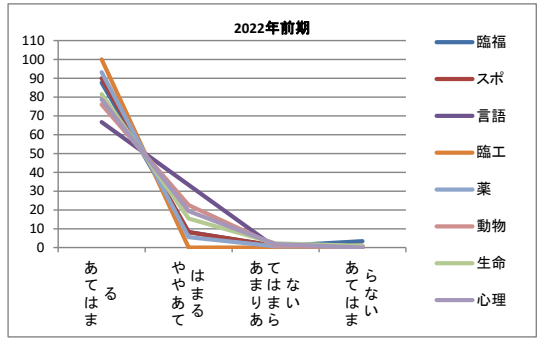


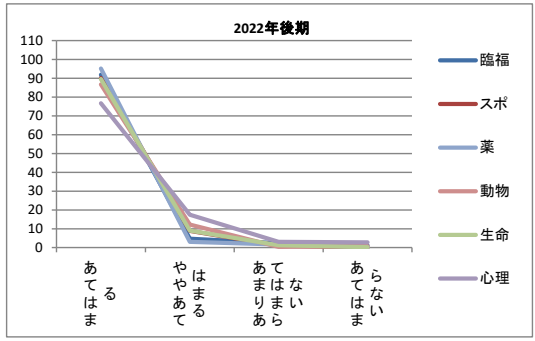


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

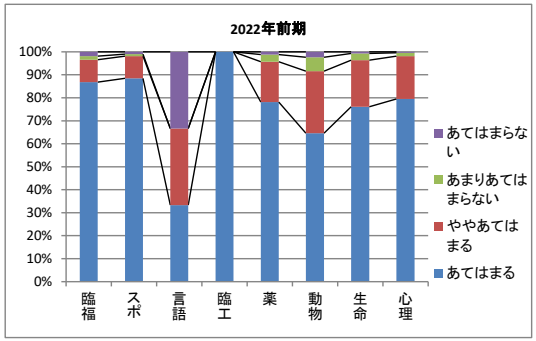


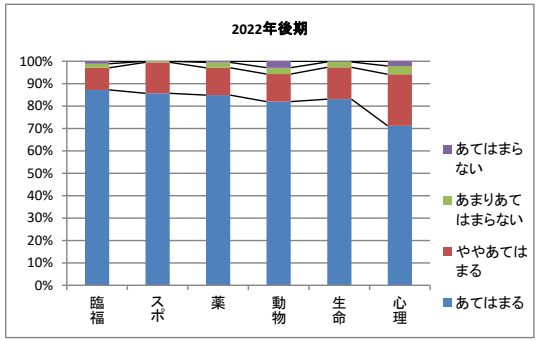


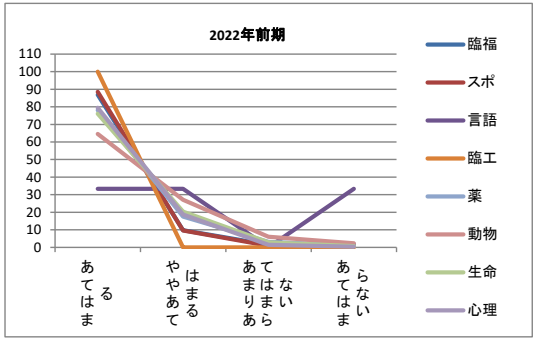


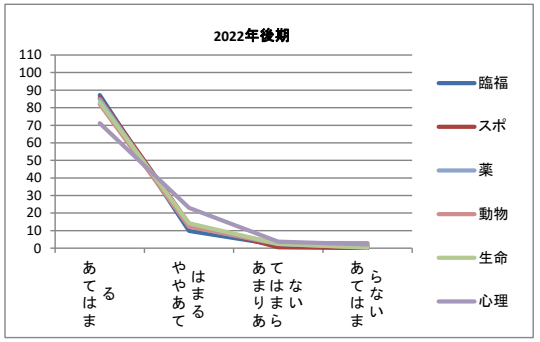


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

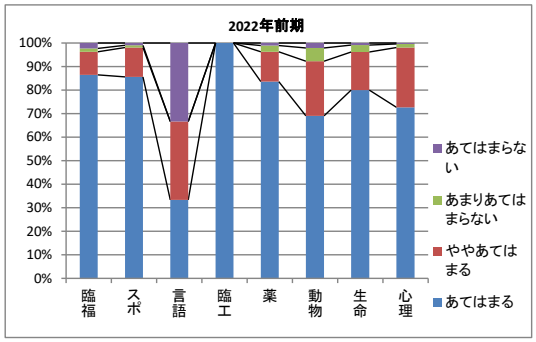


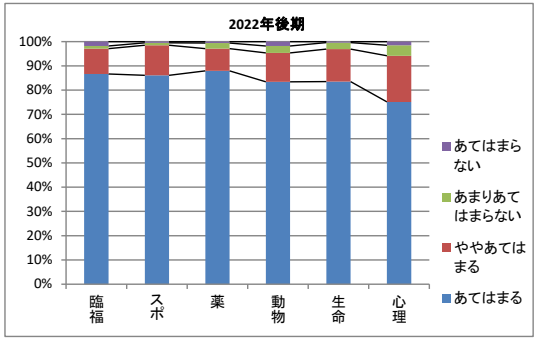


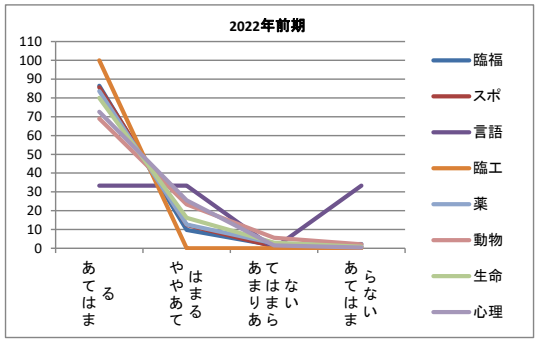


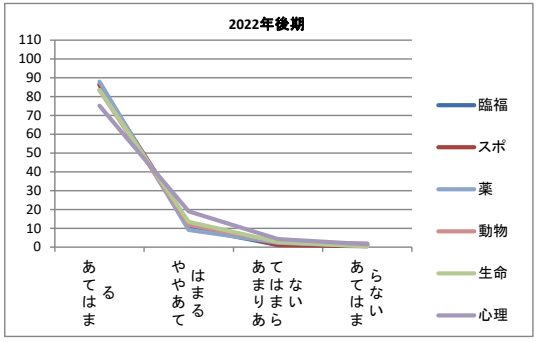


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

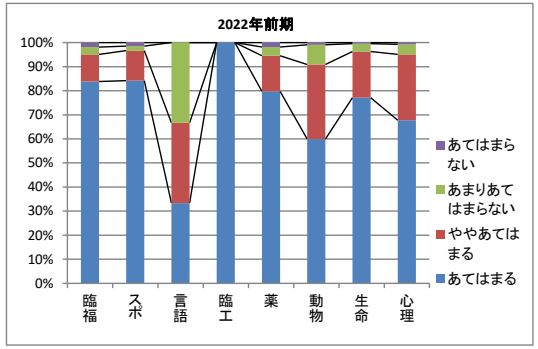


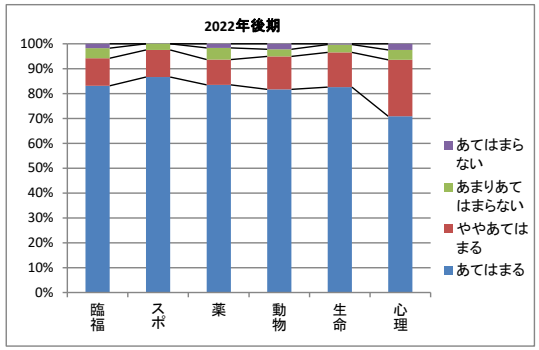


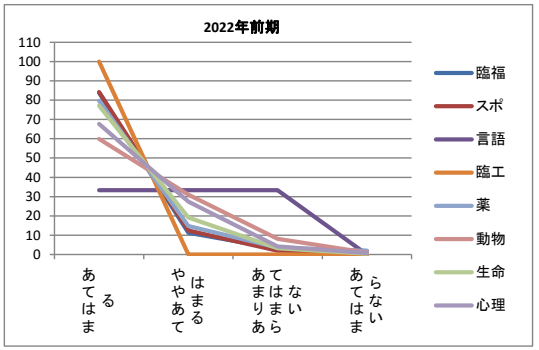


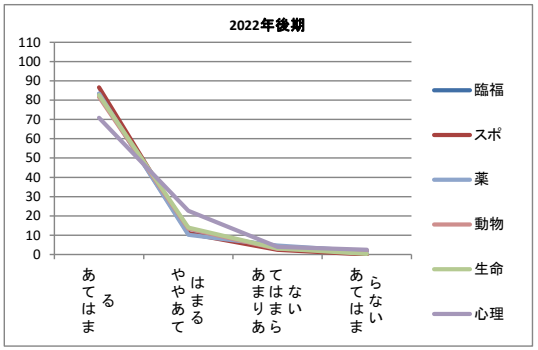


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

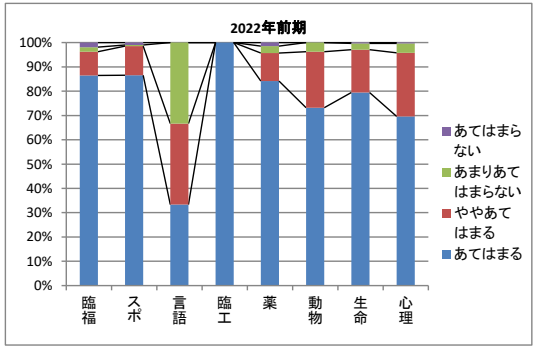


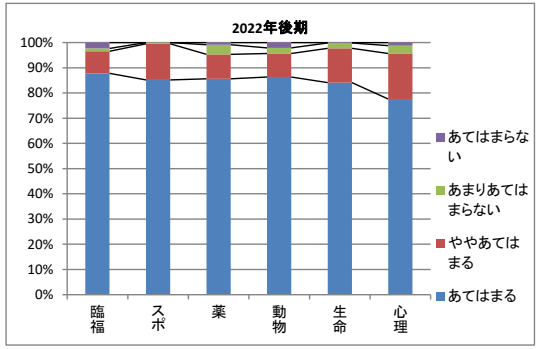


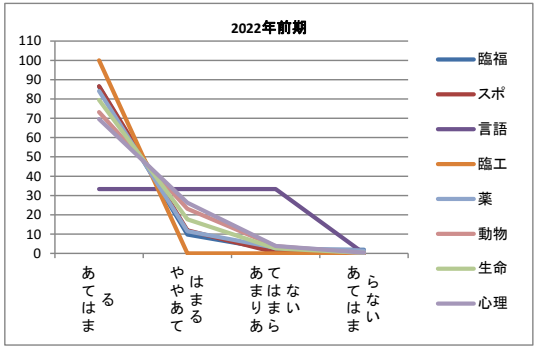


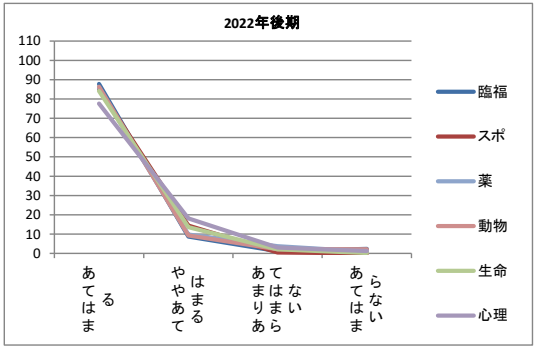


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。

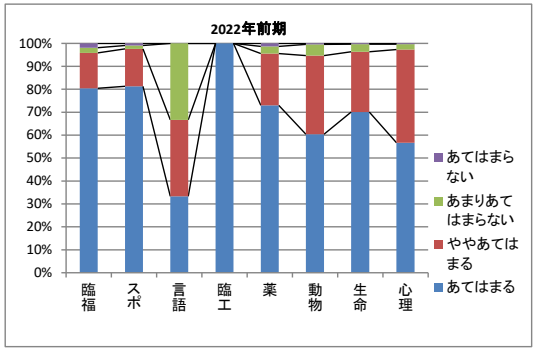


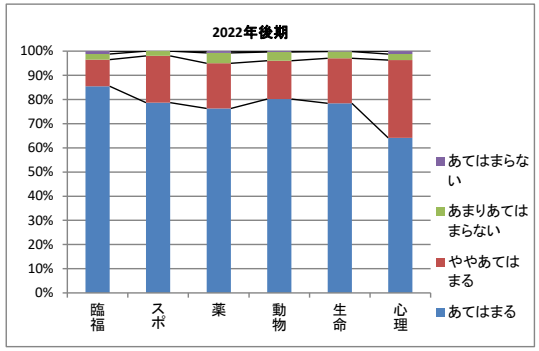


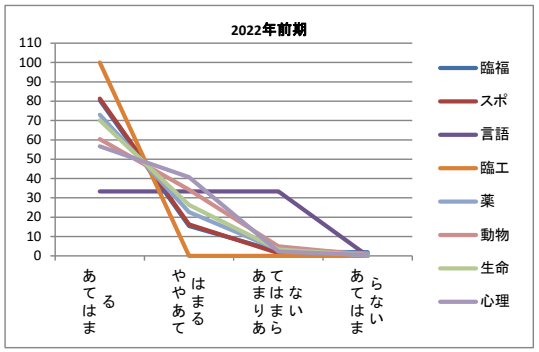


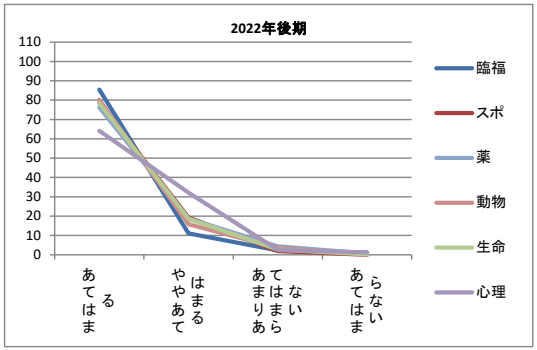


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

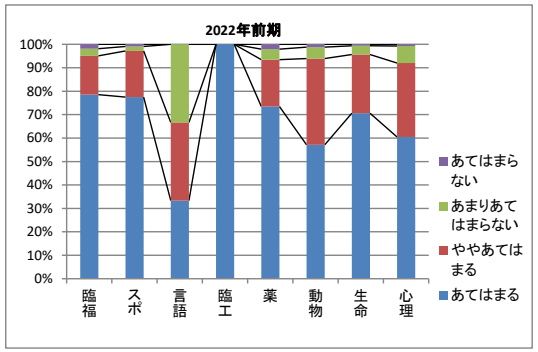


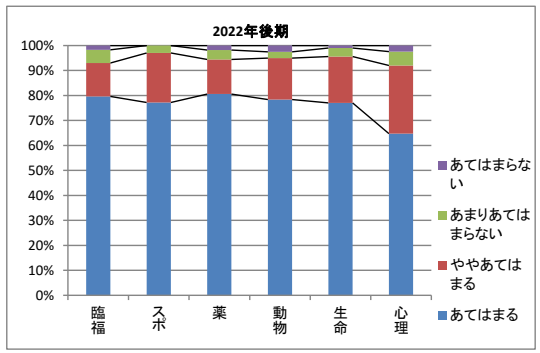


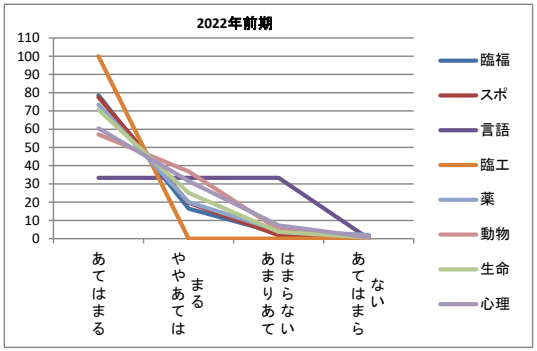


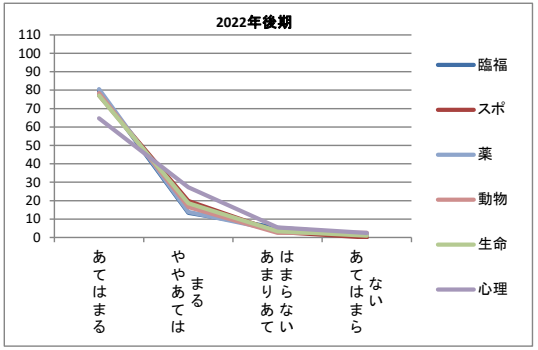


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

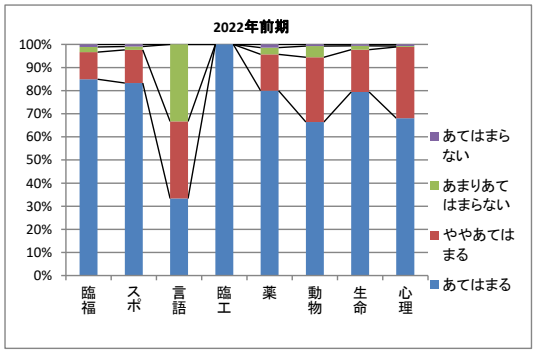


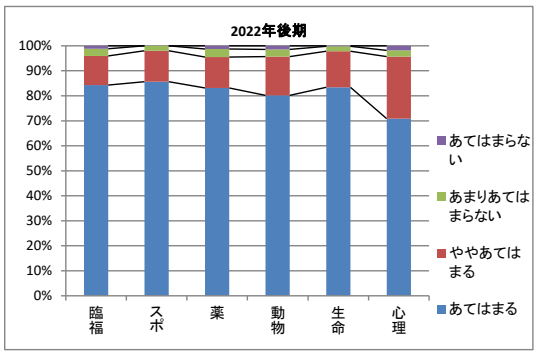


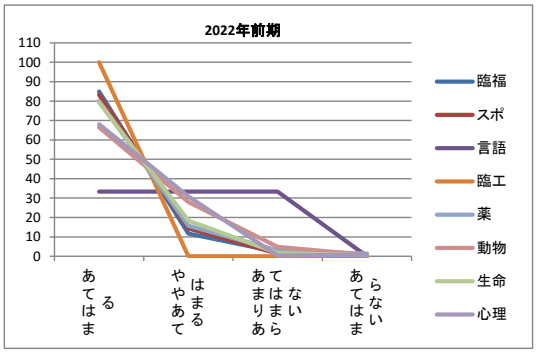


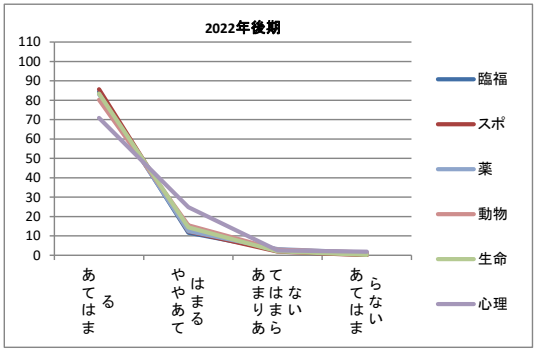


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。





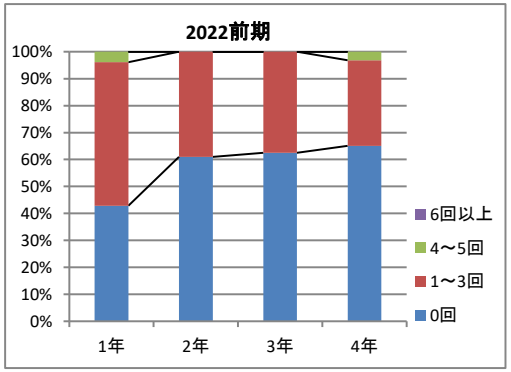


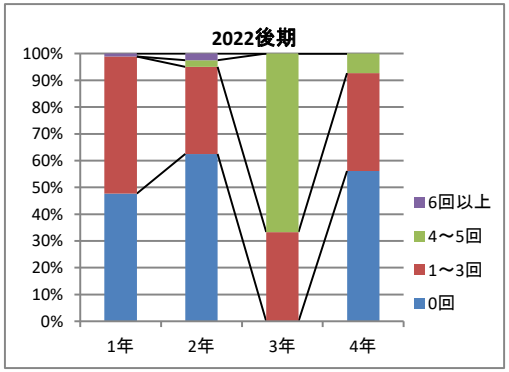


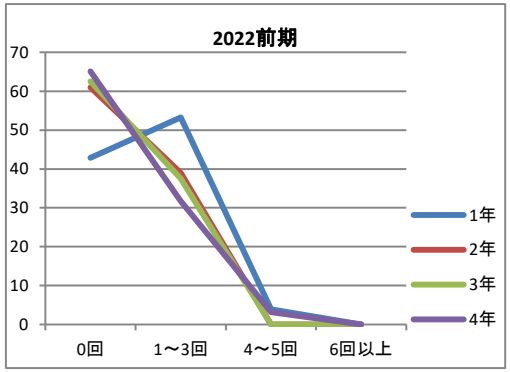
授業アンケート　令和4年度　2022年度

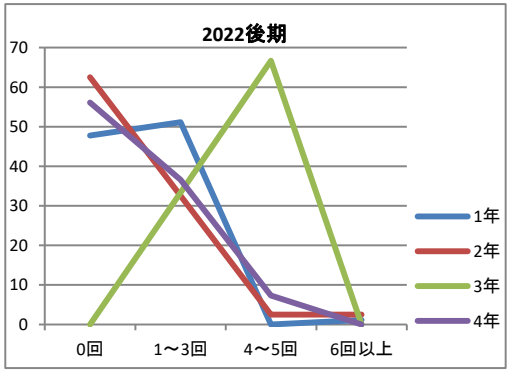
<臨床福祉学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

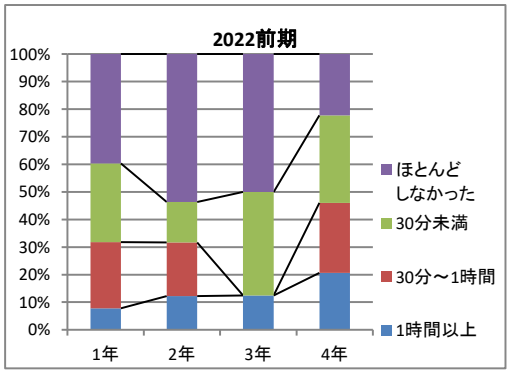


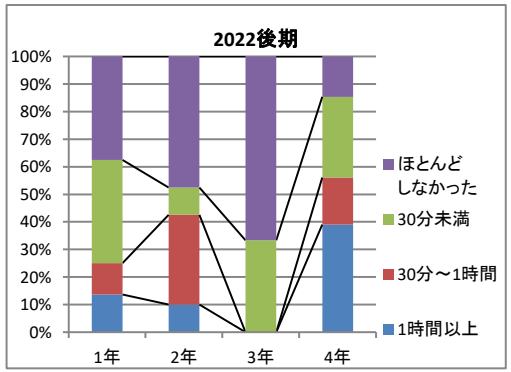


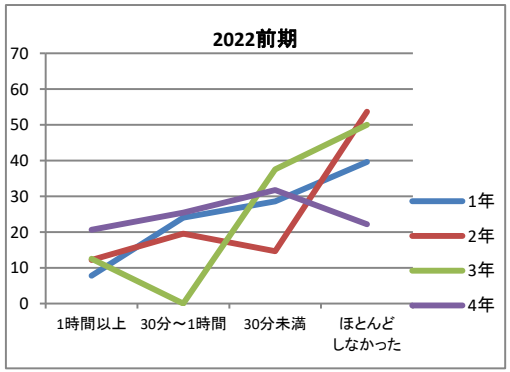


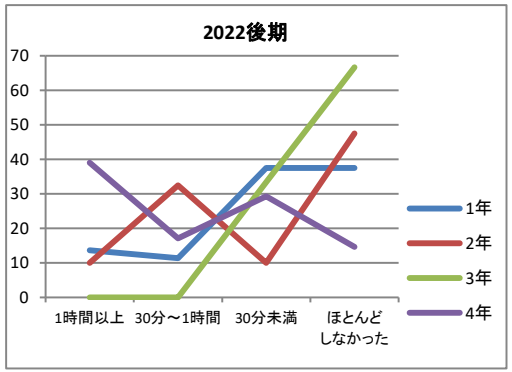


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

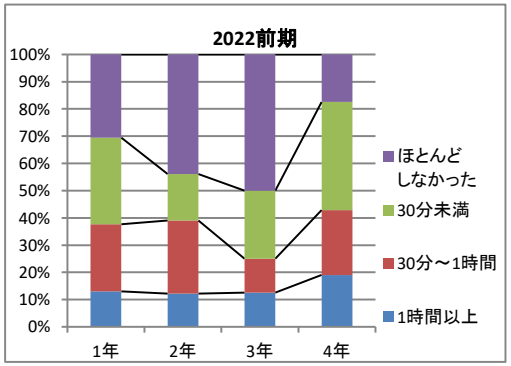


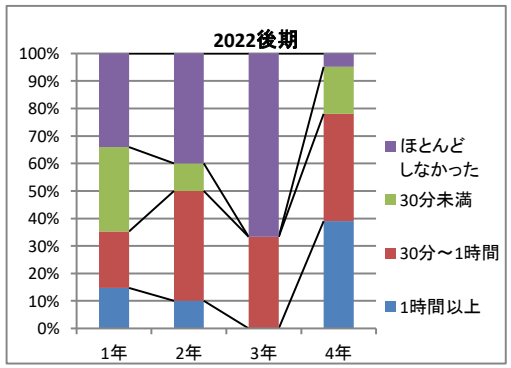


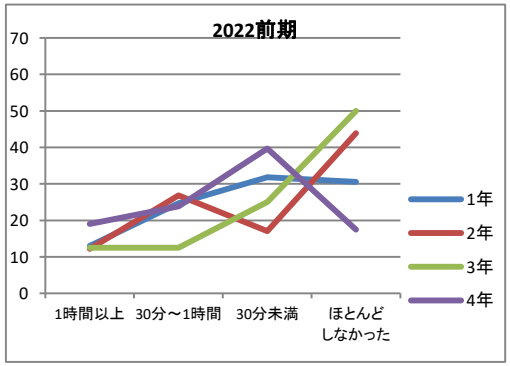


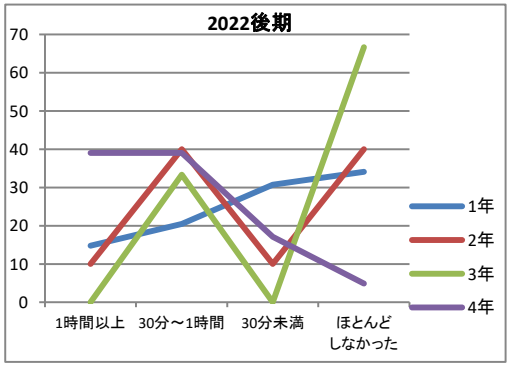


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。

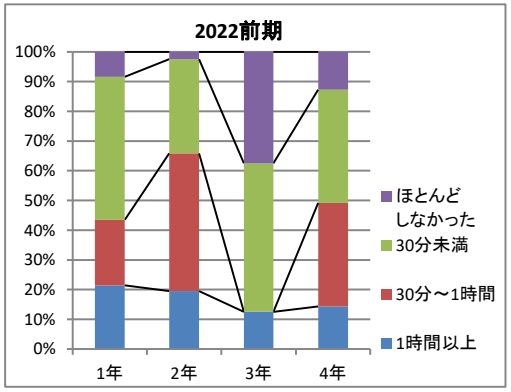


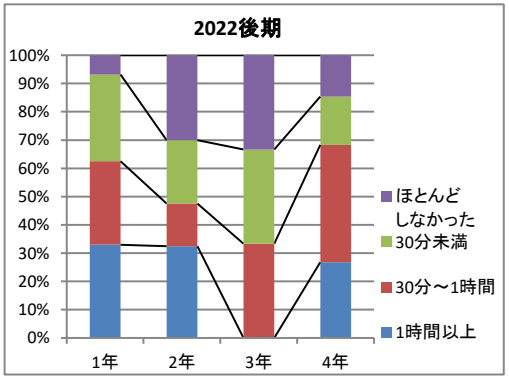


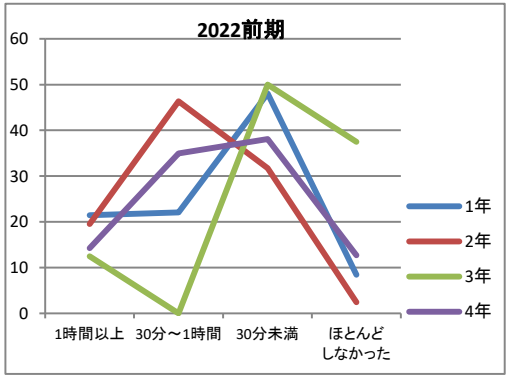


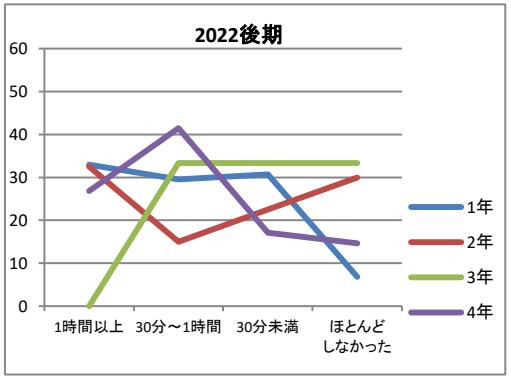


【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

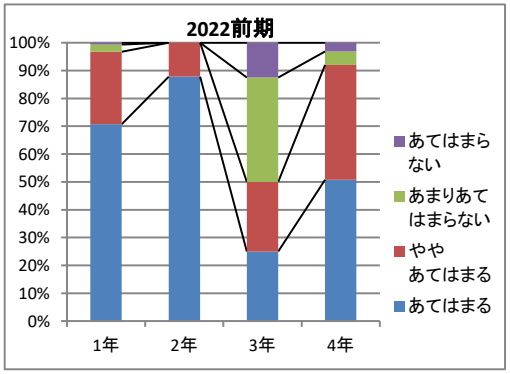


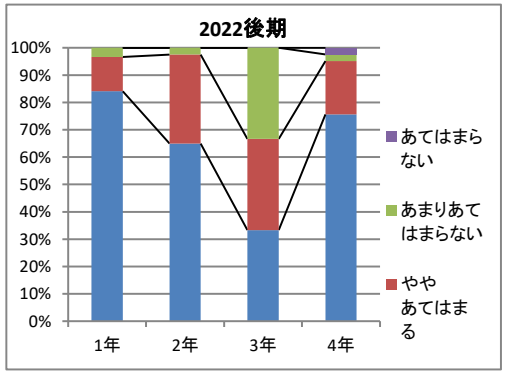


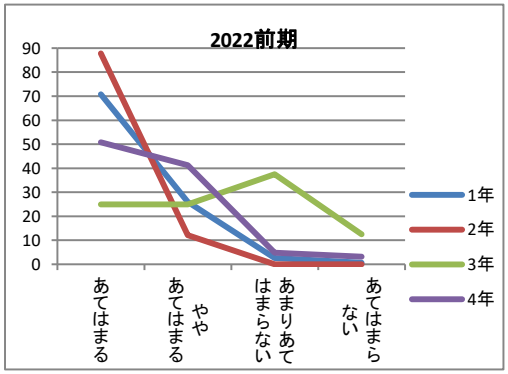


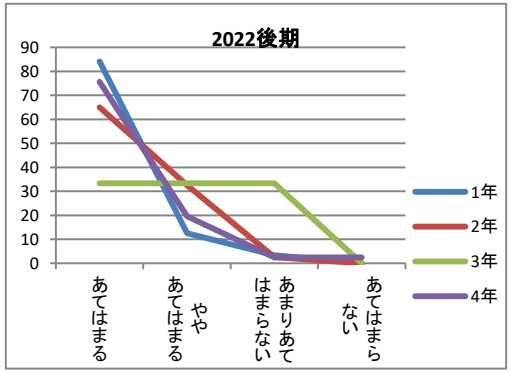


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

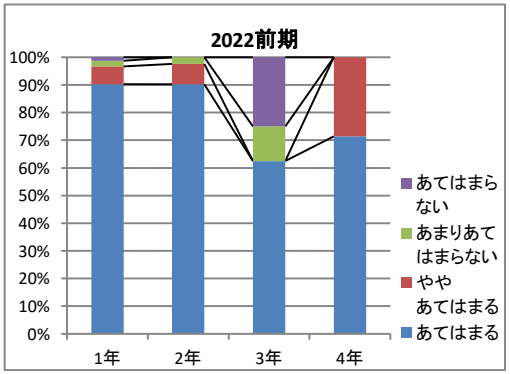


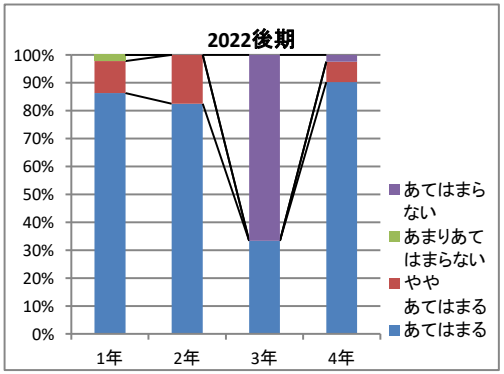


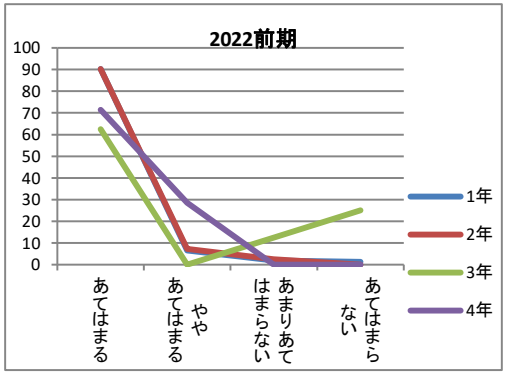


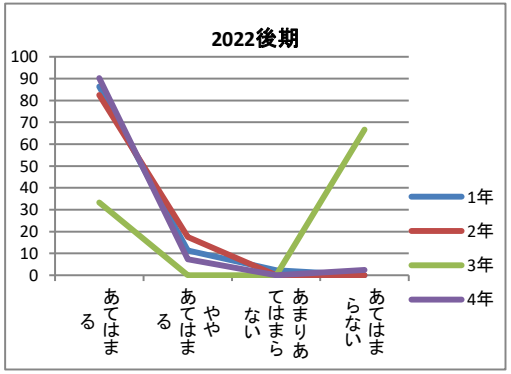


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

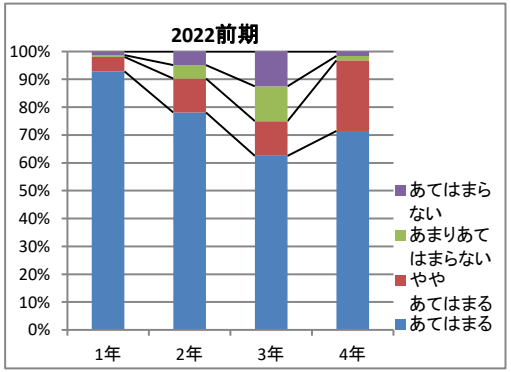


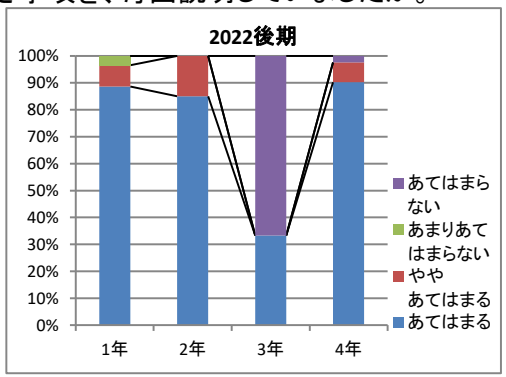


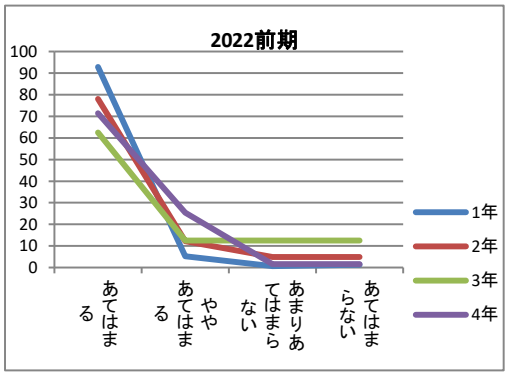


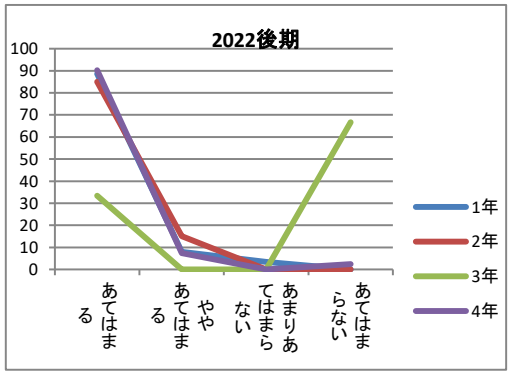


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

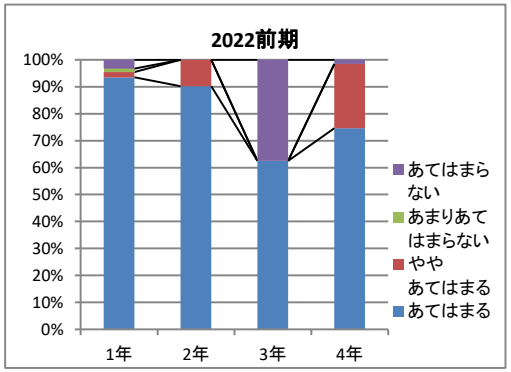


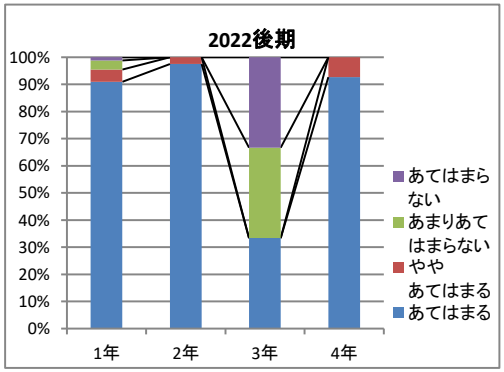


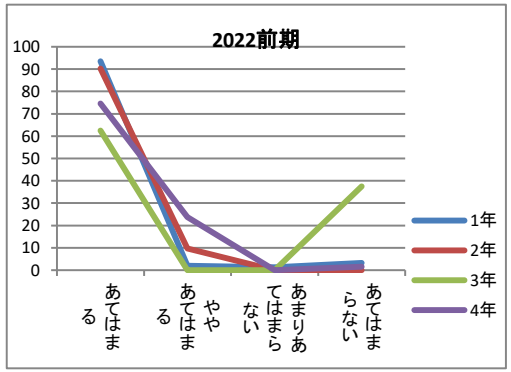


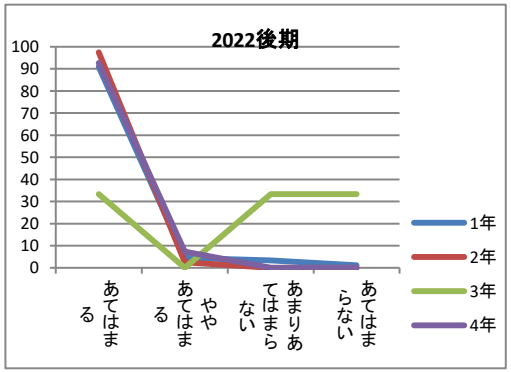


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

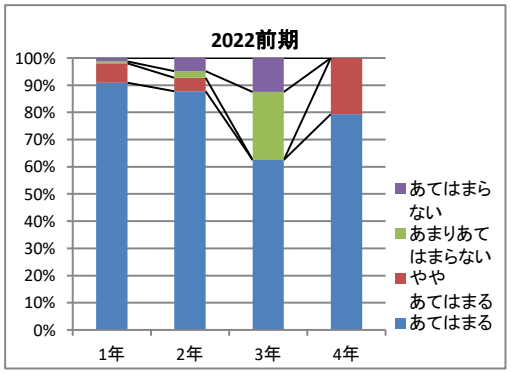


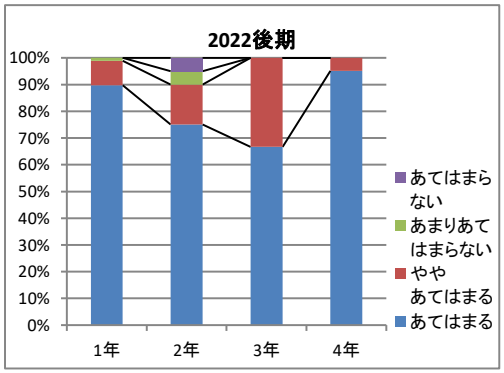


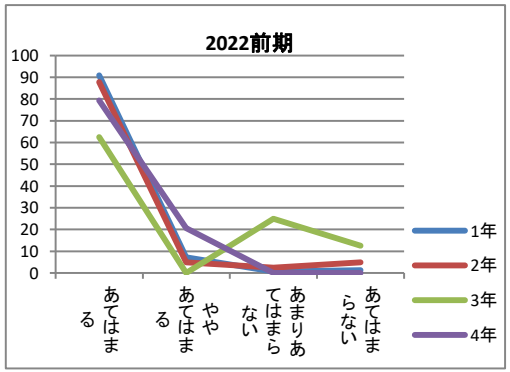


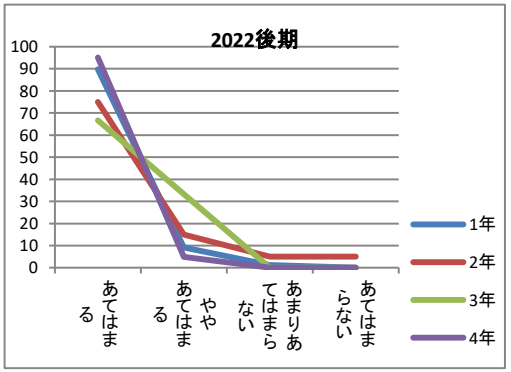


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

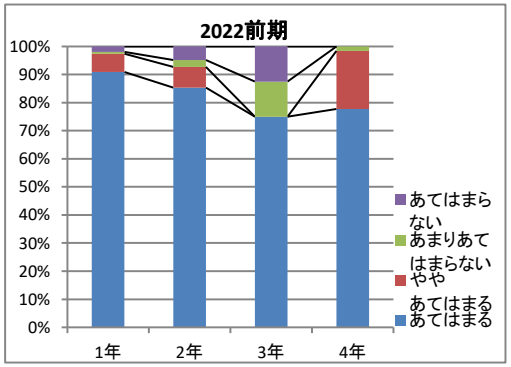


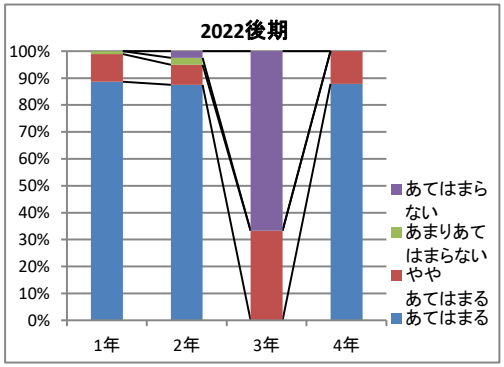


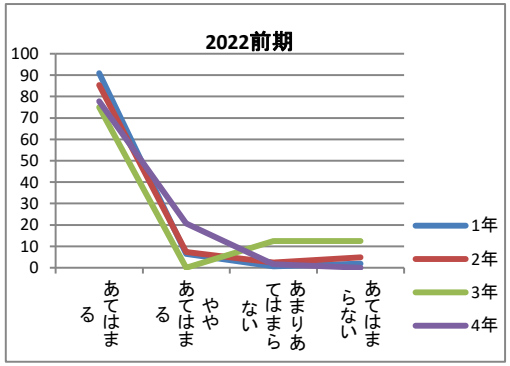


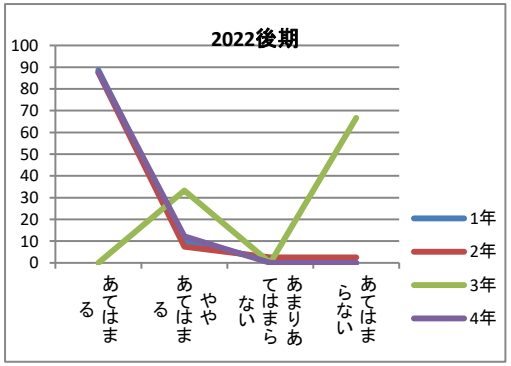


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

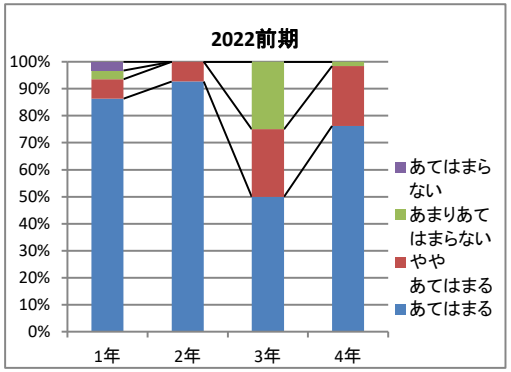


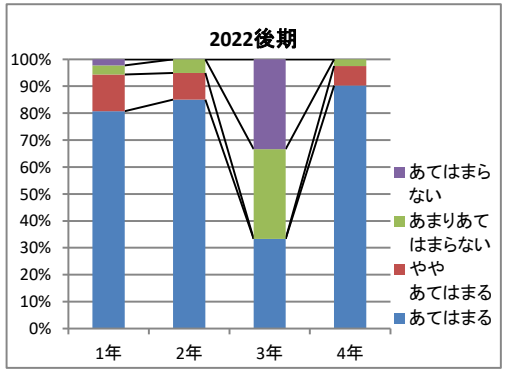


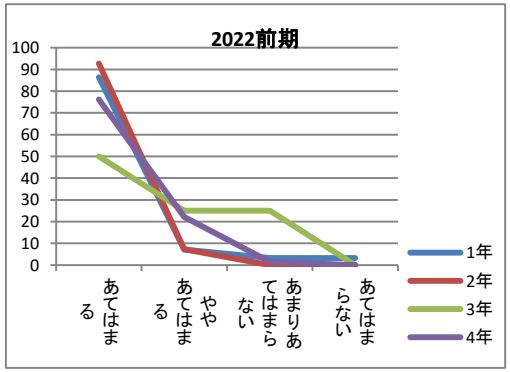


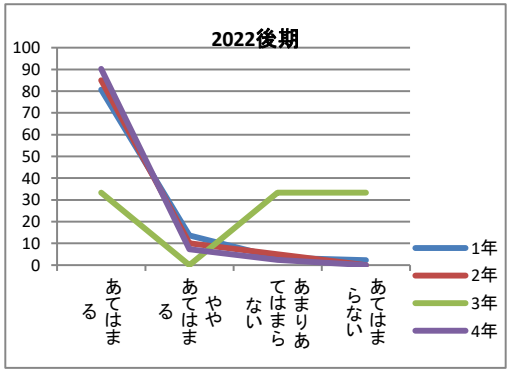


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

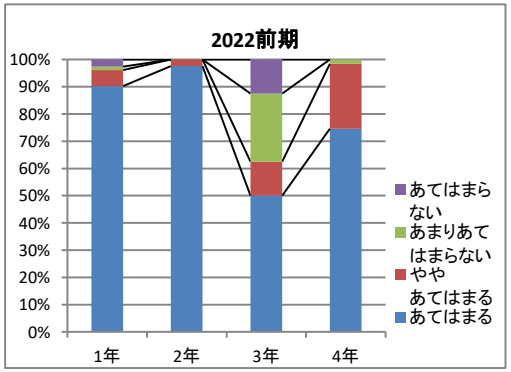


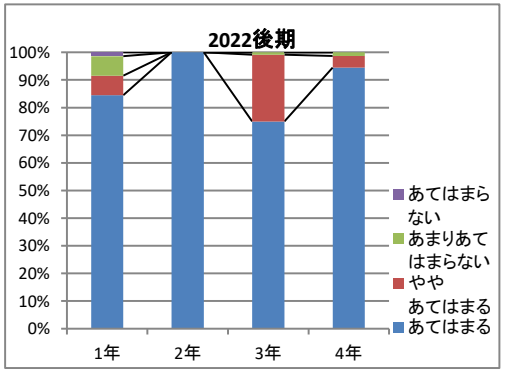


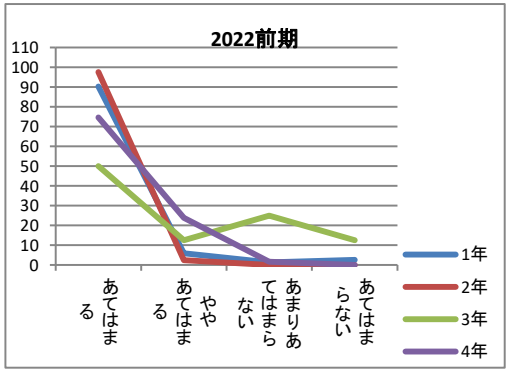


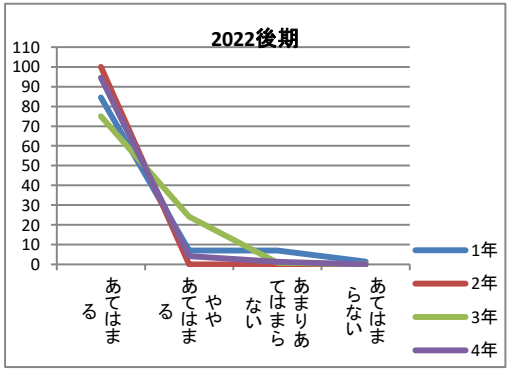


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。

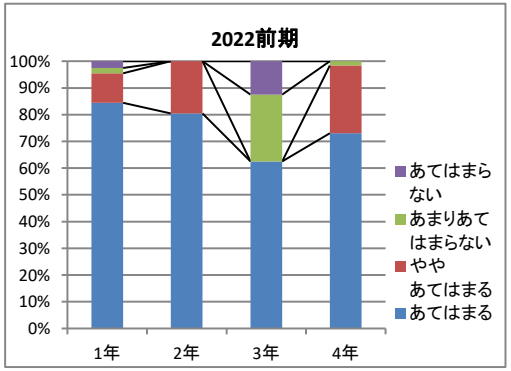


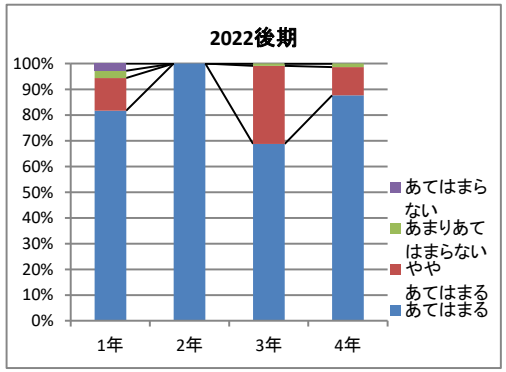


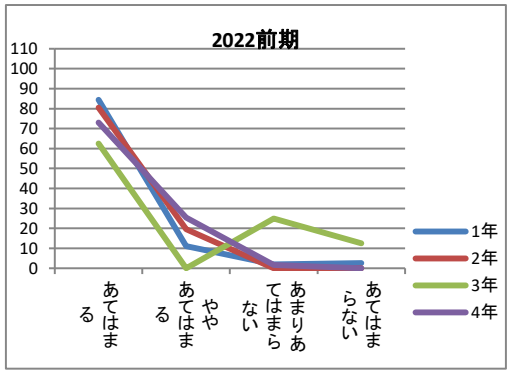


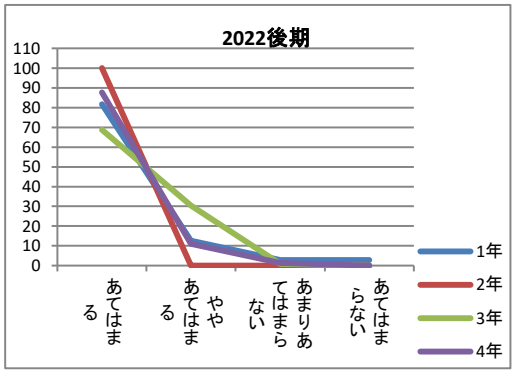


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

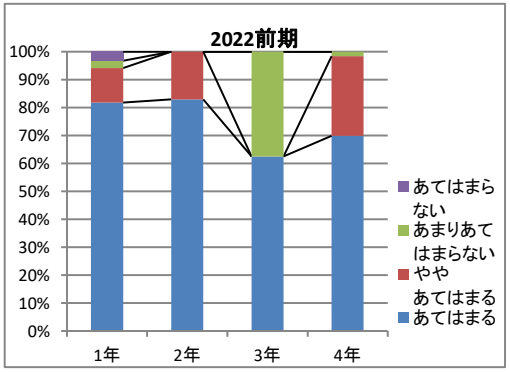


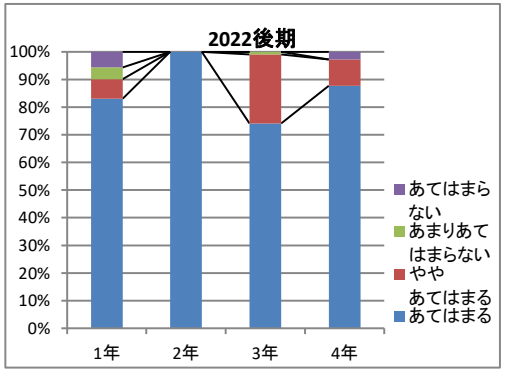


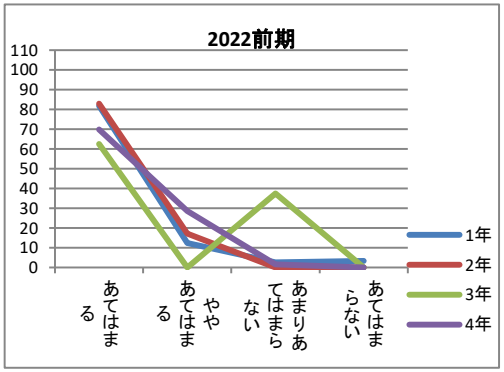


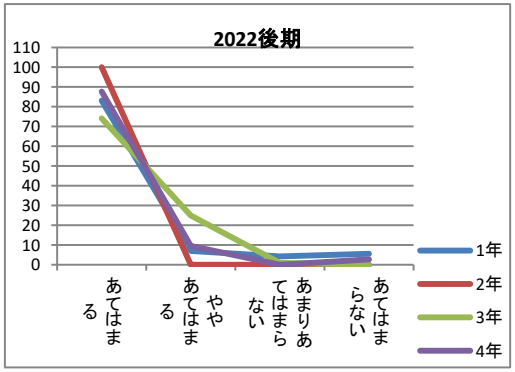


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

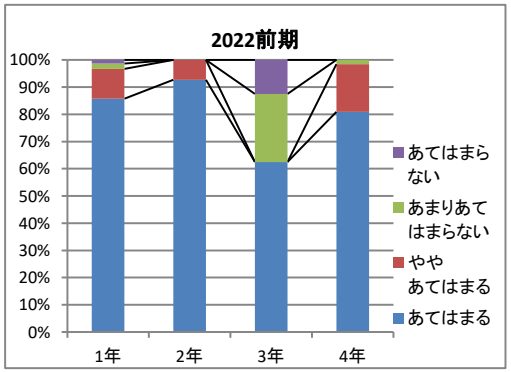


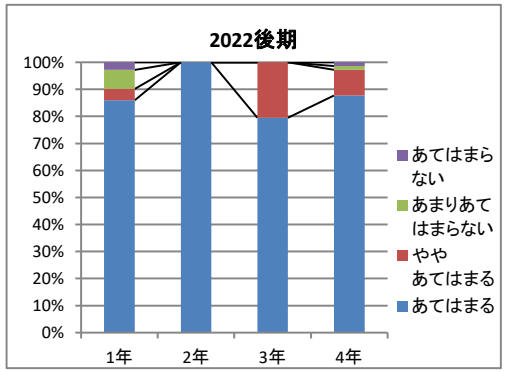


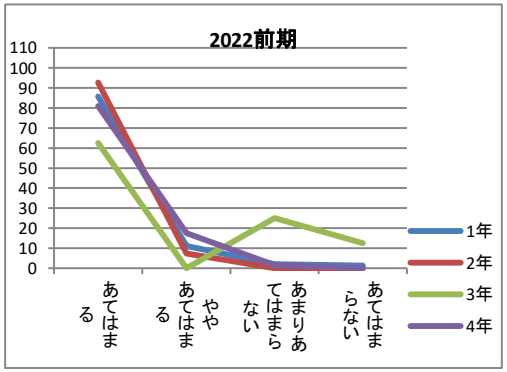


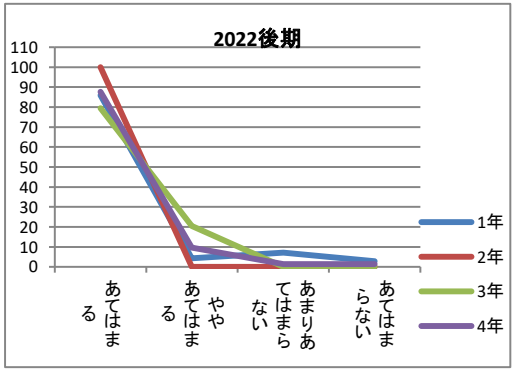


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。





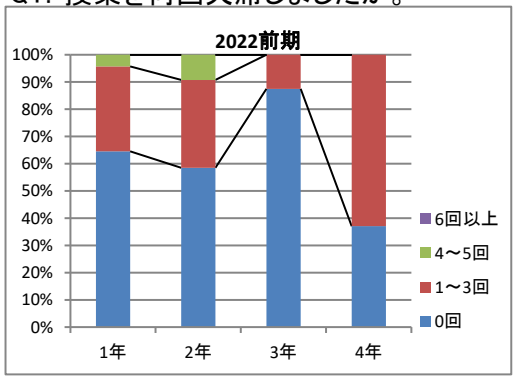


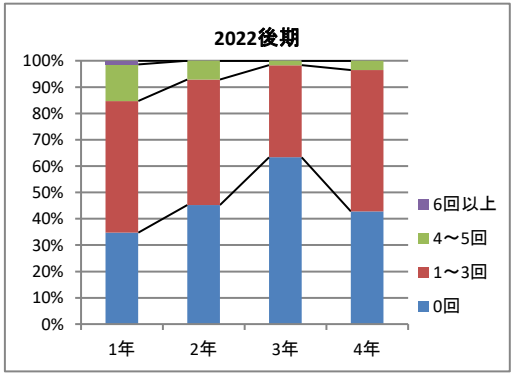


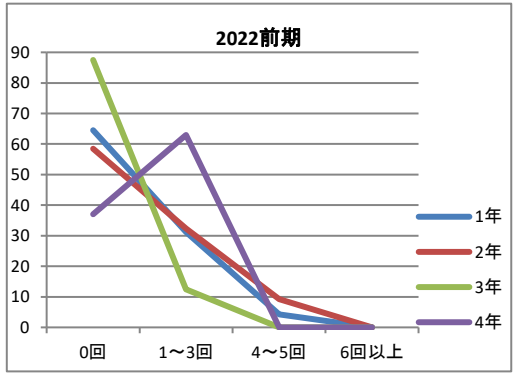
授業アンケート　令和4年度　2022年度

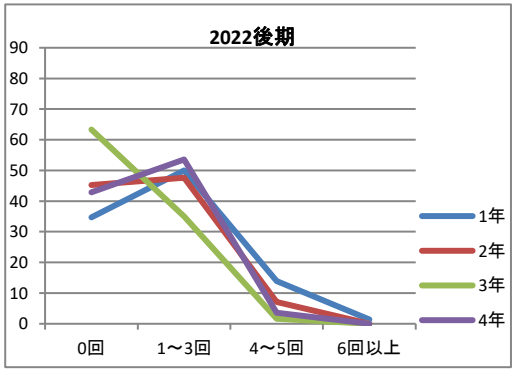
<スポーツ健康福祉学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

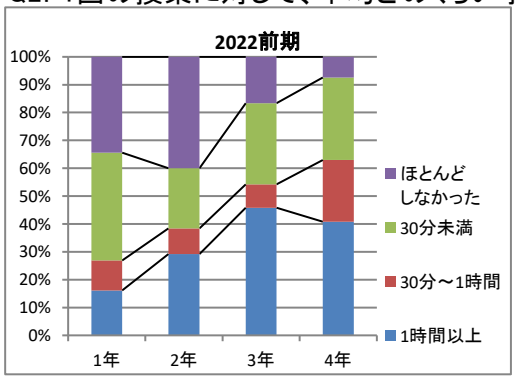


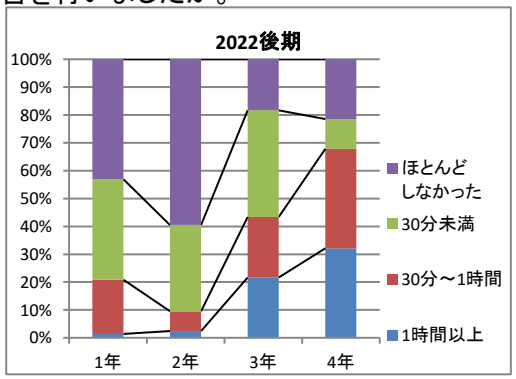


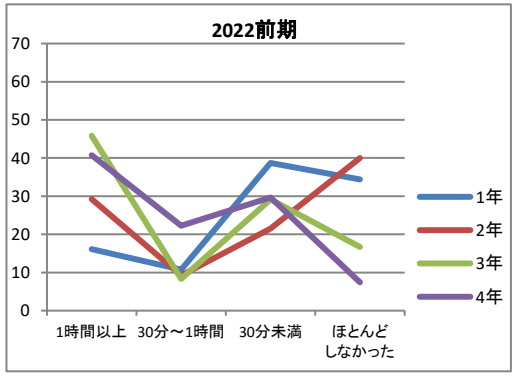


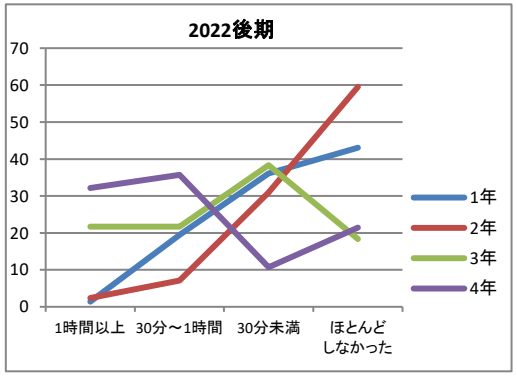


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

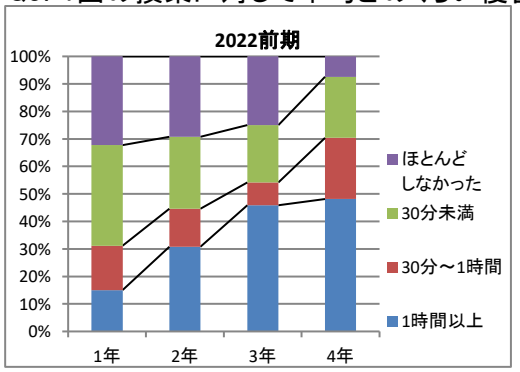


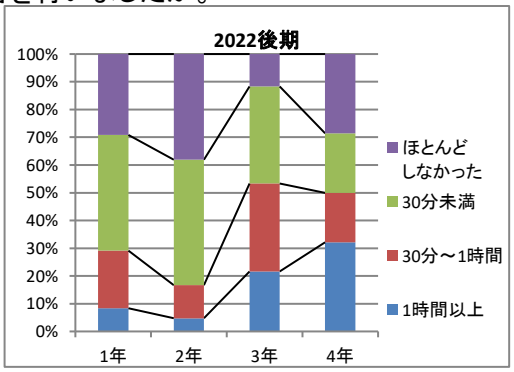


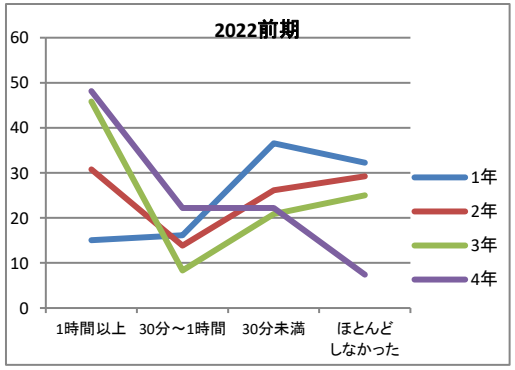


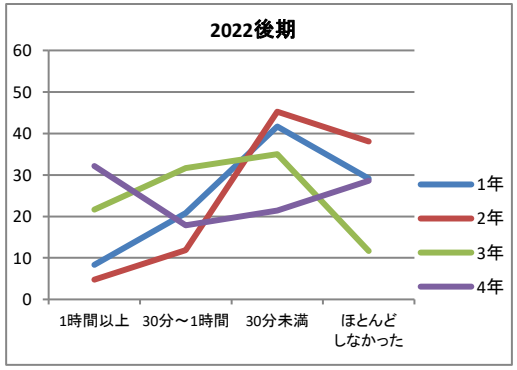


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。

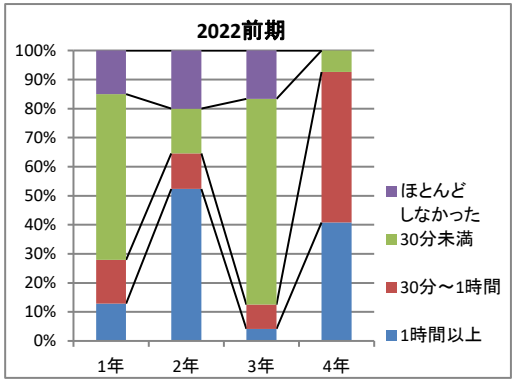


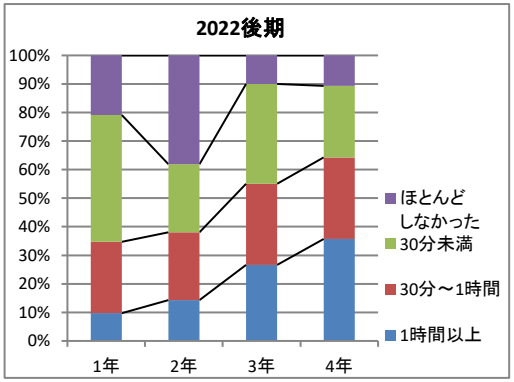


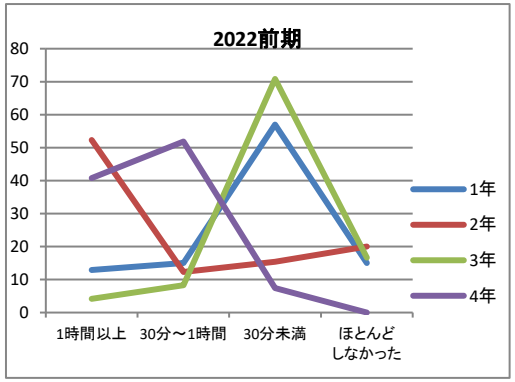


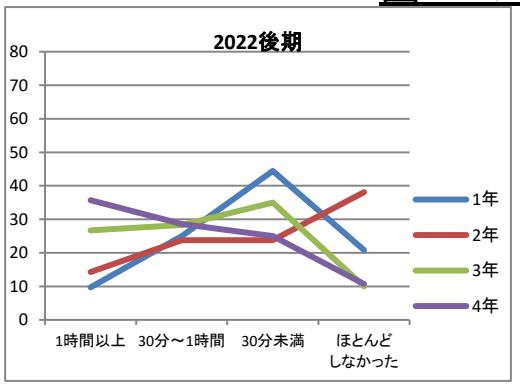


【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

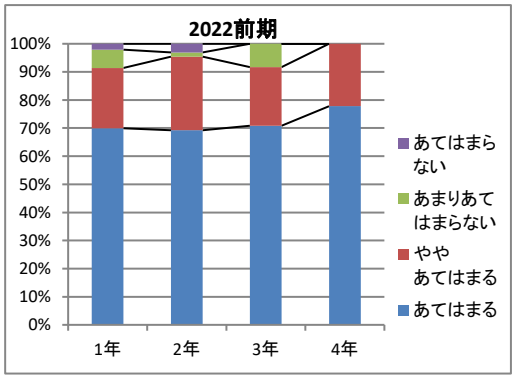


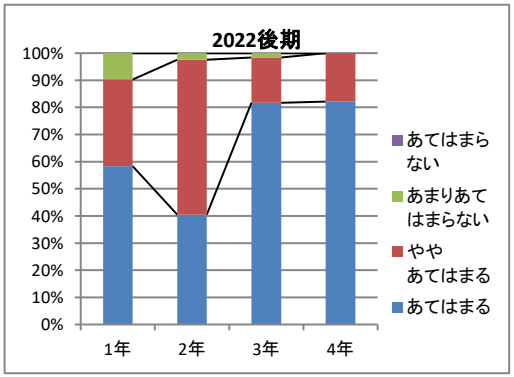


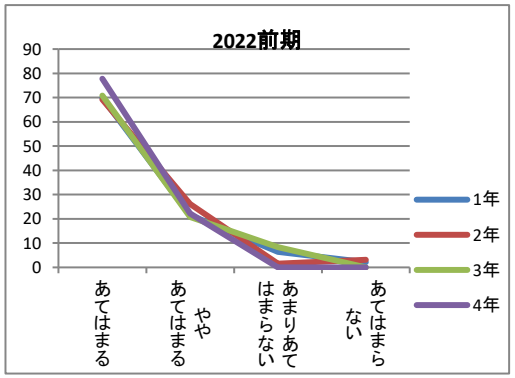


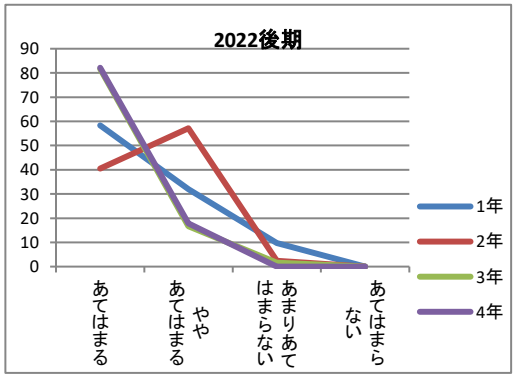


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

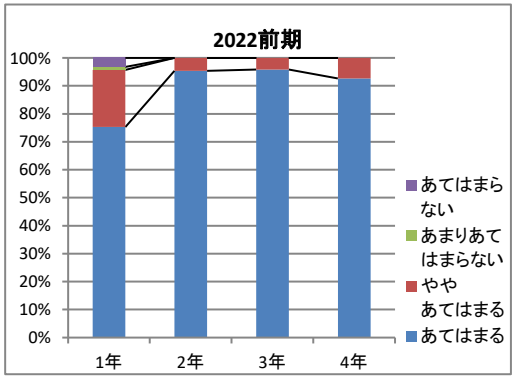


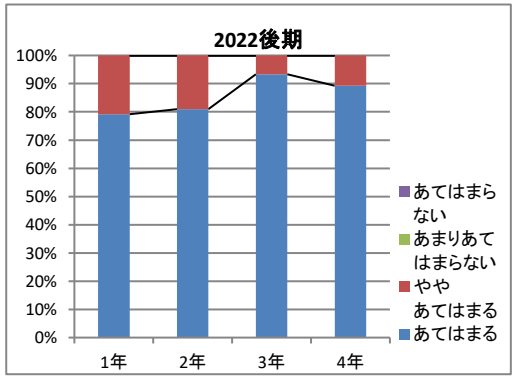


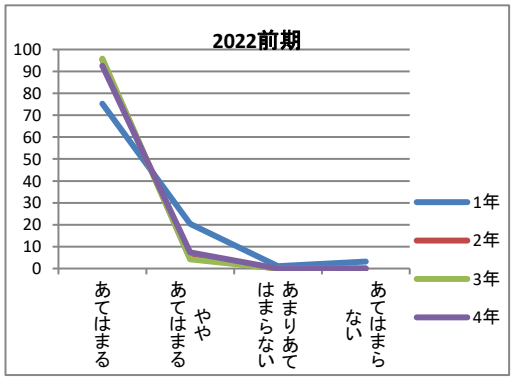


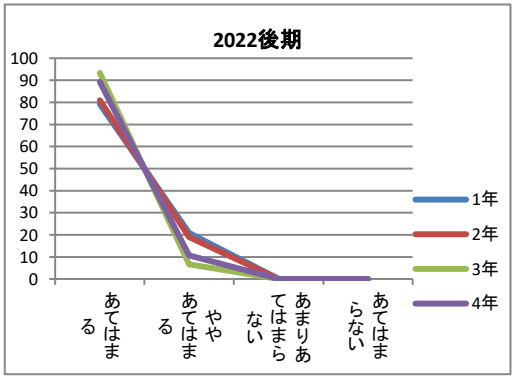


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

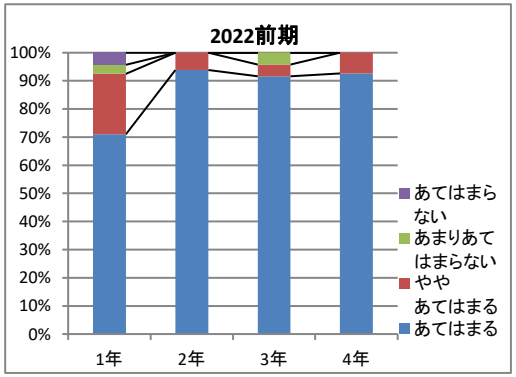


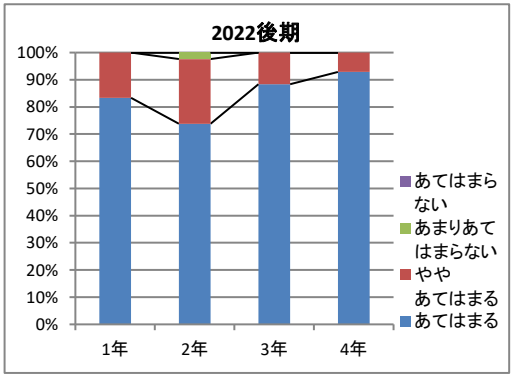


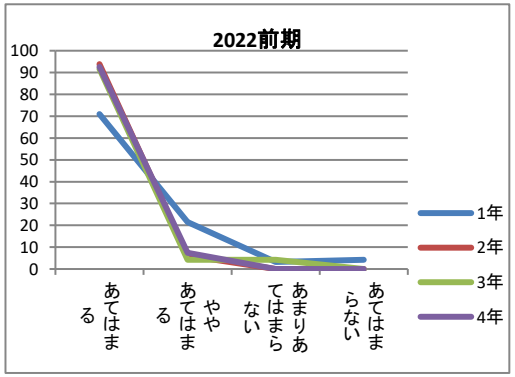


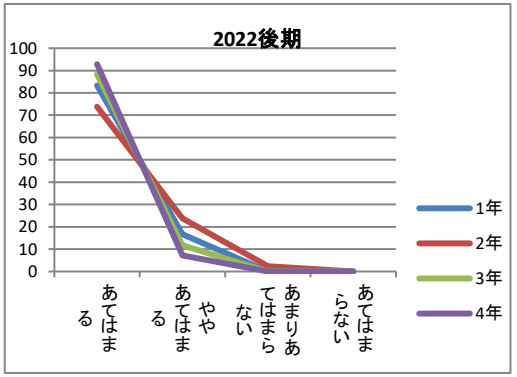


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

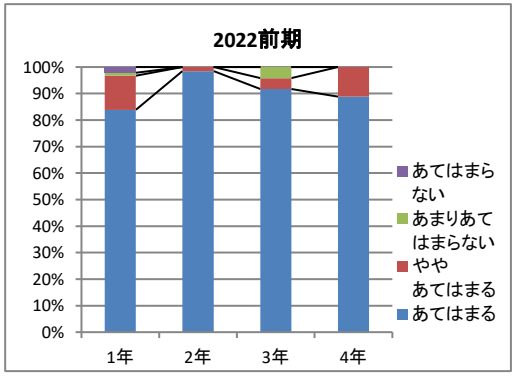


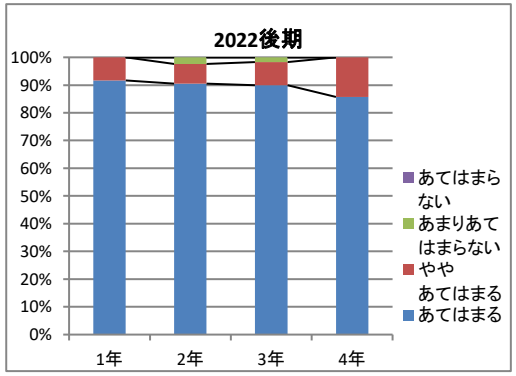


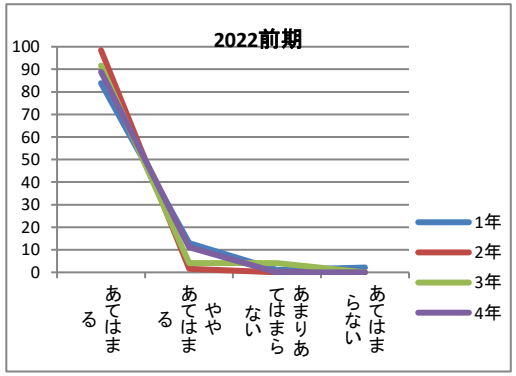


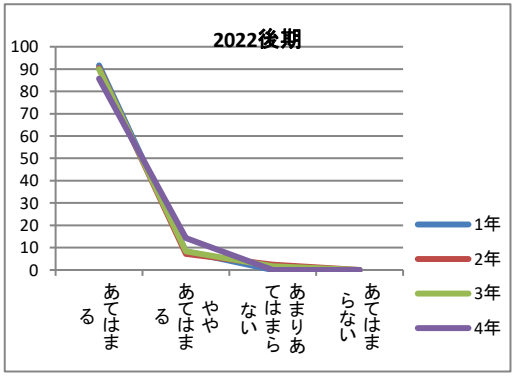


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

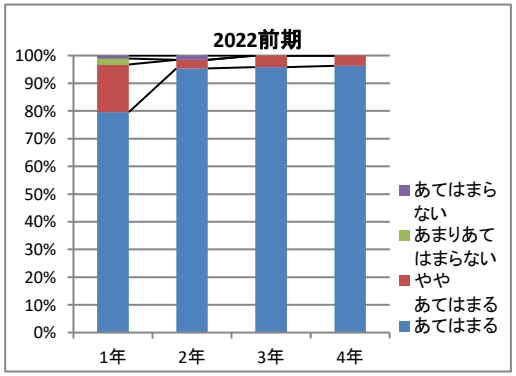


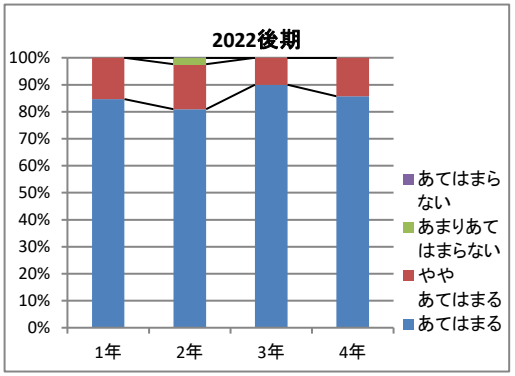


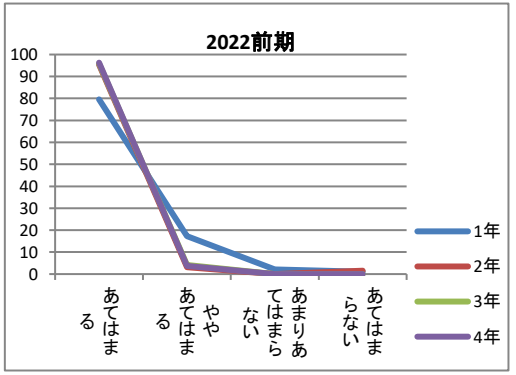


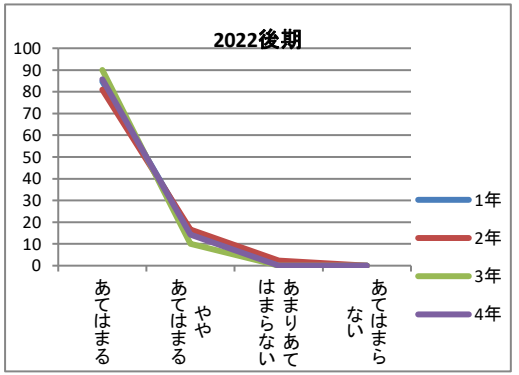


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

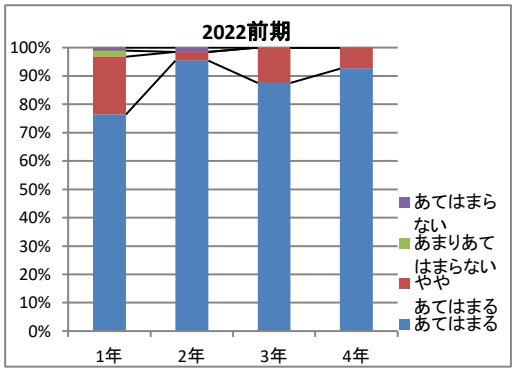


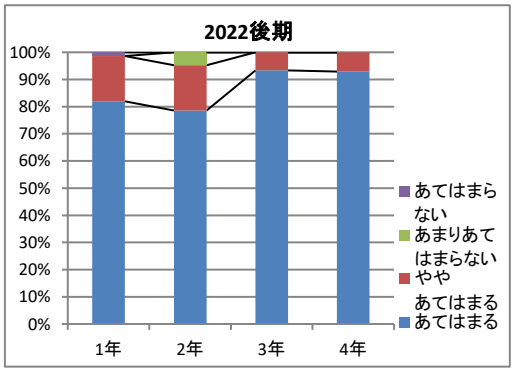


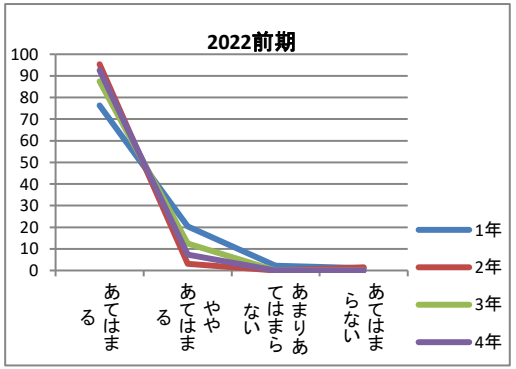


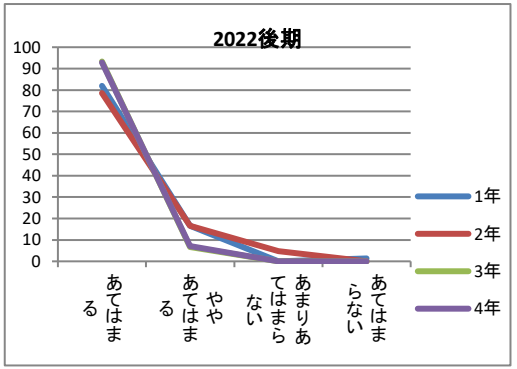


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

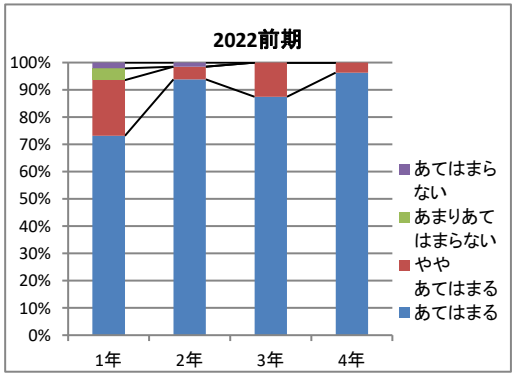


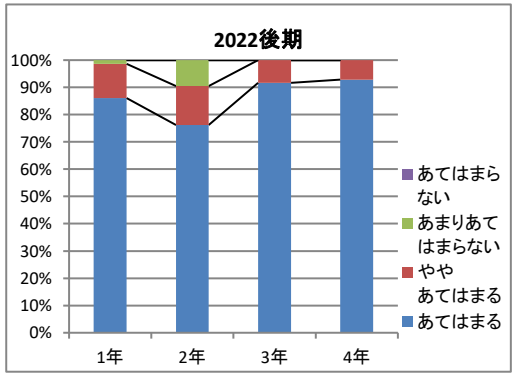


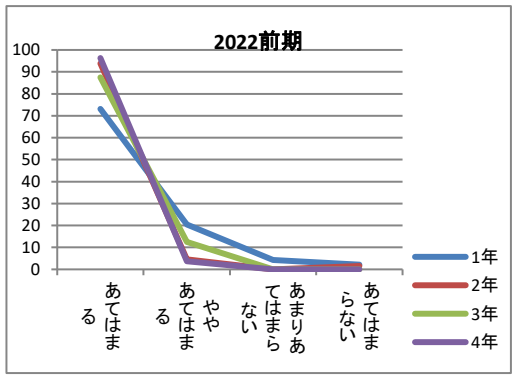


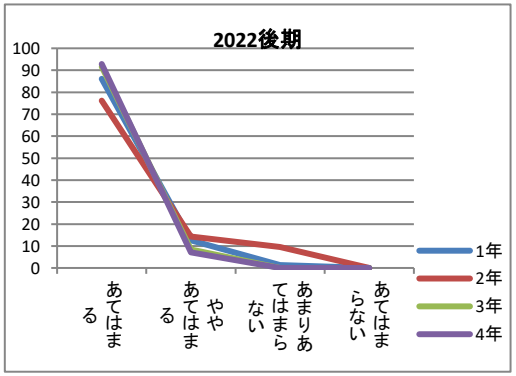


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

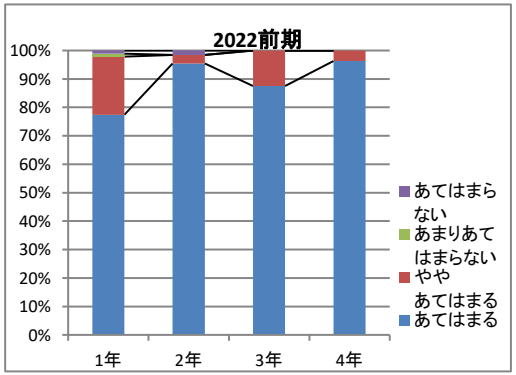


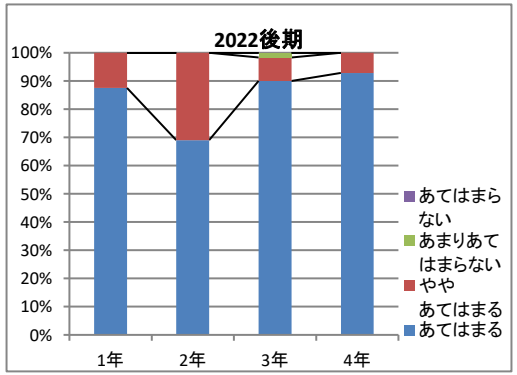


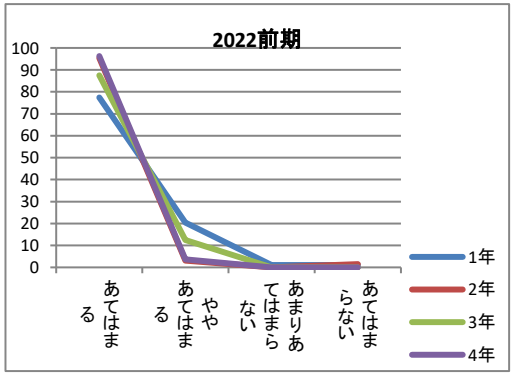


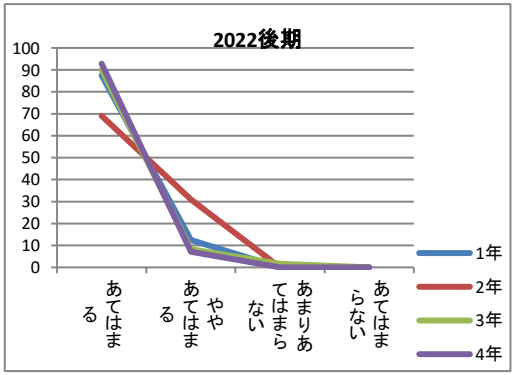


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



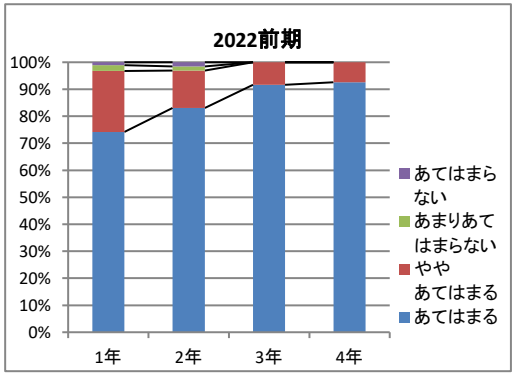


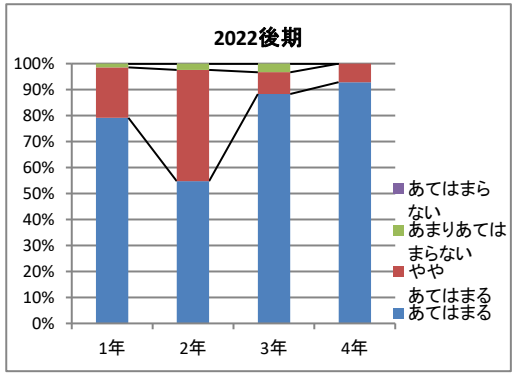


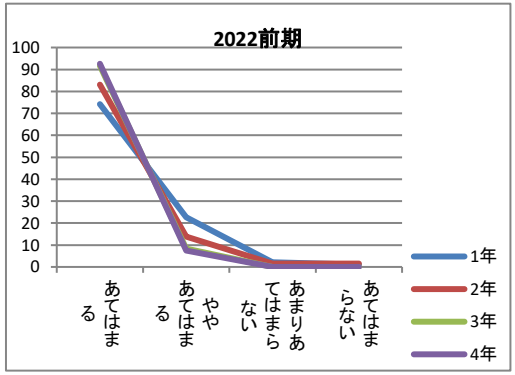


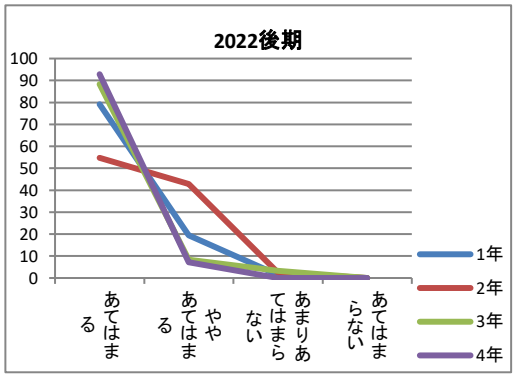
【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

図Ⅳ　スポ

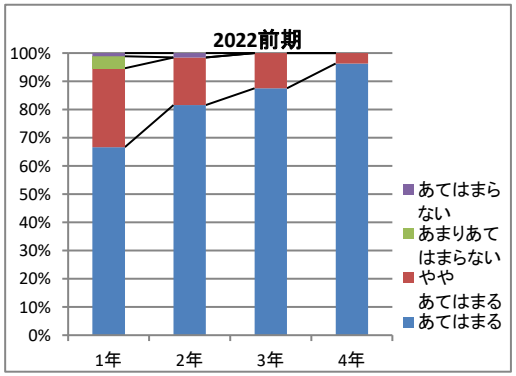


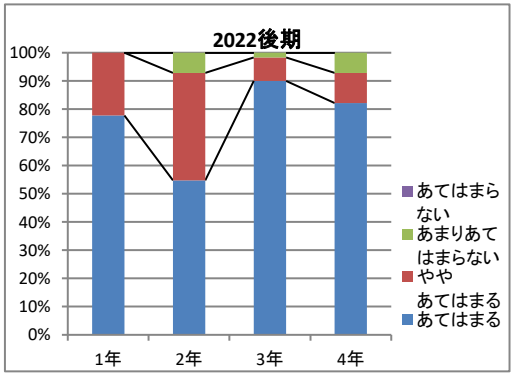


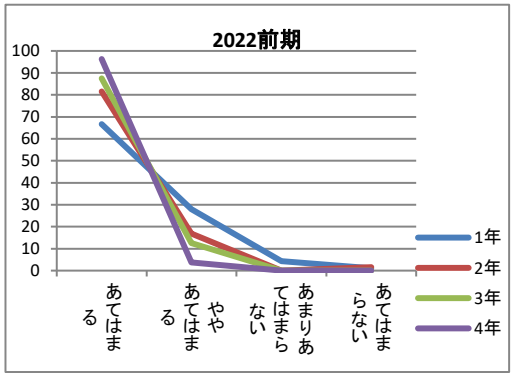


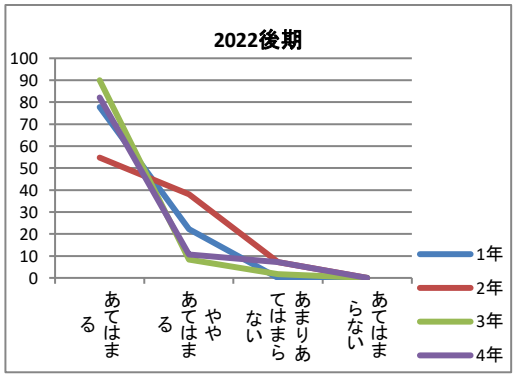


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

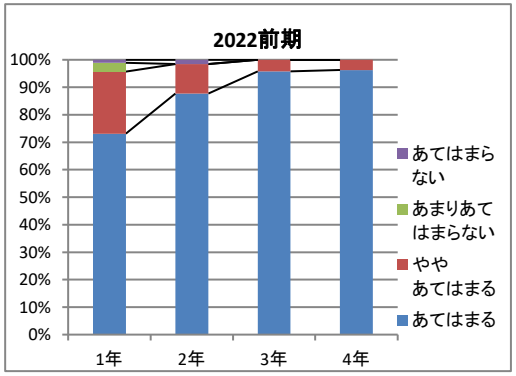


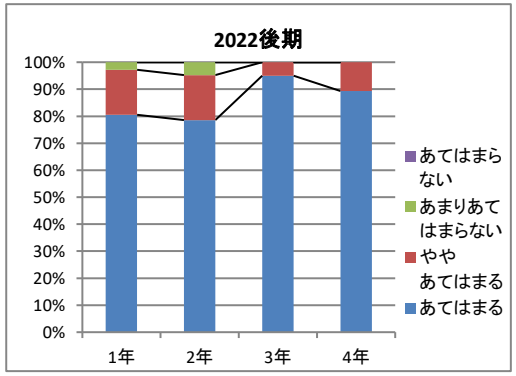


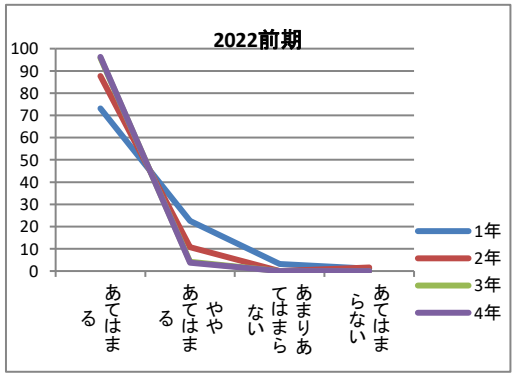


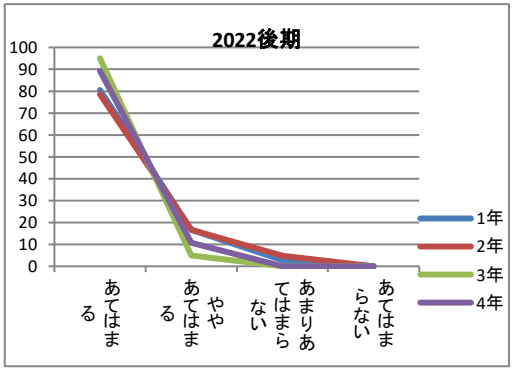


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。



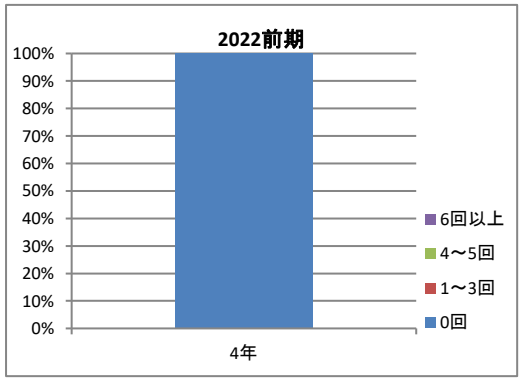


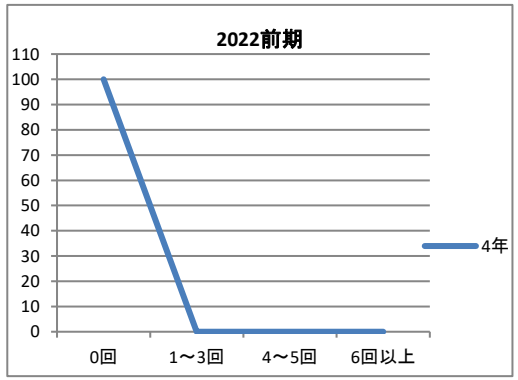




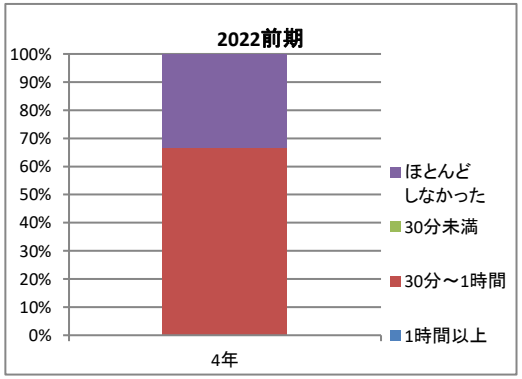
授業アンケート　令和4年度　2022年度
<言語聴覚療法学科>

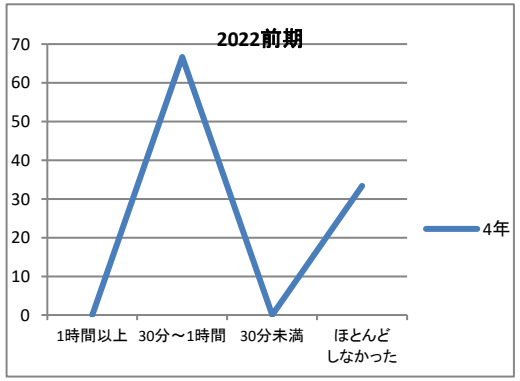
【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。



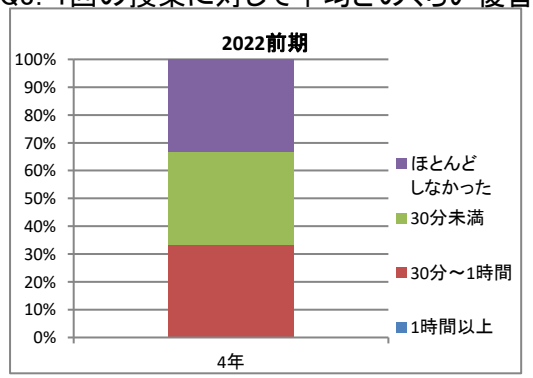


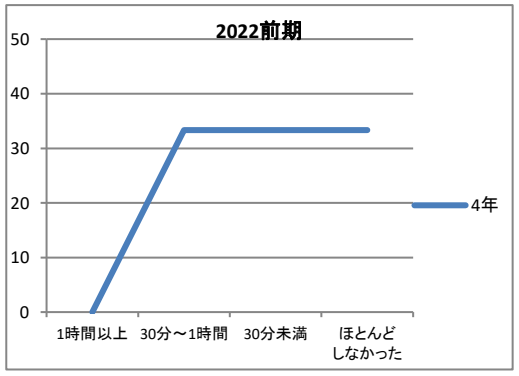
【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。



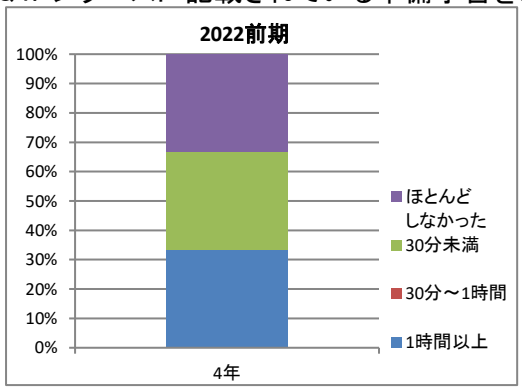


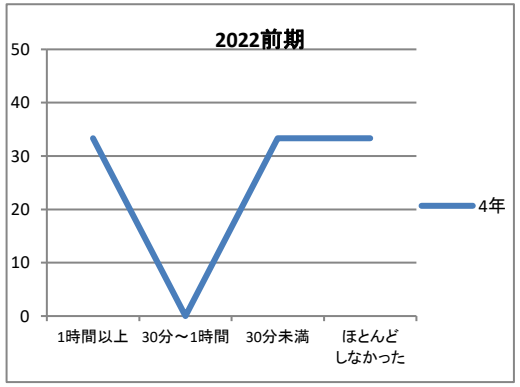
【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



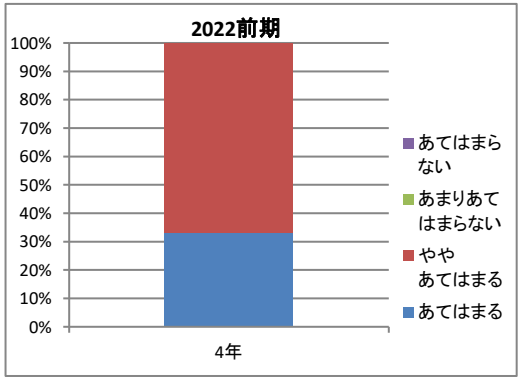


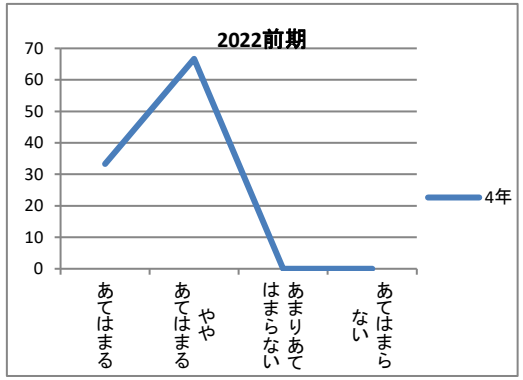
【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。



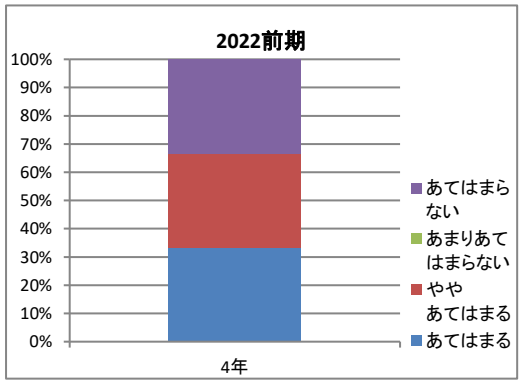


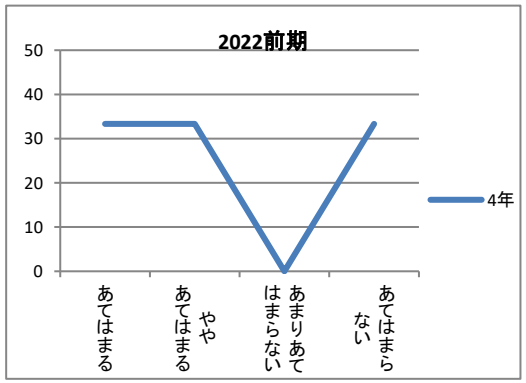
【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。



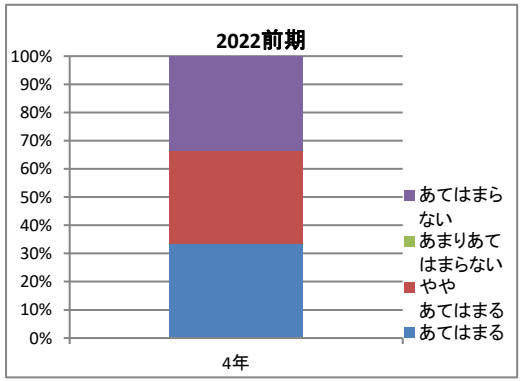


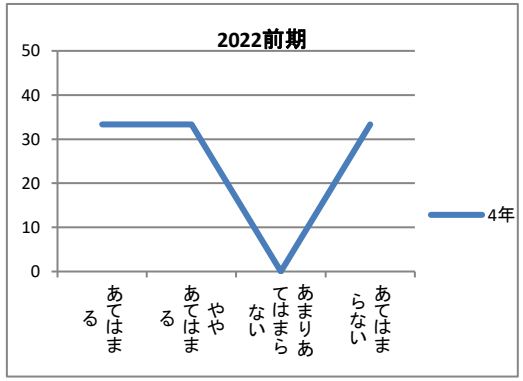
【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。



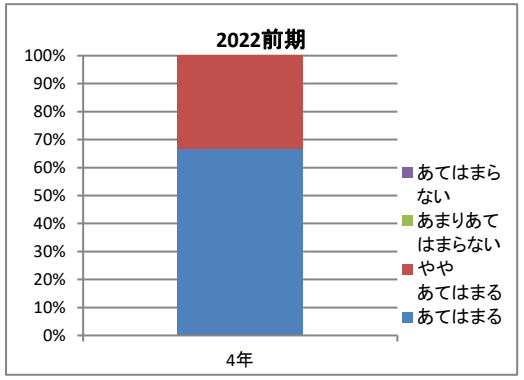


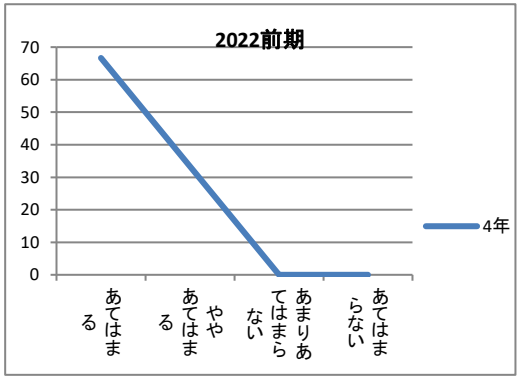
【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。



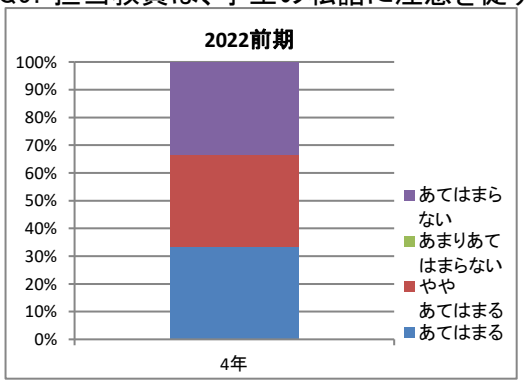


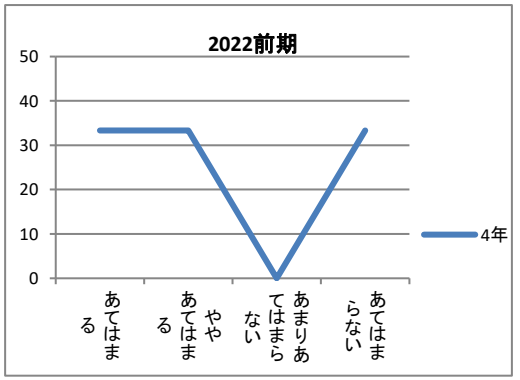
【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。



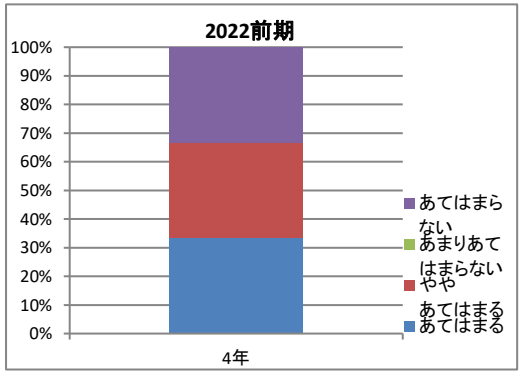


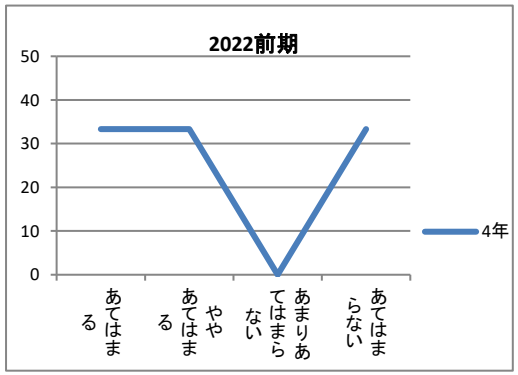
【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。



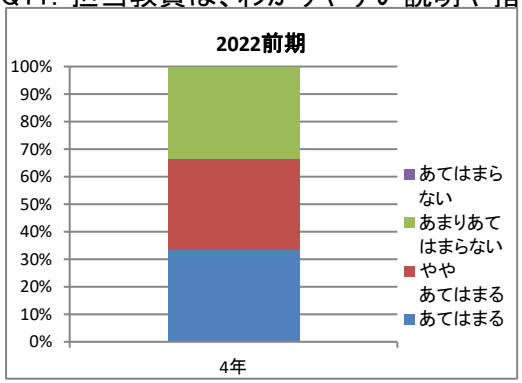


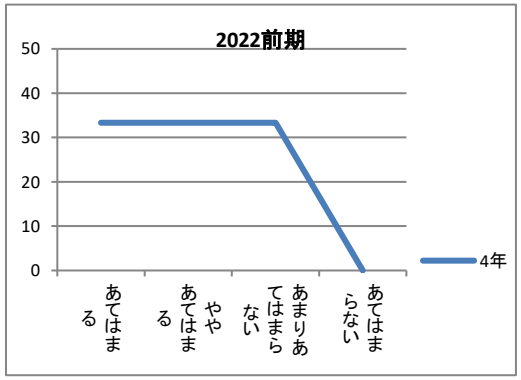
【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。



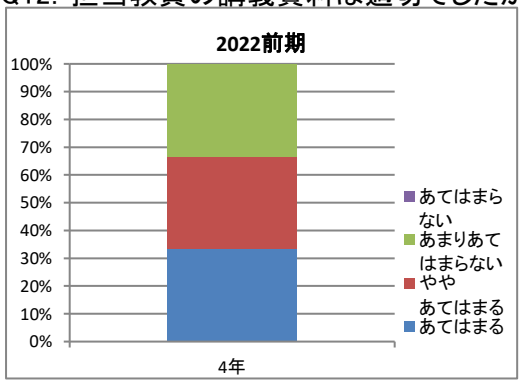


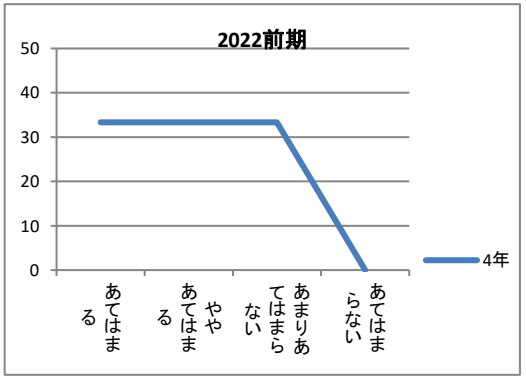
【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。



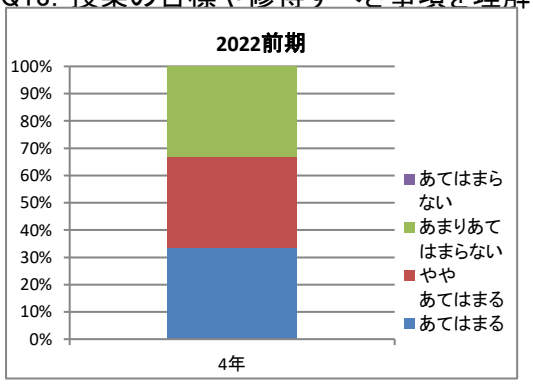


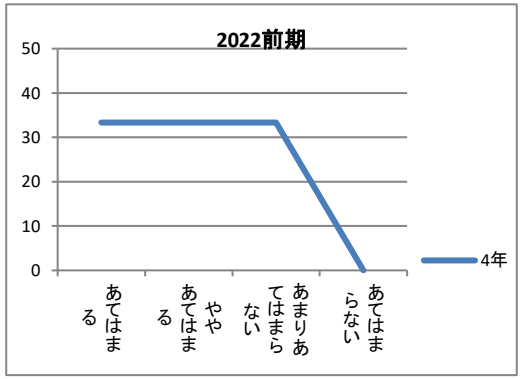
【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



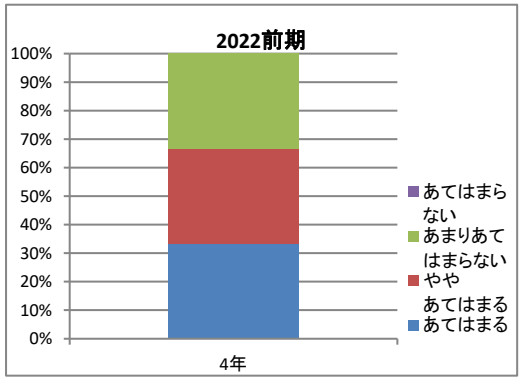


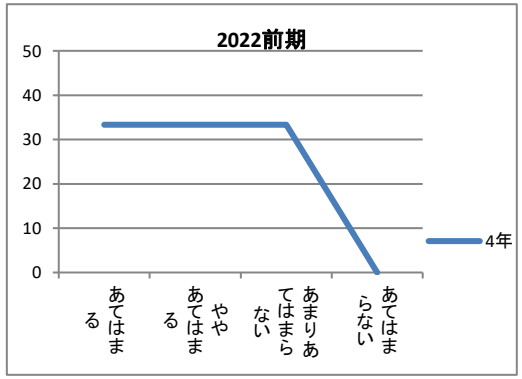
【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。



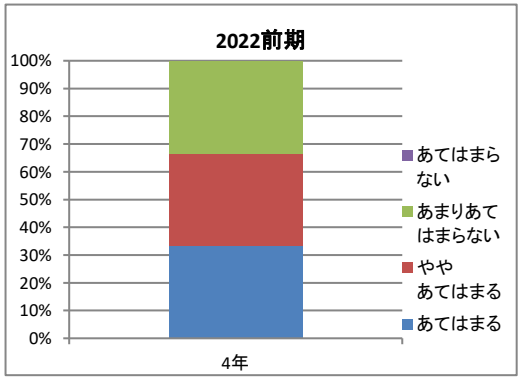


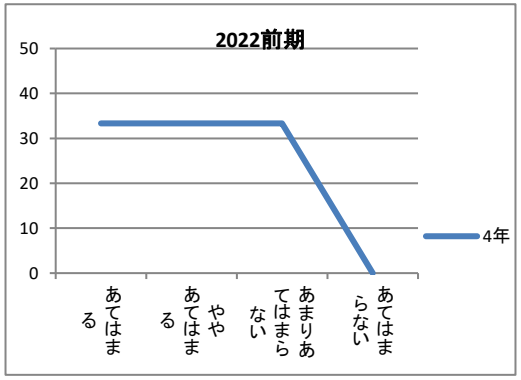
【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。





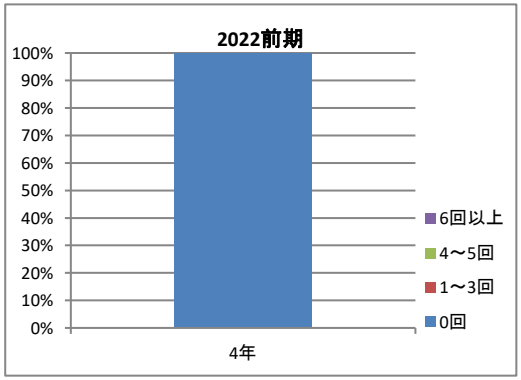
【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。

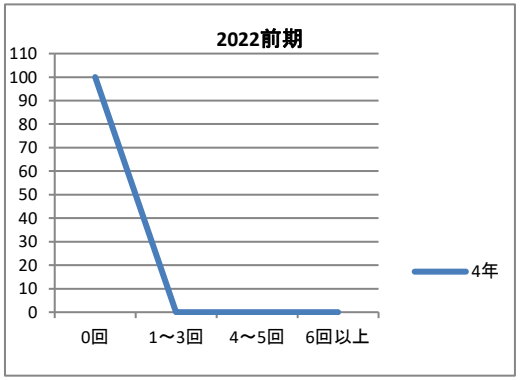




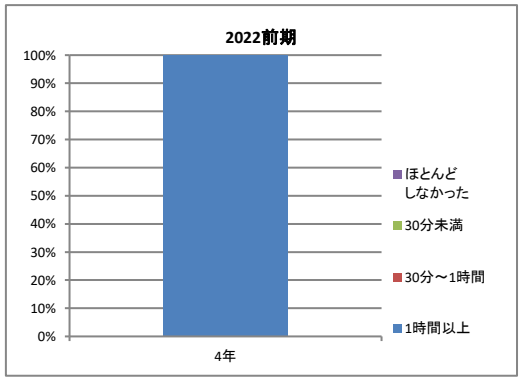
授業アンケート　令和4年度　2022年度
<臨床工学科>

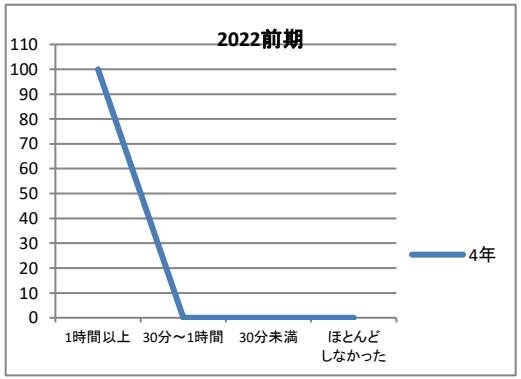
【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。



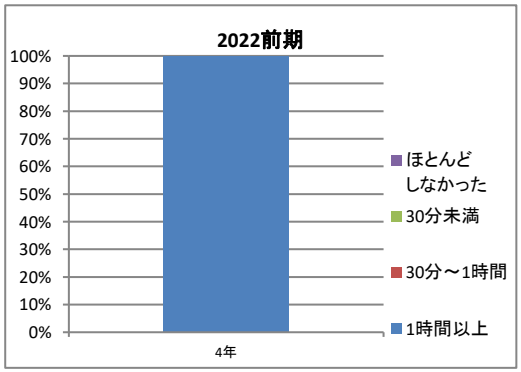


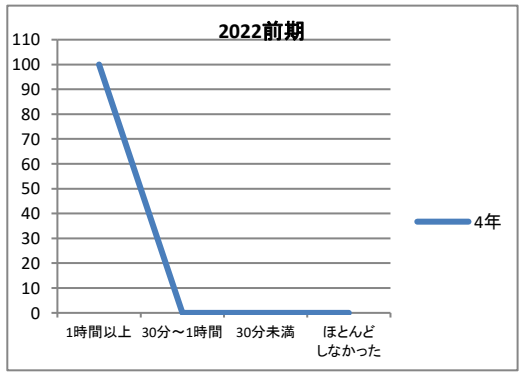
【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。



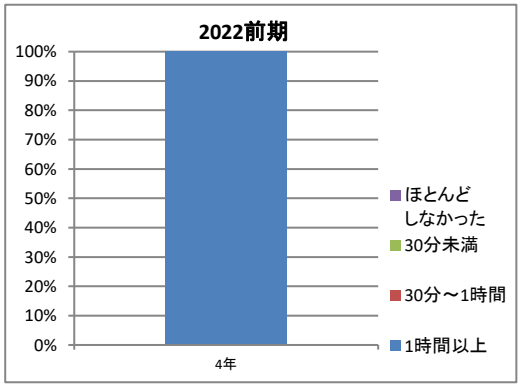


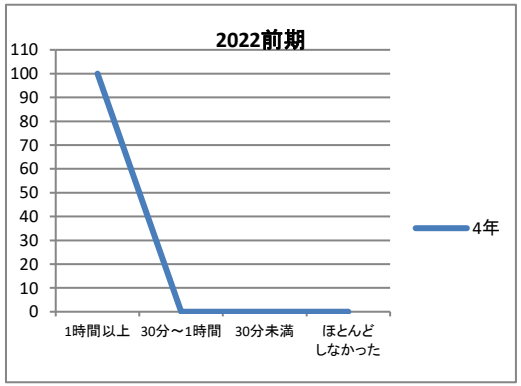
【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



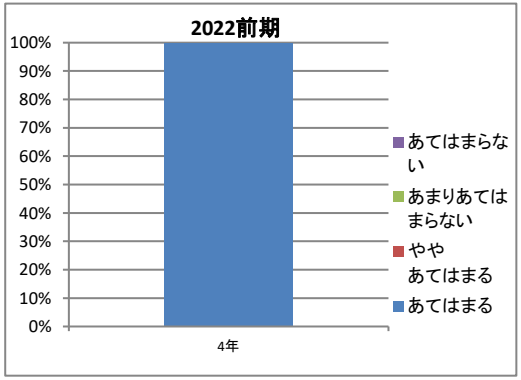


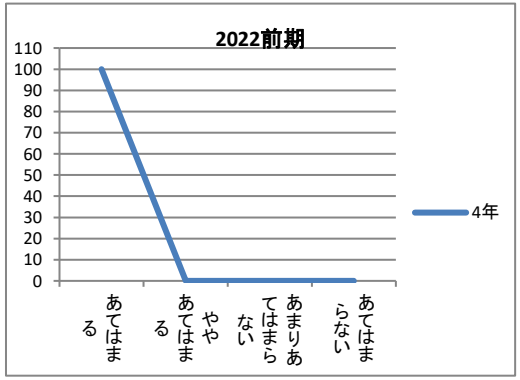
【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。



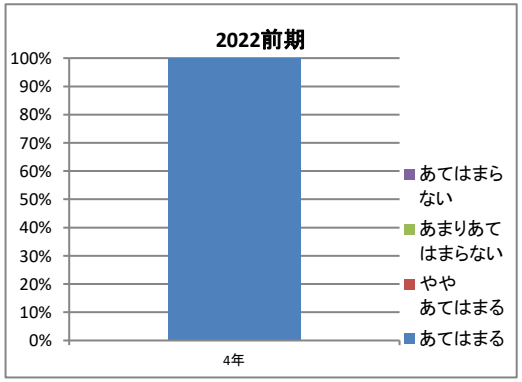


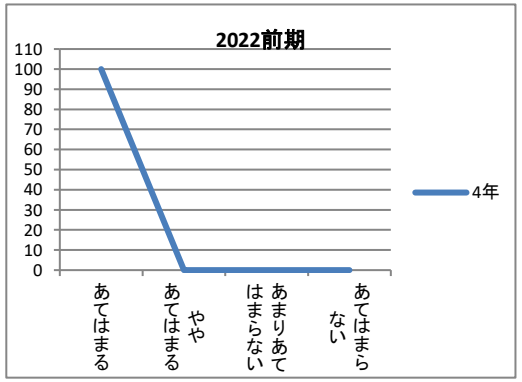
【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。



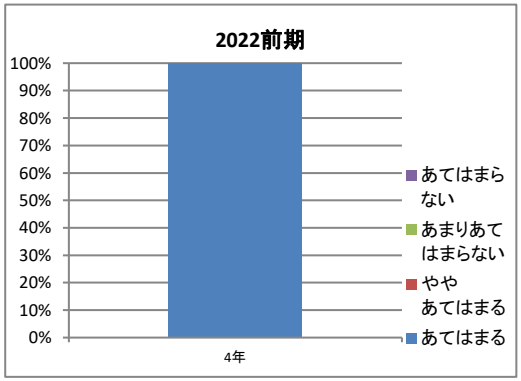


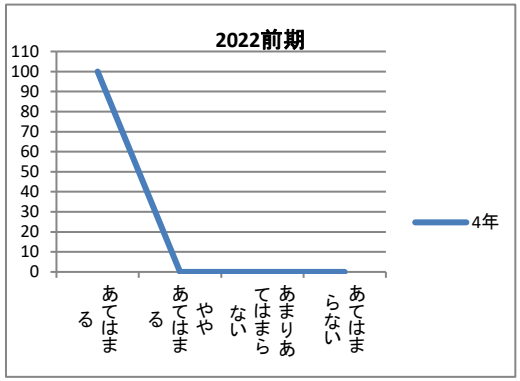
【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。



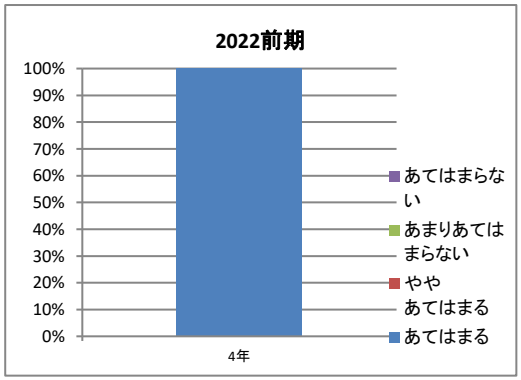


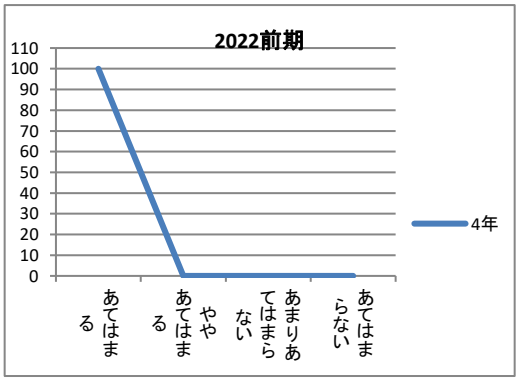
【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。



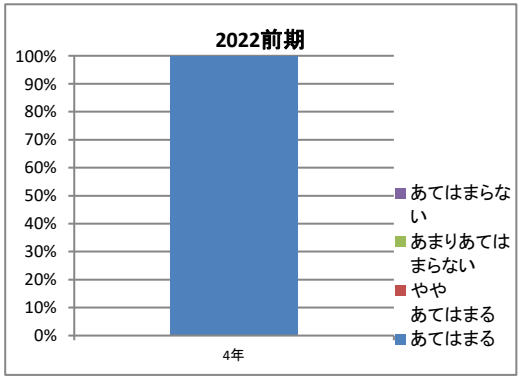


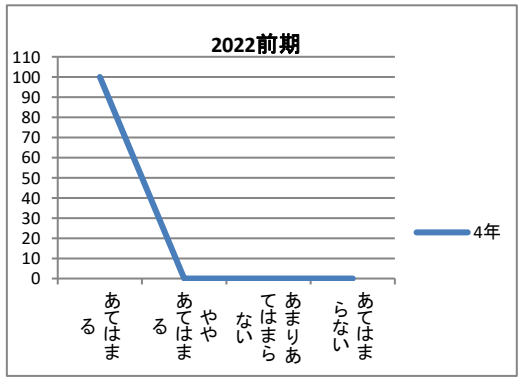
【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。



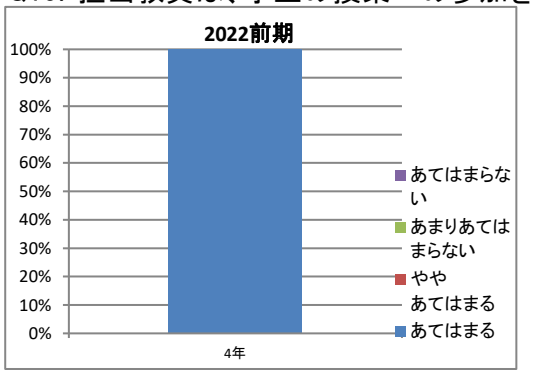


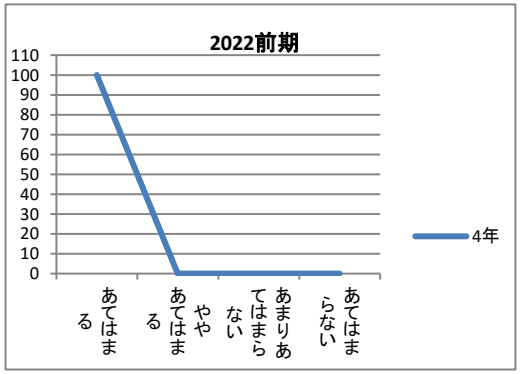
【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。



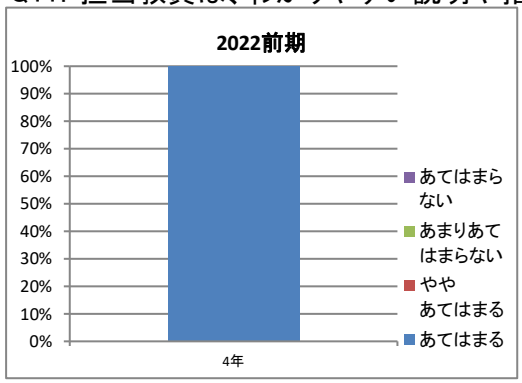


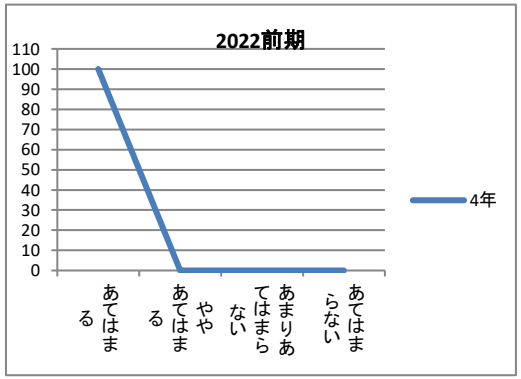
【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。



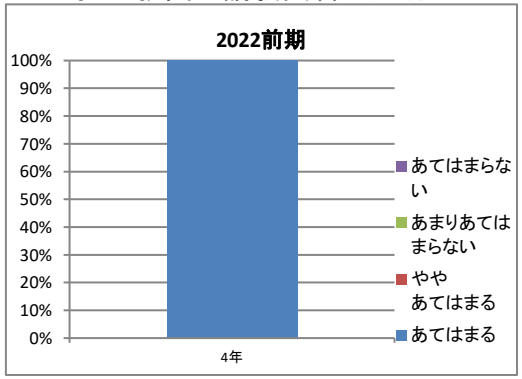


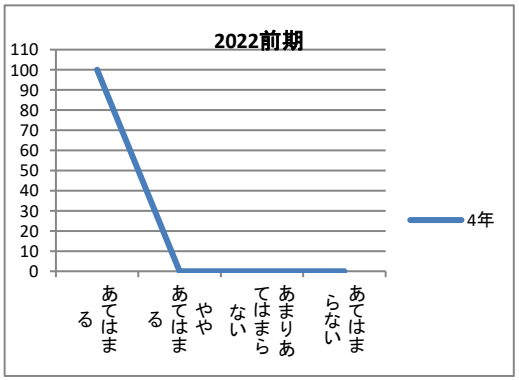
【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。



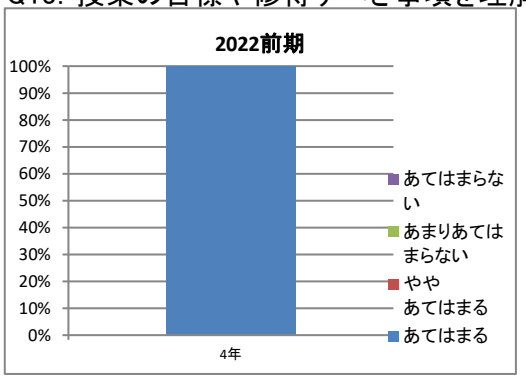


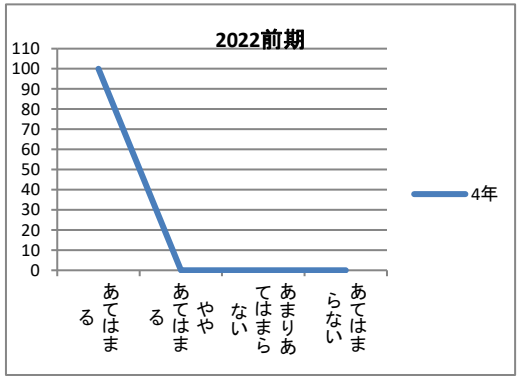
【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



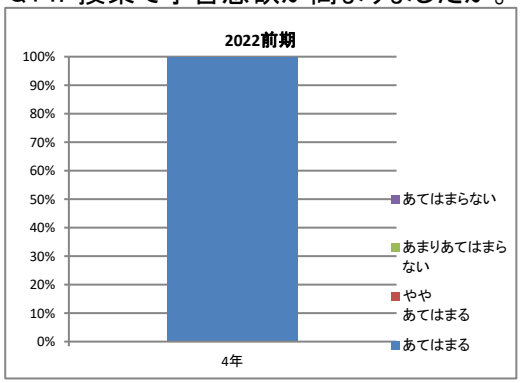


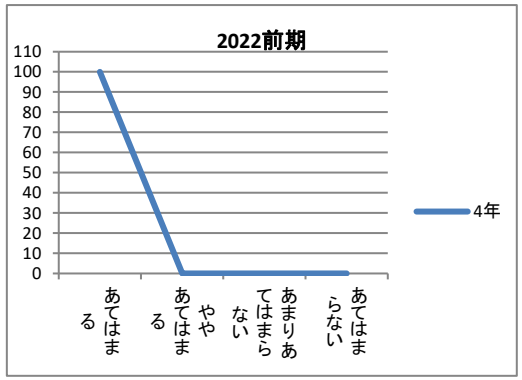
【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。



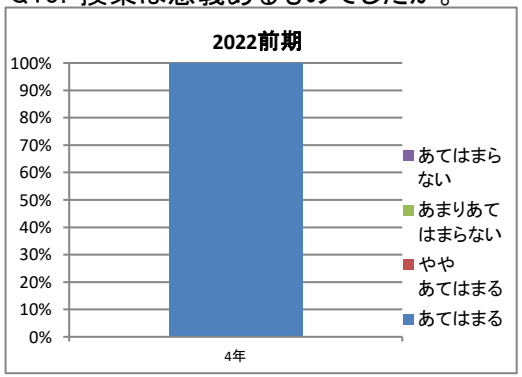


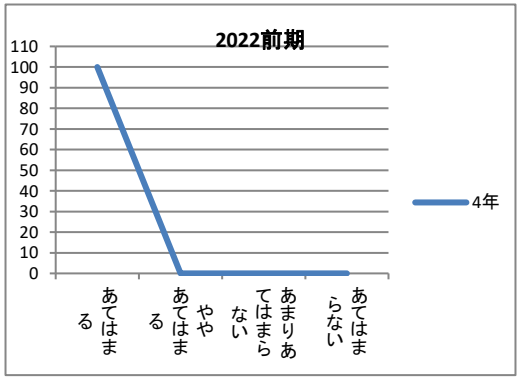
【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。





【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。

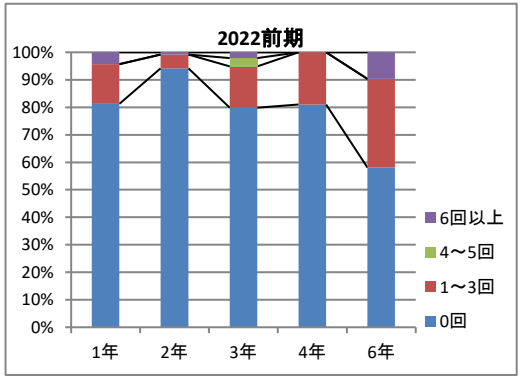


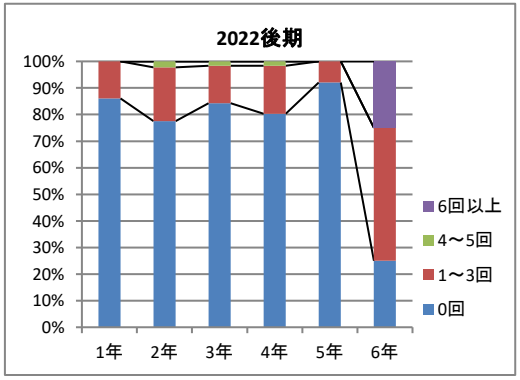


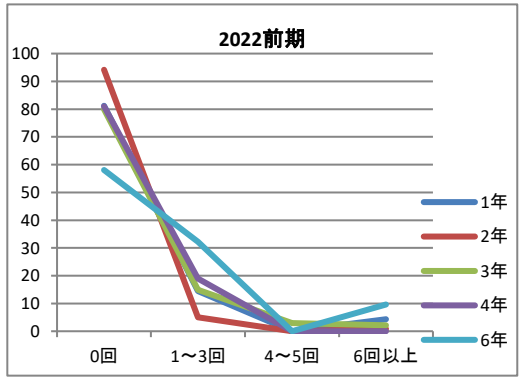
授業アンケート　令和4年度　2022年度

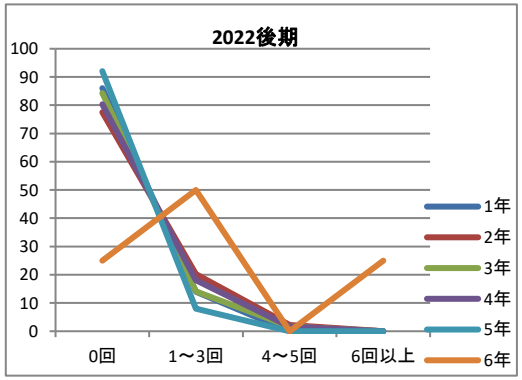
<薬学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

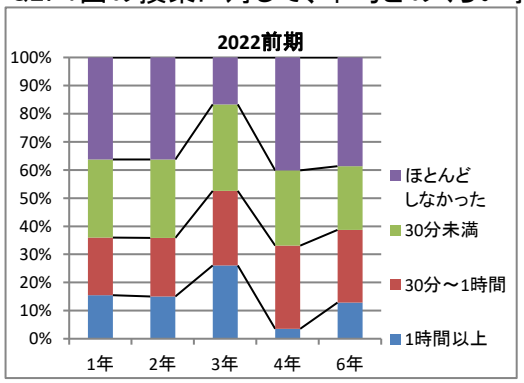


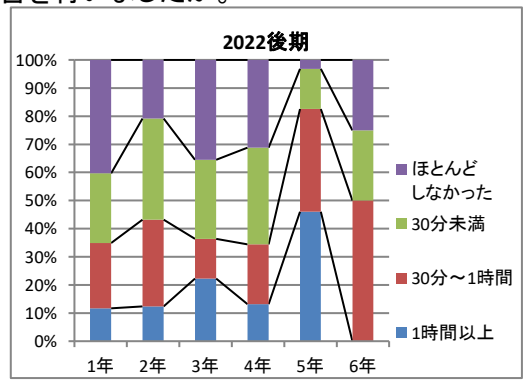


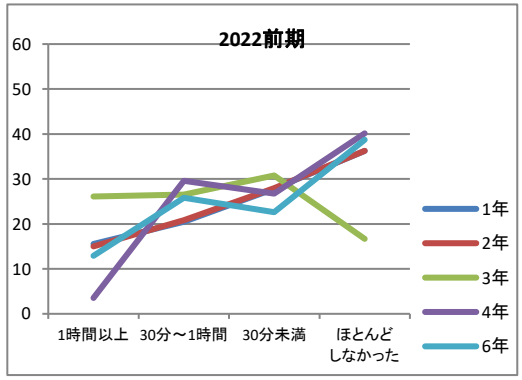


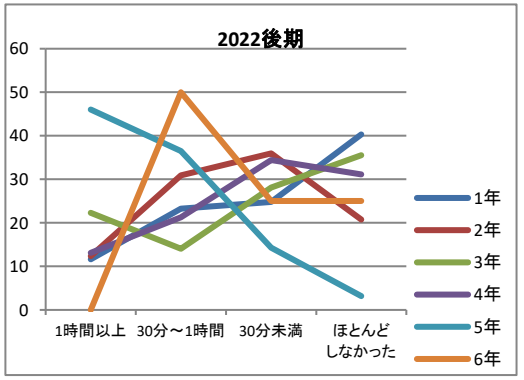


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

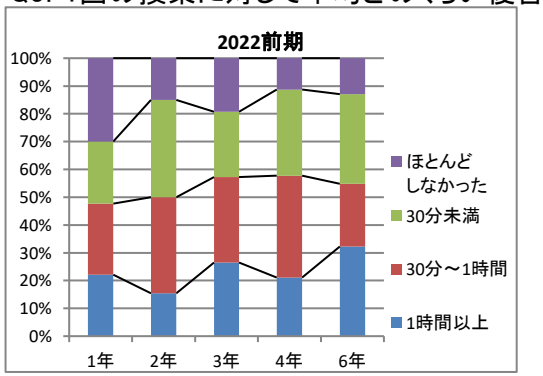


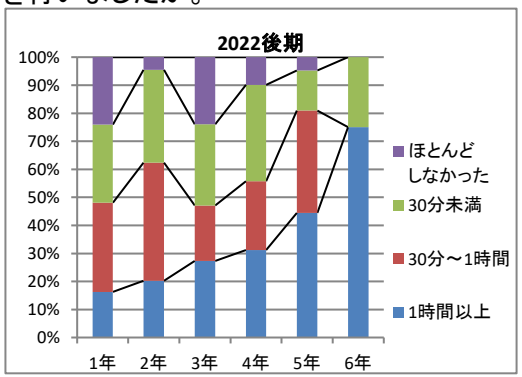


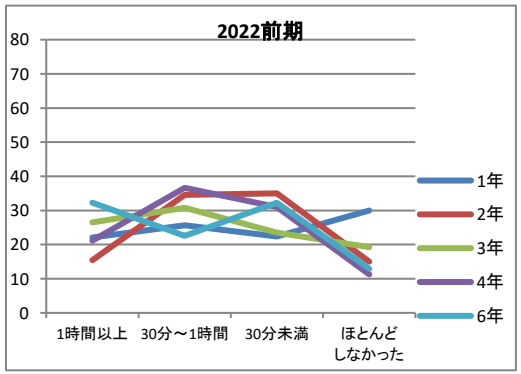


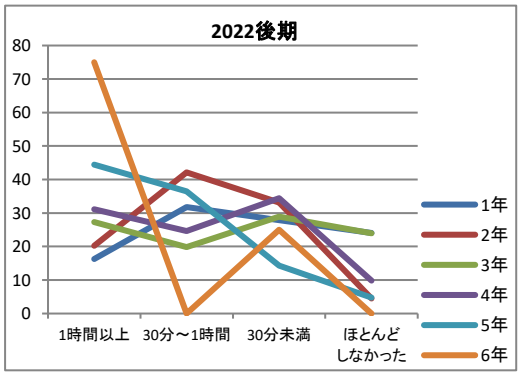


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。



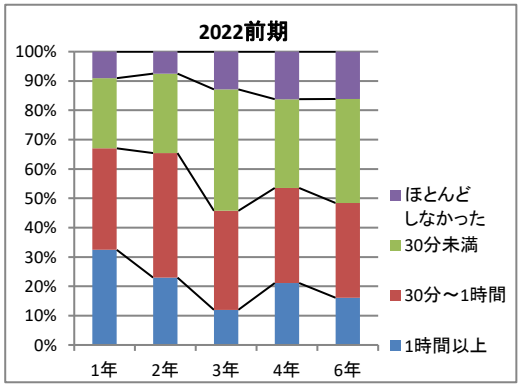


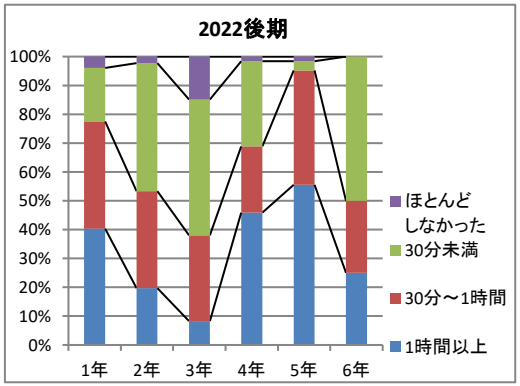


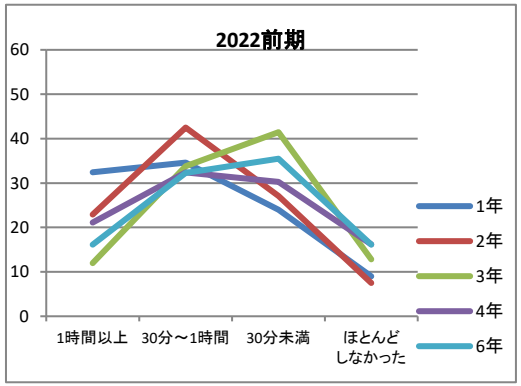


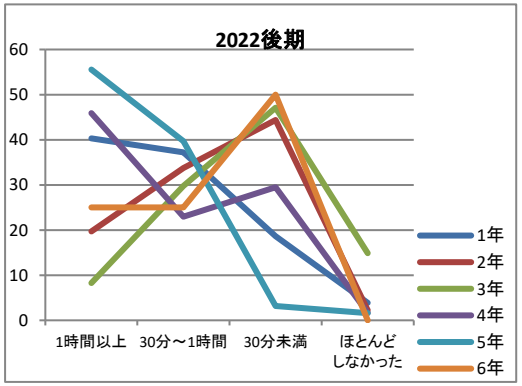
図Ⅶ　薬

【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

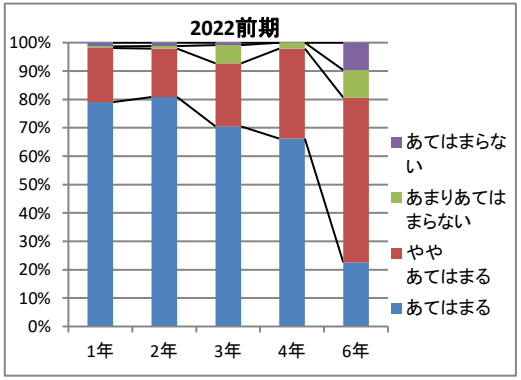


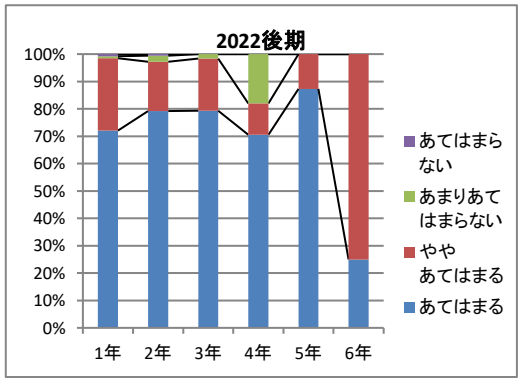


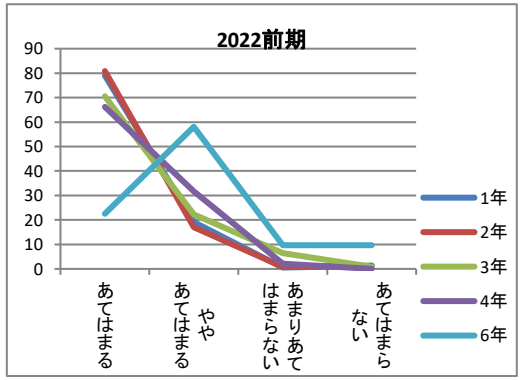


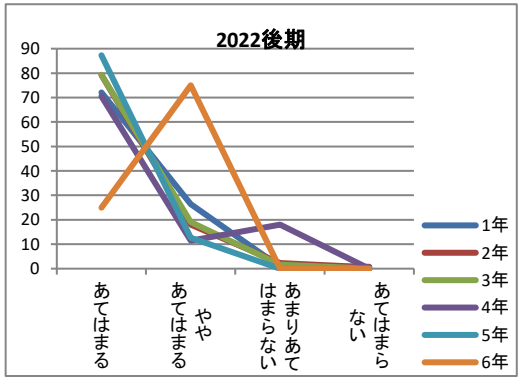


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

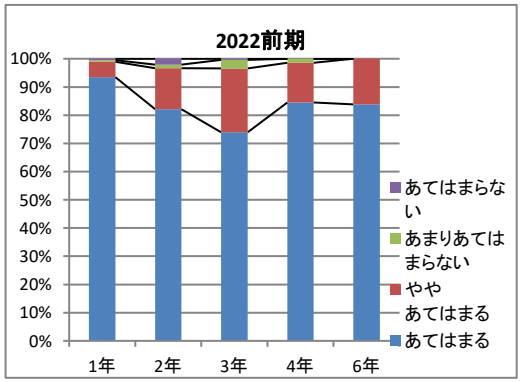


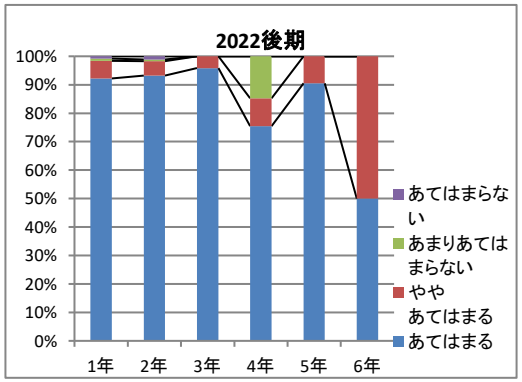


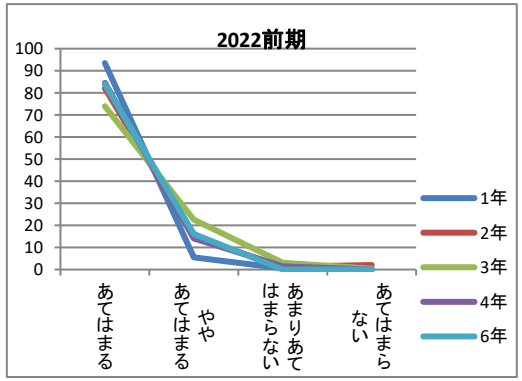


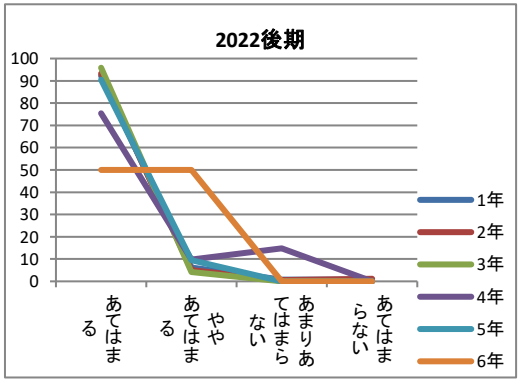


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

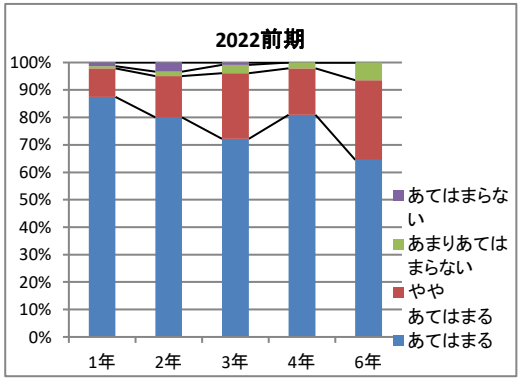


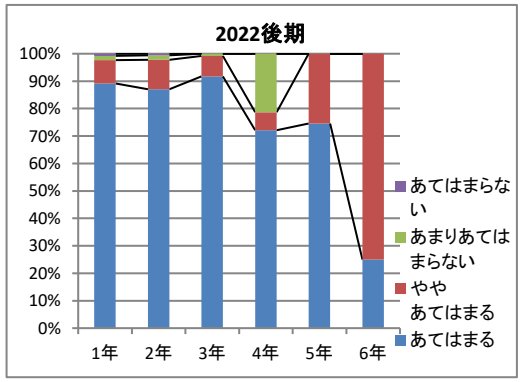


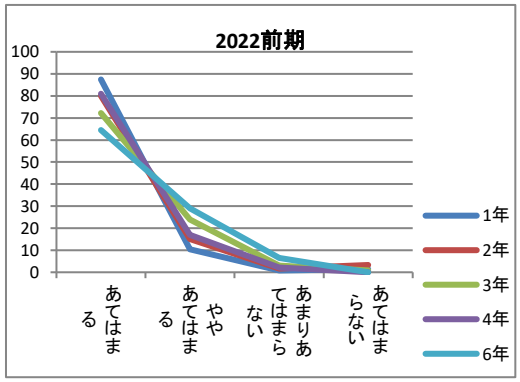


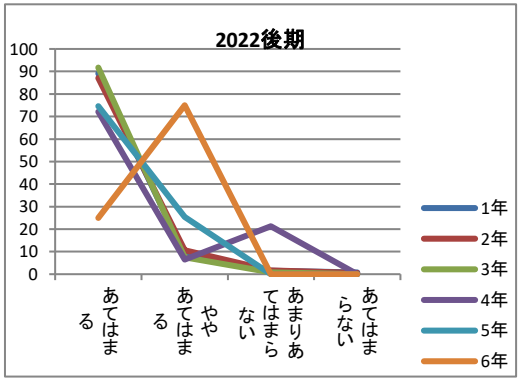


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

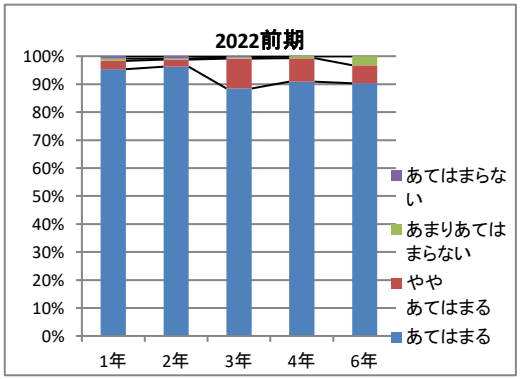


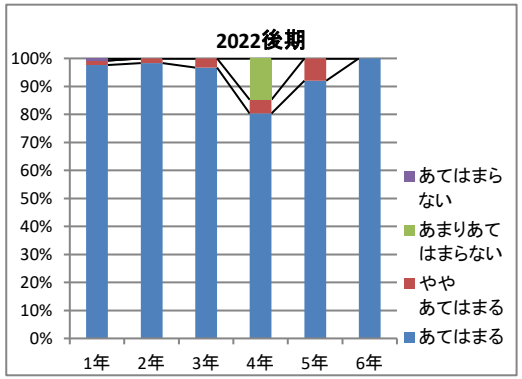


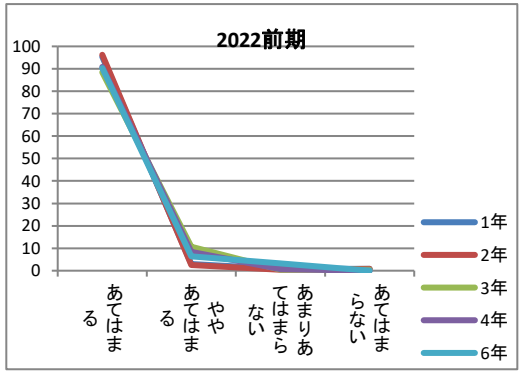


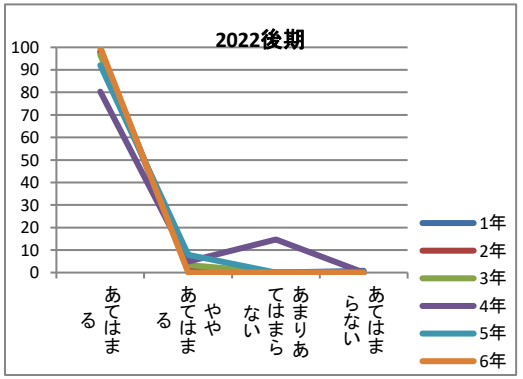


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

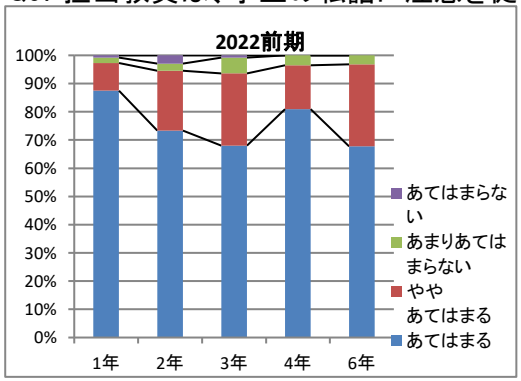


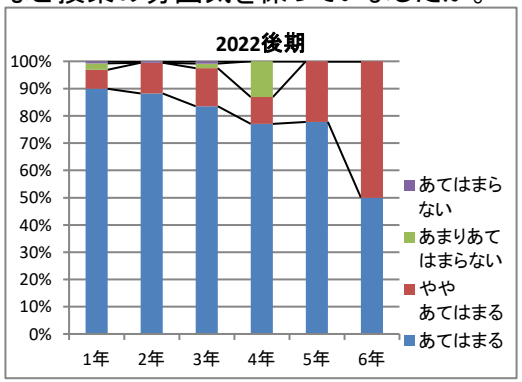


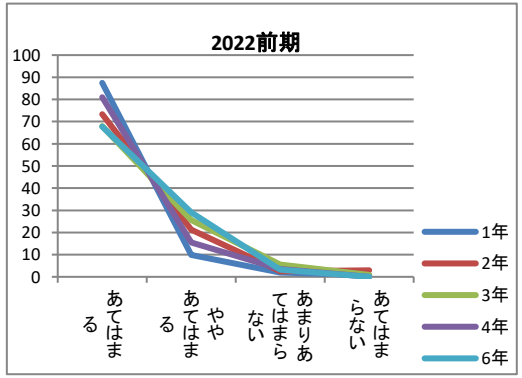


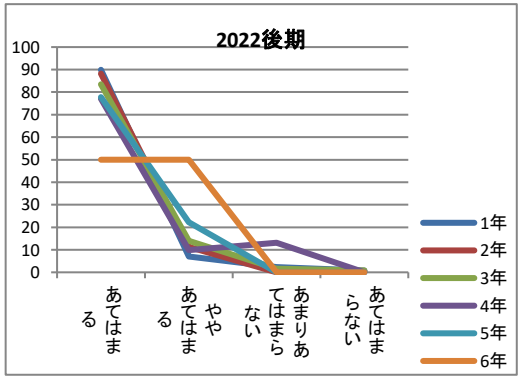


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

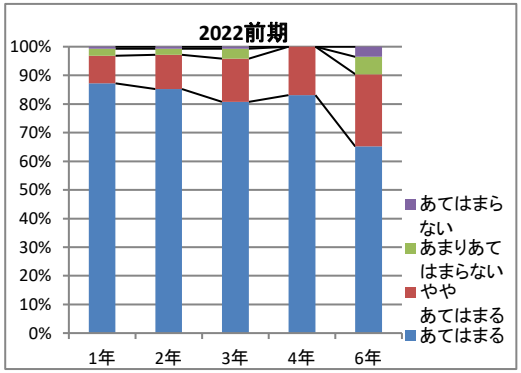


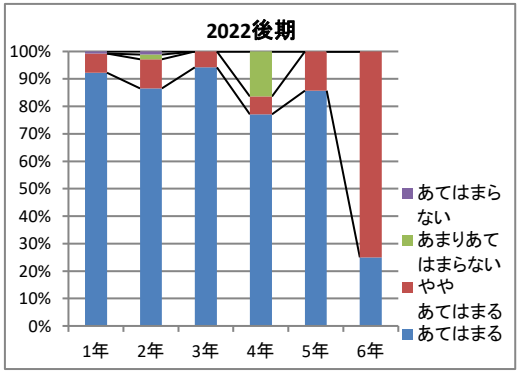


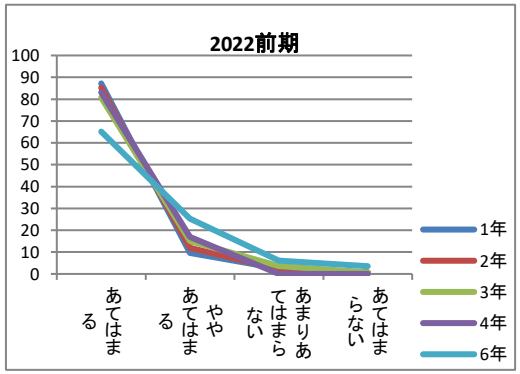


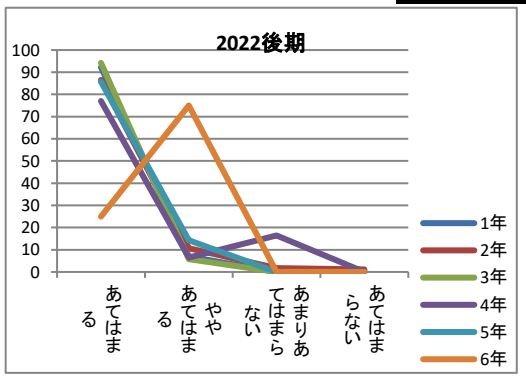


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

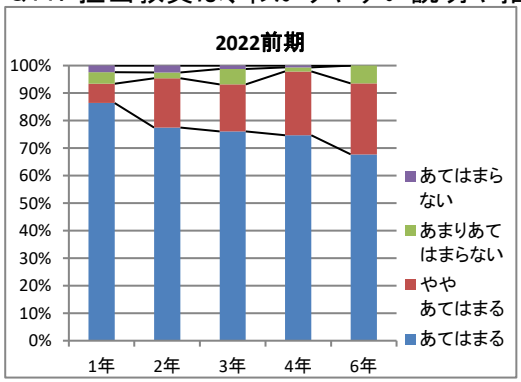


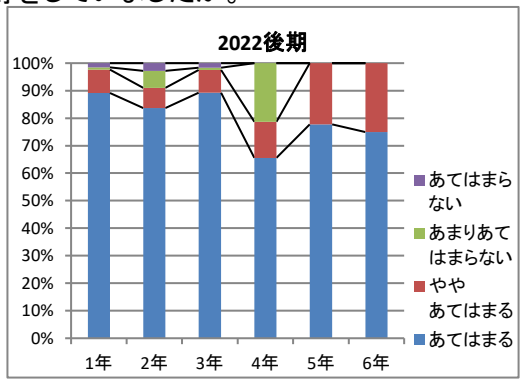


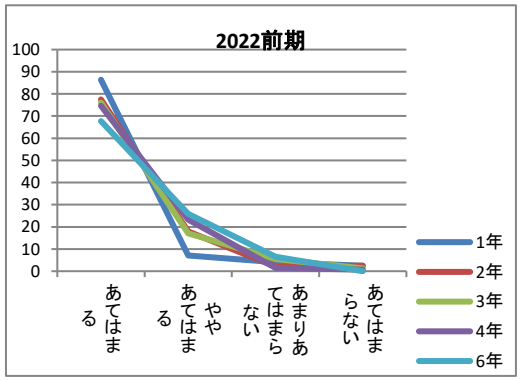


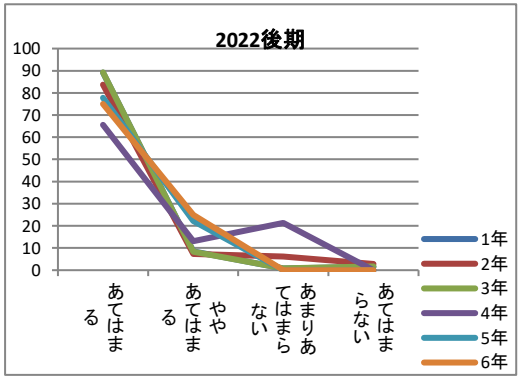


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

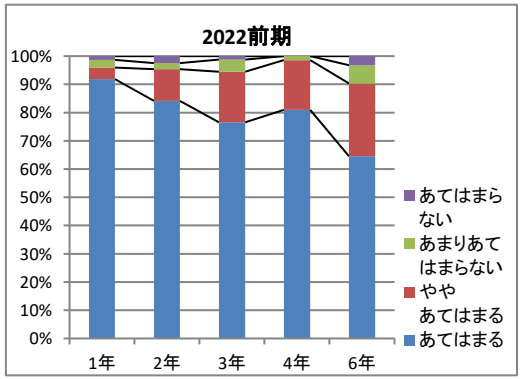


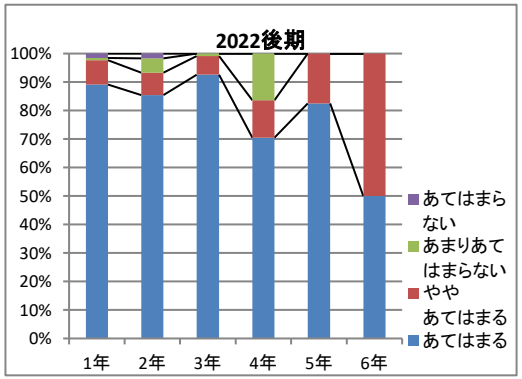


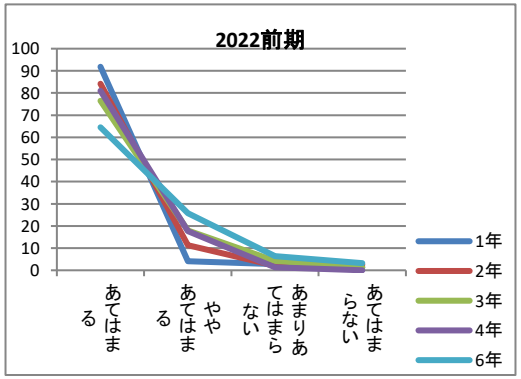


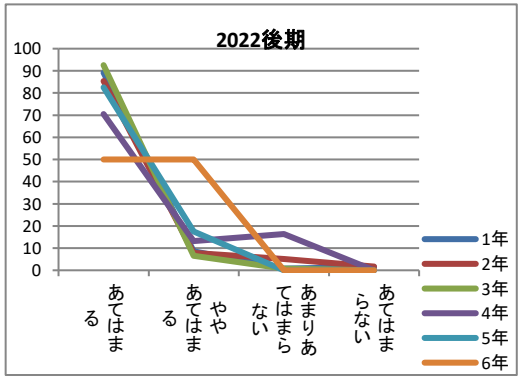


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。

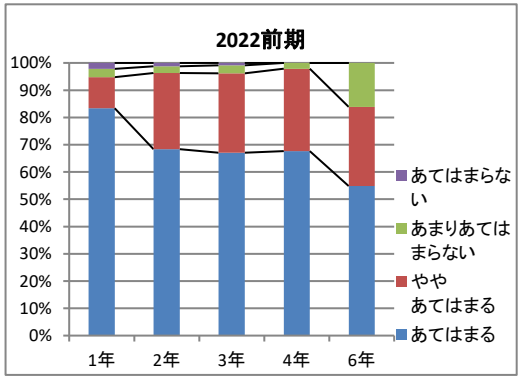


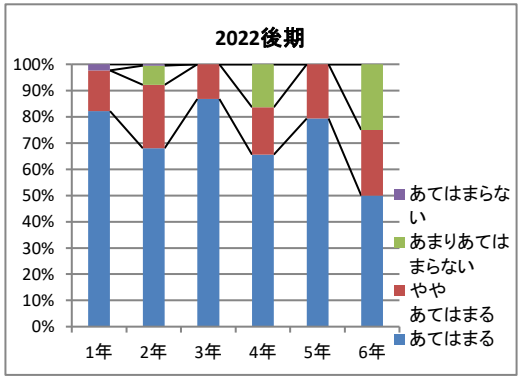


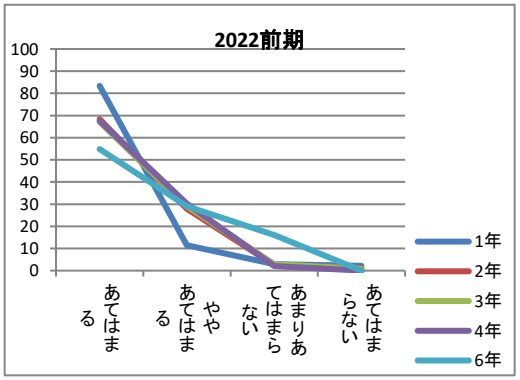


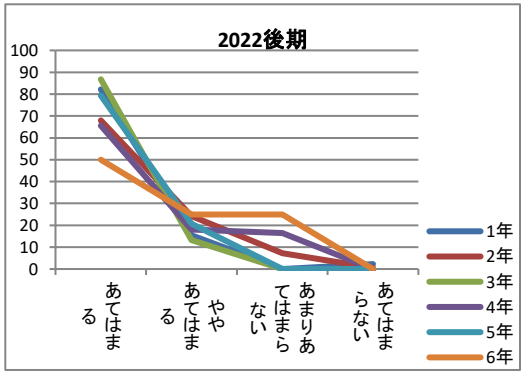


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

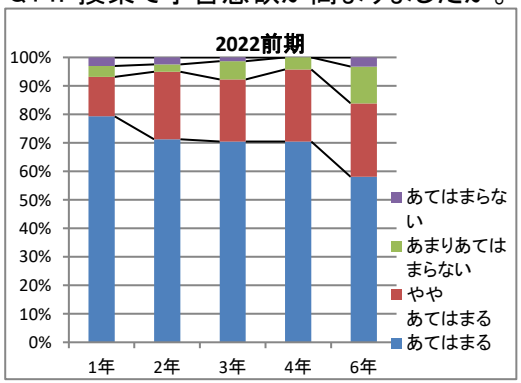


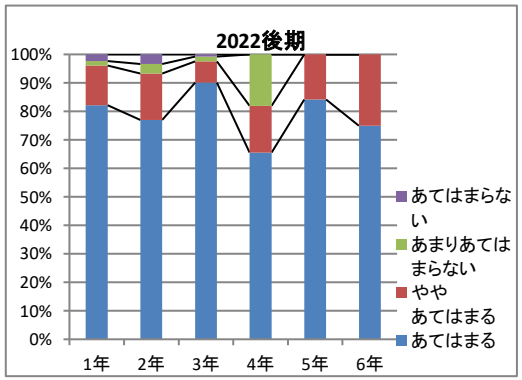


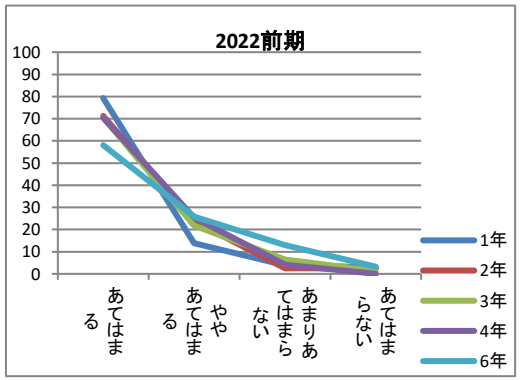


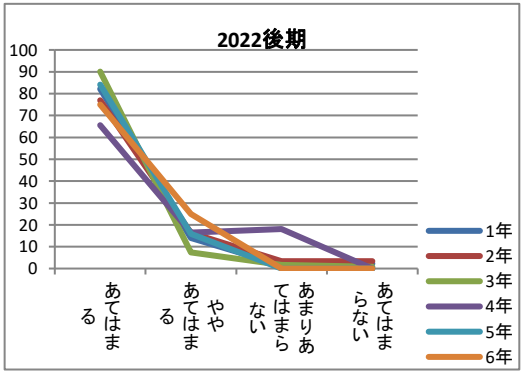


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

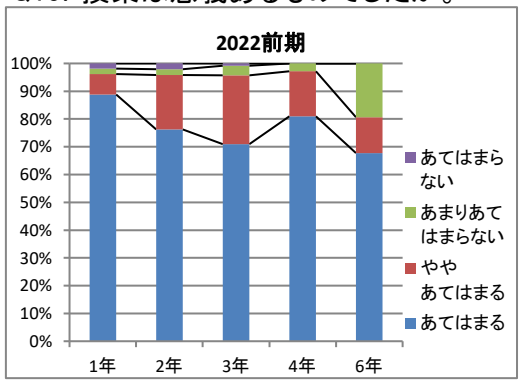


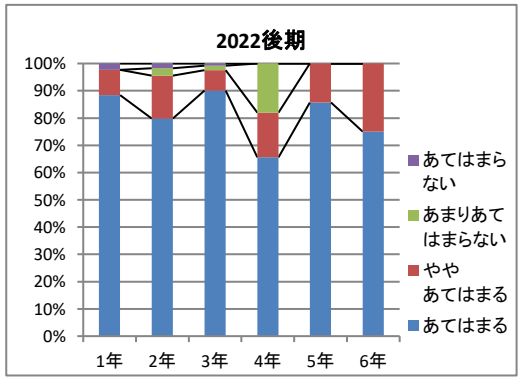


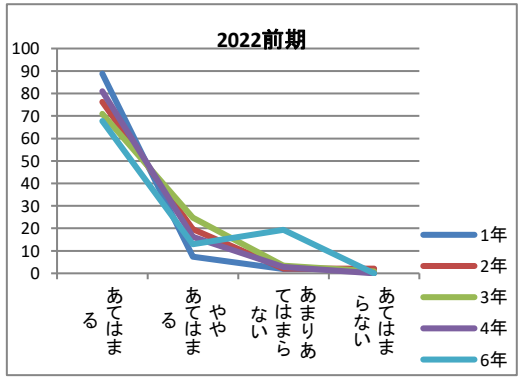


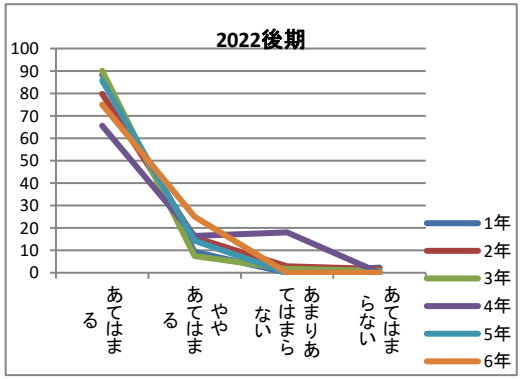


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。





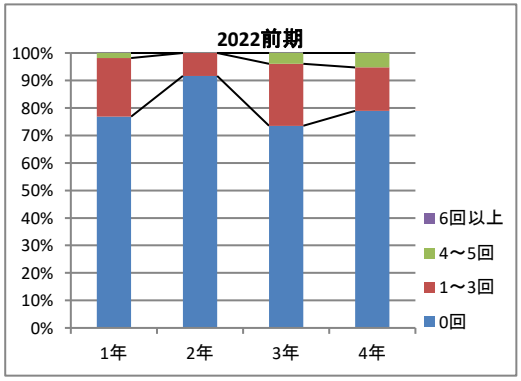


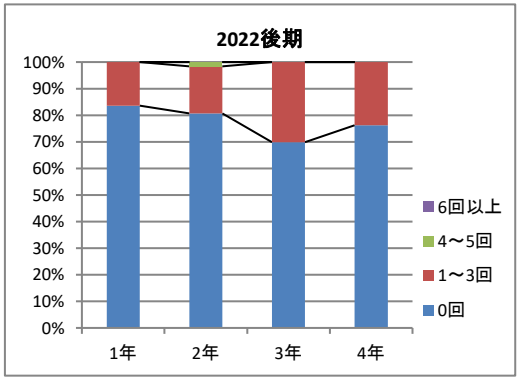


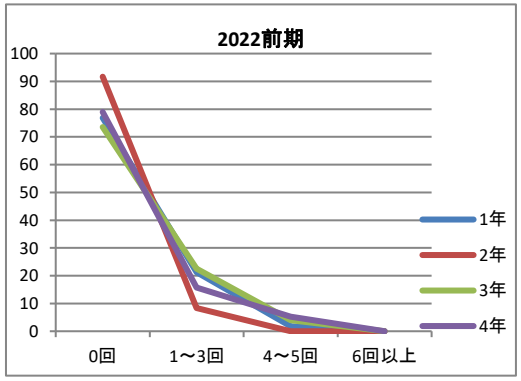
授業アンケート　令和4年度　2022年度

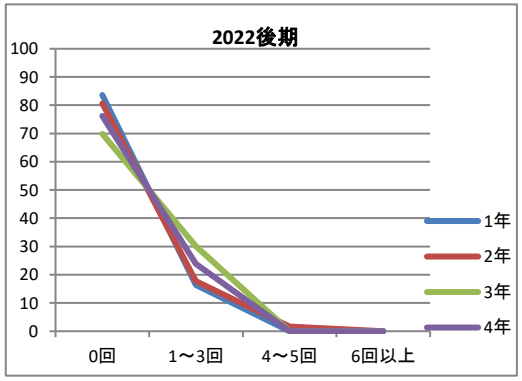
<動物生命薬科学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

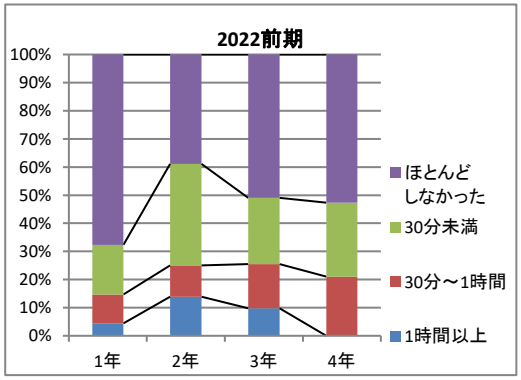


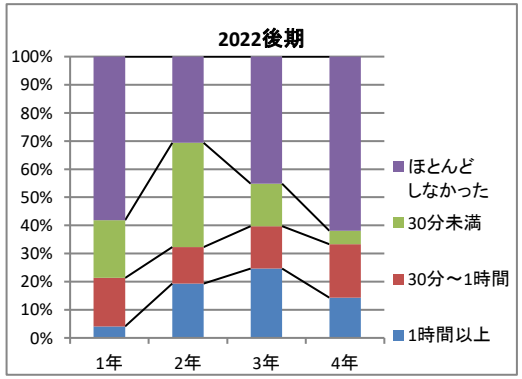


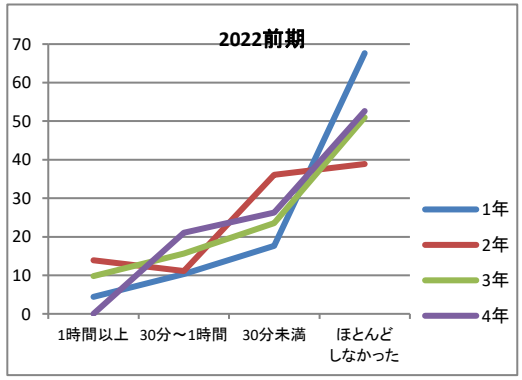


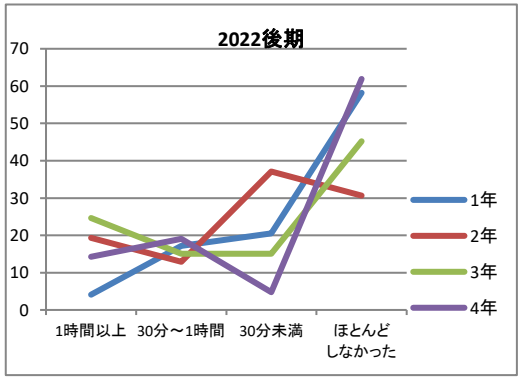


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

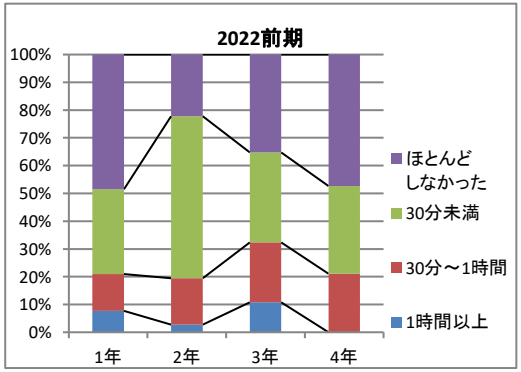


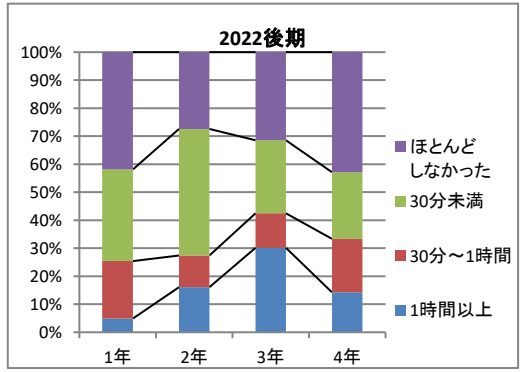


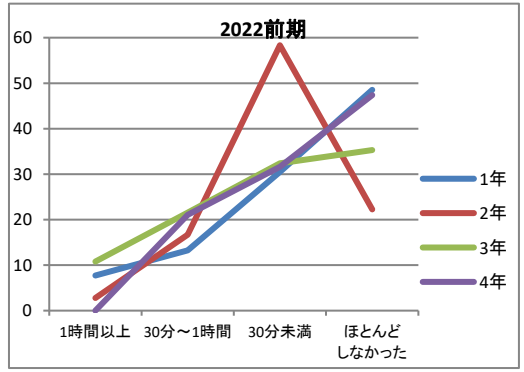


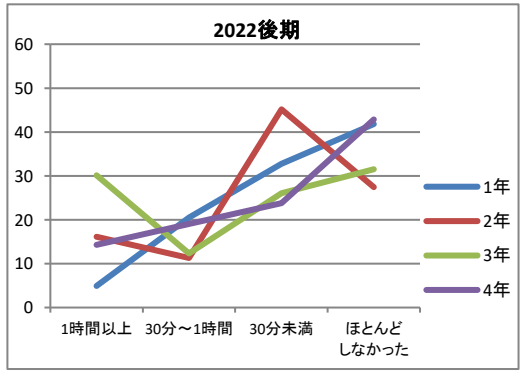


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。

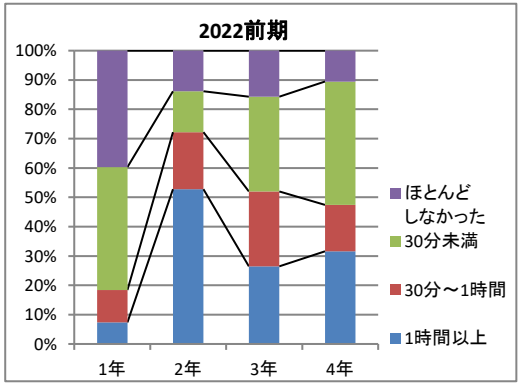


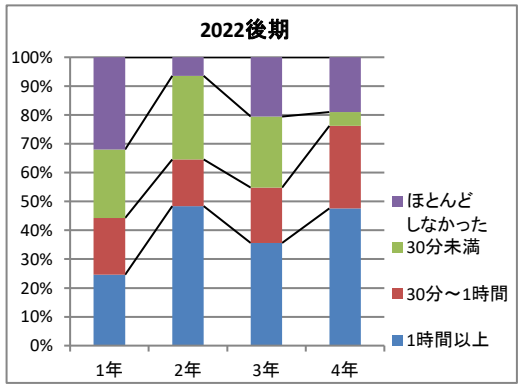


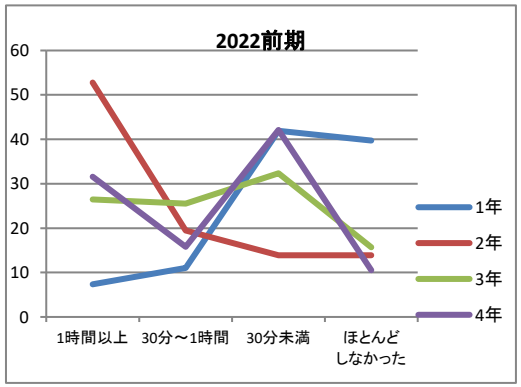


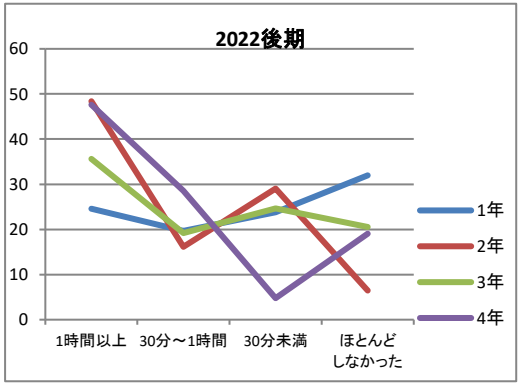


【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

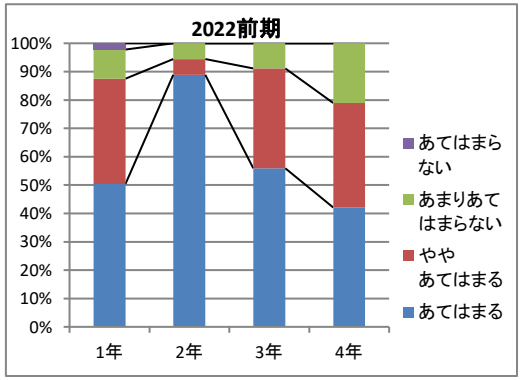


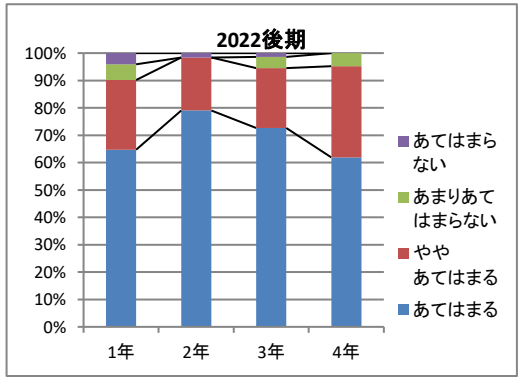


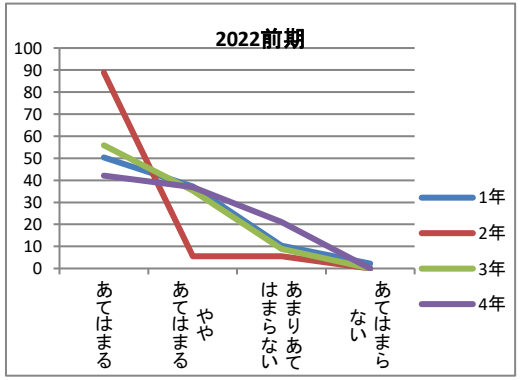


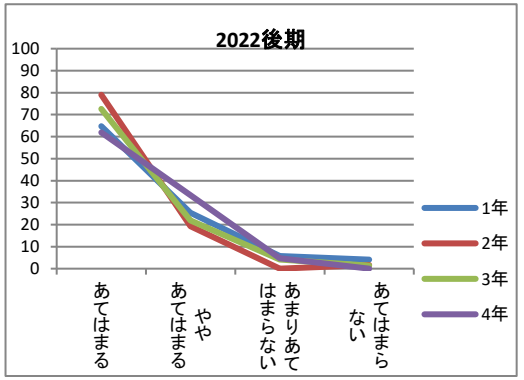


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

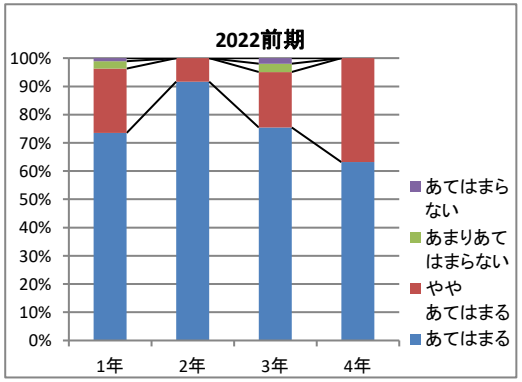


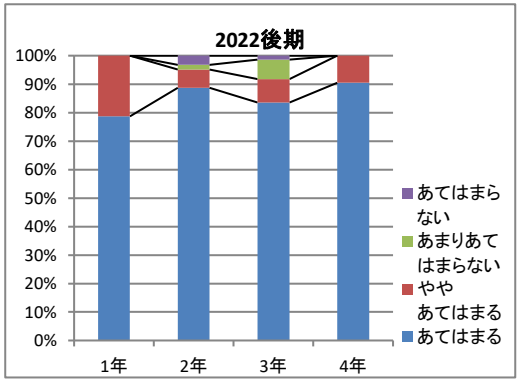


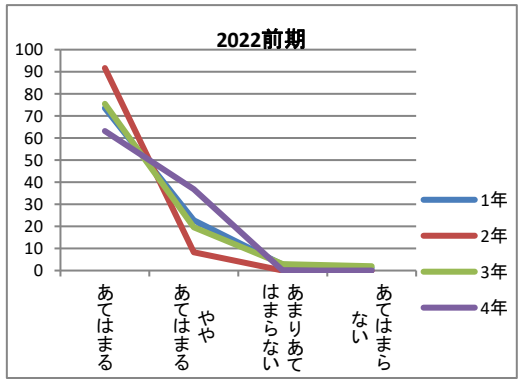


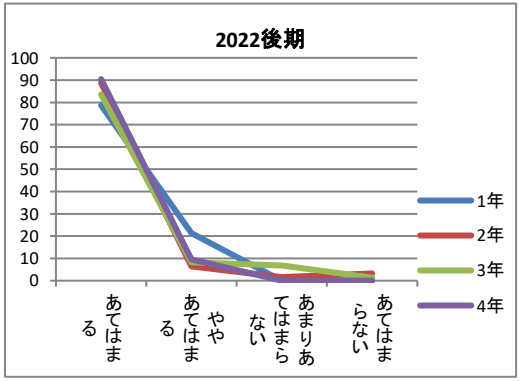


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

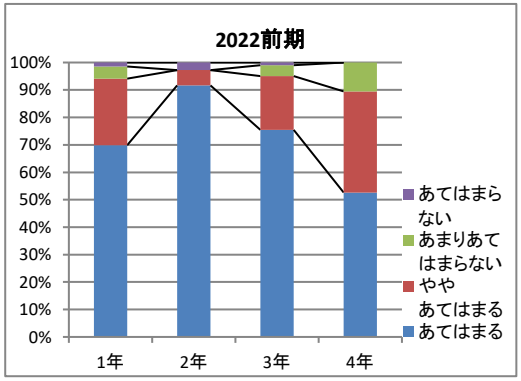


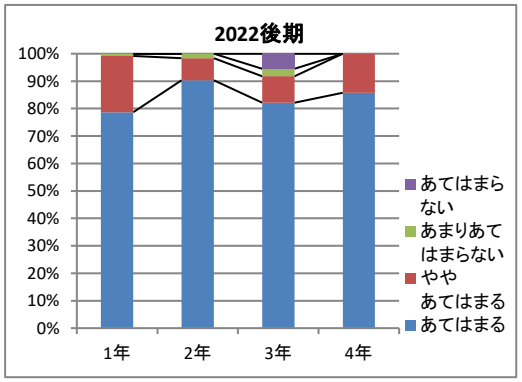


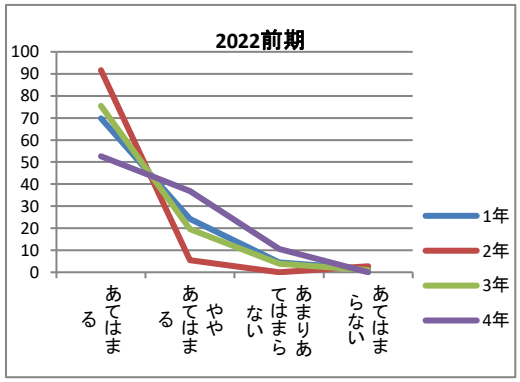


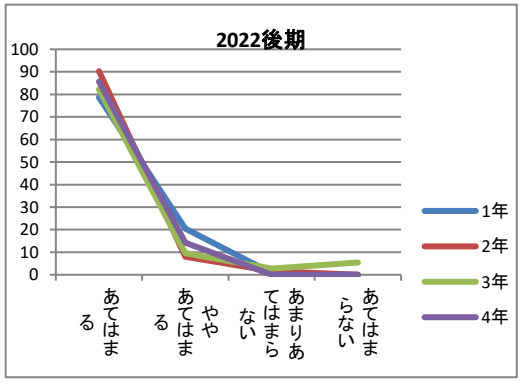


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

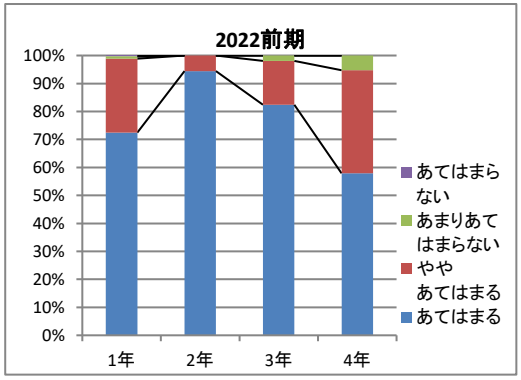


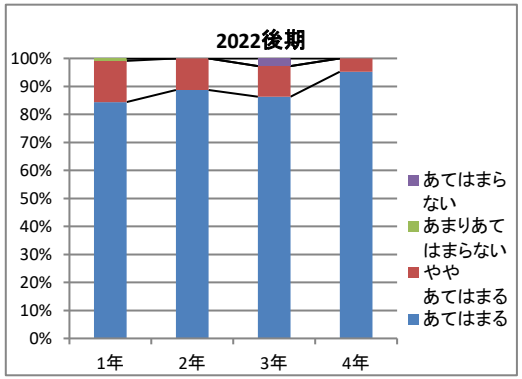


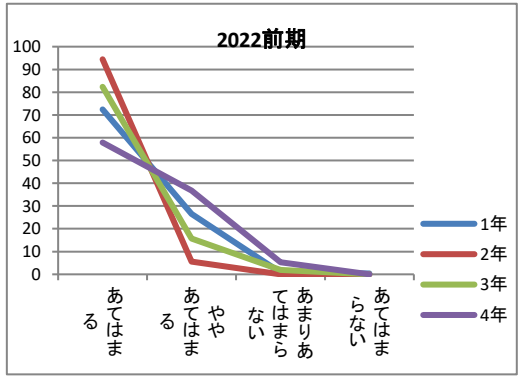


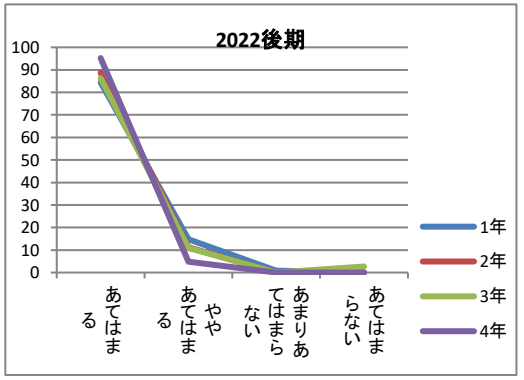


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

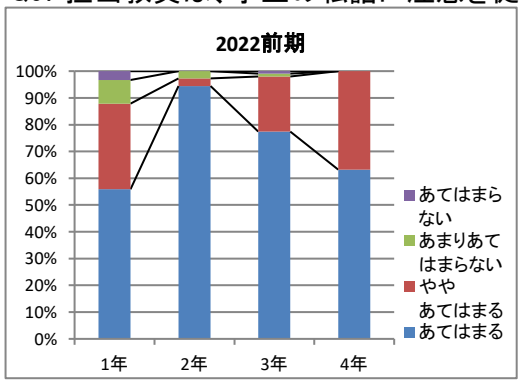


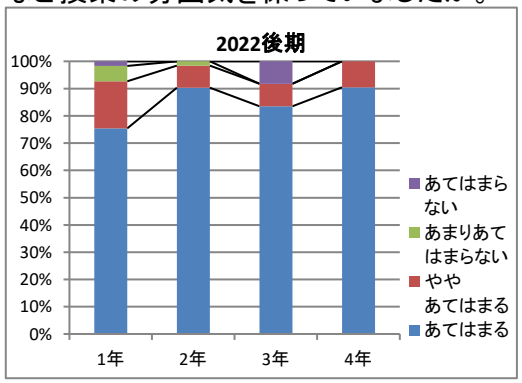


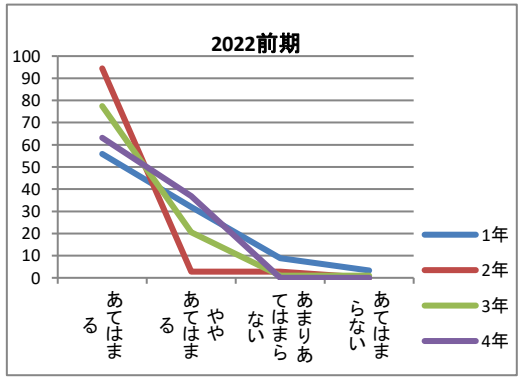


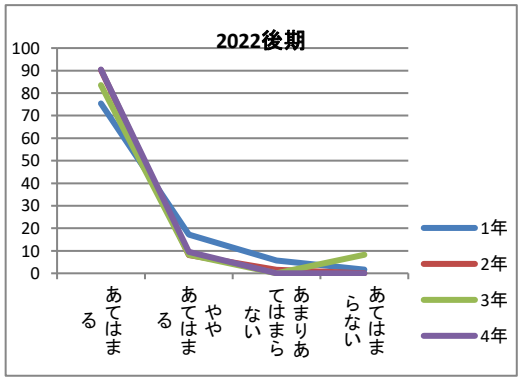


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

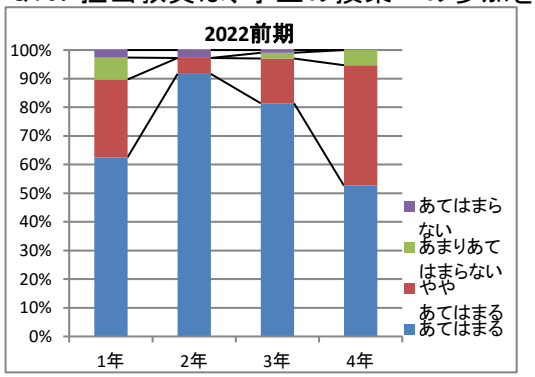


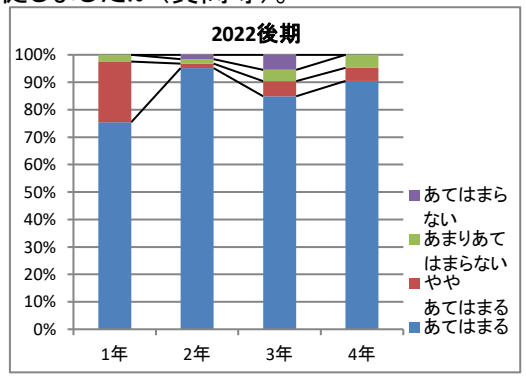


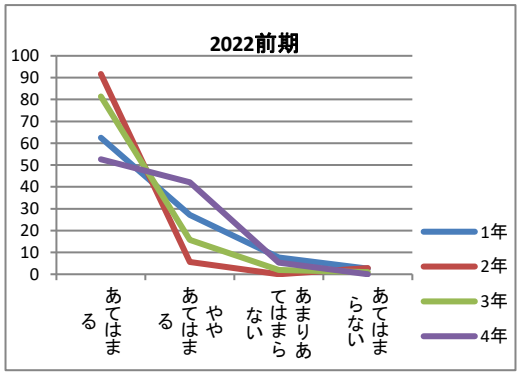


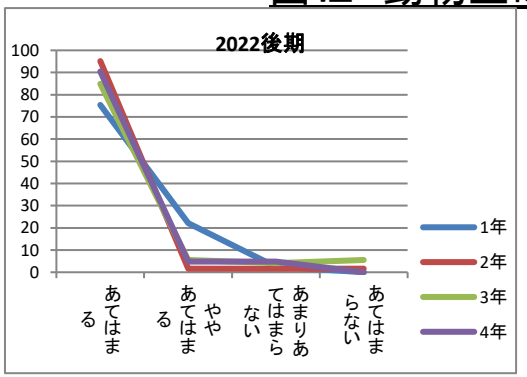


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

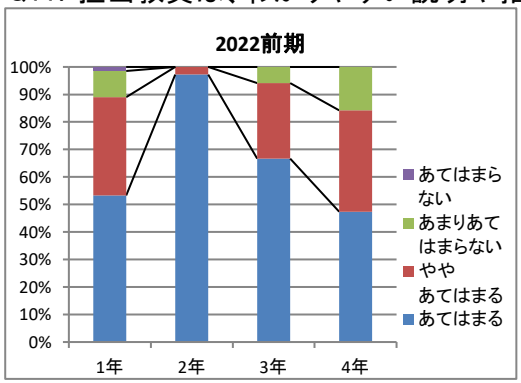


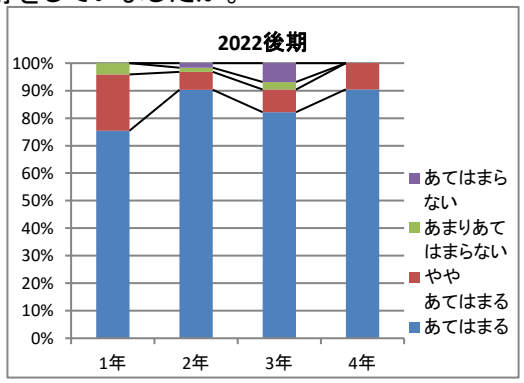


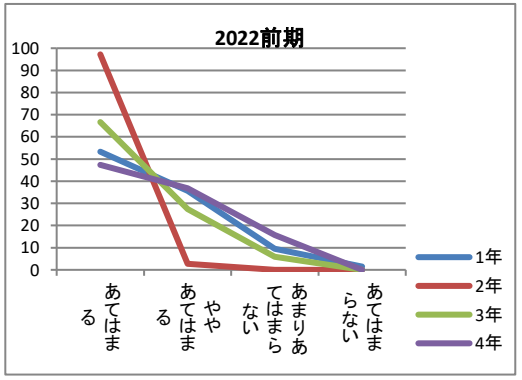


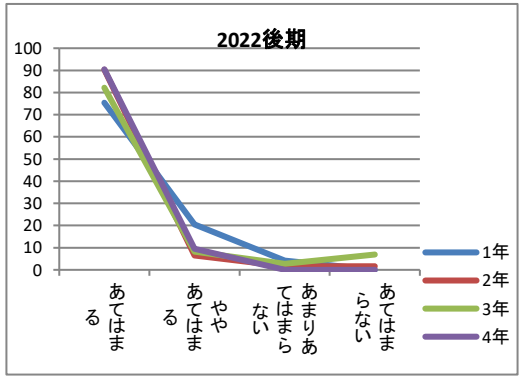


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

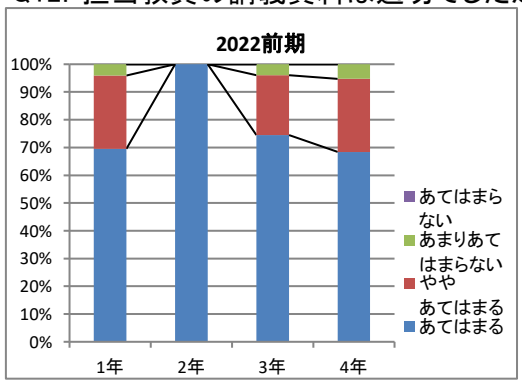


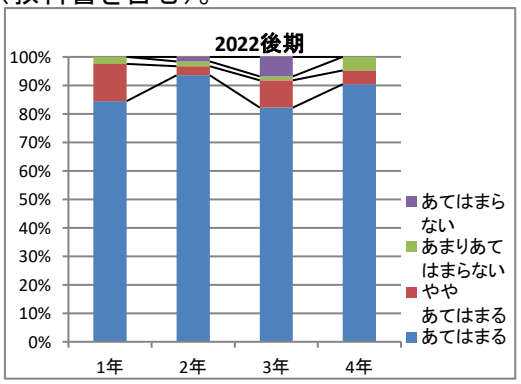


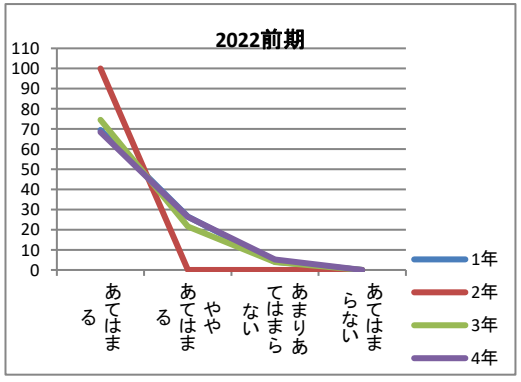


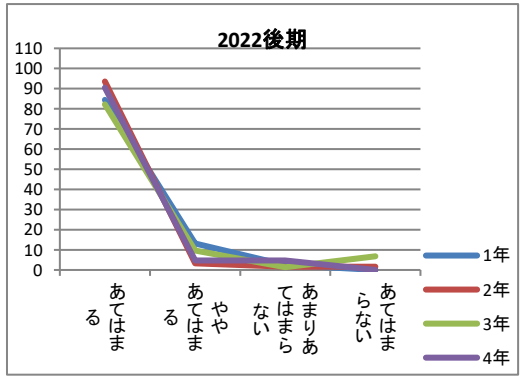


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。



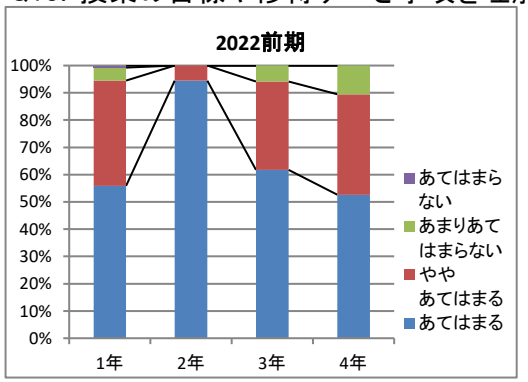


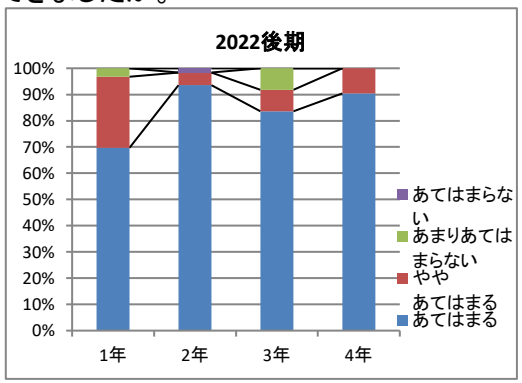


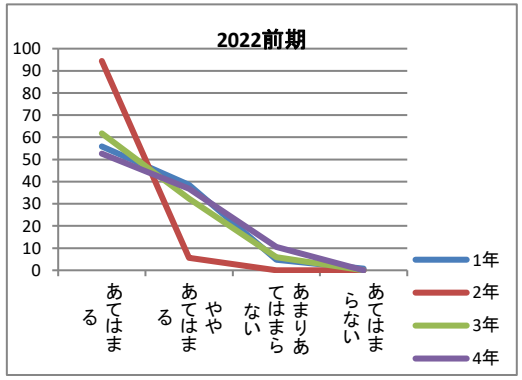


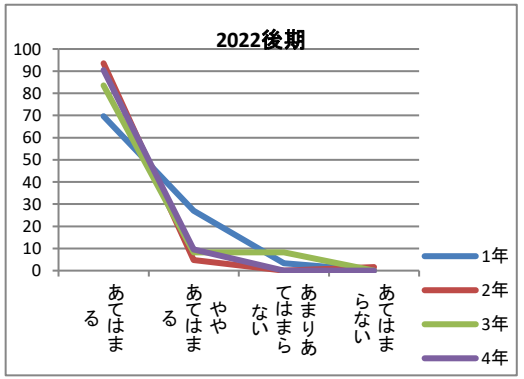
図Ⅷ　動物生命

【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

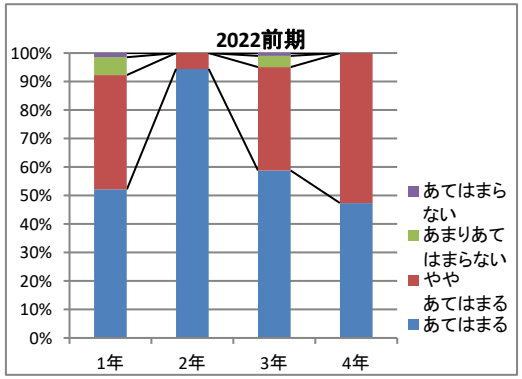


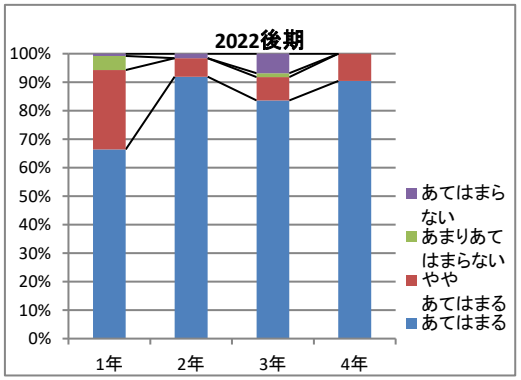


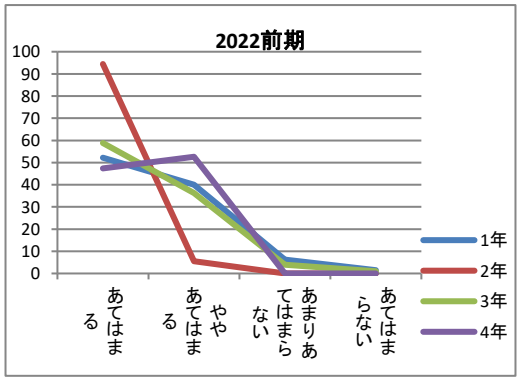


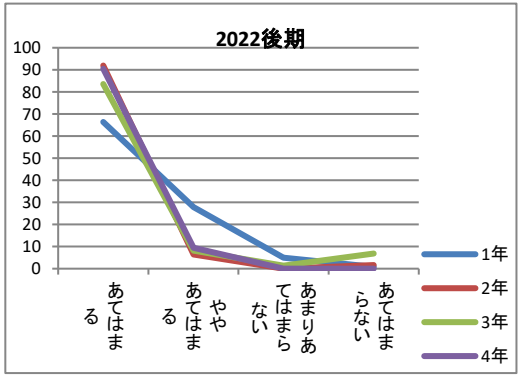


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

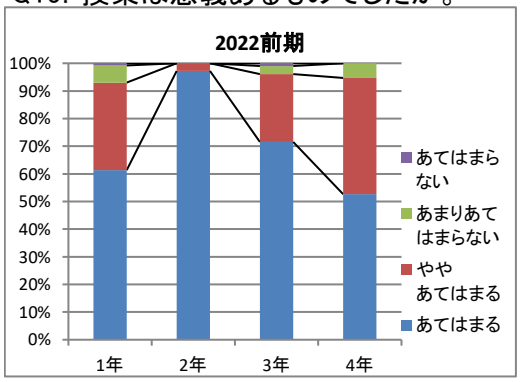


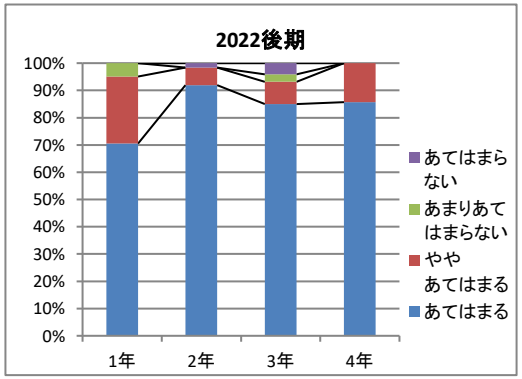


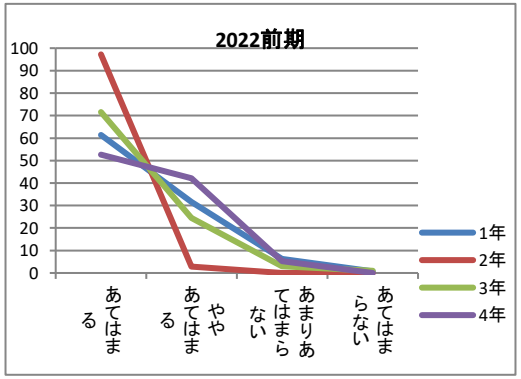


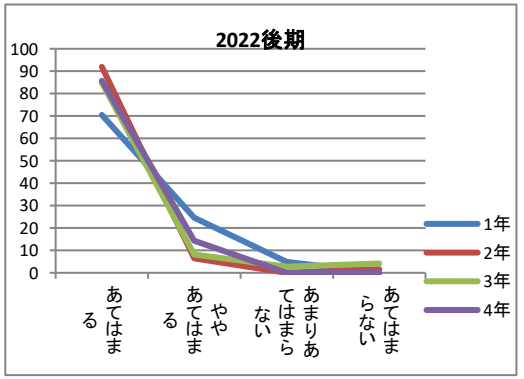


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。





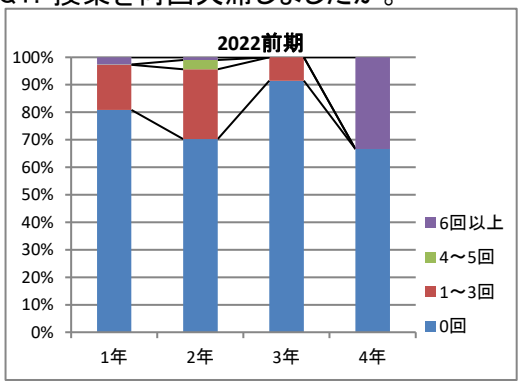


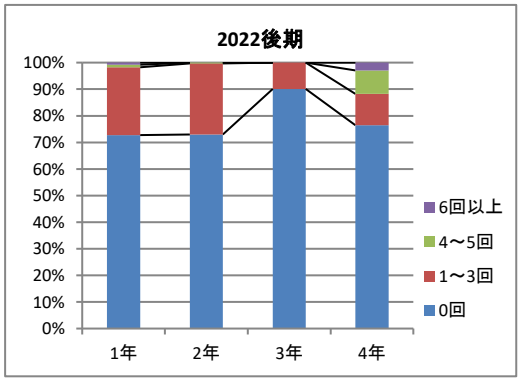


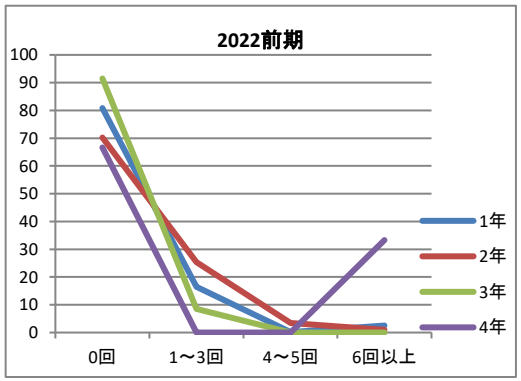
授業アンケート　令和4年度　2022年度

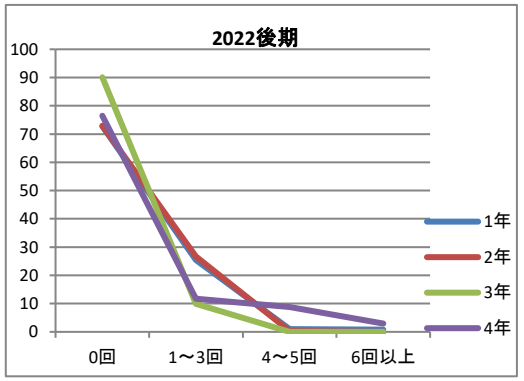
<生命医科学科>

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

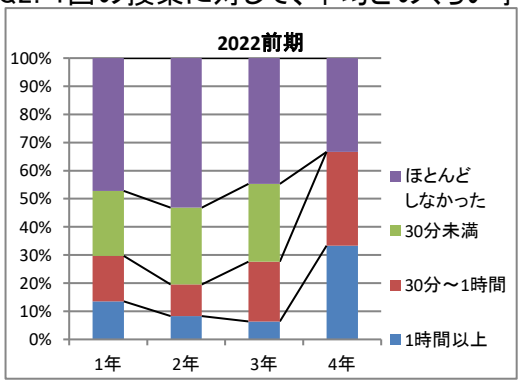


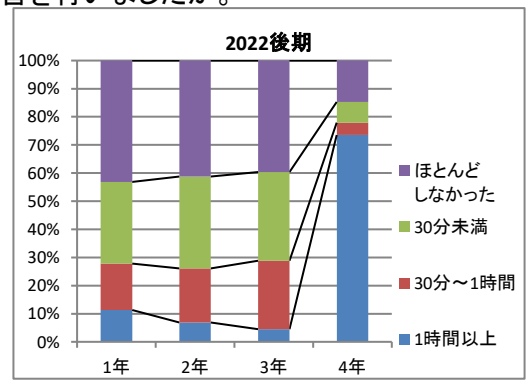


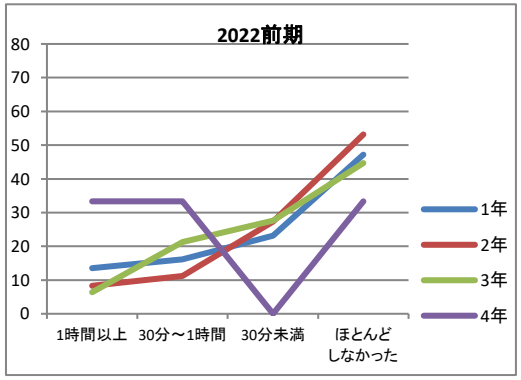


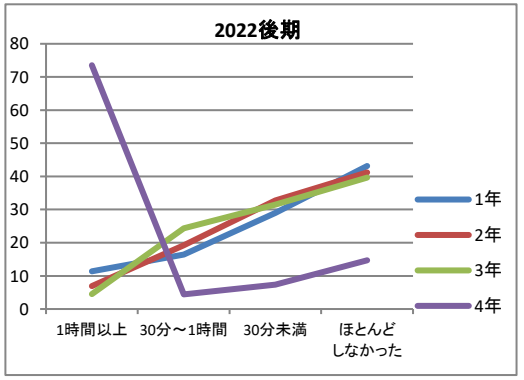


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

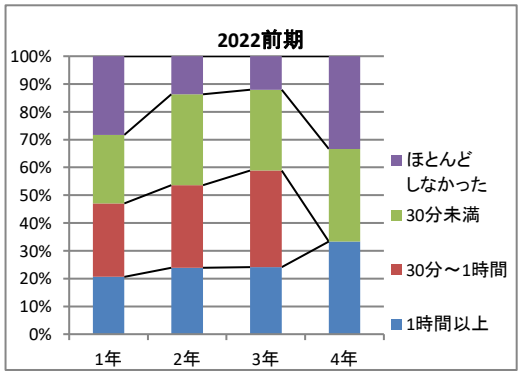


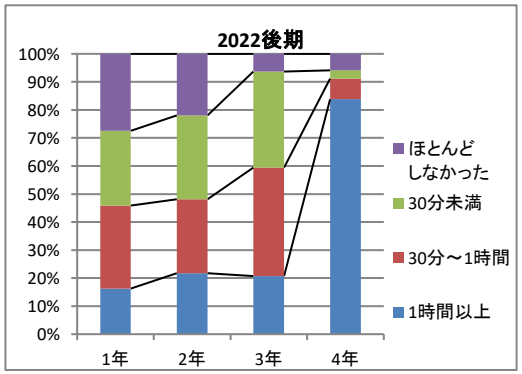


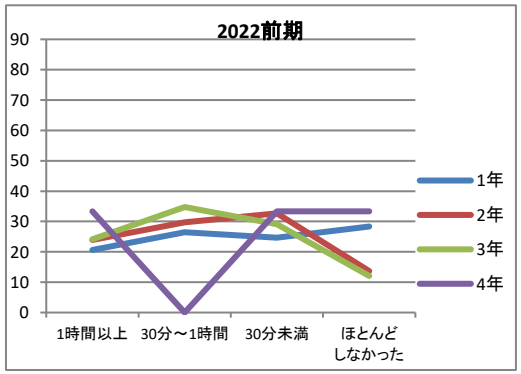


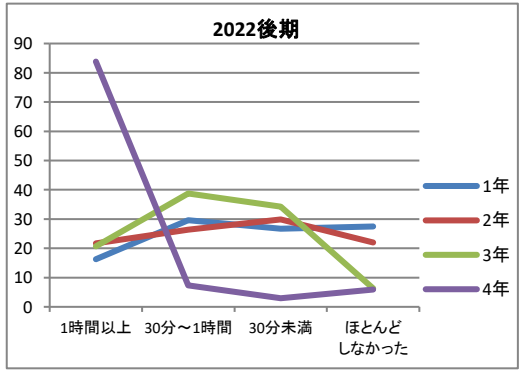


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。

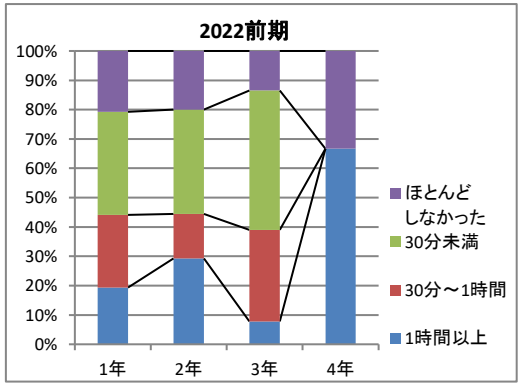


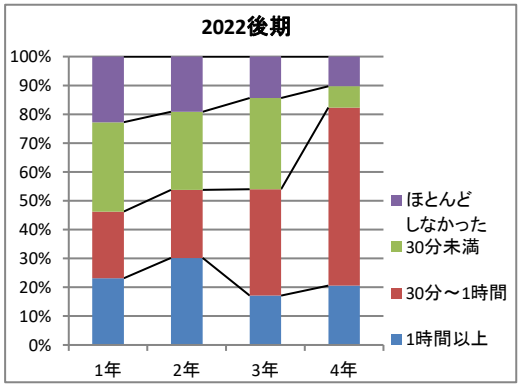


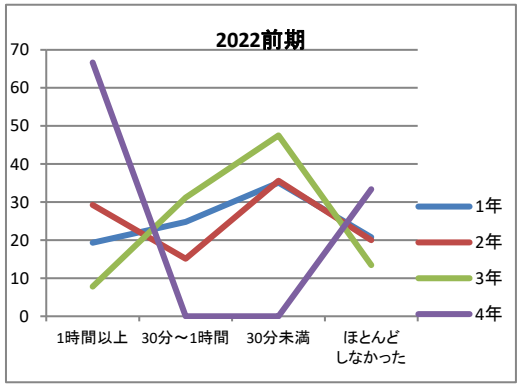


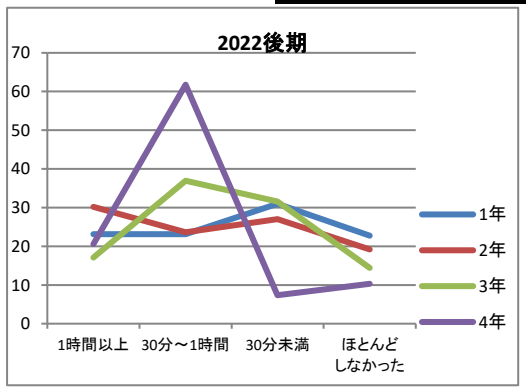


【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

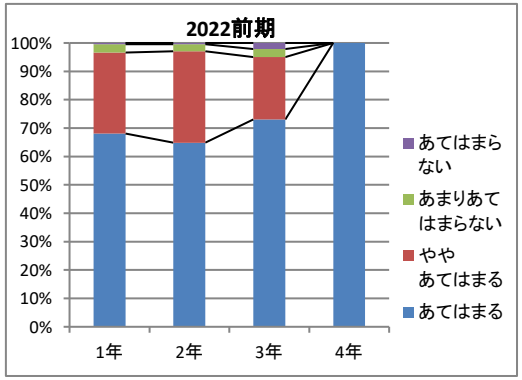


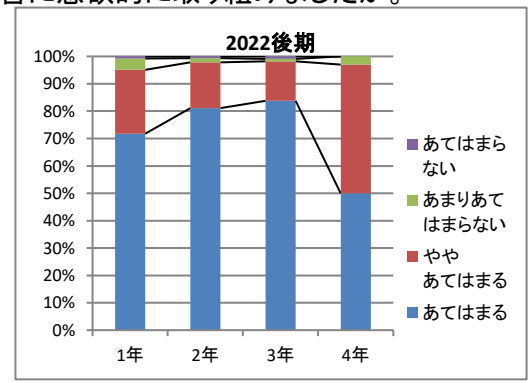


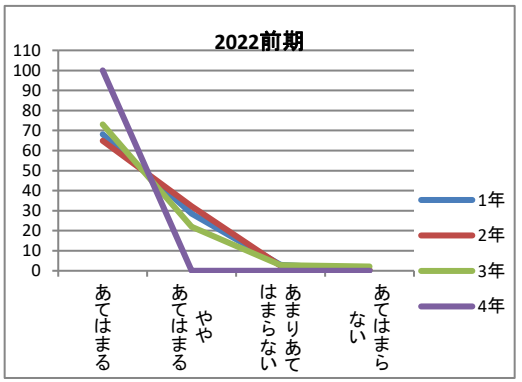


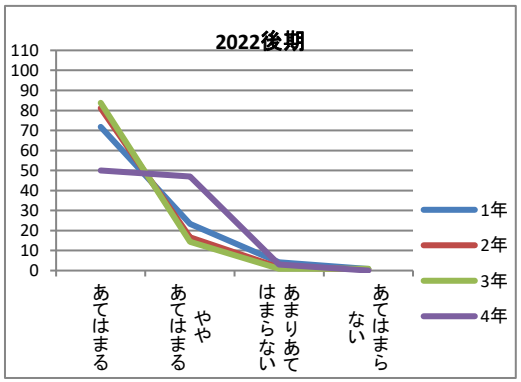


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

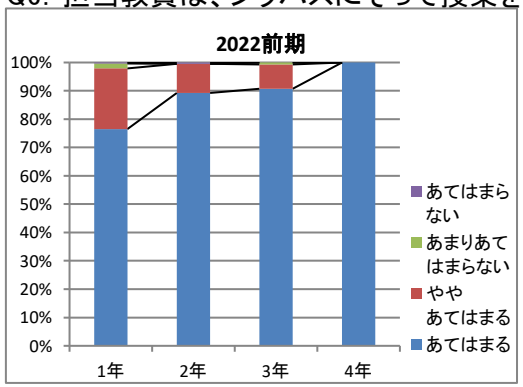


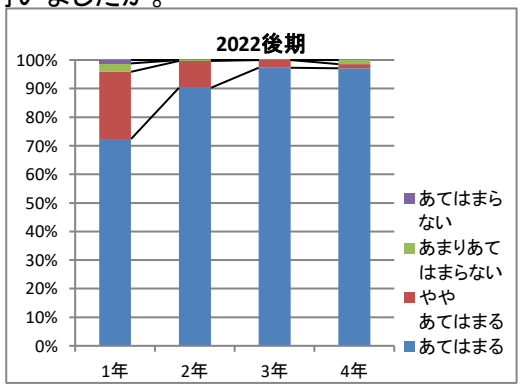


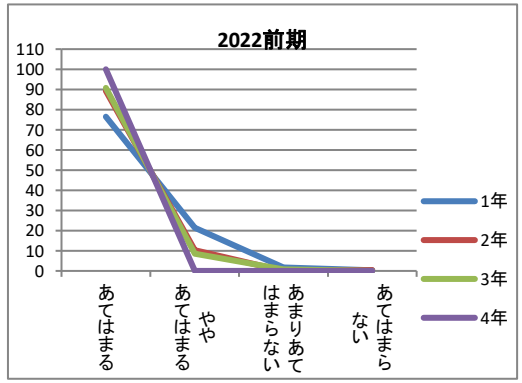


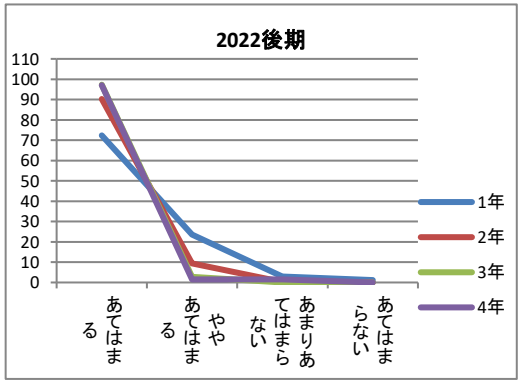


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

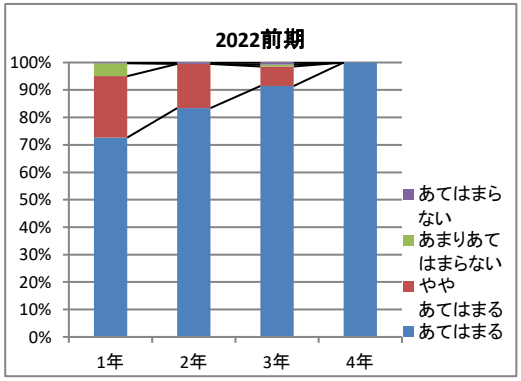


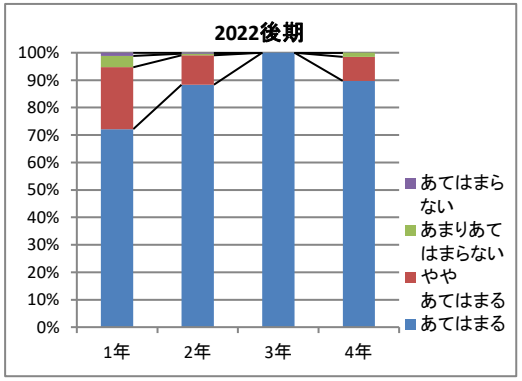


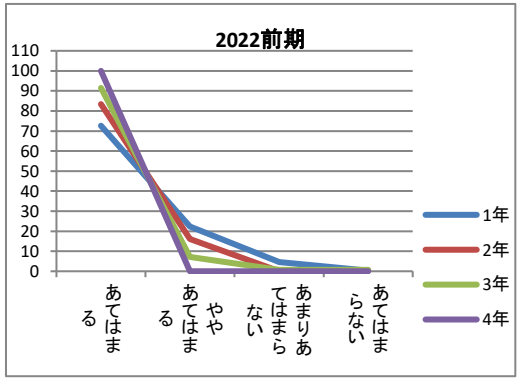


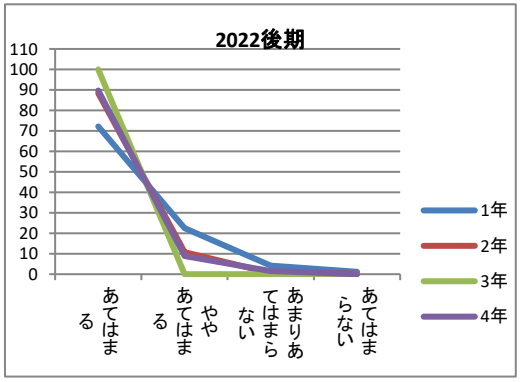


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

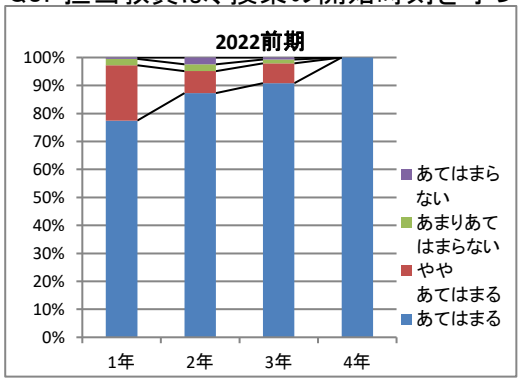


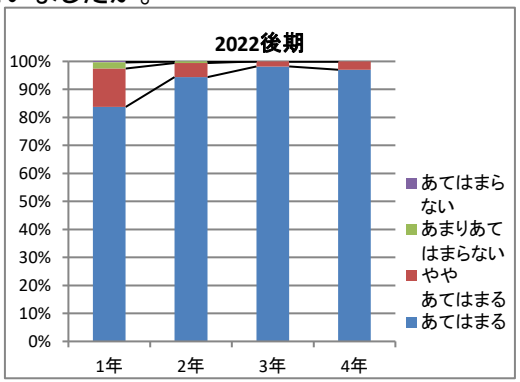


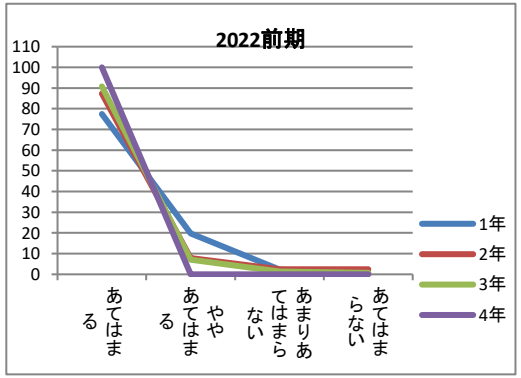


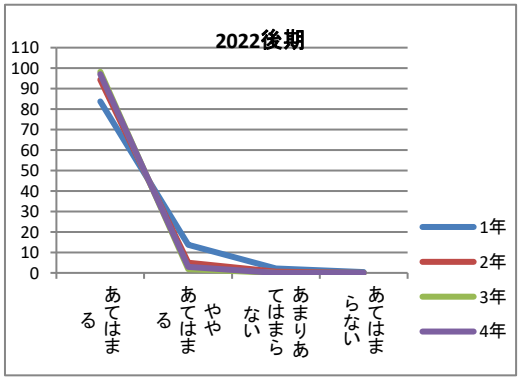


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

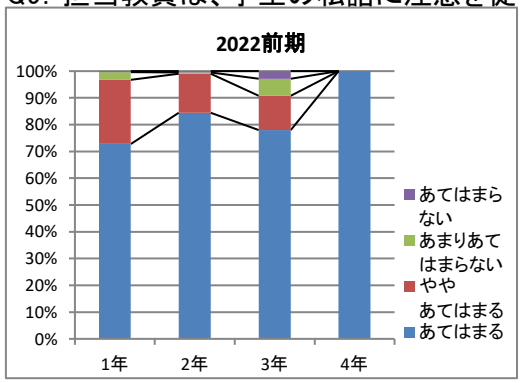


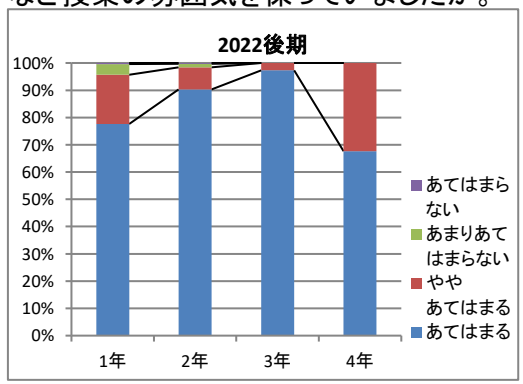


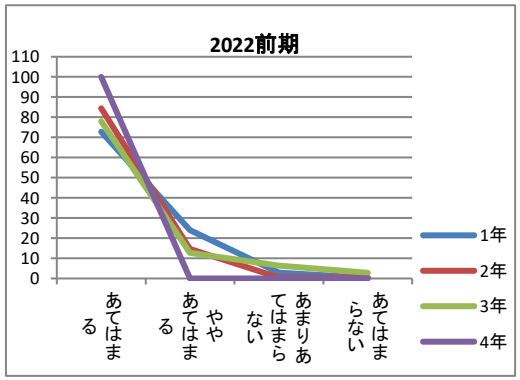


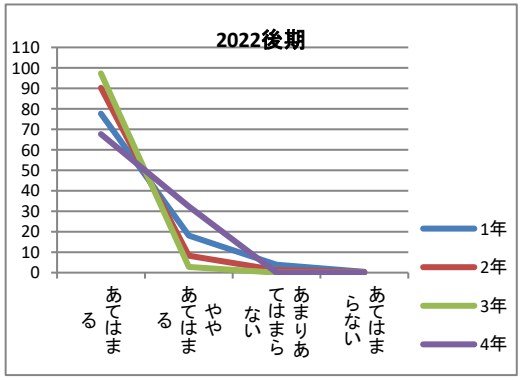


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

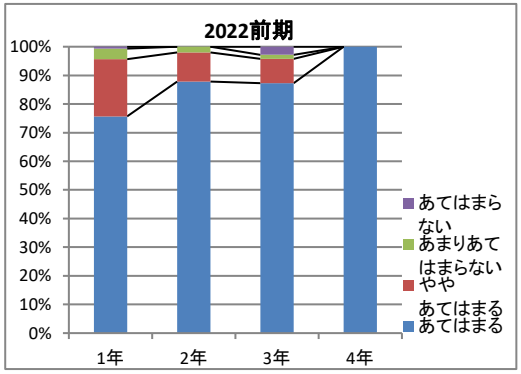


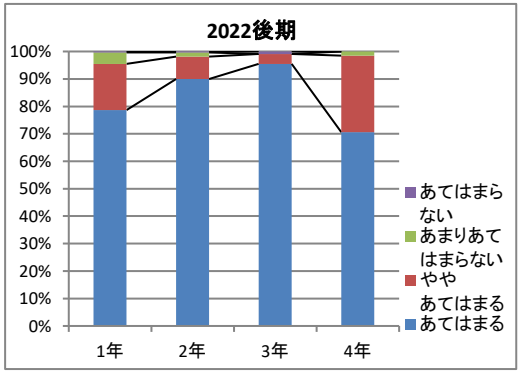


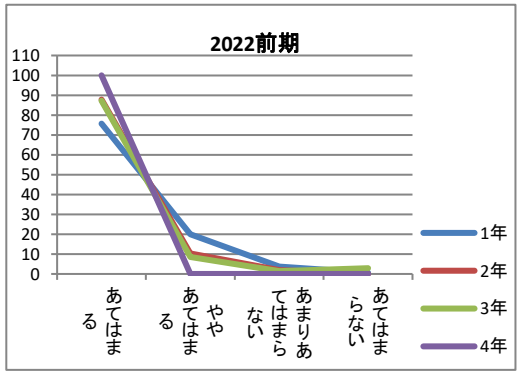


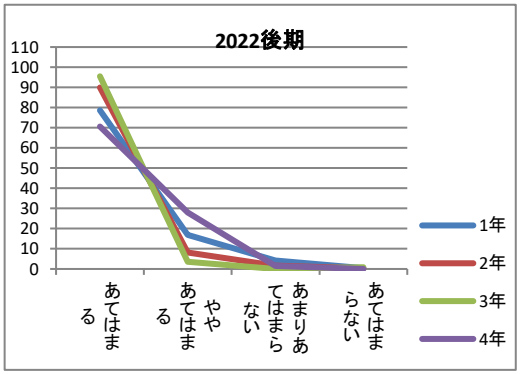


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

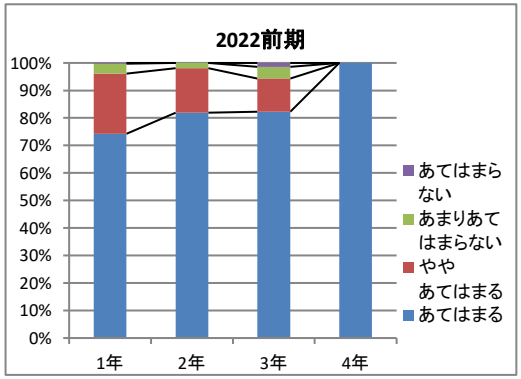


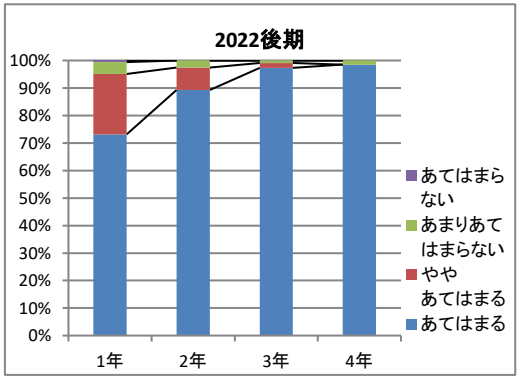


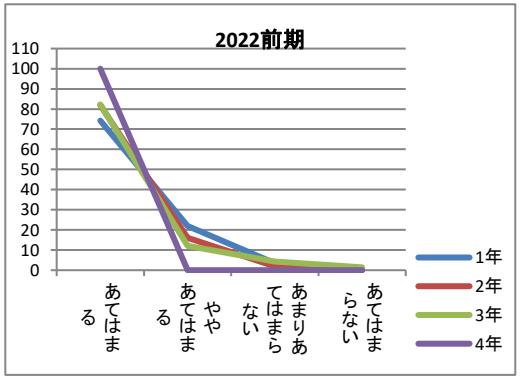


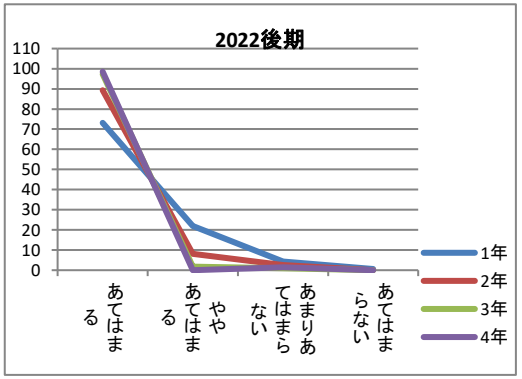


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

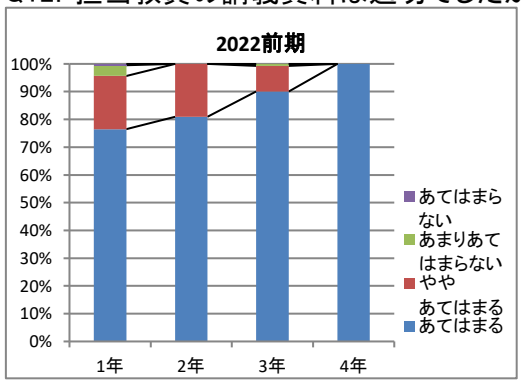


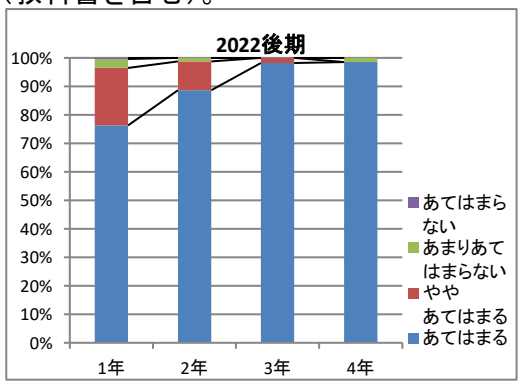


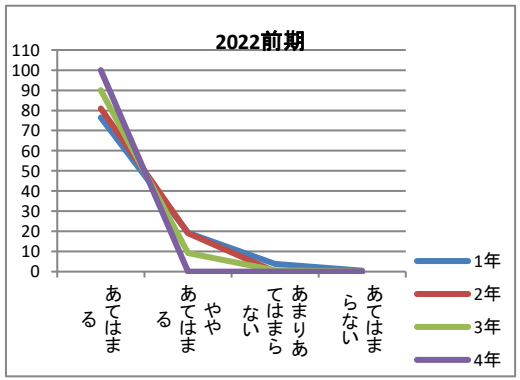


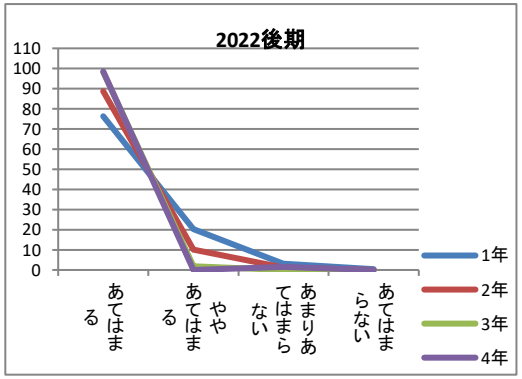


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。

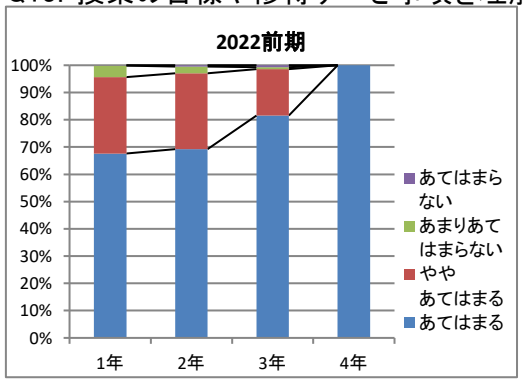


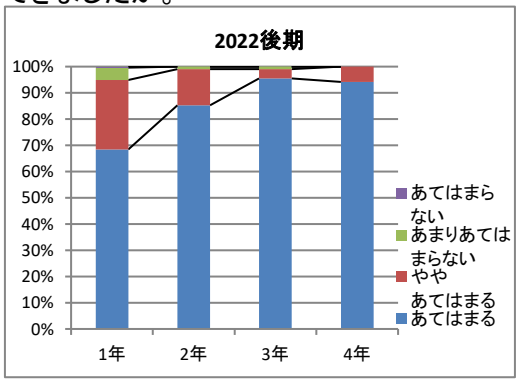


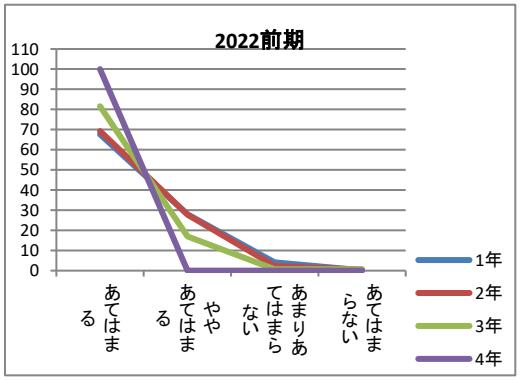


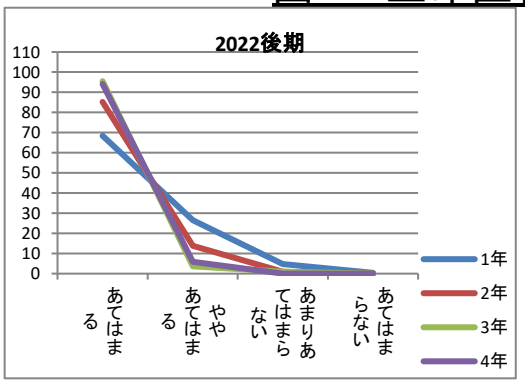


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

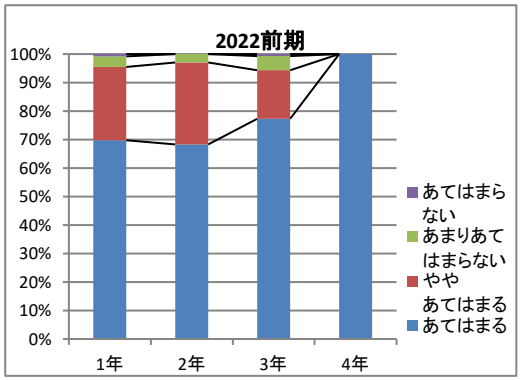


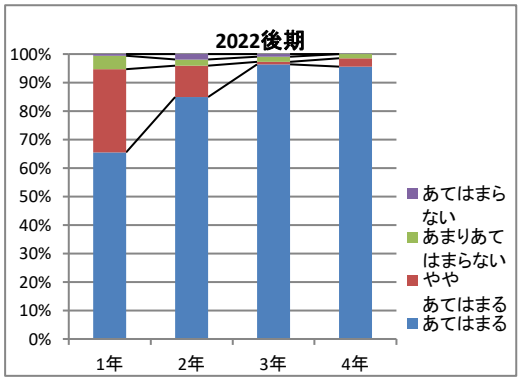


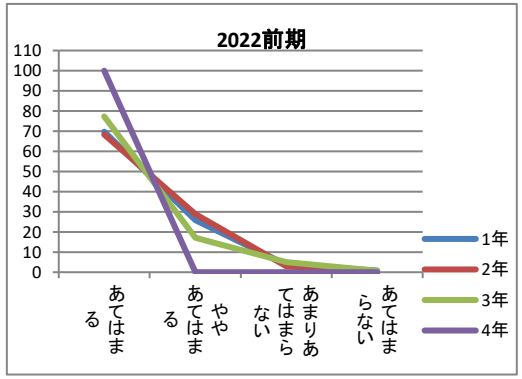


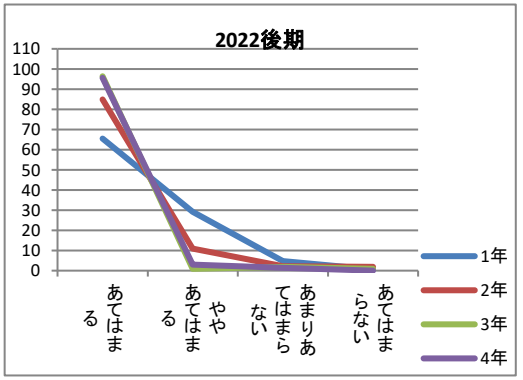


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

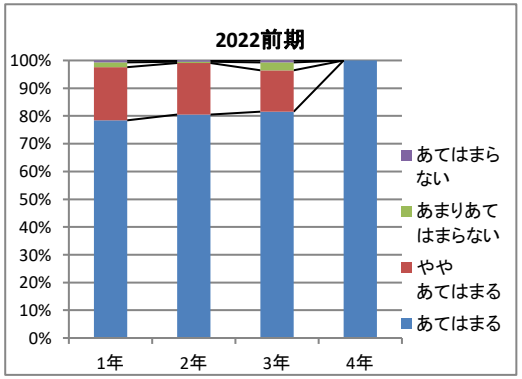


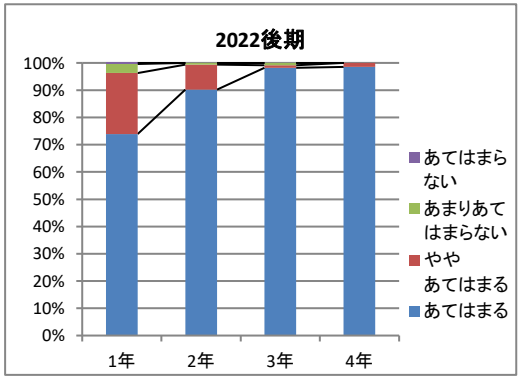


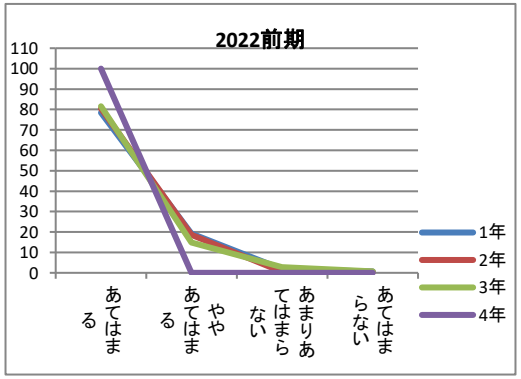


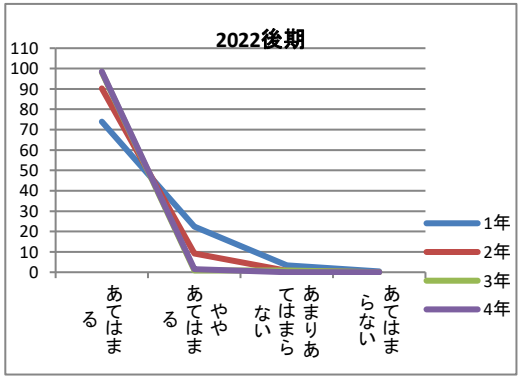


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。





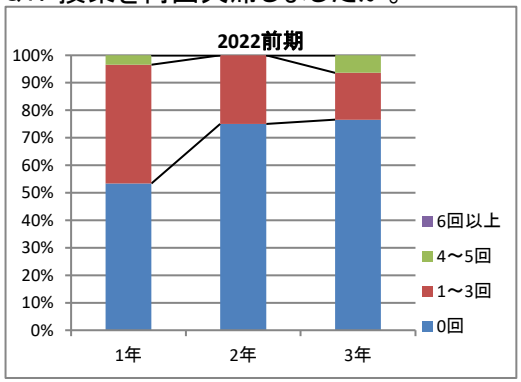


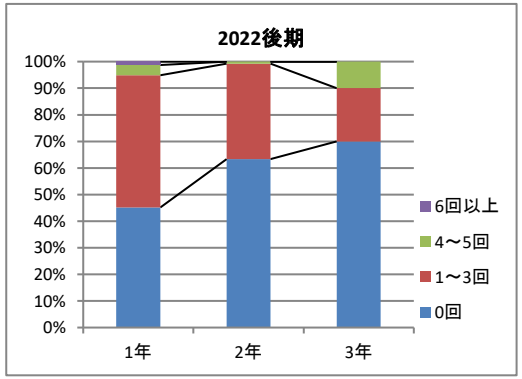


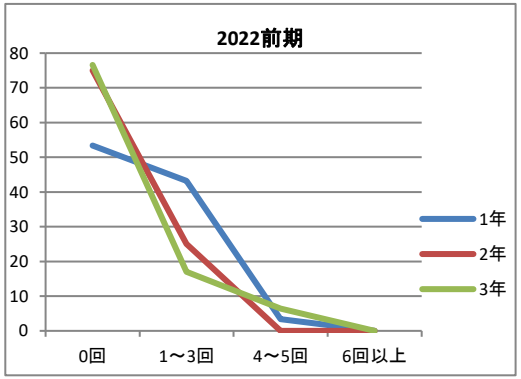
授業アンケート　令和4年度　2022年度
<臨床心理学科>

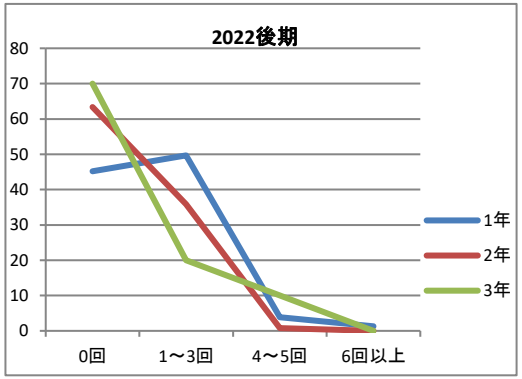
図X　心理

【あなたの授業に対する取り組み】
Q1. 授業を何回欠席しましたか。

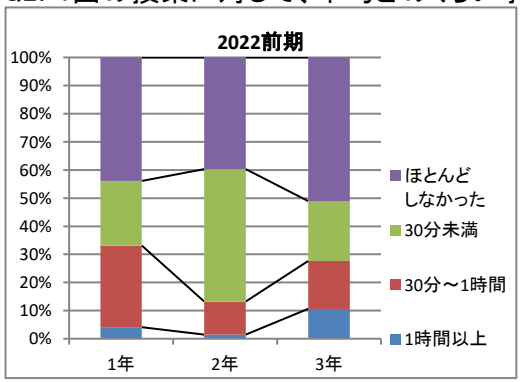


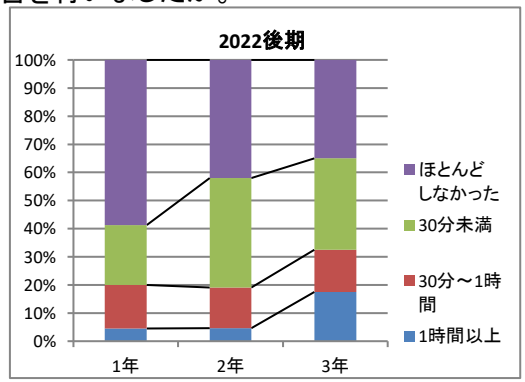


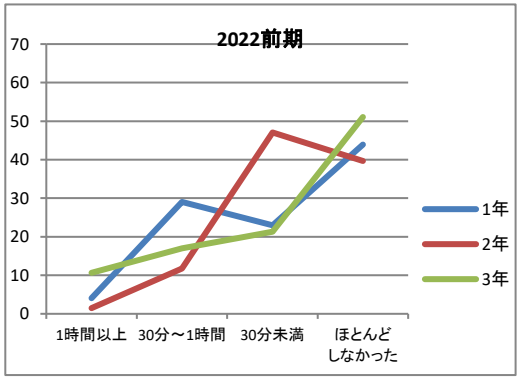


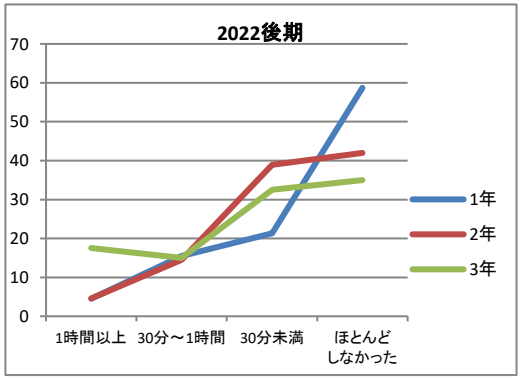


【あなたの授業に対する取り組み】
Q2. 1回の授業に対して、平均どのくらい予習を行いましたか。

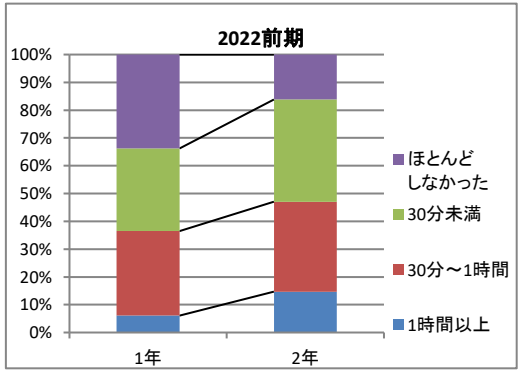


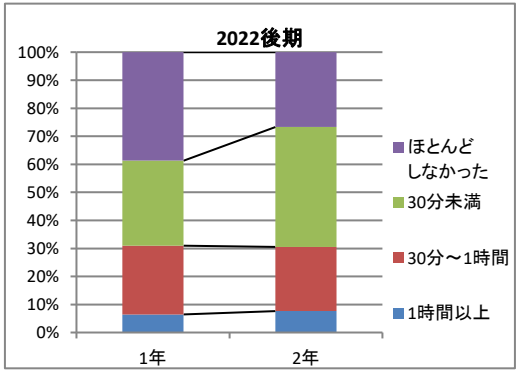


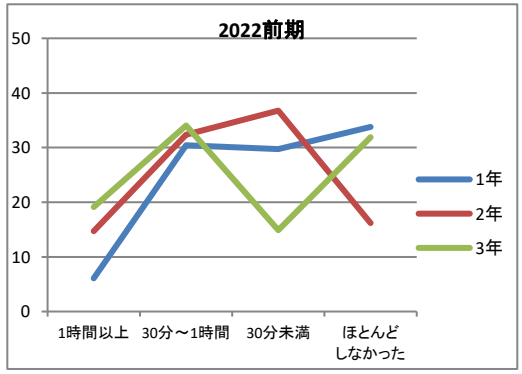


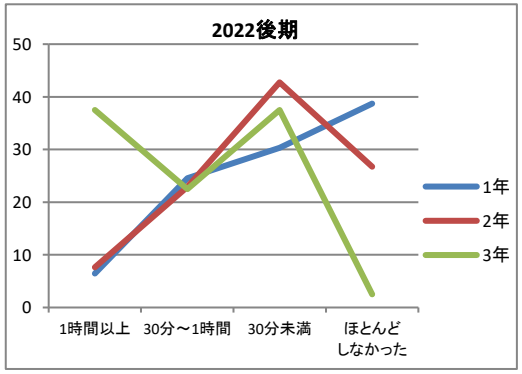


【あなたの授業に対する取り組み】
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。

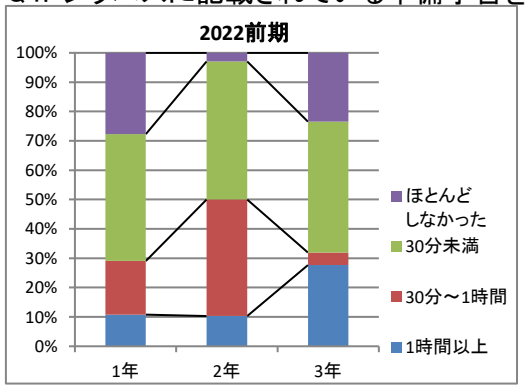


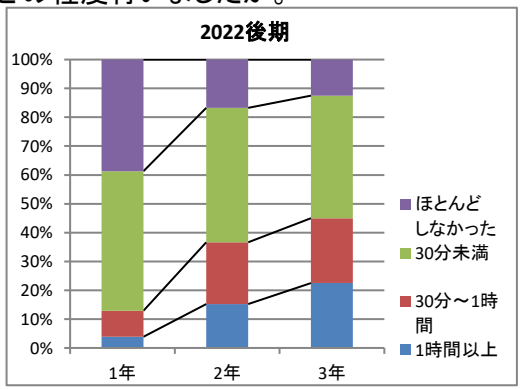


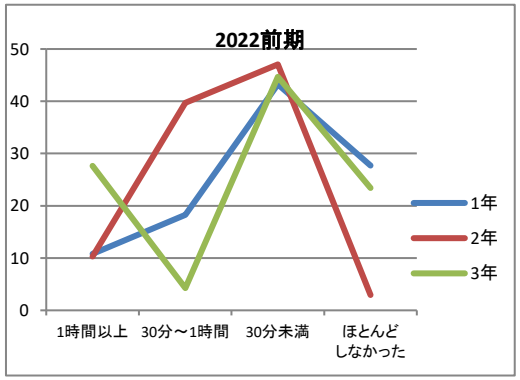


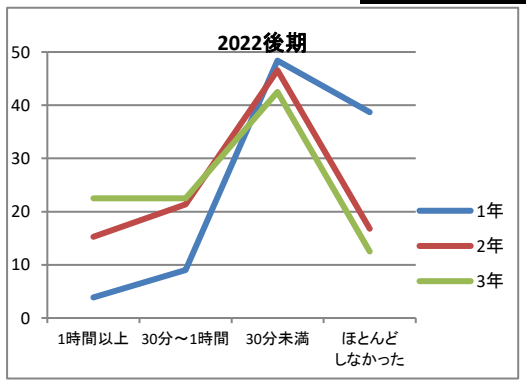


【あなたの授業に対する取り組み】
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

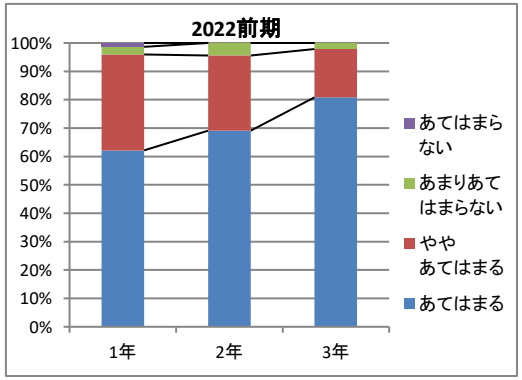


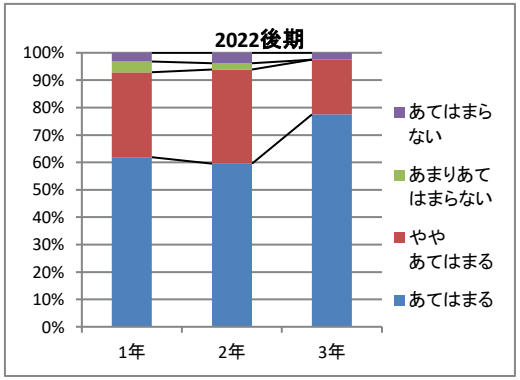


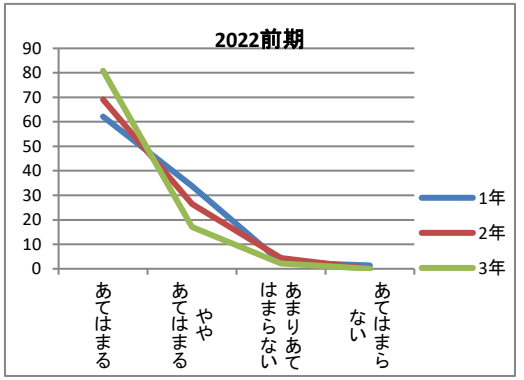


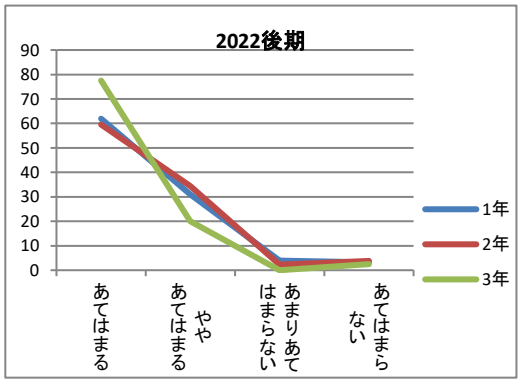


【あなたの授業に対する取り組み】
Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

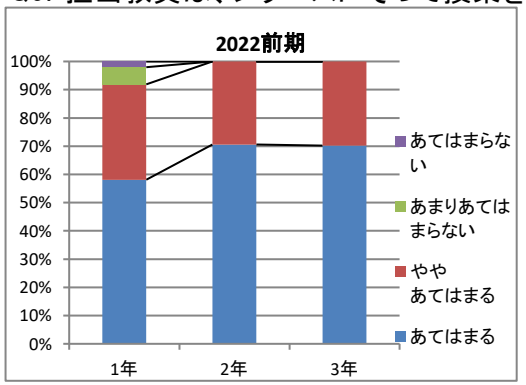


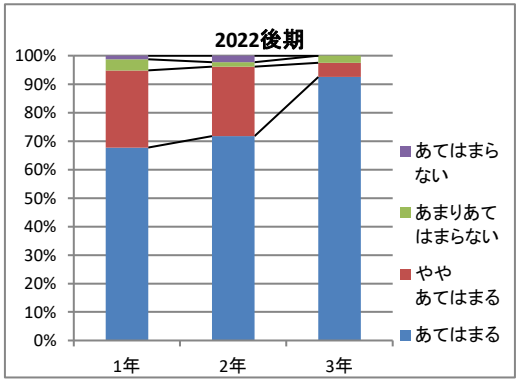


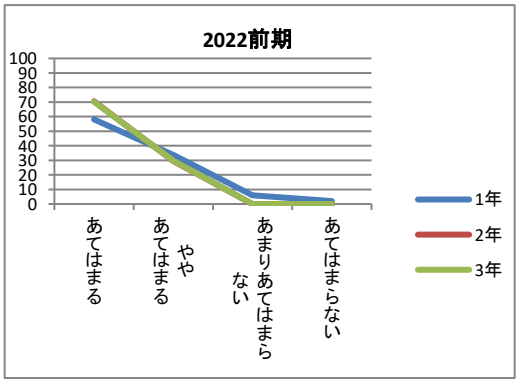


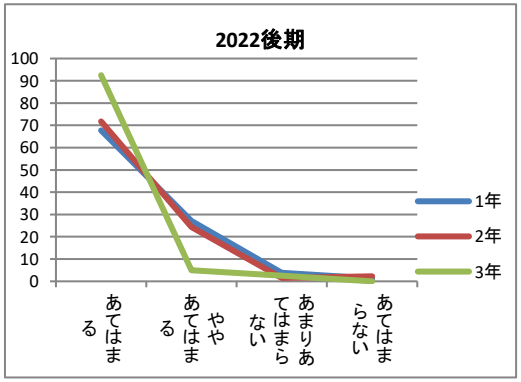


【教員の授業に対する取り組み】
Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

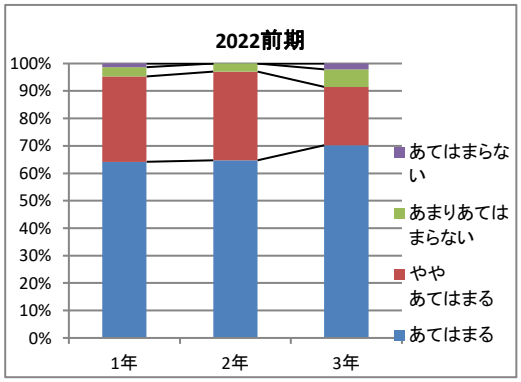


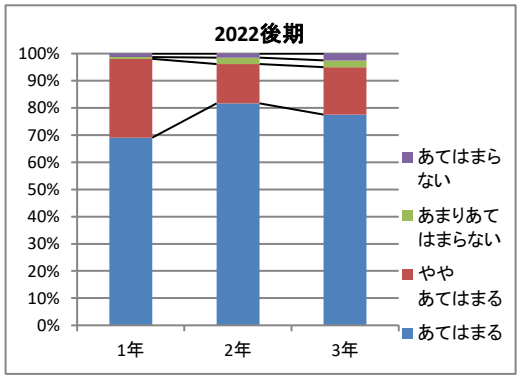


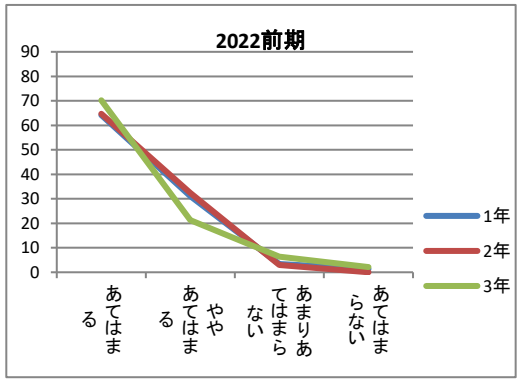


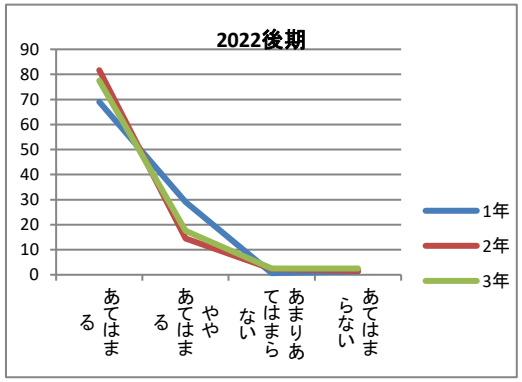


【教員の授業に対する取り組み】
Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

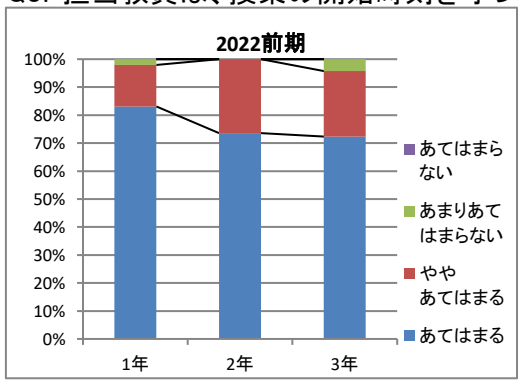


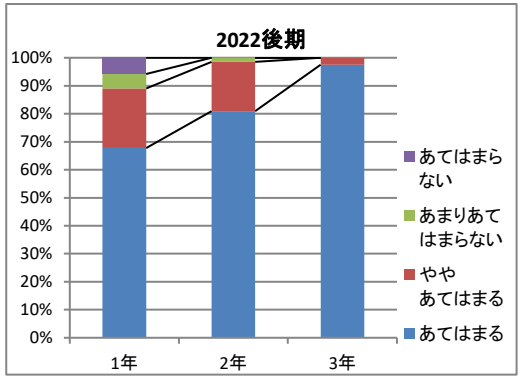


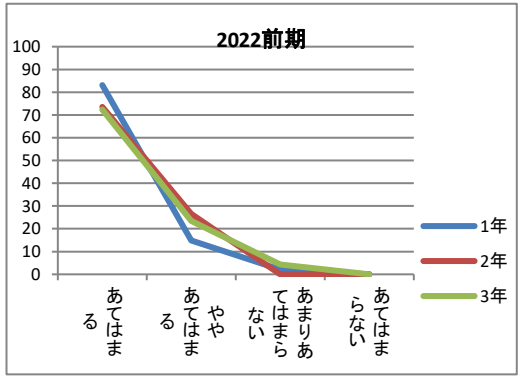


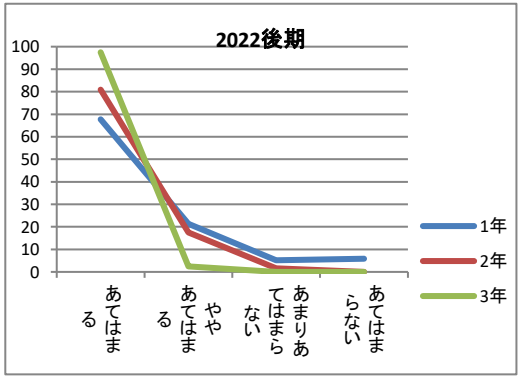


【教員の授業に対する取り組み】
Q8. 担当教員は、授業の開始時刻を守っていましたか。

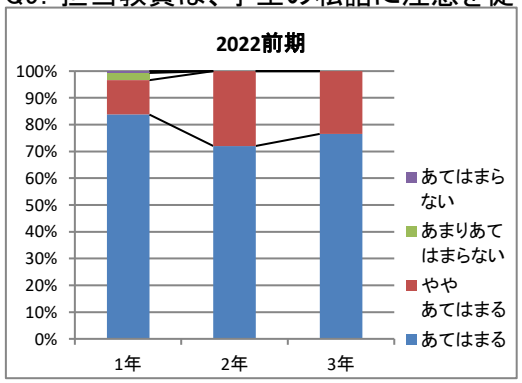


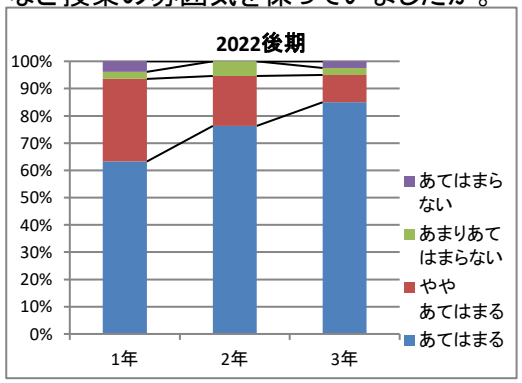


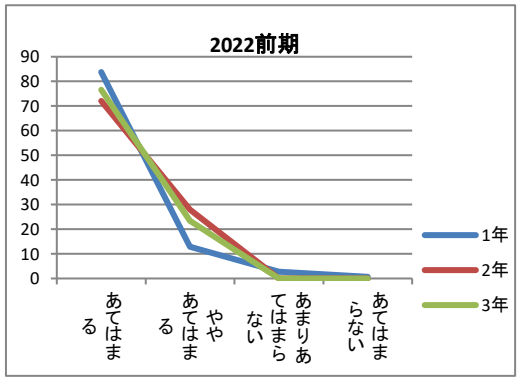


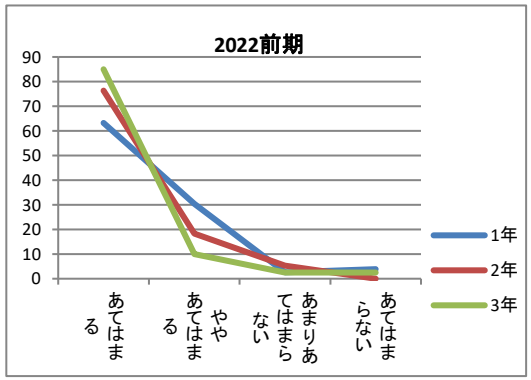


【教員の授業に対する取り組み】
Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

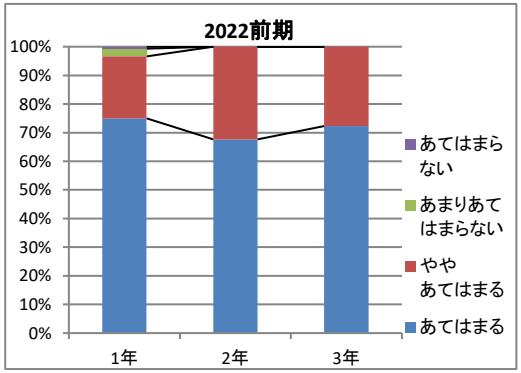


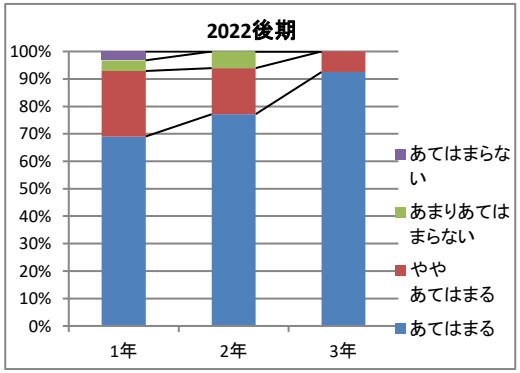


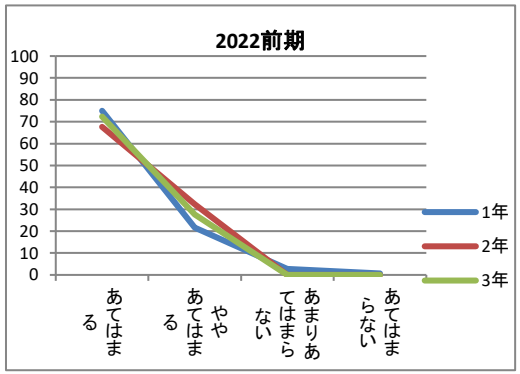


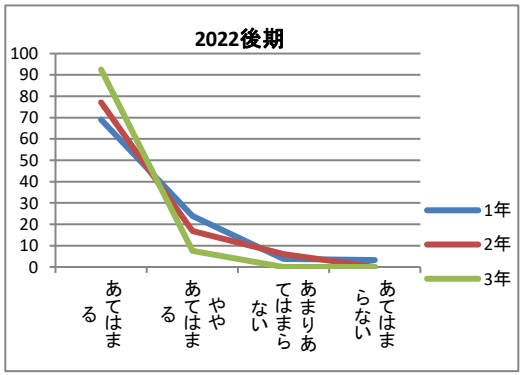


【教員の授業に対する取り組み】
Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか（質問等）。

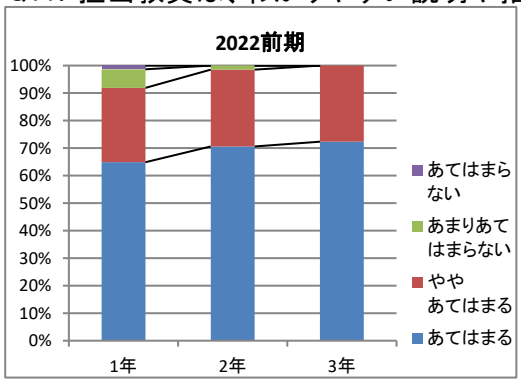


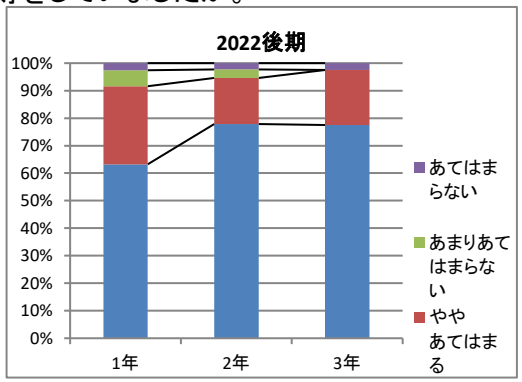


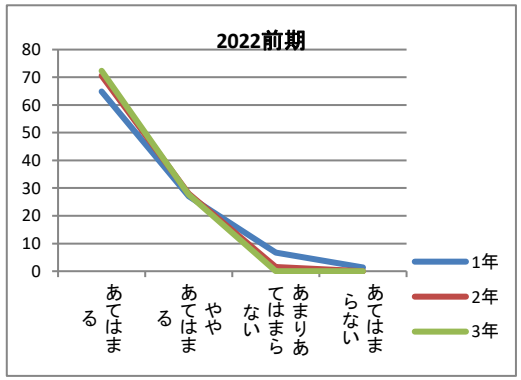


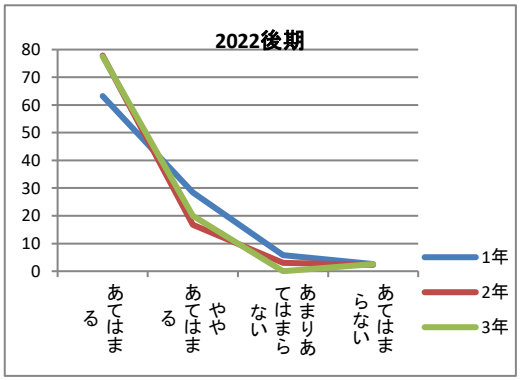


【教員の授業に対する取り組み】
Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

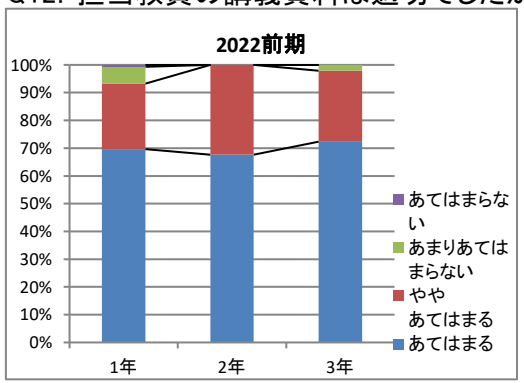


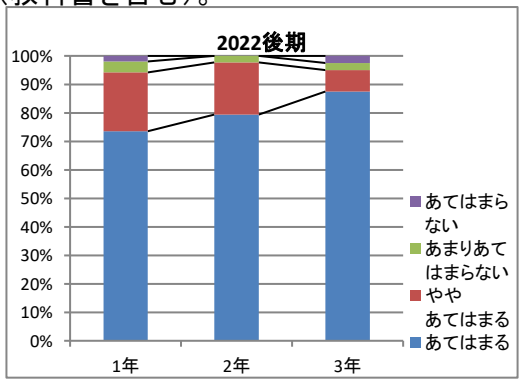


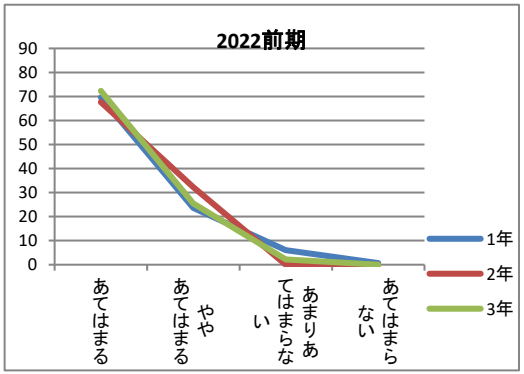


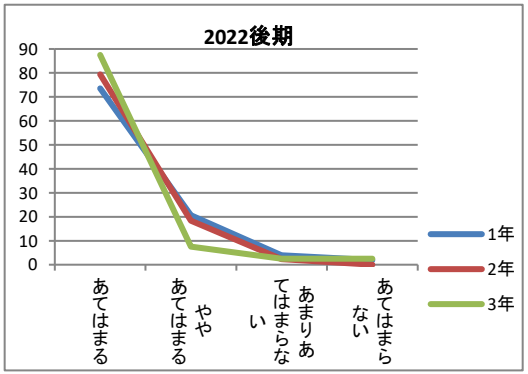


【教員の授業に対する取り組み】
Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。

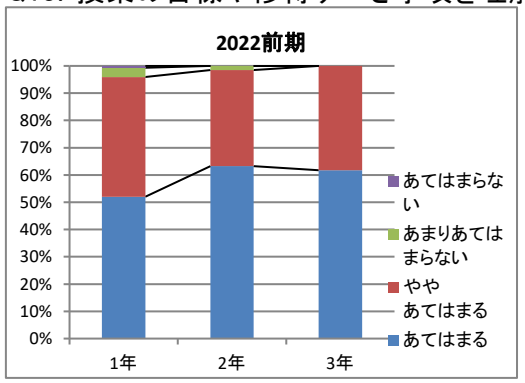


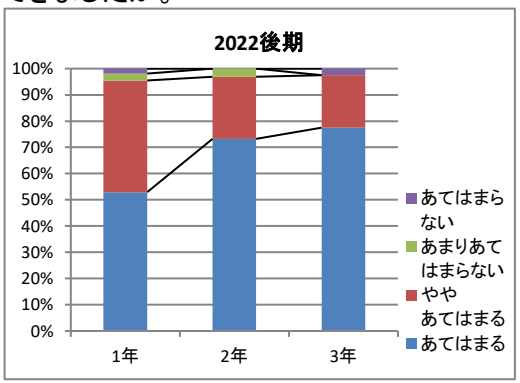


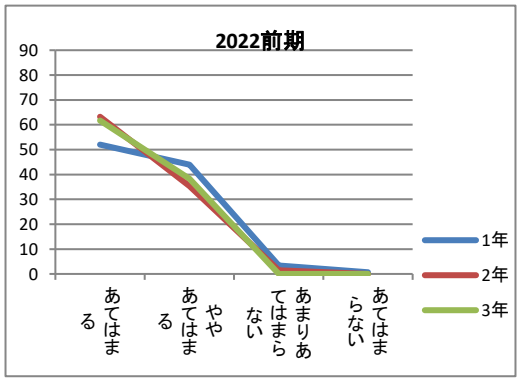


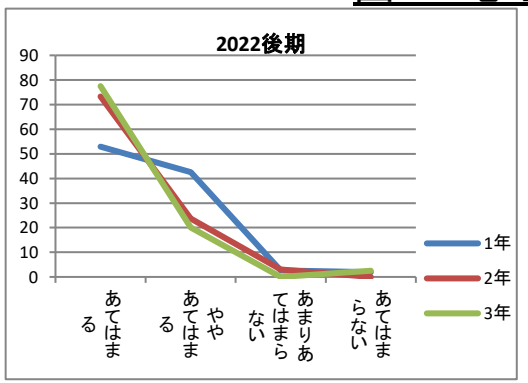


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

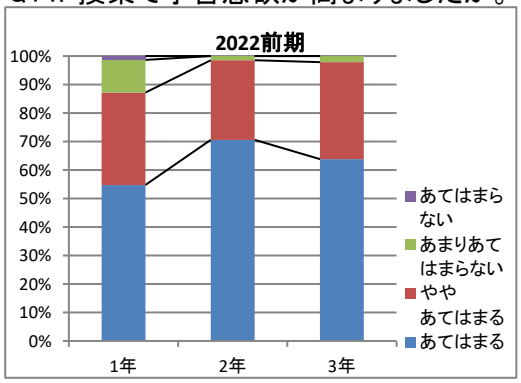


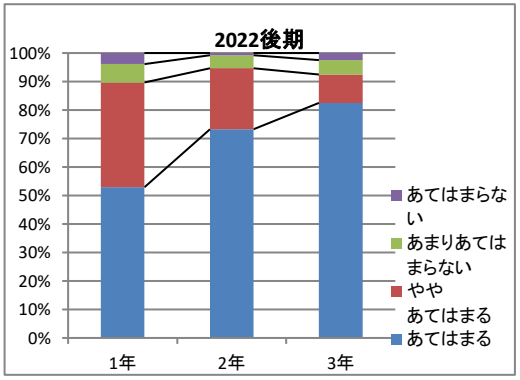


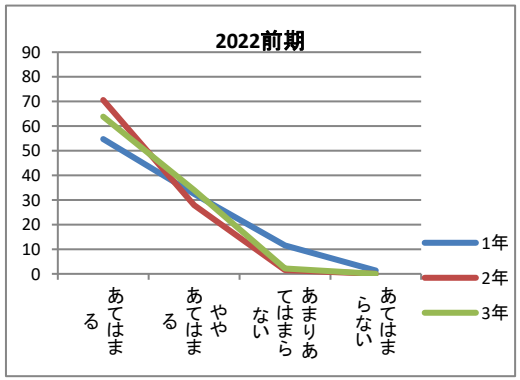


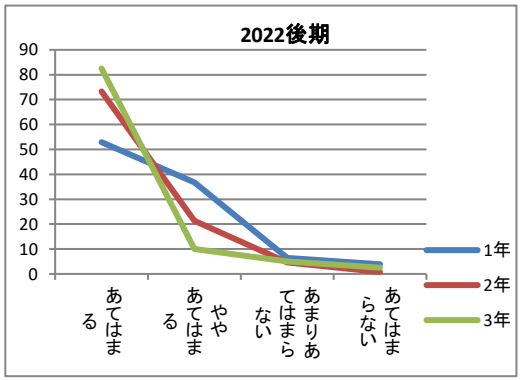


【授業に対するあなたの理解・達成度】
Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。

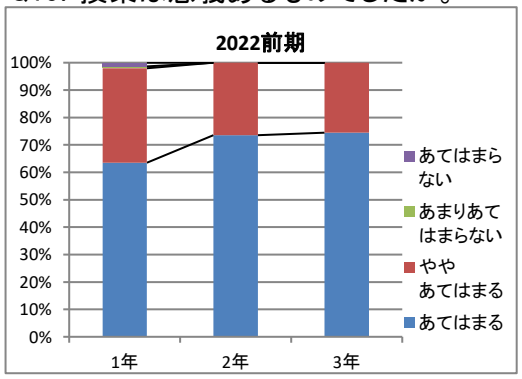


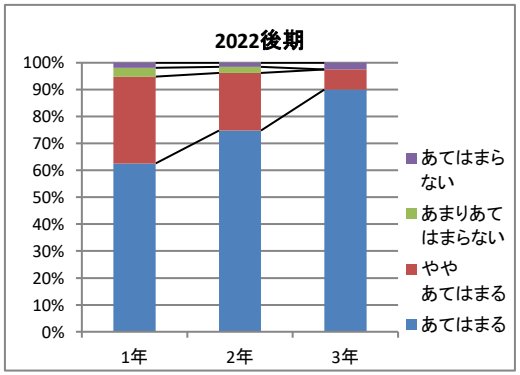


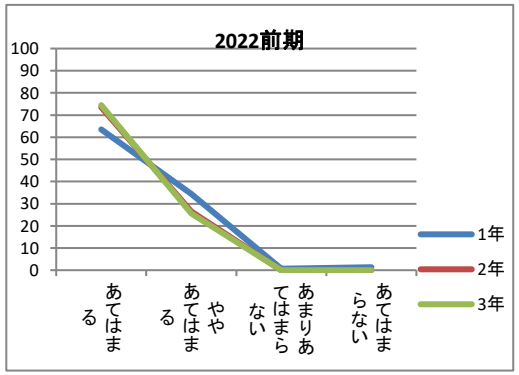


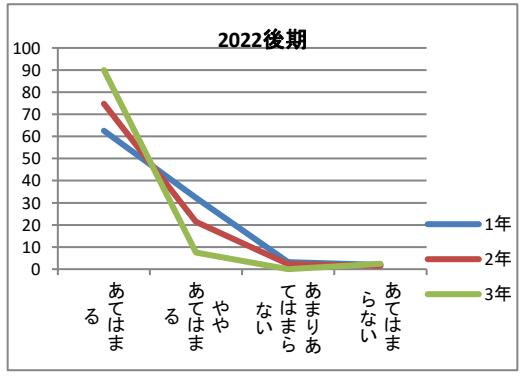


【総合評価】
Q15. 授業は意義あるものでしたか。









令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	事務局	事務局長	的場　嘉男

【前年度結果報告】

１．新名称九州医療科学大学へのスムーズな移行
名称変更に伴う変更手続き等は概ねスムーズに進めることが出来た。また、２５周年、校名変更記念行事も問題なく開催できた。

２．入学者定員１００％確保
学部入学生１６６名であり入学定員５割を切る結果となった。

３．私立大学等改革総合支援事業（タイプ１『特色ある教育の展開』とタイプ３『地域社会の発展への貢献』）での補助金獲得
入試に関する項目で点数を増やしタイプ１で選定された。

【今年度数値目標・決意表明】

１．日本高等評価機構の来年度受審を意識し業務を遂行する。
第４期評価システムの内容を意識し業務を行い、来年度提出する自己点検評価書の作成準備を今年度から始める。

２．入学者定員１００％確保
応援学費等の本学の魅力を PR し定員確保に努める。

３．私立大学等改革総合支援事業（タイプ１『特色ある教育の展開』とタイプ３『地域社会の発展への貢献』）での補助金獲得

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	庶務部　庶務課	課長	大石　正憲

【前年度結果報告】

１．働き方や職場環境の改善を進める
・積極的な働きかけにより、時期指定 5 日分の有給休暇は全教職員が取得することができた。
・残業時間については、事務職員全体で前年度比約６％増加となっているが、昨年度の約４５％増加と比較すると増加のペースは鈍化している。さらに、総残業時間を職員数で割った１人当たりの平均残業時間で比較すると、前年度比約１％の増加にとどまっている。今年度は、コロナが 5 類に移行したことに伴って、コロナ禍において縮小していた行事がコロナ禍前に戻ったこと、大学名変更に伴う事務処理が追加したことを踏まえると、増加率を比較的抑えることができたと評価している。
・ハラスメント研修並びにハラスメントに関するアンケートとアンケートの分析を実施した。
２．外部資金の獲得に向けて更なるサポートを実施
・科研費の新規採択は４件であり、目標は未達成であった。

【今年度数値目標・決意表明】

１．働き方や職場環境に改善を進める
・今年度も研修等を通じてハラスメントに対する理解を深めるとともに、ハラスメントを受けたときに相談しやすい職場環境を目指す。
・学生向けのハラスメント研修会を実施する。

２．外部資金の獲得に向けてサポートを実施
・科学研究費等、外部資金に関するサポート体制を強化し、更なる外部資金の獲得を目指す。

３．日本高等教育評価機構の機関別認証評価に向けて、第４期評価システムに対する理解を深めるとともに、自己点検評価書作成に向けた体制の整備を目指す。

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	付属図書館	課長	大石　正憲

【前年度結果報告】

１．学習支援及び教育活動への直接の関与
図書館のラーニングコモンズを活用して、教員と連携し、新入生やゼミ生に対してオリエンテーションを実施した。

２．研究活動に即した支援と知の産生への貢献
研究紀要第 25 号を発行し、リポジトリに公開した。

３．コレクション構築と適切なナビゲーション
救急救命コース開設に伴い、関連の書籍と雑誌を購入して書架に並べた。

４．他機関・地域等との連携
延岡市立図書館と連携して「認知症と食」をテーマに企画展示を実施した。
地域貢献活動として、延岡市立旭中学校の生徒２名を２日間受け入れ、職場体験学習を実施した。

【今年度数値目標・決意表明】

１．学習支援及び教育活動への直接の関与
ラーニングコモンズの活用がスムーズに進むように支援し、教員と連携することで利用者数の増加につなげる。

２．研究活動に即した支援と知の産生への貢献
研究紀要第 26 号の発行と、リポジトリへの公開を推進する。

３．コレクション構築と適切なナビゲーション
国試コーナー、認知症コーナー、学習支援コーナー、新刊コーナー、季節展示コーナーの充実を図る。

４．他機関・地域との連携
延岡市立図書館との連携展示を継続する。

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	庶務部　会計課	課長	牧野喜代子

【前年度結果報告】

１．省エネルギー活動の推進

電気・ガス・水道の使用量各 1%減を目標とした。結果、一昨年度に比べ電気使用量は 7.2%減、ガスは 10.3%減、水道は 4.4%減となりいずれも目標を達成した。なお金額にすると一昨年比 486 万円のコスト削減となった。

２．優先順位をつけた予算執行

修繕経費 1200 万円を目標としていたところ、実績は 1940 万円であった。ただしこれは予定外の大型案件として大学会館外壁塗装を実施したためで、この１件を除外すると修繕費は 1200 万円未満であった。

【今年度数値目標・決意表明】

１．省エネルギー活動の推進

省エネルギー活動を進めた結果、この 10 年間で電気使用量は 30%、ガス使用量は 35%近く減っており、更なる省エネルギーの余地は無くなりつつあるが、引き続き蛍光灯の LED 化と空調の効率的な運用を図り、電気・ガス・水道の使用量について昨年度を上回らないことを目標とする。

２．優先順位をつけた予算の執行

開学 25 年を迎え建物設備の老朽化が進んでいることから、設備の更新では省エネルギーに繋がるものを優先的に実施する。建物等の修繕では今後の維持に資する箇所と施工を優先し、修繕経費 1200 万円を超えないことを目標とする。

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	教務部　教務課	課長	紺野　智子

【前年度結果報告】

1.退学者減少に向けた取り組み（継続）

退学者０を目指した取り組みとして、転学科指導の強化を図り、学生・保護者・学科間教員の橋渡し役となる連携体制の構築を目指す。また、心身ともに課題を抱えた学生も増加傾向にあることから、安易な転科とならないよう、休学制度も有効な手段として効果的に運用したい。さらには、退学予備軍となる欠席過多学生に対する、教員への情報提供及び連携体制構築に努める。

→結果：退学者19名、退学率19名/1040名　1.8%(昨同1.7%)

退学者は昨年度と同数の19名であり、昨年度は3年連続の減となったが、今年度退学率としては1.8%と0.1%の微増である。除籍者は減少(5名→4名)している。転学科に関しても11名と昨年と同数である。

2.学生満足度向上に向けた取り組み

九保ブランドを目指し、オリジナルの基礎教育科目の見直しを行い、令和 4 年度からスタートしており、相応の成果を上げている。これを継続検討し、医療・福祉系の専門職教育の基礎となる人間力向上を目指したアクティブラーニングの提供・検討を、延岡市のみならず県北他町村とも連携し構築することで、地域の課題を学生自ら考え九保ならではの教育の提供に努める。

→結果：令和 4 年度 受講者 40 名（五ヶ瀬･延岡沿岸）令和 5 年度受講者 50 名（五ヶ瀬・高千穂・延岡沿岸）昨年度に比べ 10 名受講者増となり、高千穂コースを新たに設けた。

【今年度数値目標・決意表明】

1. 退学者減少に向けた取り組み（継続）

今年度も引き続き、退学者０を目標に昨年度の取り組みを継続する。連続欠席の情報を教職員で共有し、早期に学生指導に着手することで、学生の動向を把握し、継続的に学生サポートを実施する。

2.学生満足度向上に向けた取り組み

課員（実習センター）全員で各種情報を共有し、丁寧な学生対応（窓口等）を行う。「建学の理念」を心に留め学生に寄り添い学生の声を傾聴し、「学修者本位の教育」をサポートしていく。

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	教務部　教育イノベーション課	課長	紺野　智子

【前年度結果報告】

教育イノベーション課

1. 学修成果の可視化を推進するため、新機能 UNIVERSAL PASSPORT-RX (学修ポートフォリオ、マイステップ)の学生・教員への運用支援を行う。
   結果：学修ポートフォリオにおいては、学生へ自らの学修への振り返りを促し、マイステップにおいて大学生活を記録するとともに、九保力セルフチェックを実施し、本学の「建学の理念」「ブランドビジョン」など学生として身につけてほしい代表的な資質・能力を自ら確認できるツールとして作成している。ポートフォリオは各学期に確認を促し学生・教員コメントを入力してもらった。セルフチェックは学年の初めに回答の呼びかけを行った。回答率については、1 年次 6 割 2 年次おいては、3 割未満となっており、さらなる利用促進に向けて支援を行っていく必要がある。
2. 学科並びに各部署及び IR 推進室等他部門と連携し、九州保健福祉大学の教学 IR の推進に努める。
   結果：学内でのアセスメント実施の現状を調査し、現状把握に務めた。学修行動・学生生活に関するアンケートを実施し、本学学生の学修への取り組みや学生生活、大学生活について調査を行った。また、成績の平準化について、各科目の素点分布を作成し今後分析等に役立てるよう準備を進めている。

【今年度数値目標・決意表明】

1. 学修成果の可視化を推進するとともに、教育成果の把握・可視化を目指す。
   学修ポートフォリオ、マイステップに加え、外部アセスメントテスト「GPSアカデミック」を今年度新一年生から実施する。教育成果の把握・可視化の一環として、各授業科目の成績評価（素点）の分布表を作成し、成績の平準化について考察を始める。
2. 教育職員並びに各部署と連携し本学の教学IR推進に努める。
   アセスメント実施計画を作成する。教学マネジメントの推進ために必要とされる学内情報を収集し、紐づけ分析を試みる。

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	教務部　通信教育事務課	課長	矢野　朋光

【前年度結果報告】

●入学者の確保：前年度入学生が正科生１５８名、履修生１９名となり、減少となり目標を達することができなかった。

●学生満足度の向上：学生からの要望があればオンライン学習相談を実施したが、対面でも来学することで可能とした。電話での対応が多いことから丁寧な対応を心掛けた。スクーリング時のアンケートについては集計後速やかに教員へフィードバックした。

●国家試験合格率のアップ：対策講座を専門に扱っている業者での講座を実施し、合格率もここ数年上昇しているので継続して続けたい。

●新たな通信教育部への挑戦：ハイブリッドコースを開設し入学者確保に向けリーフレットで募集活動をおこない４名の入学があった。また福岡サテライト事務所の開設し新たな広報活動への取り組みをおこなった。

【今年度数値目標・決意表明】

●入学者の確保に向けた広報活動の充実：増加傾向から減少傾向となってきたので、まずはホームページへの誘導を基本に META 広告を取り入れていく。ハイブリッドコースへの入学者確保に向け通信制高校へ向けた広報を行い、入学者確保に努める。

●学生サポート体制の充実：今年度よりバーチャル教育空間を取りいれ、学生同士のコミュ二ケーションツールとしてまたスクーリングのバーチャル空間としての利用促進を図る。学習相談を積極的に取り入れるとともに、可能であれば対面を実施する。引き続きスクーリング時に学生アンケートを実施し速やかに教員へのフィードバックを行う。

●オンラインに対応した授業内容の検討：オンライン化による弊害を無くすように努めていく。

●ハイブリッドコースの充実：学習支援室を設けるなどハイブリッドコースの充実をはかる。

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	ｽﾁｭｰﾃﾞﾝﾄｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰ学生部学生課	課長	加藤　泰輔

【前年度結果報告】

〇学生満足度の向上

R5 年 11 月に 4 年ぶりに一般公開での九保祭を開催することができた。学生に対する情報提供に関しては、課内で共有・活用することで「速やかに・確実なもの」を提供することができた。また、コロナ沈静化を確認して英語村と共同して留学生との交流会を実施することができた。

〇事件・事故の防止

当課に届け出があった学生の交通事故は、第 1 当（加害者）13 件であった。なお、危険運転に起因する事故はなかったがマナー不足が確認された学生に対しては対面で指導するなど事故防止に努めた。

〇防災に対する意識向上

令和 5 年 12 月大学全体での消防・防災・避難訓練を実施して防災意識の向上を図った。

〇相談しやすい環境づくりと相談スキルの向上

私大協や九州地区大学が主催する学生支援に関する研修会へは努めて参加をして情報共有を図った。

【今年度数値目標・決意表明】

（１）【３つの力】で学生満足度の向上をめざす（すべては窓口対応から始まる）
　　①安定した傾聴力　　②課題の発見力　　③的確な判断・情報発信力

（２）事件・事故・防災（災害）に対する「備え」と「危機管理」の意識向上
　　①事件、事故を発生させない（注意喚起の徹底）（交通事故ゼロを目指す）
　　②事件については関係部署・機関との連携による早期解決をめざす（抱え込まない）

（３）学生生活に関する学生の意見・要望の把握
　　①相談しやすい窓口対応と環境の整備
　　②学生支援にかかわる研修会への参加（情報収集と情報共有）→学生支援の質の向上に努める

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
九州医療科学大学	キャリアサポートセンター	課長	猪股　健久

【前年度結果報告】

１．就職目標　100%
　　【結果】　98.9%　　［98.4%］　　※［　　%］は 2023 年度　最終

２．修学支援新制度での要件を満たす「就職・進学率」90%以上
　　【結果】　97.9%

３．キャリア支援の強化
　　質の高いキャリアサポートを目指し、教職員や外部機関と連携し学生の個々のキャリア適性や志向性を把握し、適切なキャリア選択を支援した。また、就活に有利な資格支援プログラムを提供した。更に、地元公的機関を連携し、公務員試験対策を実施した結果、13 名の学生が公的機関に合格することができた。

【今年度数値目標・決意表明】

１．就職目標　100%

２．修学支援新制度での要件を満たす「就職・進学率」90%以上

３．キャリア支援の強化

①学生支援部署と連携し質の高いキャリアサポートを実施する

②就職試験対応に繋がる学科のニーズに合った各種企画を積極的に実施する

③学生の利便性向上を目的としたデジタル化を推進する

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
法人本部	入試広報室	次長	大政　孝則

【前年度結果報告】

2024 年度順正学園の学部・専門学校総志願者数は、1,240 名(前年度 1,873 名)で前年対比 66.2%、入学者総数は、543 名(前年度 599 名)で前年対比 91.0%であった。学園全体の充足率は全体定員 940 名中入学者数 543 名で 58.0%と前年度の目標であった全学科定員確保は未達となった。また留学生 200 名入学の目標については、秋・春入学者数 147 名（昨年 153 名）となり目標は未達となった。

	志願者数			入学者数			入学定員充足率
	2024 年度	2023 年度	対前年比	2024 年度	2023 年度	対前年比	
吉備国際大学	729	995	73.3%	331	355	93.2%	61.2%
九州医療科学大学	429	775	55.4%	166	184	91.2%	49.0%
九州医療科学大学専門学校	82	103	80.0%	46	60	77.0%	100.0%
総　数	1,240	1,873	66.2%	543	599	91.0%	58.0%

【今年度数値目標・決意表明】

◎入試

入学者選抜において、受付・入試実施・発表・入学手続までの入試業務をミスのないよう行う。

◎広報

各設置校のブランドビジョンを柱に学部・学科の情報発信を行い、入学定員充足率 100%を目指す。
留学生募集については、秋、春、留学生別科を含めて 200 名の入学を目指す。

令和６年度　部門目標（事務部門）

所　　属	部　　署	役　職	氏　　名
法人本部	入試広報室	参事	高木真理子

【前年度結果報告】

2024 年度九州医療科学大学の学部志願者数は、429 名(昨年度 775 名、一昨年度 928 名)で前年対比 55.3%、入学者数は、166 名（昨年度 184 名、一昨年度 210 名)で定員充足率 48.8%であった。
全体の受験者が年内入試にシフトしているといわれる中、本学の年内入試志願者は 100 名（入学者 98 名）入学者の 59%（昨年度：志願者 118 名、入学者 93 名・入学者の 50%、一昨年度志願者 136 名、入学者 111 名・入学者の 43%）と入学者はほぼ変わらなかった。※入学者が 300 名を超えている年度は 160 名程度（一般は受験者数、入学者数ともに減少）一般入試受験者数 324 名：入学者 64 名（20%）昨年 652 名：入学 87 名（13%）一昨年度 778 名：88 名（11%）※2020 年度 586 名：入学 151 名(25%)

学科	志願者数					入学者数						入学定員充足率
	2024	2023	2022	2021	2020	2024	歩留	2023	歩留	2020	歩留	
スポーツ健康福祉	92	76	88	73	60	62	67%	35	44%	37	62%	77.5%
臨床福祉		41	46	49	26			17	48%	11	42%	
薬	140	294	345	369	253	38	27%	43	10%	66	26%	38%
動物生命薬科	66	84	118	77	78	22	33%	23	21%	28	36%	55%
生命医科	84	200	250	282	193	26	31%	45	23%	66	34%	32.5%
臨床心理	46	80	81	118	108	18	39%	21	40%	48	44%	45%
合　計	429	775	928	968	718	166	39%	184	23%	256	36%	48.8%

【今年度数値目標・決意表明】

◎入試：学科のポリシーに沿った入学者選抜の実施、受験生に対して丁寧な対応やミスのない実施に努める。
◎広報：保護者と 2 年生をターゲットにした SNS、学科と協力しての高校訪問、ガイダンスを強化。オープンキャンパス参加者の受験率 50%以上を目標とし今年度の志願者 850 名以上（12 月までの入試で 150 名、一般入試 700 名以上）を目指す。